

岩出地区内遺跡群発掘調査報告

— 度会郡玉城町岩出所在、ケカノ辻・角垣内・蚊山地区の調査



1996. 3

三重県埋蔵文化財センター

序

伊勢国の南部、南勢地方と呼ばれているところは、今の松阪市・伊勢市・飯南郡・多気郡・度会郡が相当します。ここは古来より特に伊勢神宮との関係が深いところで、多気郡・度会郡および現在の松阪市南部に相当する飯野郡は特に「神三郡」と呼ばれた神宮領であり、文化的な背景を考える際には神宮との係わりで検討せねばならないことが多々あります。

今回調査が実施されました度会郡玉城町岩出地区は、平安時代の後半から室町時代にかけて、神宮の最高責任者である祭主が居住していたところで、「岩出祭主」の名で知られています。また、南北朝時代には南朝方、北朝方の戦乱の舞台ともなっておりますし、戦国時代から安土・桃山時代にかけては岩出城が築かれ、城下町も形成されていたところであります。現在でこそ静かなたたずまいの集落である岩出地区は、このような華やかでしかも波瀾に満ちた歴史を持っているのですが、明確な資料も少なく、その歴史について具体的に語られる機会は少なかつたように思われます。

今回の発掘調査では、岩出祭主が活動していた時代を中心に、岩出城が築城される直前頃までの遺跡が濃密に確認されました。岩出地区内遺跡群の調査自体は、今回も含めて4回にわたりますが、風流な人物の存在を想定させる絵の描かれた土器や、祭祀の匂いのする墨書土器、また伊勢では珍しい鎌倉時代のカイロ（温石）？、多様な貿易陶磁器などが出土しており、岩出祭主の存在とその周辺に形成された集落の質の高さを彷彿とさせます。このような貴重な成果を得ながらもその遺跡が記録保存というかたちでしか残せなかつたのは残念というほかありませんが、調査の実施によって明らかになった事実を今後深く追求していくことにより、文化財保護への関心が皆様により強く感じていただけるのであれば、これに勝る喜びはありません。

調査に際しましては、玉城町・度会町・伊勢市在住の皆様方、玉城町教育委員会をはじめ、県土木部道路建設課・伊勢土木事務所の関係各位からは、多大な御協力とともに暖かい御配慮をいただくことができました。調査の成果はひとえにこれら方々の文化財保護への深い御理解にあります。文末とはなりましたが、各位の誠意あるご対応に心からのお礼を申し上げ、冒頭の挨拶といたします。

1996年3月

三重県埋蔵文化財センター

所長 川村政敬

例 言

- 1 本書は、県道岩出新田線道路改良事業に伴い緊急発掘調査を実施した度会郡玉城町岩出地区内に所在する岩出地区内遺跡群の発掘調査報告書である。
- 2 岩出地区には、旧石器時代～中・近世に至る遺跡が複合的に確認されている。これまでの発掘調査では、^{かやま}蚊山遺跡・蚊山古墳群と呼称され、報告されてきたものがある。しかし、岩出地区内における遺跡の状況を鑑み、当報告以降、以下のように把握する。

(旧 称) (改 称)

角垣内遺跡……………岩出遺跡群角垣内地区 (旧石器)

蚊山古墳群……………左郡古墳群 (古墳)

蚊山遺跡……………岩出遺跡群 (中世～近世)

岩出城跡……………岩出城跡・岩出城下町跡 (近世初頭)

岩出地区内遺跡群

- 3 調査は、平成2年度と平成4年度の2次にわたっている。平成2年度は字ケカノ辻・角垣内・左郡地内、平成4年度は字蚊山地内である。なお、以前の調査との混乱を避けるため、便宜上平成2年度調査区を「ケカノ辻・角垣内地区」、平成4年度調査区を「蚊山地区」と呼称する。調査の体制は以下の通りである。

<平成2年度>

調査主体 三重県教育委員会

調査担当 三重県埋蔵文化財センター (調査第一課)

主 事 田中久生・福田哲也

研修員 小川専哉・宮崎宣光・東山則幸

<平成4年度>

調査主体 三重県教育委員会

調査担当 三重県埋蔵文化財センター (調査第一課)

技 師 伊藤裕偉 研修員 東 良樹

- 4 当報告書の作成業務は三重県埋蔵文化財センター調査第1課および管理指導課が行い以下の方々の援助・協力を得た。写真は、遺構関係を伊藤・田中・東が、遺物を伊藤・田中が撮影した。執筆および全体の編集は伊藤裕偉が行った。

足立純子、石橋秀美、岩崎道代、尾家 恵、柿原清子、川方裕美、北山美奈子、楠 純子、倉田由起子、小林佳代子、須賀幸枝、杉原泰子、瀧川ひとみ、武村千春、田中美樹、豊田幸子、中村美智代、中山豊子、西田衣里、西山秋子、浜崎佳代、林由起子、藤村美智子、前村浩子、松井美幸、松月浩子、森島公子、脇坂栄子、

- 5 報告書作成にあたっては、乾 哲也氏 (和泉市教育委員会)、駒井正明氏 (財大阪府埋蔵文化財協会)、近藤康司氏 (堺市埋蔵文化財センター)、坪之内徹氏 (奈良女子大学)、中野晴久氏 (常滑市歴史民俗資料館)、藤澤良祐氏 (財瀬戸市埋蔵文化財センター)、村井幸洋氏 (三尊寺) のご教示を得た。

- 6 蚊山地区検出の瓦窯の考古地磁気測定については、広岡公夫氏・田中彰子氏 (富山大学) に御世話をいただき、玉稿も賜った。

- 7 調査にあたっては、玉城町岩出・勝田・山岡・中角・岡出・宮古、度会町葛原、伊勢市中須町在住の方々、玉城町教育委員会、および県土木部道路建設課・伊勢土木事務所から多大な協力を受けたことを明記する。

- 8 挿図の方位は、ケカノ辻・角垣内地区については座標北で、蚊山地区については真北で示している。当調査区は

国土座標第Ⅵ系に相当する。当地の磁針方位は西偏6°20′（平成元年）である。

9 写真図版の遺物番号は、実測図の番号と対応している。写真図版は、特に断らない限り縮尺不同である。

10 当報告書での用語は、以下の通り統一した。

なべ……………「鍋」および「埴」があるが、「鍋」を用いた。

わん……………「椀」「碗」「埴」があるが、「椀」を用いた。

11 当報告書の遺構は、発掘調査当時の呼称を改め、全て通し番号となっている。旧呼称との対応関係は本文中の表で行っている。また、煩雑となるような挿図では「S」あるいは「SK」などの記号を省略したものがある。

12 スキャニングによるデータ取り込みのため若干のひずみが生じています。

各図の縮尺率は、スケールバーを参照ください。

本文目次

I	前言	伊藤裕偉	1
1	調査の契機		1
2	調査の経過		1
3	調査の方法		1
II	位置と環境～問題の所在～	伊藤裕偉	3
1	中世「岩出」にかかる問題点		3
2	近世「岩出」にかかる問題点		4
3	「蚊山」の地名について		6
III	調査の成果―層位と遺構―	伊藤裕偉	11
1	基本層位		11
2	ケカノ辻・角垣内地区の遺構		11
3	蚊山地区の遺構		17
IV	調査の成果―出土した遺物―	伊藤裕偉	31
1	ケカノ辻・角垣内地区出土の遺物		31
2	蚊山地区出土の遺物		34
V	調査資料の科学分析	広岡公夫・田中彰子	80
	瓦窯SF501の考古地磁気年代		80
VI	調査のまとめと検討	伊藤裕偉	83
1	左郡古墳群について		83
2	中世岩出遺跡群にかかる事例と検討		84
3	中世集落形成にかかる諸要因		92
4	近世の遺構と遺物について		93

写真図 版目次

P L A T E表紙	中世墓 S X 3 0 5 出土遺物	P L . 1 2	蚊山地区	瓦窯 S F 5 0 1	1 次窯	
P L . 1	ケカノ辻・角垣内地区	調査区全景	P L . 1 3	蚊山地区	瓦窯 S F 5 0 1	2 次窯
P L . 2	ケカノ辻・角垣内地区	各遺構 (1)	P L . 1 4	出土遺物 (1)		
P L . 3	ケカノ辻・角垣内地区	中世墓 S X 3 0 5	P L . 1 5	出土遺物 (2)		
P L . 4	ケカノ辻・角垣内地区	各遺構 (2)	P L . 1 6	出土遺物 (3)	絵画のある山茶碗	
P L . 5	ケカノ辻・角垣内地区	各遺構 (3)	P L . 1 7	出土遺物 (4)	土師器類	
P L . 6	ケカノ辻・角垣内地区	各遺構 (4)	P L . 1 8	出土遺物 (5)	土師器・墨書土器	
P L . 7	ケカノ辻・角垣内地区	各遺構 (5)	P L . 1 9	出土遺物 (6)	陶器・瓦質土器・温石	
P L . 8	ケカノ辻・角垣内地区	各遺構 (6)	P L . 2 0	出土遺物 (7)	磁器類	
P L . 9	ケカノ辻・角垣内地区	各遺構 (7)	P L . 2 1	出土遺物 (8)	金属・石製品、瓦類	
P L . 1 0	蚊山地区	調査区全景・土層	P L . 2 2	参考・三尊寺山門・観音堂		
P L . 1 1	蚊山地区	各遺構	P L . 2 3	参考・三尊寺山門使用の瓦		

挿 図 目 次

fig.1	岩出周辺地形図……………	4	fig.25	ケカノ辻・角垣内地区出土遺物(6) ……	41
fig.2	岩出地区内遺跡群地形図……………	5	fig.26	ケカノ辻・角垣内地区出土遺物(7) ……	42
fig.3	ケカノ辻・角垣内地区平面図(1) ……	7~8	fig.27	ケカノ辻・角垣内地区出土遺物(8) ……	43
fig.4	ケカノ辻・角垣内地区平面図(2) ……	9~10	fig.28	ケカノ辻・角垣内地区出土遺物(9) ……	44
fig.5	ケカノ辻・角垣内地区西壁土層(1) ……	12	fig.29	ケカノ辻・角垣内地区出土遺物(10) ……	45
fig.6	ケカノ辻・角垣内地区西壁土層(2) ……	13	fig.30	ケカノ辻・角垣内地区出土遺物(11) ……	46
fig.7	ケカノ辻・角垣内地区西壁土層(3) ……	14	fig.31	ケカノ辻・角垣内地区出土遺物(12) ……	47
fig.8	S E 3 7 7 付近掘立柱建物集中部分平面図	15	fig.32	ケカノ辻・角垣内地区出土遺物(13) ……	48
fig.9	S A 4 5 8 付近掘立柱建物集中部分平面図	16	fig.33	ケカノ辻・角垣内地区出土遺物(14) ……	49
fig.10	S D 3 9 1 付近掘立柱建物集中部分平面図	17	fig.34	ケカノ辻・角垣内地区出土遺物(15) ……	50
fig.11	S D 4 4 5 付近掘立柱建物集中部分平面図	18	fig.35	ケカノ辻・角垣内地区出土遺物(16) ……	51
fig.12	S X 3 0 5 平面図……………	19	fig.36	ケカノ辻・角垣内地区出土遺物(17) ……	52
fig.13	S X 3 0 5 墓壙実測図……………	19	fig.37	ケカノ辻・角垣内地区出土遺物(18) ……	53
fig.14	蚊山地区平面図……………	20	fig.38	ケカノ辻・角垣内地区出土遺物(19) ……	54
fig.15	蚊山地区各部土層断面図……………	21	fig.39	蚊山地区出土遺物(1) ……	55
fig.16	S B 5 2 2 ・ 5 2 3 平面・断面図……………	22	fig.40	蚊山地区出土遺物(2) ……	56
fig.17	S K 5 0 7 平面・断面図……………	22	fig.41	蚊山地区出土遺物(3) ……	57
fig.18	S F 5 0 1 (1 次) 平面・立面図及び 1 ・ 2 次 瓦窯土層図……………	23	fig.42	西南日本の考古地磁気永年変化と 瓦窯 S F 5 0 1 の考古地磁気測定結果……………	82
fig.19	S F 5 0 1 (2 次) 平面・立面図……………	24	fig.43	岩出遺跡群における南伊勢系土師器皿 B 系統の変遷……………	85
fig.20	ケカノ辻・角垣内地区出土遺物(1) ……	36	fig.44	土師器皿口径・重量相関図……………	86
fig.21	ケカノ辻・角垣内地区出土遺物(2) ……	37	fig.45	山茶碗(639) 外面の絵画……………	89
fig.22	ケカノ辻・角垣内地区出土遺物(3) ……	38	fig.46	昭和18年時点の地割りと調査区との関係	90
fig.23	ケカノ辻・角垣内地区出土遺物(4) ……	39	fig.47	風呂谷館跡検出瓦窯……………	91
fig.24	ケカノ辻・角垣内地区出土遺物(5) ……	40			

目 次

tab. 1	ケカノ辻・角垣内地区遺構一覧表(1) …25	tab.21	ケカノ辻・角垣内地区出土遺物 観察表(12)……………	69	
tab. 2	ケカノ辻・角垣内地区遺構一覧表(2) …26	tab.22	ケカノ辻・角垣内地区出土遺物 観察表(13)……………	70	
tab. 3	ケカノ辻・角垣内地区遺構一覧表(3) …27	tab.23	ケカノ辻・角垣内地区出土遺物 観察表(14)……………	71	
tab. 4	ケカノ辻・角垣内地区遺構一覧表(4) …28	tab.24	ケカノ辻・角垣内地区出土遺物 観察表(15)……………	72	
tab. 5	ケカノ辻・角垣内地区遺構一覧表(5) …29	tab.25	ケカノ辻・角垣内地区出土遺物 観察表(16)……………	73	
tab. 6	ケカノ辻・角垣内地区掘立柱建物 ・柱列一覧表……………	29	tab.26	ケカノ辻・角垣内地区出土遺物 観察表(17)……………	74
tab. 7	蚊山地区遺構一覧表……………	30	tab.27	ケカノ辻・角垣内地区出土遺物 観察表(18)……………	75
tab. 8	蚊山地区掘立柱建物一覧表……………	30	tab.28	ケカノ辻・角垣内地区出土遺物 観察表(19)……………	76
tab. 9	瓦出土地点および数量(破片数)一覧表	34	tab.29	ケカノ辻・角垣内地区出土遺物 観察表(20)……………	77
tab.10	ケカノ辻・角垣内地区出土遺物 観察表(1)……………	58	tab.30	ケカノ辻・角垣内地区出土遺物 観察表(21)……………	78
tab.11	ケカノ辻・角垣内地区出土遺物 観察表(2)……………	59	tab.31	蚊山地区出土遺物観察表(22)……………	79
tab.12	ケカノ辻・角垣内地区出土遺物 観察表(3)……………	60	tab.32	瓦窯 S F 501 のNRM の磁化測定結果…	82
tab.13	ケカノ辻・角垣内地区出土遺物 観察表(4)……………	61	tab.33	瓦窯 S F 501 の50 Oe 消磁後の磁化測定 結果……………	82
tab.14	ケカノ辻・角垣内地区出土遺物 観察表(5)……………	62	tab.34	瓦窯 S F 501 の考古地磁気測定結果…	82
tab.15	ケカノ辻・角垣内地区出土遺物 観察表(6)……………	63	tab.35	溝 S D 391 の土器組成……………	87
tab.16	ケカノ辻・角垣内地区出土遺物 観察表(7)……………	64	tab.36	井戸 S E 381 の土器組成……………	88
tab.17	ケカノ辻・角垣内地区出土遺物 観察表(8)……………	65	tab.37	土坑 S K 408 の土器組成……………	88
tab.18	ケカノ辻・角垣内地区出土遺物 観察表(9)……………	66	tab.38	溝 S D 341 の土器組成……………	88
tab.19	ケカノ辻・角垣内地区出土遺物 観察表(10)……………	67	tab.39	土坑 S K 406 の土器組成……………	88
tab.20	ケカノ辻・角垣内地区出土遺物 観察表(11)……………	68	tab.40	溝 S D 412 の土器組成……………	88

I 前 言

1 調査の契機

平成5年4月で近畿自動車道・勢和～伊勢線が供用開始となる。度会郡玉城町岩出地内にも、集落の南側を東西に横断するようにその道が走る。県道岩出新田線は岩出地区内を南北に走る道で、今回近畿自動車道の下を潜るかたちで新たな路線が設置されることになった。現岩出集落内を通る当該道路は、狭いにもかかわらず大型自動車の通行も頻繁であり、当該道路の改良は交通緩和と地域振興を図るためにも必要な措置と考えられる。このため、既に近畿自動車道建設にかかる埋蔵文化財調査で周知の遺跡となっていた岩出地区内遺跡群（旧称・蚊山遺跡）の調査が必要となった。

今回の道路改良事業予定地内における遺跡の範囲を確定するために、平成元年10月20日から同年11月1日にかけて当埋蔵文化財センターが試掘調査を実施した。その結果、字ケカノ辻・角垣内・左郡地内と、字蚊山・塚名地内の約6,500㎡が調査必要範囲として認識されるに至った。開発工事の関係上、ケカノ辻・角垣内地区は平成2年度に、蚊山地区は平成4年度に調査を行うこととなった。

近畿自動車道にかかる当該遺跡の調査は、所り垣地区および左郡地区でそれぞれ行われている。したがって当該遺跡の調査は都合4次にわたることになる。混乱を避けるため、近畿自動車道にかかる第1～2次調査を所り垣地区・左郡地区とし、県道改良事業にかかる平成2年度の第3次調査をケカノ辻・角垣内地区、平成4年度の第4次調査を蚊山地区として扱う。

なお、文化財保護法（昭和25年法律第214号・以下、「法」と呼称）にかかる諸通知は、法第57条の3第1項にかかる通知を平成2年7月11日付け道建第771号（県知事通知）で、法第98条の2第1項にかかる通知を平成2年8月23日付け教文第1350号、および平成4年9月30日付け教文第1862号（共に県教育委員会教育長通知）で、それぞれ文化庁長官あてに行っている。

2 調査の経過

平成2年度の発掘調査は9月25日から開始し、同年12月28日に全て完了した。最終的な調査面積は、計3,500㎡である。平成4年度の発掘調査は10月12日から開始し、同年11月19日に全て完了した。最終的な調査面積は、計1,010㎡である。

現地調査は、下記の方々の御参加により、恙なく進行し、終了することができた。ここに御芳名を記して感謝の意を表したい。

（現地調査作業員・平成2・4年度を一括）

青木 勇 青木 茂 池田小昭 池山晶子 岩崎あき 岩崎つね 岩崎とみ 岩崎ゆきえ 内田ちよの 萩田ちよ 沖見千津子 沖見富男 奥野せつ子 神谷幸子 河合はる子 河村さつ子 北岡みさよ 小辻喜巳 小林きよ 小林ひさ 小林鉦司 小林正彦 阪井市蔵 阪井き代司 阪井文子 坂口とみ子 里中義美 茂谷良子 茂谷やす子 清水きく 清水とみ 杉田逸男 竹郷愛子 谷口おとゑ 谷口ミサヲ 田村良男 辻本チヨウ 堤のり子 出口 久永井さだ子 中川一子 中北利読 中瀬さき 長尾ます 中西みとえ 中西八重子 中山とめ 西川あや子 西村かづ 野口清子 野口敏子 野口美知 藤川かね子 古田君子 堀之内えみ子 松井美代 松井ゆきへ 松田綾子 松田君代 松田照子 松田利郎 松田とくの 松田とよ 松田廣美 松田正男 松田良高 間宮美智子 見置千代 見置まさ子 宮本 清 宮本重子 宮本信子 宮本ミヨコ 村井テル 村田まさ 山川きぬ 山路喜代子 山口久米次 山口 節 山本きみへ 山本くにへ 渡辺喜代子 渡辺幸太郎

3 調査の方法

a 小地区設定について

今回の調査では、調査区内を4m四方の柵目で切ることによって小地区を設定した。両地区とも北からアルファベット、西から数字を付け、柵目の北西隅の番号をその小地区の符号とした。なお、この小地区設定は座標軸とは全く無関係である。

b 遺構図面について

調査区平面図の作成は、ケカノ辻・角垣内地区は航空測量、蚊山地区は1/100の平板測量による。蚊山地区のうち、掘立柱建物の確認された一画は1/20の実測図を作成した。遺物出土状況や中世墓・各遺構の土層などについては個別に実測図を作成したものもある。航空測量図は1/50を基本としている。個別遺構図は1/10を基本としているが、各々の性格によって違った縮尺のものもある。

c 遺構番号等について

遺構番号は通し番号とし、ケカノ辻・角垣内地区と調査区が接する左郡地区との混乱を避けるため、ケカノ辻・角垣内地区は300～400番台、蚊山地区は500番台とした。また各遺構の見た目の雰囲気によって頭の略記号を以下のように付加した。

SA……………柱列	SB……………掘立柱建物
SD……………溝	SE……………井戸
SK……………土坑	SF……………窯
SZ……………落ち込み・ 土坑群等	SX……………墓 pit ………ピット・柱穴

4 遺跡名称について

例言でも触れたように、当遺跡はすでに蚊山遺跡として報告書が刊行されている地区がある。しかし、岩出地区における遺跡の重複関係から、今後は以下のように把握することとする。

岩出遺跡群

旧石器時代 字角垣内において、旧石器時代を中心とした遺跡が確認されている^①。ただし、同時代の遺物が左郡地区でも採取されており、所り垣地区では下層にその時代の遺跡の存在が確認されている^②。さらに、後述するように蚊山地区でもその可能性のあるものが出土している。したがって旧石器時代の遺跡については岩出地区内に広く散在的に分布することが想定されるため、大きく岩出遺跡群として把握し、個別に地区名(字名)を冠することで将来に備えたいと考える。

中世 中世では、現在までのところ左郡・塚名・所り垣・ケカノ辻・角垣内・蚊山などの地内において調査がなされ、その時代の遺構が確認されている。また、採集資料ではあるが、後の岩出城跡付近でも

中世のものが確認されている^③。これらのことや中世における岩出の意義(第Ⅱ・Ⅵ章参照)から考えて、岩出地区内全域にわたって中世の遺跡が展開しているものとするのが妥当である。なお、中世遺跡には居館跡・寺院跡・中世墓などの遺跡が複合して確認されると予想されるため、遺跡名に「群」を付加することとする。

左郡古墳群

岩出地区における古墳群は、字左郡・塚名に及ぶことが確認されるとともに、字角垣内・蚊山にまでは及ばないことも判ってきた。したがって、調査がなされた中心部分の字を採り、左郡古墳群と呼称することとする。

岩出城跡・岩出城下町跡

近世 近世初頭には岩出城が成立するが、その存続時期は極めて短い(第Ⅱ章参照)。しかし、岩出城が成立した段階では総構え(外郭)も構築され、一定の整備がなされている。この事実を積極的に考慮に入れ、ほんの短い期間ではあるがこの時期の岩出城関連遺跡を「岩出城跡・岩出城下町跡」として把握する。なお、岩出城下町跡については、外堀(外区画)の存在から総構え的な状況を呈しているものと考えられ、さらにその外側に「鷹匠町」「新田町」などの字があることから、外区画を境とした区分も可能と考えられる。しかし、外区画外側がどの程度の広がりを持つのかは現状では判然としない。

以上のことを鑑み、現在のところ当地にはfig. 2のように遺跡が展開しているものとして把握する。

註

- ① 奥義次「第1章考古 第1節旧石器・縄文時代」(『三重県玉城町史』上巻 1995)
- ② 稲本賢治「蚊山遺跡所り垣地区」(『近畿自動車道(勢和～伊勢)埋蔵文化財発掘調査報告』第4分冊 三重県埋蔵文化財センター 1992)
- ③ 瀬古吉久ほか「岩出の遺跡」(『歩跡』第3号 皇学館大学考古学研究会 1976)

Ⅱ 位置と環境 ～問題の所在～

岩出地区内遺跡群は、度会郡玉城町岩出地区内全域に広がる面積約490,000㎡の広大な遺跡である。地形的に見ると、宮川左岸の中位～低位段丘上に立地しており、標高は20m前後の平坦な立地である。

近畿自動車道にかかる埋蔵文化財発掘調査によって、当遺跡は既に第1次・第2次の調査結果が公表されている^①。これによって当該遺跡は旧石器時代・縄文時代・古墳時代および奈良時代以降の近世までの遺跡であることが明らかとなり、特に古墳時代の群集墳と中世の集落が顕著に認められる遺跡であることが判明している。

当遺跡周辺の環境についてはすでに上記の報告書に記載されている。また、古墳時代の背景については落合古墳群の報告^②で、中世の背景については楠ノ木遺跡の報告^③でそれぞれ概略を記述しているので繰り返さない。したがって、岩出地区内遺跡群にかかる問題のうち、最も重要である“岩出”について掘り下げ、この章を構成しよう。

1 中世「岩出」にかかる問題点

中世以降の岩出地区については、平安時代後期の11世紀初頭から室町時代末期の16世紀前葉までの約500年間、伊勢神宮祭主大中臣氏の居館が存在していたとされている。このことに関しては岡田荘司氏の優れて示唆的な論文^④があるので、それを基に見ていこう。

「岩出祭主」と呼ばれるのは、長保3(1001)年の大中臣輔親からといわれ、この頃から祭主が岩出に居館を構えていたのではないかと推定される。その後、明応年間(1492～1501)頃までは「岩出殿」などと呼ばれる祭主が確認でき、以降にはみられなくなる。したがって、おおよそ500年間については岩出に祭主の居館が存在していたのではないかと想定される。

特に平安時代の末頃には祭主の下にある神宮検非違使の役割が顕著なものとなり、祭主機構が独自の中世的権力として形成されている^⑤。このため、南北朝期までの間、神三郡(飯野・多気・度会郡)は祭主により実質的な運営がなされている。したがって、

祭主館の存在した当地が、神三郡のなかでも際立つて重要な場所であったことは論を待たない。

なお、祭主に実質的権限があった平安末期から鎌倉時代前期には、岩出地内に複数の仏堂(寺院)が建てられていた。『古今著聞集』には「瞻西上人圖繪和歌曼陀羅事」として「祭主神祇伯親定伊勢国いはでといふ所に堂を立て、瞻西上人を請じて供養をとげり。(後略)」^⑥とあり、『文保記』「一 掘墓穢事」には「建保五年四月五日、掘岩三位能隆新御堂塚之時、掘出鉢瓶各一口之間、被定卅ヶ日穢了(後略)」^⑦とある。親定の祭主就任期間は1092～1122年、建保5年は1217年であり、平安時代末～鎌倉時代にかけての時期に祭主を願主とした仏堂(寺院)が最低2基存在したことが知れる。今回の調査によっても平安末期～中世と考えられる瓦がいくつか見つかり、また字一原町から新田町にかけての地内には口承地名として「寺屋敷」と呼ばれるところがある。「寺屋敷」については中世後期以降に成立した地名である可能性も大きいですが、いずれにしても岩出地内に祭主の居館と仏堂(寺院)の存在は確かである。

中世後期に至ると、南北朝期の内乱が当地にも大きな影響を与えている。延元2(1337、建武4)年7月日付けの加藤定有軍忠状(『南狩遺文』)によれば、当時の伊勢国守護畠山高国が岩出に來襲していることが窺われる^⑧。このことから、当地が軍事的な要地であるとともに、当地に南朝政権側の何らかの施設等が存在していたことが想定されよう。

また、『醍醐寺文書』所収「法楽寺領拝領人数注文」^⑨によれば、法楽寺(現度会郡度会町棚橋の蓮華寺の前身)領の給人に「宮子刀祢職 岩出今大路」、「常幢寺領八段 岩出松本」の名が見える。法楽寺は南北朝期に南朝方・北朝方による熾烈な争奪戦が繰り広げられたところであるが、それ以前の鎌倉中期に神宮祭主の子息に伝領された経緯を持つ。南北朝期前後における岩出と法楽寺との関係の深さはこのことから推察されるとともに、神宮祭主あるいはその関係者の拠点が政治的・軍事的に重要な場であったことを、上記の守護・畠山氏の行動が示して

いると考えられる。

その後は南北朝期後半期に南朝政権の影響により北畠氏が伊勢国司として入部し、以降の南勢地域を大なり小なり規定する存在となる。その段階でも岩出に祭主館が存在していたらしいことは上記のとおりであるが、公的権力としては実質は衰退に向かっていたものと考えられる。

岩出周辺地域では、14世紀第2四半期中に田丸城(度会郡玉城町田丸)が北畠氏支配下における支城として配置され、その後、15~16世紀にかけては北畠氏領域における多気(美杉村)に次ぐ重要な拠点として機能している。特に16世紀における田丸城は、伊勢参宮の公卿・山科言継を北畠氏が接待するために用いられており、北畠氏の領域支配における中核的な城であるとともにその周囲には町場が形成され^⑩、都市的な機能を有していたことが推察される。

15~16世紀にかけての岩出がどのような状況に置かれていたのかはよく判らない。考古学的に見た場合、中世岩坂郷(村)に比定されると考えられる楠ノ木遺跡^⑪が15世紀中葉頃には実質的に消滅したりしており、中世前期までの秩序とは明らかに異なった状況下にあったであろうことが想定される。岩出遺跡群においても南北朝期以降のあり方は前代までとは異なりが見られ、祭主の実質的機能の低下に伴っ

て岩出集落も何らかの変貌をきたしていたものと想定される。

以上、中世における岩出周辺の状況を見てきた。岩出遺跡群は極めて大規模な遺跡であり、特に中世のそれは神宮祭主とその居館および付属施設の存在を前提としたうえで考察すべき対象といえる。広大な面積を有し、数多くの建物跡や区画溝などが確認されている岩出遺跡群は、発掘調査によって明らかとなった中世集落の典型的なもののように見える。しかし、上記の点を看過してしまえば、岩出遺跡群の評価はおろか、中世集落の本質をも見失う結果ともなりそうである。

2 近世「岩出」にかかる問題

中世末期から近世初頭にかけては、岩出城が存在している。この城がいつ頃築かれたのかは定かではないが、北畠氏が織田氏の支配下に入った永禄12(1569)年直後に田丸城の破城が実行されており^⑫、それ以降田丸城に代わり当該地域周辺における中核的な場として改めて機能していることは間違いない。

岩出城は、最終的には総構形態の城下町として成立していたらしいことが、地籍図や絵図あるいは小字名によって想定される^⑬。豊臣秀吉による朝鮮侵略にあたっては当時の岩出城主牧野利貞が岩出から



fig. 1 岩出周辺地形図(1:100,000)(国土地理院発行1/50,000【伊勢】から)

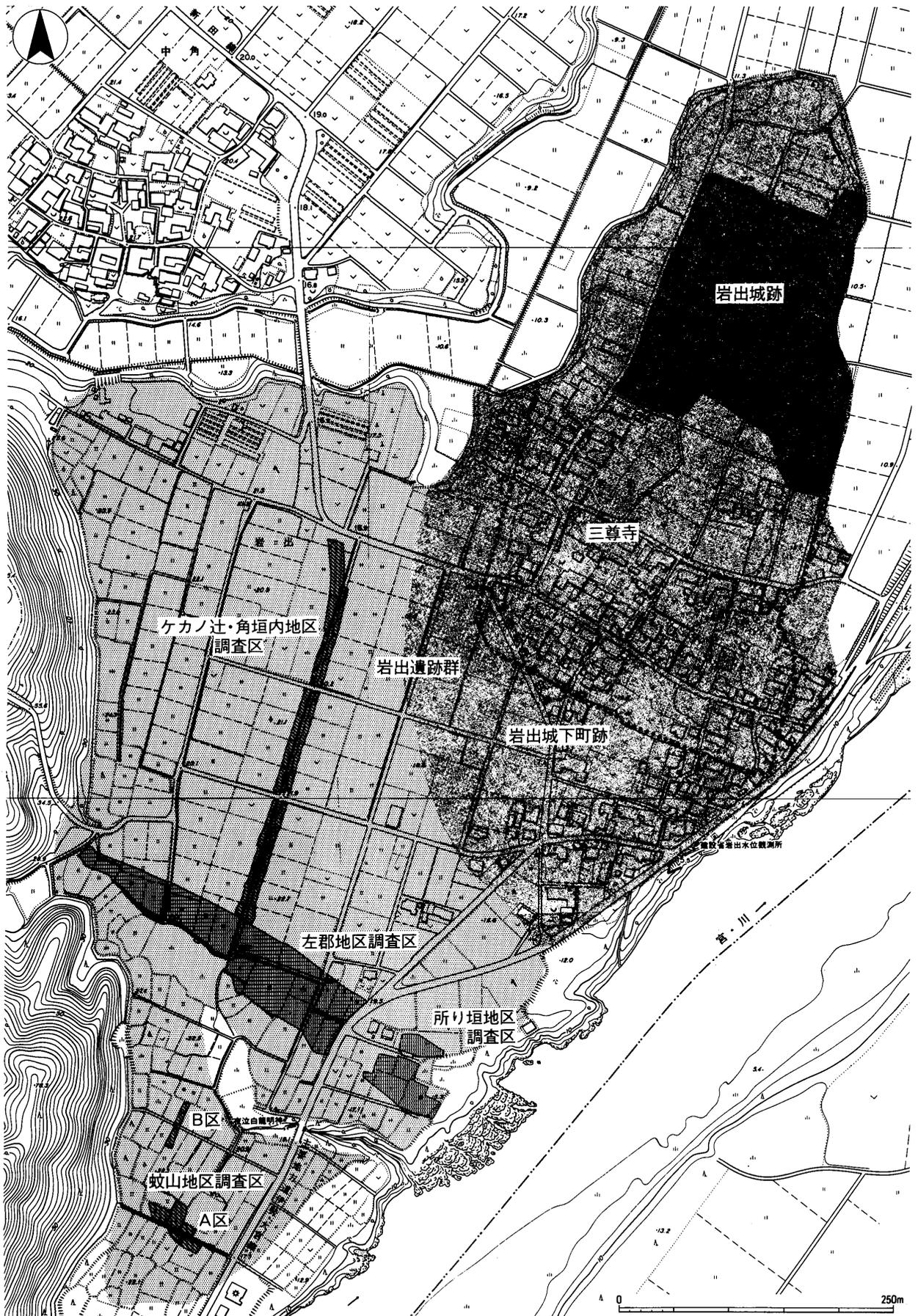


fig.2 岩出地区内遺跡群地形図 (1 : 5,000) 点線は地籍図から想定される岩出城外郭(土塁・堀)

出兵しており^⑤、当該時期における岩出の中核的な機能が推察される。しかし、関ヶ原の合戦の年(1600)には廃城となっているようで、当該地域の中心は再度田丸へと移り、明治維新を経て現在に至っている。

岩出の地は、その後は「町」として再開発されることはなかった。ここには近世初頭の城と城下集落がそのまま埋蔵されているものと見なされ、意欲的な城下町調査が行われれば城下集落に関する貴重な事例が数多く確認されることであろう。戦後の開墾によって主郭部分が表面的に確認できなくなっているのは、全く残念という他ないが、堀・建物跡等の遺構はそのまま残っている可能性が極めて大きく、今後の積極的な調査・保存が大切である。

さて、岩出城下の消滅後の17世紀初頭には、田丸藩領・津藩領を経て、元和5(1619)年以降は和歌山藩田丸領となり、岩出村と呼ばれている。岩出村はそのまま現在の岩出に相当すると考えて大過ない。現在、岩出地内の寺院には大字宮古の広泰寺の末寺である曹洞宗聯溪山三尊寺がある。「三尊寺過去帳」^⑥によれば万治2(1659)年に開山し、天保15(1844)年前後には本堂が葺瓦葺きにされているという。しかし、当寺院の山門の鬼瓦には「元禄十七□申年」(1704年)の銘が見え、その頃にはいくつかの建物が瓦葺きであったものと考えられる。

3 「蚊山」の地名について

上記の事柄とは少し関係ないが、「蚊山」の地名について若干考えておく。

御巫清直(1812~1894)の著作による『神宮神事考証』所収の「岩出村祭主居住ノ事」^⑦には「岩出村舊跡略図」とする絵図面がある。この絵図には現在の字蚊山に相当する場所に「カヤハ」とあり、岩出の字として「カヤバ」とある。この「カヤバ」が「茅場」であるとするならば、茅の栽培がなされていた場所「カヤバ」が時代を追うにしたがって「カヤマ」へと転訛したのものと考えることもできる。

この呼称は何時成立したのかは不明とせざるを得ないが、第三章で触れる蚊山地区の近世瓦窯の廃絶以降と考えられる。

註

- ① 稲本賢治「蚊山遺跡所り垣地区」(『近畿自動車道(勢和~伊勢)埋蔵文化財発掘調査報告』第4分冊 三重県埋蔵文化財センター 1992)および前川嘉宏「蚊山遺跡左郡地区」(『同上』第6分冊 三重県埋蔵文化財センター 1993)
- ② 伊藤裕偉「落合古墳群」(『同上』第7分冊 三重県埋蔵文化財センター 1992)
- ③ 伊藤裕偉「楠ノ木遺跡」(『近畿自動車道(勢和~伊勢)埋蔵文化財発掘調査報告』第3分冊 三重県埋蔵文化財センター 1991)
- ④ 岡田莊司「中世の大中臣祭主家」(『大中臣祭主藤波家の歴史』藤波家文書研究会 1993)
- ⑤ 西山克「南北朝期の権力と惣郷一伊勢神宮検非違使の消滅をめぐって」(『中世日本の歴史像』創元社 1978)
- ⑥ 『古今著聞集』巻5『新訂増補国史大系』第19巻 吉川弘文館
- ⑦ 『群書類従』第29輯 雑部
- ⑧ 金子延夫『玉城町史』第1巻(三重県郷土資料刊行会 1983)などに掲載。
- ⑨ 稲本紀昭「九鬼氏について」(『三重県史研究』創刊号 1985)なお、「法楽寺領拝領人数注文」は欠年号であるが、稲本氏はその成立年代を、『醍醐寺文書』中の関連史料から応永6(1399)年前後の成立と考えている。妥当な見解であろう。
- ⑩ 『言繼卿記』弘治3年3月24~25日条(『松阪市史』第3巻史料編古代・中世 1980所収)
- ⑪ 『鎬矢伊勢方記』(『東京学芸大学付属高等学校研究紀要』Ⅳ・Ⅴ)所収、明応8(1499)年5月日付山田三方神役人等日安に「近年構数多人家麓」等の記述からそれが知れる。
- ⑫ 楠ノ木遺跡に隣接する道が「岩坂道」、遺跡の付近に「岩坂不動」と呼ばれる祠のあることから推察される。なお、この件については別稿を予定している。
- ⑬ 『信長公記』永禄12年10月4日の条(角川文庫 1969)
- ⑭ 瀬古吉久ほか「岩出の遺跡」(『歩跡』第3号 皇学館大学考古学研究会 1976)
- ⑮ 「秀吉公名護屋御陣之図ニ相添候覚書」(天保6(1835)年間7月筆写、弘化3(1846)年2月転写)(『特別史跡名護屋城跡並びに陣跡』3 文禄・慶長の役城跡図集解説編 佐賀県教育委員会 1985)所収、および註⑧金子氏文献
- ⑯ 三尊寺蔵
- ⑰ 御巫清直『神宮神事考証』(『大神宮叢書』臨川書店)

参考文献

- ・『三重県の地名』日本歴史地名大系24(平凡社 1983)
- ・『角川日本地名大辞典』24 三重県(角川書店 1983)

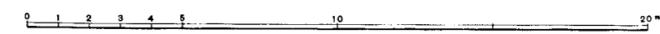
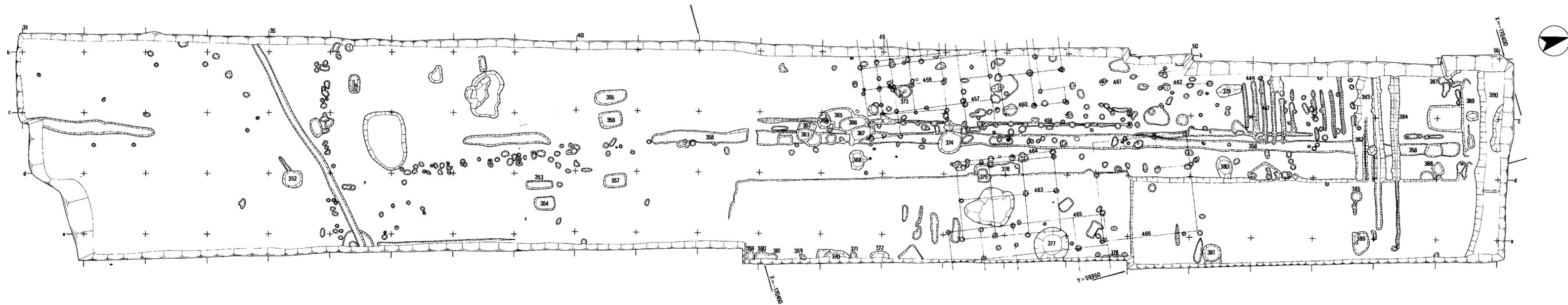
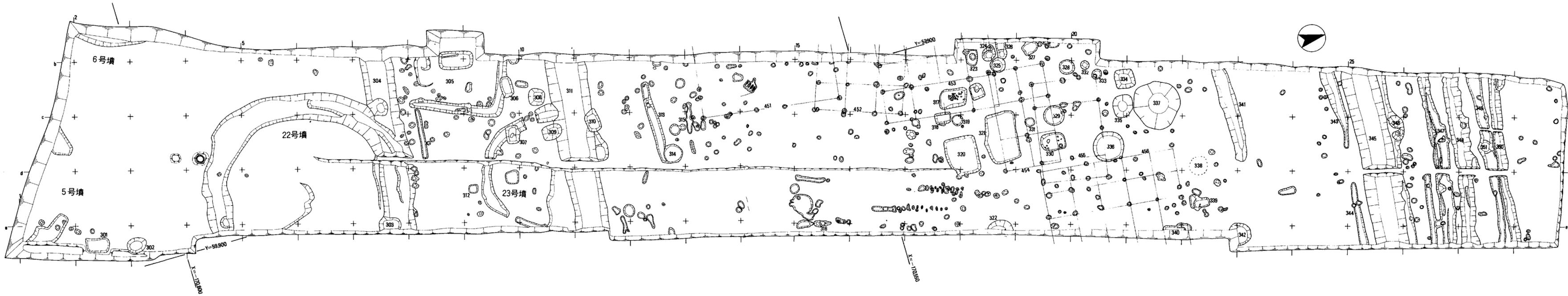


fig.3 ケカノ辻・角垣内地区平面図(1) 区画線はグリッド、遺構は数字のみにて表記。

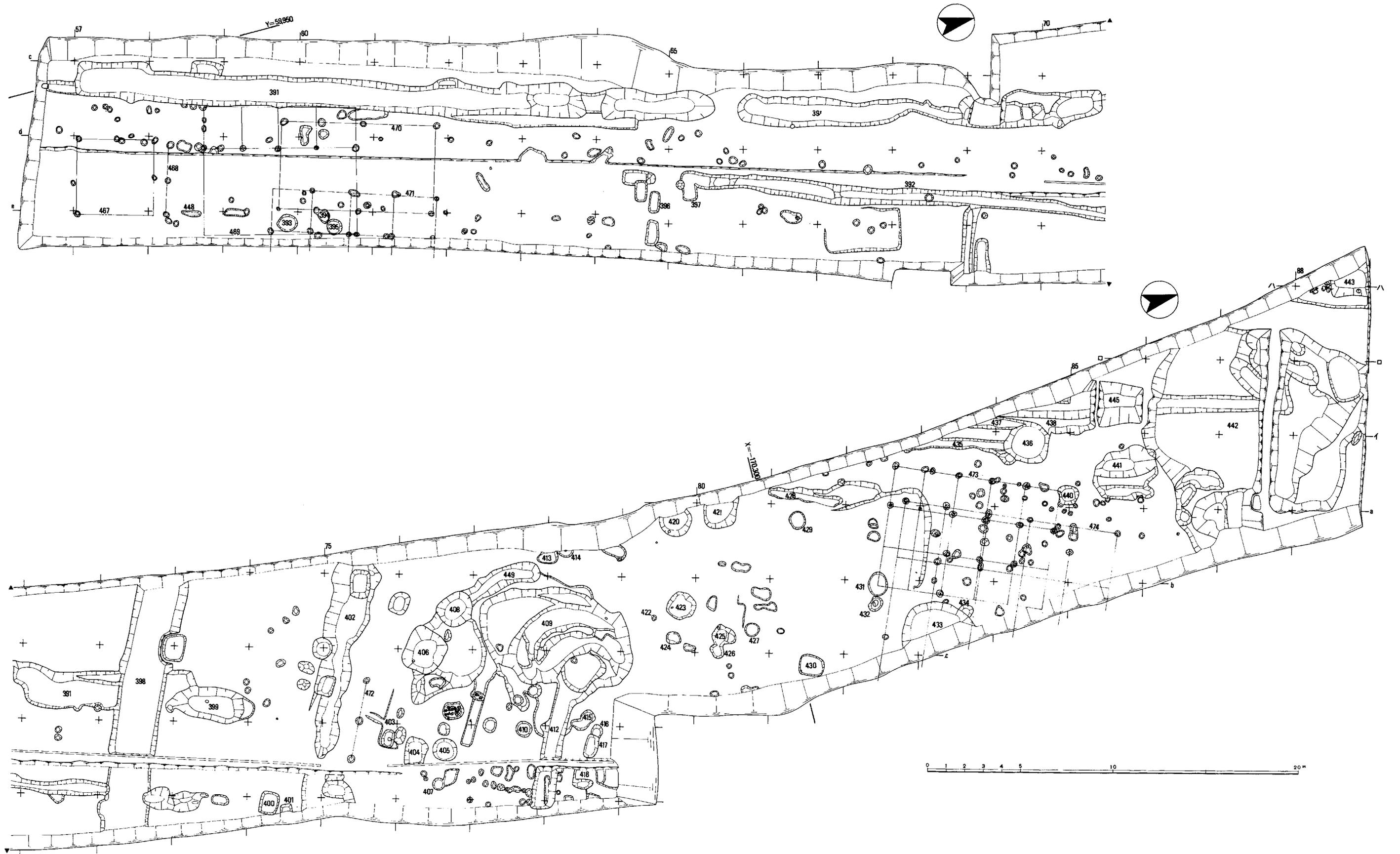


fig.4 ケカノ辻・角垣内地区平面図(2) (1:200) 区画線はグリッド、遺構は数字のみにて表記。

Ⅲ 調査の成果

－層位と遺構－

この章では、岩出地区内遺跡群の基本層位と、各調査区毎の遺構の概略を記述する。個別遺構の状況は遺構一覧表(tab. 1～8)を参照されたい。

1 基本層位

調査区の層位はH 1左郡地区の層位と大きな違いはない。基本的には上から順に耕作土・黒褐色系土(黒ボク)・砂礫混じり黄灰色系粘質土(遺構基盤層)となっている。

ケカノ辻・角垣内地区では、特にS D 402以北の部分に黒褐色系砂質土が厚く堆積しており、遺物包含層を形成している。調査区は、南端部で標高約23mで、北へ向かうにつれて漸次下降し、北端部では標高約18mまで下がっている。

蚊山地区には黒褐色系土の上に中世の遺物包含層に相当する淡褐色系砂質土が堆積しており、その上に瓦窯に伴う近世の遺物包含層が若干認められる。

蚊山地区では、明治年間頃の圃場整備により、調査区中央の耕地境の段により上下に分かれる。そのうち、下段部分の耕作土直下には灰褐色系砂質土が数10cm堆積しており、その中に多量の焼土・炭に混じってやはり多量の瓦が包含されていた。この瓦は全て近世に所属するものであり、焼土の量から推察すると、今回確認された瓦窯以外にも数基の窯が存在していた可能性が高い。

調査区が等高線に対して並行に近いケカノ辻・角垣内地区では上記の基本層位であるが、等高線に対して直行する蚊山地区では南部ほど黒褐色系土の堆積が薄くなり、南端では全く認められなかった。これは左郡地区の報告にあるように、戦前から行われた当地の圃場整備などによる開墾行為によって、その大部分が削り取られた結果と考えられる。

2 ケカノ辻・角垣内地区の遺構

平成2年度に調査をおこなった部分である。調査段階では、現道の関係で南からA～C区と呼称している。なお、調査区内を南北に縦断するかたちで導水施設が存在しているため、中央部分には調査不能部分が帯状に存在している。

ケカノ辻・角垣内地区では古墳・区画溝・溝・掘立柱建物・井戸・墓・土坑などを検出している。時代的には、古墳以外では一部平安時代のものを含むものの、その大部分が鎌倉～室町時代(以下、戦国時代までを含めて「中世」と呼称する)のものである。出土遺物中には縄文時代かと思われるものもあるが、その時期の明確な遺構は確認されていない。

a 古墳時代の遺構

古墳

左郡地区で確認された21基の古墳のうち、5号墳と6号墳の周溝の一部を今回の調査区でも確認した。また、新たに22・23号墳を確認している。いずれも円墳で、22号墳は直径約12.5m、23号墳は直径約8.0mである。今回の確認によって、「左郡古墳群」として認識されるものが最少23基の古墳によって構成されていることが判明した。

b 中世の遺構

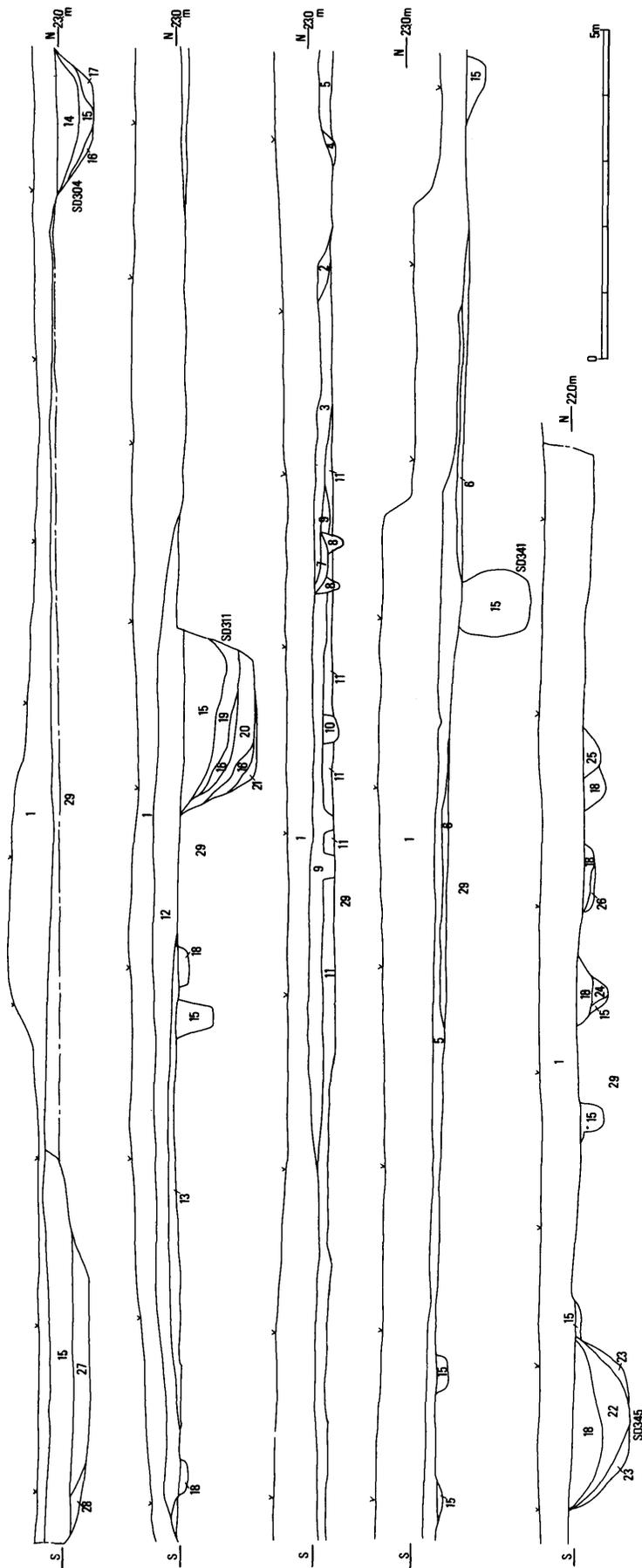
溝

溝は、耕作溝に相当するような小規模のもの以外は区画を意識したものと見なされる。そのうち、東西方向のS D 304・311・390・398・402、南北方向のS D 358・391・392・445は、幅・深さとも大規模で、大区画溝として認識されよう。

このうちS D 304・305は、その関係から道状遺構の側溝のようにも見える。しかし、時期的に近接して中世墓S X 305 が作られているため、例えばそれぞれ別々の区画を構成する溝として認識すべきかも知れない。

S D 391・402については時期的にも並行し、また溝底が平坦でないなどの共通点があり、同時存在と考えられる。そうすると、この2本の溝で囲まれた方形の区画を西側に想定でき、大規模な屋敷地の存在も想定される。

なお、S D 341 やS D 412 には多量の土器廃棄が見られる。しかもこれらは土器器皿類を中心としたもので、溝内土器廃棄としては特別な意味を持つ可能性も考えられる。



- | | | | | |
|----------|--------------|--------------|-----------|---------------|
| 1. 表土 | 7. 黒褐色土 | 13. 暗茶褐色土 | 19. 黒灰色土 | 25. 黄色土含心黒色土 |
| 2. 淡黄色土 | 8. 黄褐色土含心黒色土 | 14. 小礫含心黒茶色土 | 20. 暗黄褐色土 | 26. 黄茶褐色土 |
| 3. 暗黒茶色土 | 9. 暗黒茶色土 | 15. 黒色土 | 21. 暗黄褐色土 | 27. 淡黄色土 |
| 4. 黒色土 | 10. 黒色土 | 16. 暗灰色土 | 22. 黒茶色土 | 28. 灰黄色土 |
| 5. 黒灰色土 | 11. 黒茶色土 | 17. 暗黄色土 | 23. 淡茶褐色土 | 29. 黄色土 (基盤層) |
| 6. 黄茶色土 | 12. 黒茶色土 | 18. 茶褐色土 | 24. 灰茶色土 | |

fig.5 ケカノ辻・角垣内地区西壁土層(1) (1:100)

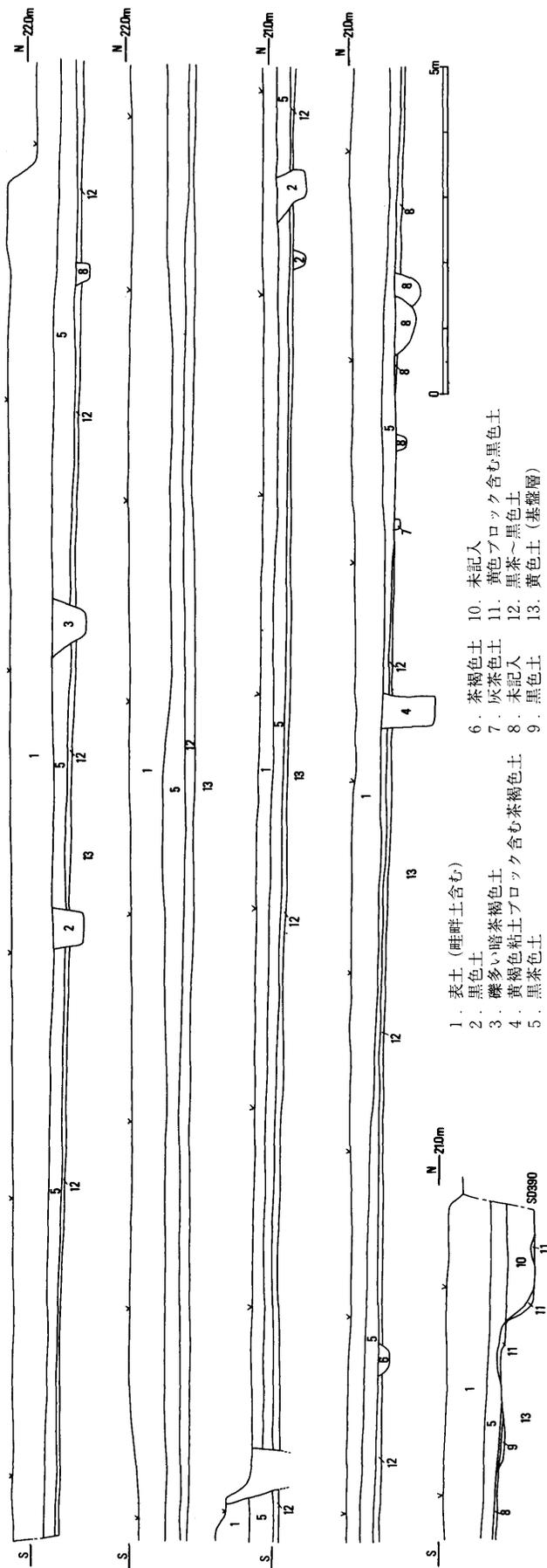


fig.6 ケカノ辻・角垣内地区西壁土層 (2) (1 : 100)

建物類

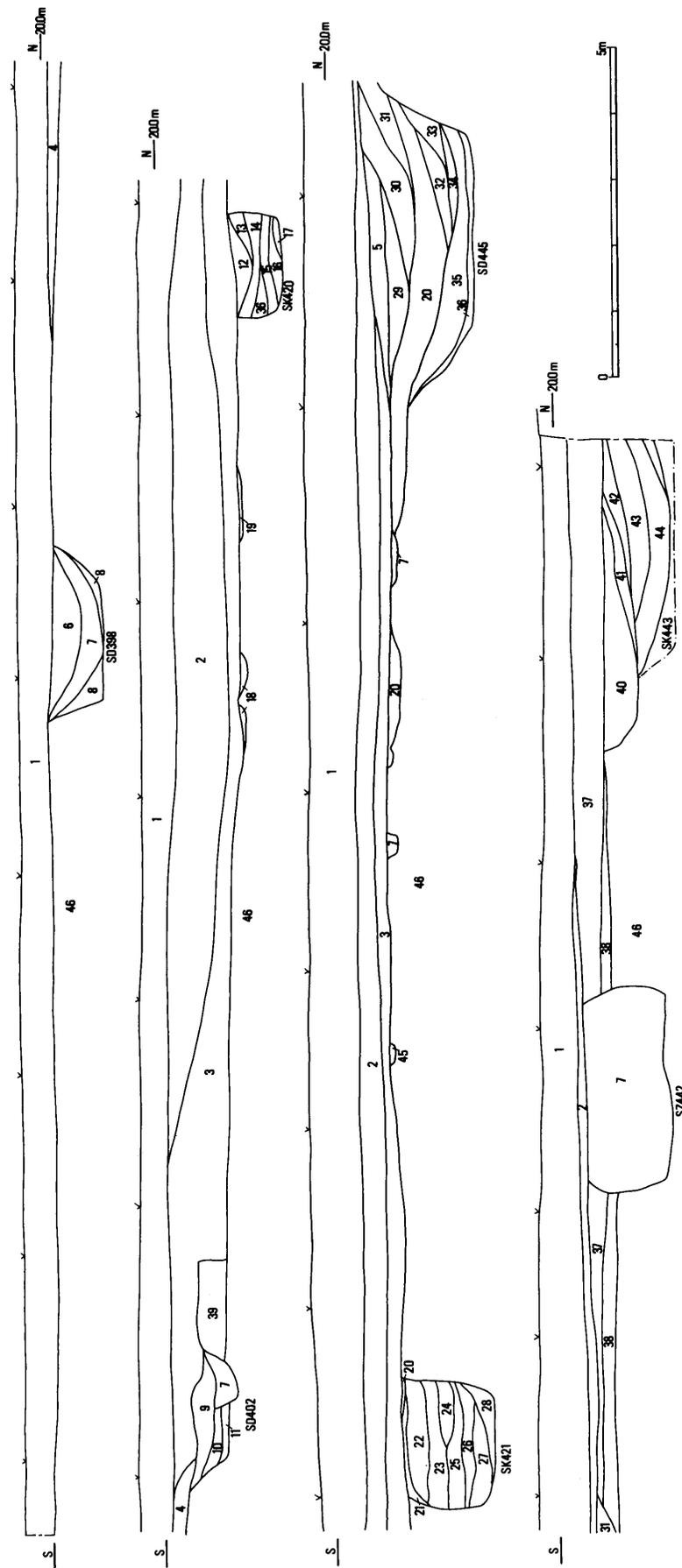
柱穴の揃い具合が今ひとつであるが、ピットの間隔が一定でしかも一直線上に並んでいること、及びそれに直行する同様なものが認められること、の2点を原則として見た場合、最少で19棟の建物と5列の柱列が確認された。S B 451～456の一群、S B 457・459～461・463・465・466とS A 458・462・464の一群、S B 467・469～471とS A 468の一群、S B 473・474の一群の、大きく4つの建物集中箇所が存在している。井戸が存在する周辺には建物が多く確認されているような傾向も見受けられる。

確認された建物は全て掘立柱建物である。時期的には第IV章で述べるⅡ期～Ⅲ期と考えられるが、ピットからの出土遺物が極めて少ないため、時期の特定は難しい。いくつかの建物には根石が認められる。建物の棟方向はそれぞれの付近にある区画溝の方向にほぼ沿っている。そのため、集中箇所単位で一定の棟方向が決定されているような状況と換言でき、全ての建物群が一定の方向性を持つものではないといえる。

なお、S D 358 にはそれと並行する建物がまとまらない反面、北側に約1m間隔で溝が付設する、古代の遺構ならば「布堀り」としたくなるような柱列S A 458 がある。これは、所属時期こそ違うものの、秋田県弘田柵跡などに見られる「板塀」に類似しており^①、おそらく同様のものと考えられる。これを積極的に解釈すれば、S A 458 以北にこの柱列が付属するような大規模な建物群が存在する可能性も考えられる。

井戸

8基確認された。調査区南部の18～20ラインに3基、北端部の82～84ライン付近に4基が、それぞれ集中している。確認されたものは素掘りの井戸が中心であるが、S E 337 の底には木枠が確認されており、上部まで続いていたものと考えられる。そもそも岩出遺跡群の上部基盤層は脆弱であり、調査時点で素掘り状態のものについても、石などの投入があるものについては何らかの石組が、石の少ないものについては木枠などが、それぞれ設置されていたと考えるべきであろう。



- | | | | | |
|---------------|-------------------|------------------|-----------------|------------------|
| 1. 表土 | 11. 黄灰色土 | 21. 黄色土 | 31. 黒褐色土 | 41. 黄茶褐色土 |
| 2. 灰色礫 | 12. 茶灰色土 | 22. 黒茶色土 | 32. 暗茶褐色土、土器多い | 42. 黄茶色土 |
| 3. 礫まじり黒灰色土 | 13. 黄色ブロックまじり茶灰色土 | 23. 黄色粒含む暗茶色土 | 33. 黄茶色土 | 43. 暗茶褐色土 |
| 4. 黄色土まじり黒灰色土 | 14. 暗灰褐色土 | 24. 黒茶色土 | 34. 暗茶褐色土 | 44. 黄色ブロック含む黄茶色土 |
| 5. 暗黄褐色土 | 15. 黄色土 | 25. 暗茶褐色土 | 35. 黄色ブロック含む黒色土 | 45. 茶灰色粘土 |
| 6. 小礫まじり暗灰色土 | 16. 灰褐色土 | 26. 黄色ブロック含む暗茶色土 | 36. 黄色粒含む黒色土 | 46. 黄色土 (基盤層) |
| 7. 黒色土 | 17. 黄褐色土 | 27. 黒茶色土 | 37. 黒色土 | |
| 8. 暗黄灰色土 | 18. 暗灰色土 | 28. 暗茶褐色土 | 38. 茶褐色土 | |
| 9. 暗灰色土 | 19. 黄灰色土 | 29. 暗黄褐色粘質土 | 39. 小礫含む黄色土 | |
| 10. 暗灰色土 | 20. 暗茶色土 | 30. 暗黄褐色まじり黒茶色土 | 40. 黒褐色土 | |

fig. 7 ケカノ辻・角垣内地区西壁土層(3) (1 : 100)

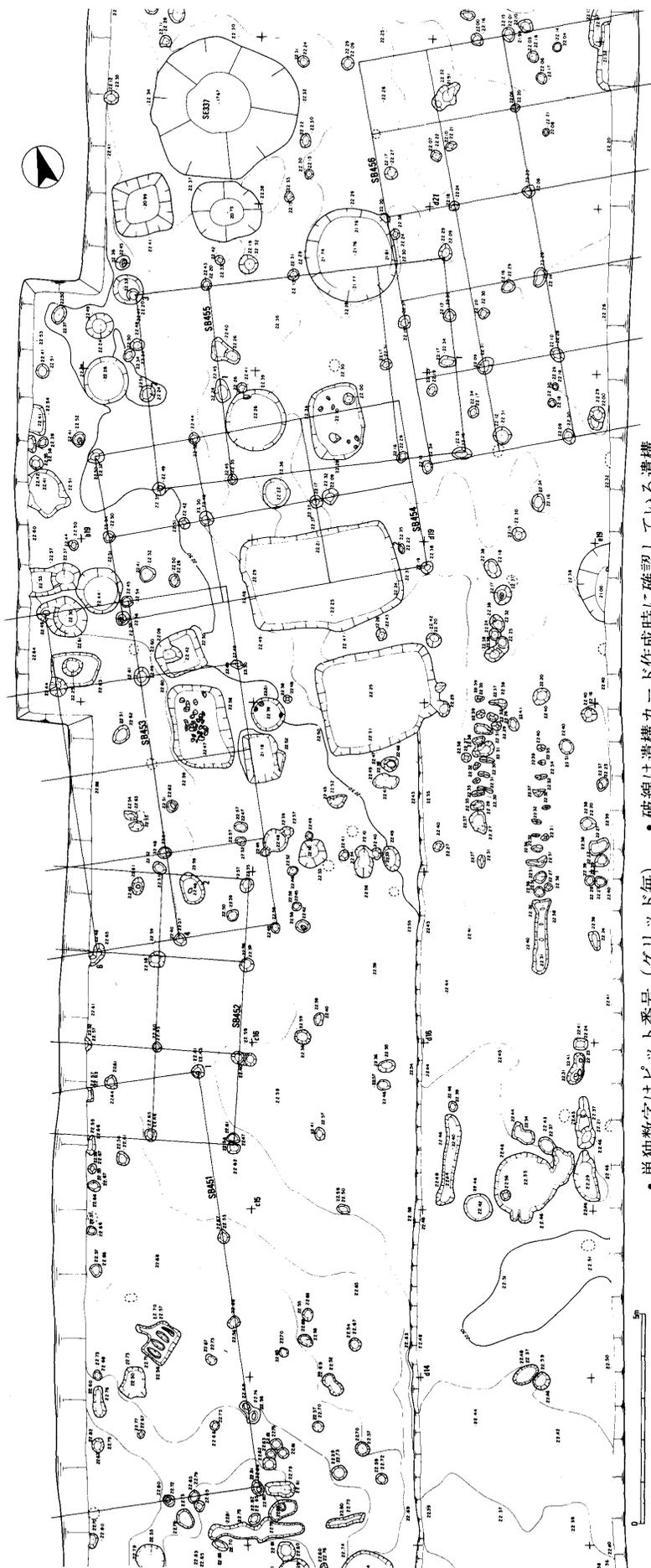


fig.8 SE377付近掘立柱建物集中部分平面図 (1 : 50)

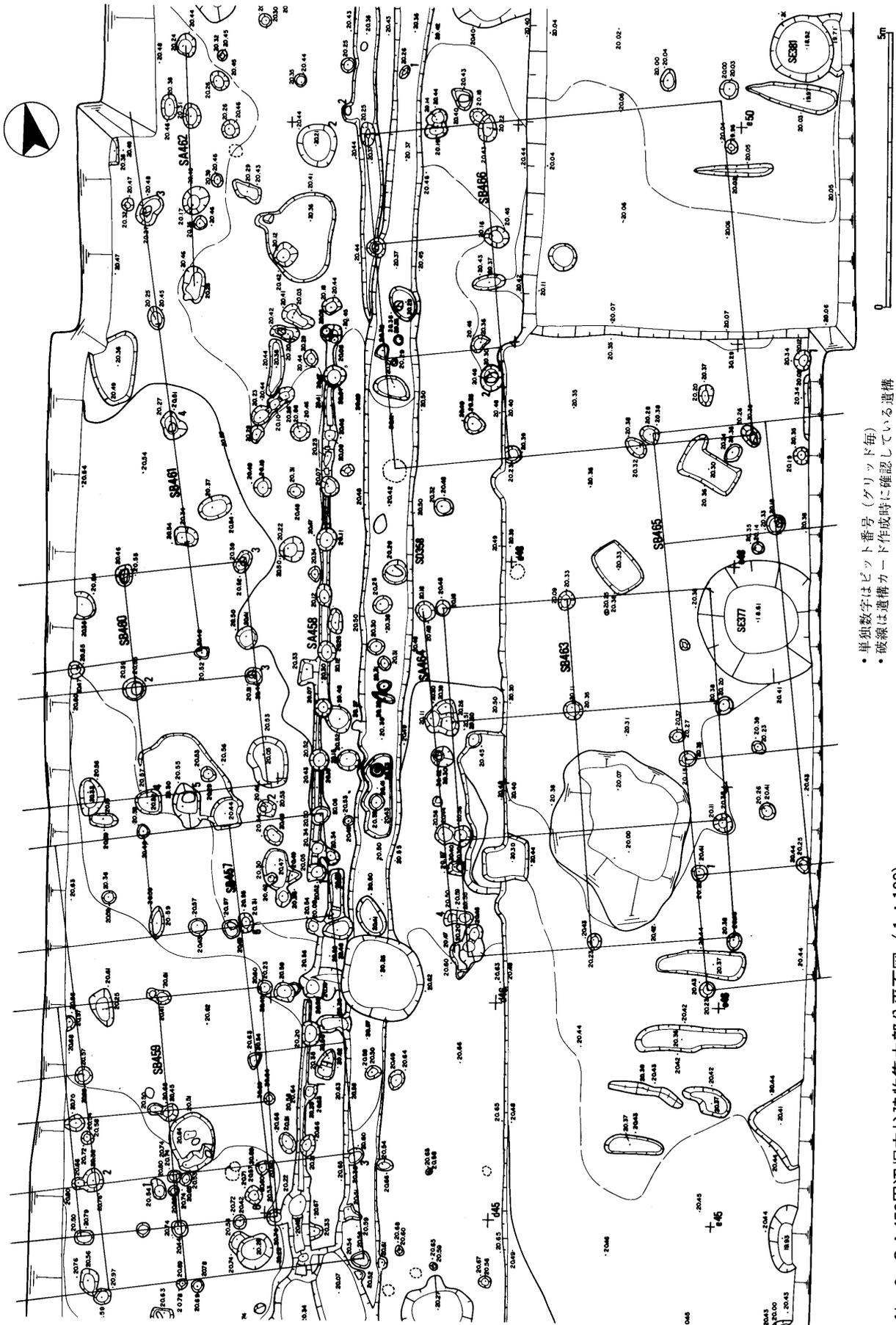
墓

いわゆる土壌墓で、不明確なものも含め調査区全体で17基確認された。検出された場所は12ライン以南と35~41ラインの間に集中する。土壌内からは人骨などの有機物は全く確認できなかった。墓と判断した根拠は、土師器皿・小皿などの遺物が完形でまともな認められることが第一義で、その周辺にそれらと良く似た形状の土坑が認められた場合も墓と見なしている。結果的にはあるが、土坑の形状が円・方を問わず人体埋葬が過不足なくできる規模で明瞭に掘削されているもの、とも言えそう。出土遺物は多くが土師器皿・小皿等のみが認められるものである。

このうち、S X 305 (fig.12~13) からは木棺痕跡が確認され、副葬品として完形の青磁碗のほか、短刀 (2本) ・土師器類が認められた。また土壌の周囲にはL字形の溝が認められ、この墓に伴うものとして注目される。この周溝の存在により、この墓には盛土の存在が想定されるが、墓壙はこの周溝の深さよりも深いため、古墳や方形周溝墓のように明瞭な盛土を有していたとは考えにくい。また、周溝が極めて浅く、幅も狭いことから、盛土後に墓壙を設定するのではなく、墓壙掘削後に盛土を行うような方法であった可能性が想定される。

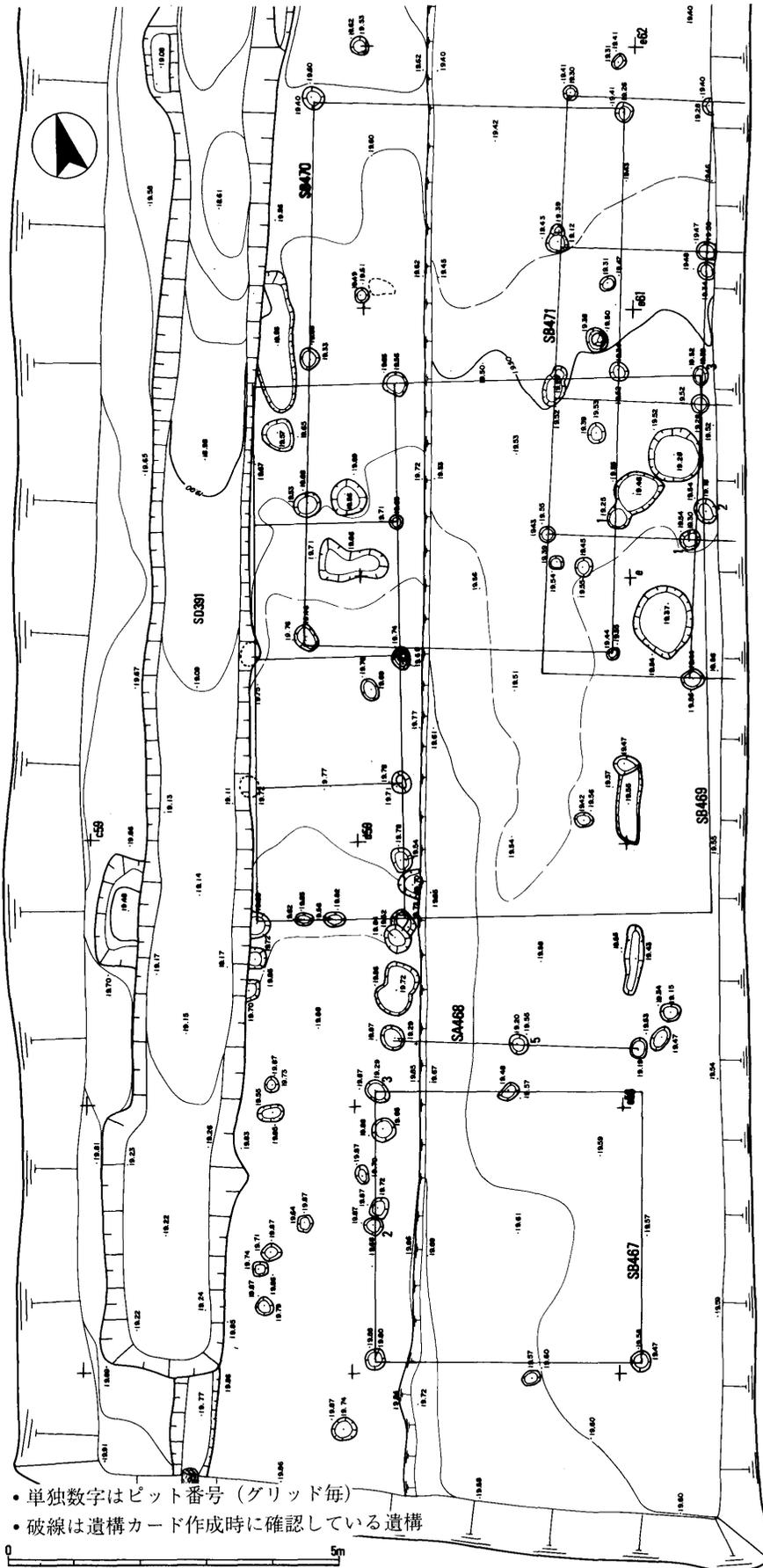
土坑

性格不明であるが明確な掘形のある坑は全て土坑として扱っている。中には廃棄土坑・墓・井戸なども含まれている可能性がある。



- 単独数字はビット番号 (グリッド毎)
- 破線は遺構カード作成時に確認している遺構

fig.9 S A 458周辺掘立柱建物集中部分平面図 (1:100)



- 単独数字はピット番号（グリッド毎）
- 破線は遺構カード作成時に確認している遺構

fig.10 S D391周辺掘立柱建物集中部分平面図（1：100）

大規模な廃棄土坑と考えられるものにS Z409・442がある。これらは2時期以上にわたって同じ場所に土坑が継続的に掘削されたものであり、埋土の土質も極めて類似していたことなどから、1基毎の土坑を層位的に確認していく調査が現場作業段階ではできなかったものである。しかし、出土遺物はこのような土坑ほど多種多様であり、若干悔いが残る結果となった。

小土坑などからは絵が描かれた山茶碗が出土しており、注目される。

3. 蚊山地区の遺構

平成4年度に調査した部分で、A・Bの2地区がある。

a A地区の調査

A地区は字蚊山にある。ここでは溝・掘立柱建物・瓦窯・土坑などを検出している。時期的には中世（鎌倉時代）・江戸時代（以下、「近世」と呼称）・時期不明のもの、がある。出土遺物にはチャート剥片、中世土器類、近世土器類および瓦がある。

中世の遺構

中世のものには、掘立柱建物2棟・土坑1基・溝2条およびピットがある。

掘立柱建物

2棟確認している（fig.16）。そのうちの1棟（SB522）は建物敷地内の南東

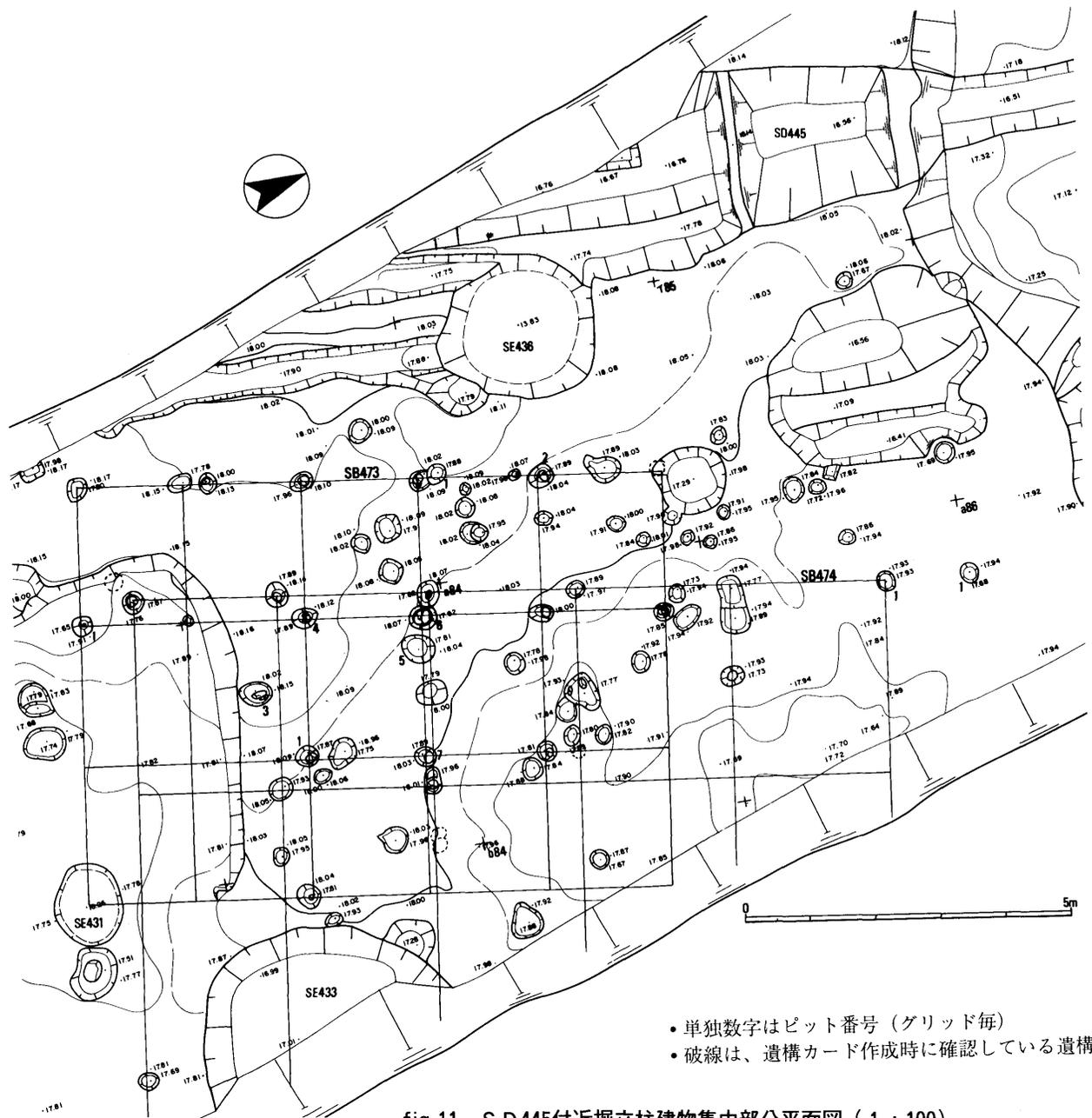


fig.11 S D445付近掘立柱建物集中部分平面図（1 : 100）

隅に土坑（S K510）を有するものである。この2棟の掘立柱建物は重なっており、同一系列にある人物ないしは集団の占有による建て替えであることが窺われる。時期的にはⅡb期前後のものと考えられる。

溝

3条ある。Ⅱ期のものである。S D503・508は深さ・幅とも似通っており、平行に走ることから、この間が道に相当する可能性があろう。

なお、S D503・508については、j5～i6付近にもこの遺構が及んでいるものと考えられるが、この付近は近世の粘土採掘坑群が集中していたため、確認

できなかった。

近世の遺構

近世の遺構には、瓦窯・土坑がある。土坑には、粘土採掘坑と考えられるものが多数ある。

瓦窯S F501 (fig.17～18) 瓦窯は調査区中央付近で検出した。遺構の南半にあたる焼成部は削平されているものの、その南側には関連する遺構は見いだされず、いわゆる「ダルマ窯」というよりは平窯と考えてよかろう。窯は1回の修復が見られる。遺構の残存長は約1.9mである。

窯の北方には炭および焼土層が2層分認められ、灰原に相当するものと考えられる。しかし、それぞ

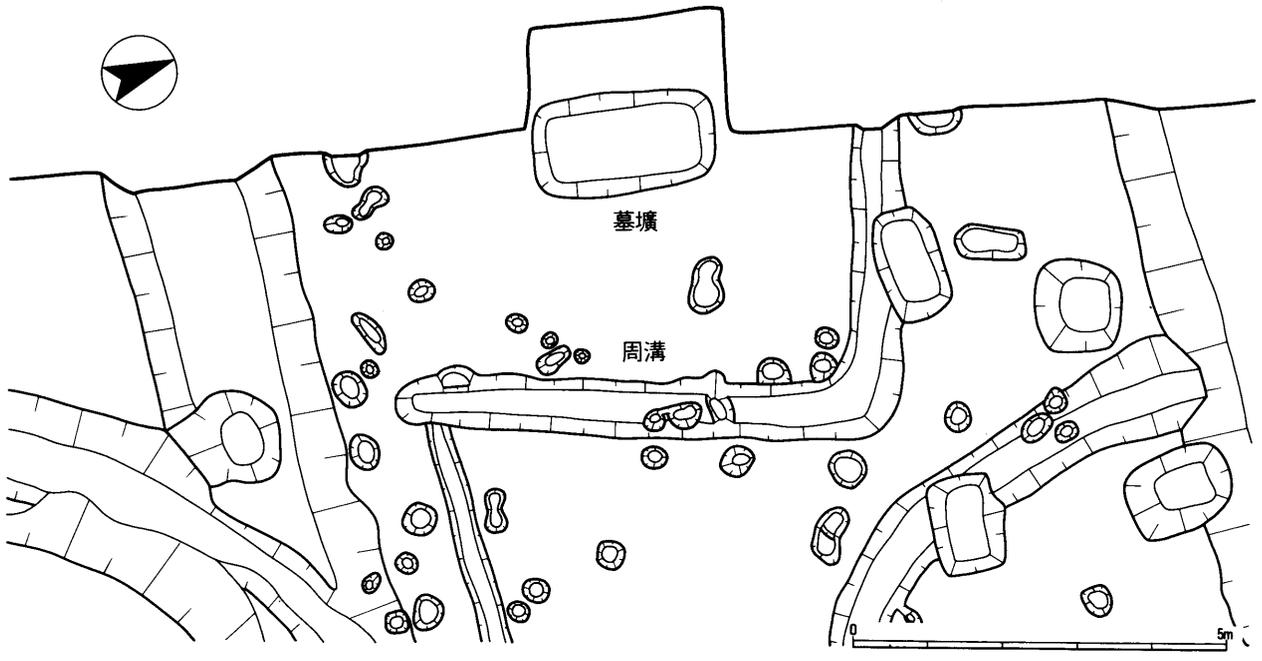


fig.12 SX 305平面図 (1 : 100)

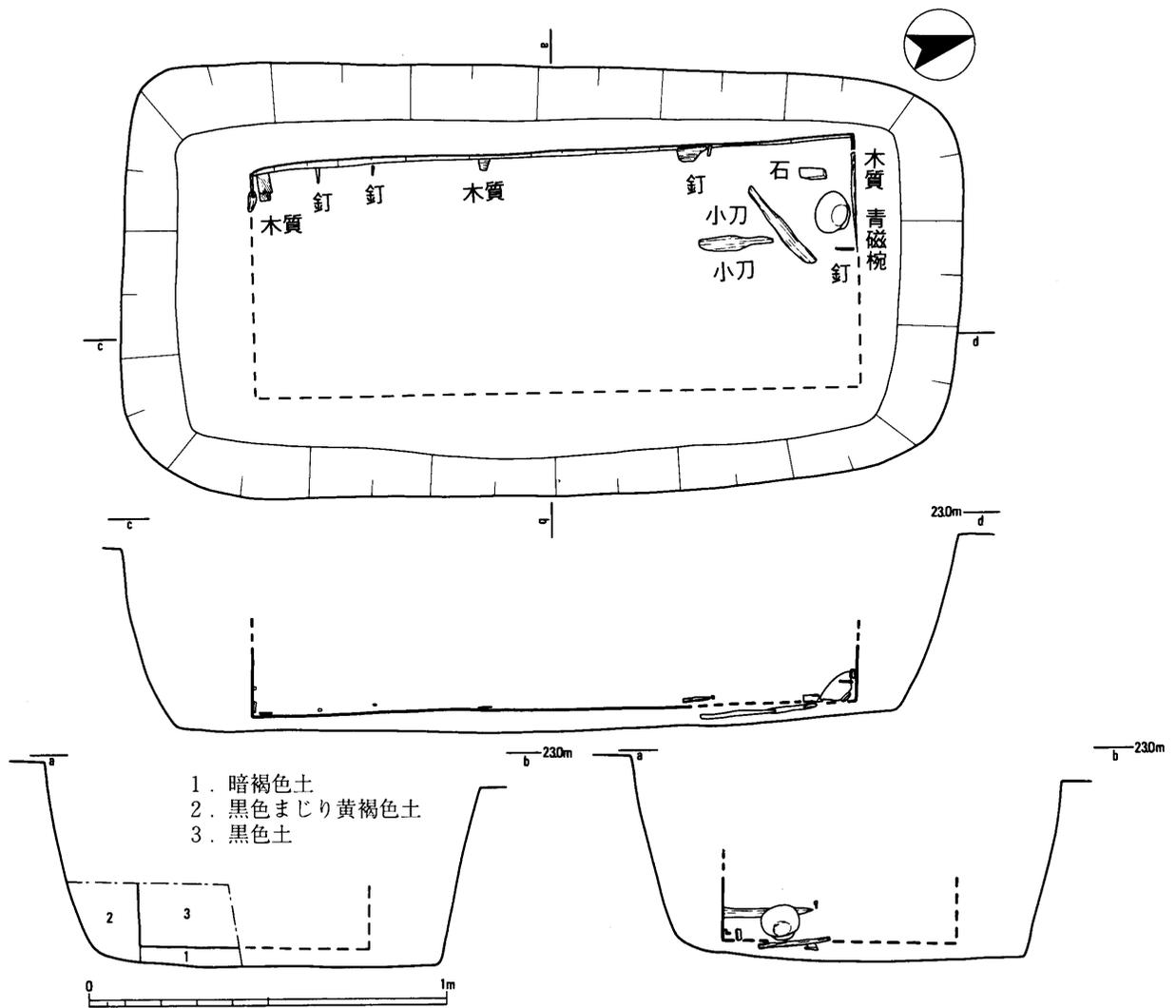


fig.13 SX 305墓壙実測図 (1 : 20)

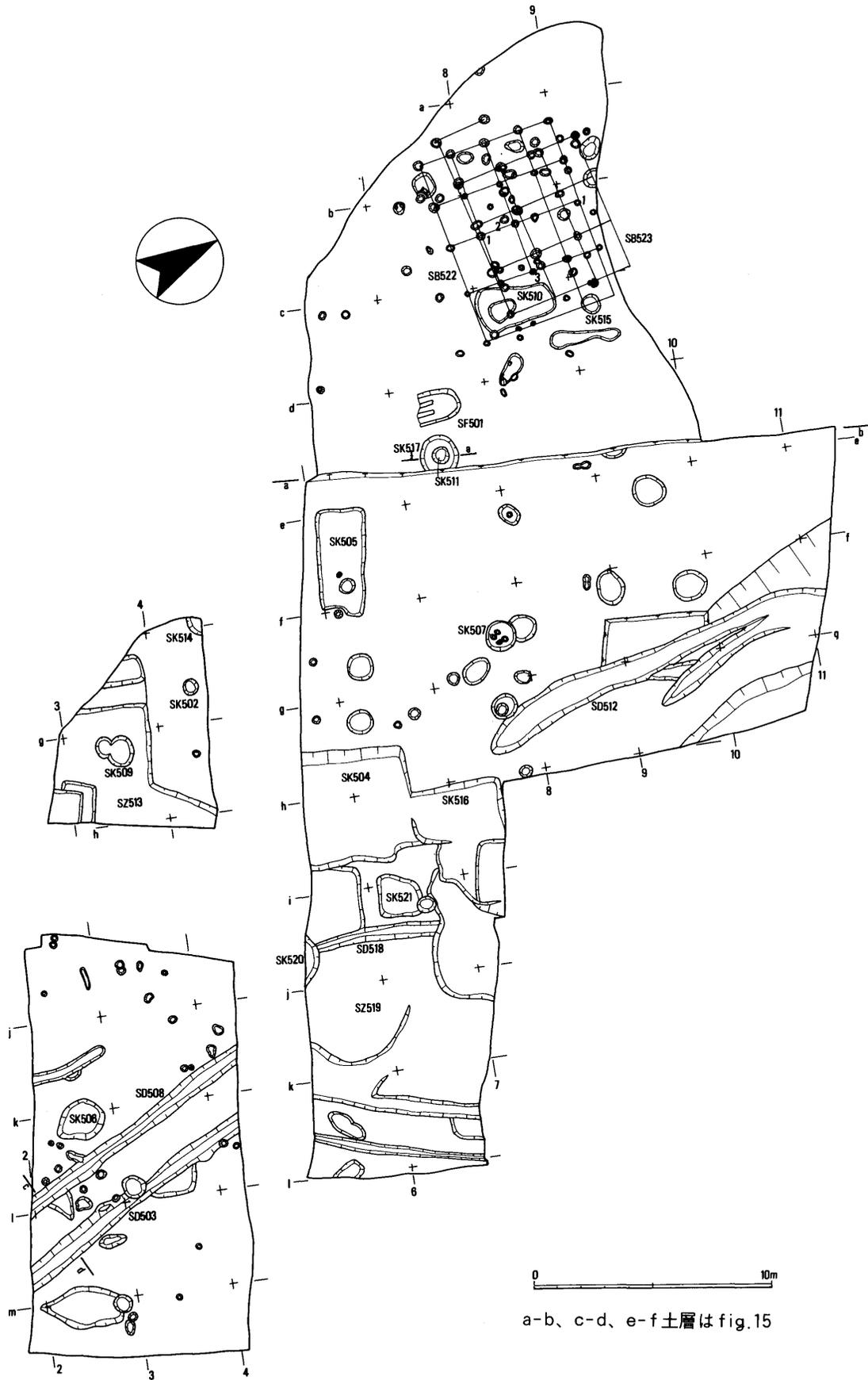


fig.14 蚊山地区平面図 (1 : 250)

区画線はグリッド線、単独数字はピット番号を表わす。

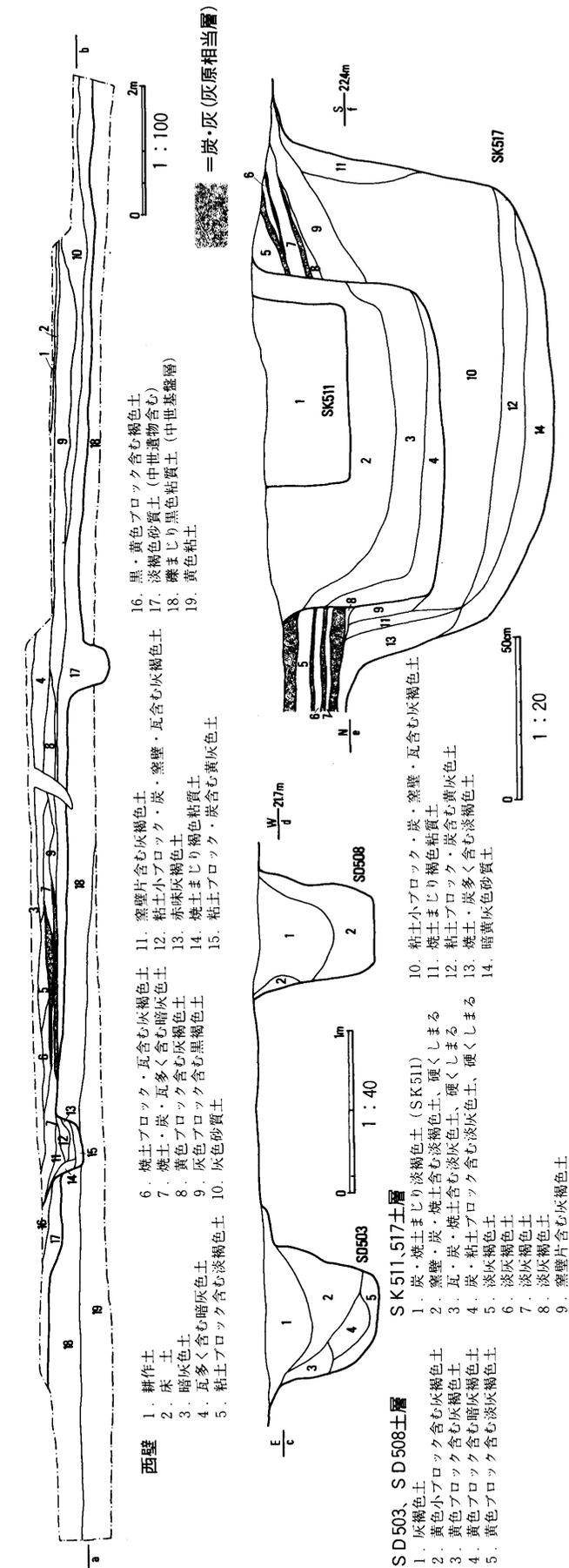


fig.15 蚊山地区 各部土層断面図

これは薄いもので、遺物は棧瓦の小片以外は殆ど含まないものである。また、瓦窯に近接してある土坑SK517の上部埋土は下層の方の灰原層と繋がっている状況が観察された(fig. 15)。

第1次窯 遺構は、幅約1.4mの遺構掘形に棧瓦を磚積みにして窯壁とし、燃烧室～烧成室を形成している。磚積みは、通常の平棧瓦を用い、水平方向に並べた後、粘土を充填してさらに上方に積み上げる方法によっている。傾向としては、烧成室に近づくほど小口積みとなっている。この段階では、窯壁は磚積みした状態のまま用いている。燃烧室から烧成室の内法は最大1.05mである。遺構残存部では、窯壁は垂直に立ち上がっている。

烧成室には2本のロストルが構築されている。ロストルも棧瓦を用いて磚積みしており、方法は窯壁の構築方法に準拠している。烧成室のロストル間は燃烧室から約26°の傾斜を持たせており、火通りのための工夫かと思われる。

燃烧室は緩やかに焚口部に向かって上昇している。燃烧室の床面には粘土は貼られておらず、明確な被熱も見られなかった。

焚口部は窯壁の磚積みが途切れている。使用の便を図ったものであろう。

第2次窯 第1次窯をそのまま利用する。窯壁・燃烧室床面・烧成室には改めて粘土を貼付している。その結果、窯壁内法は第1次窯よりも2cmほど小規模となっている。ロストルは第1次窯のものを利用し、それに裁断した棧瓦を補足した後、全体を粘土で覆っている。燃烧室床面にも粘土を貼付しており、その部分にも被熱が認められ、固く焼け締まっている。これは、第1次窯の状況を見る限り、瓦焼成時の被熱によるものと考えられるよりは、第2次窯の使用前に空焚きを行った結果、焼け締まったものと考えておくべきであろう。

出土遺物は、ロストルや第1次窯の壁に用いられた瓦以外は小片の瓦が少量認められたにとどまる。棧瓦がほとんどで、窯壁に用いられていた軒棧瓦の模様から、近世でも中葉頃のものと考えられる。

当瓦窯については考古地磁気測定を行っているので、第V章の広岡公夫・田中彰子両氏の報文を参照されたい。

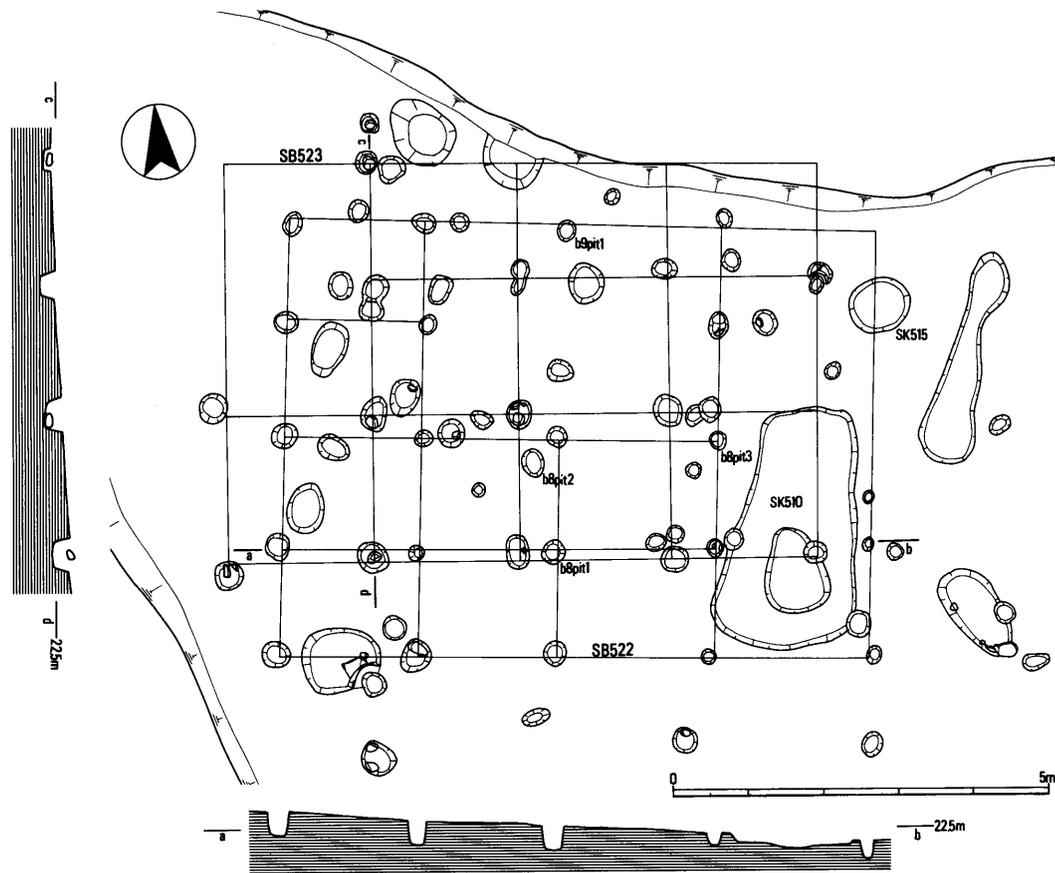


fig.16 S B522・523平面・断面図（1：100）

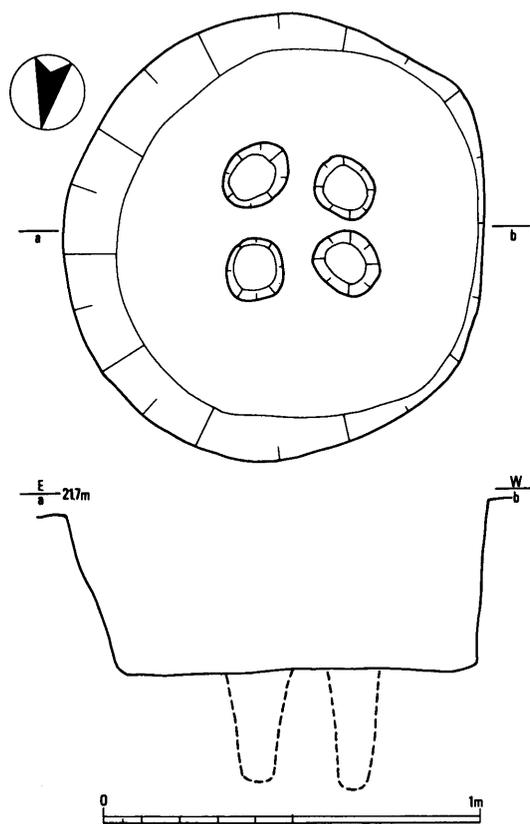


fig.17 S K517平面・断面図（1：20）

なお、層位の項で触れたように、当調査区の焼土の出土量からは、さらに数基の瓦窯が存在していた可能性は高い。

土坑SK517（fig.15）瓦窯SF501の東に近接して存在する直径約1.6m、深さ約0.9mの土坑である。土層図に見るとおり、土坑上層北側には瓦窯SF501から排出されたと考えられる灰層が堆積しており、当該遺構が瓦窯と併存していたことを物語っている。埋土は、粘土を基本とした炭・焼土混じりの薄い層が幾層も重なった状況である。土坑内の埋土堆積状況を見ると、土坑が一旦埋没した後に直径約1.0mの土坑を再度掘削している状況が観察される。これらの埋土は極めて締まりのよいものであり、後述する土坑SK511とは全く違った印象を与える。おそらくは粘土水溶液状のものが順次この土坑内に入っていったのであろう。その意味でこの土坑は瓦生産に深く関連した施設と考えられる。出土遺物は、瓦片が少量あるのみである。

なお、SK517の上層部を削り込んで作られた土坑SK511には、土以上に瓦が多く投棄されていた。

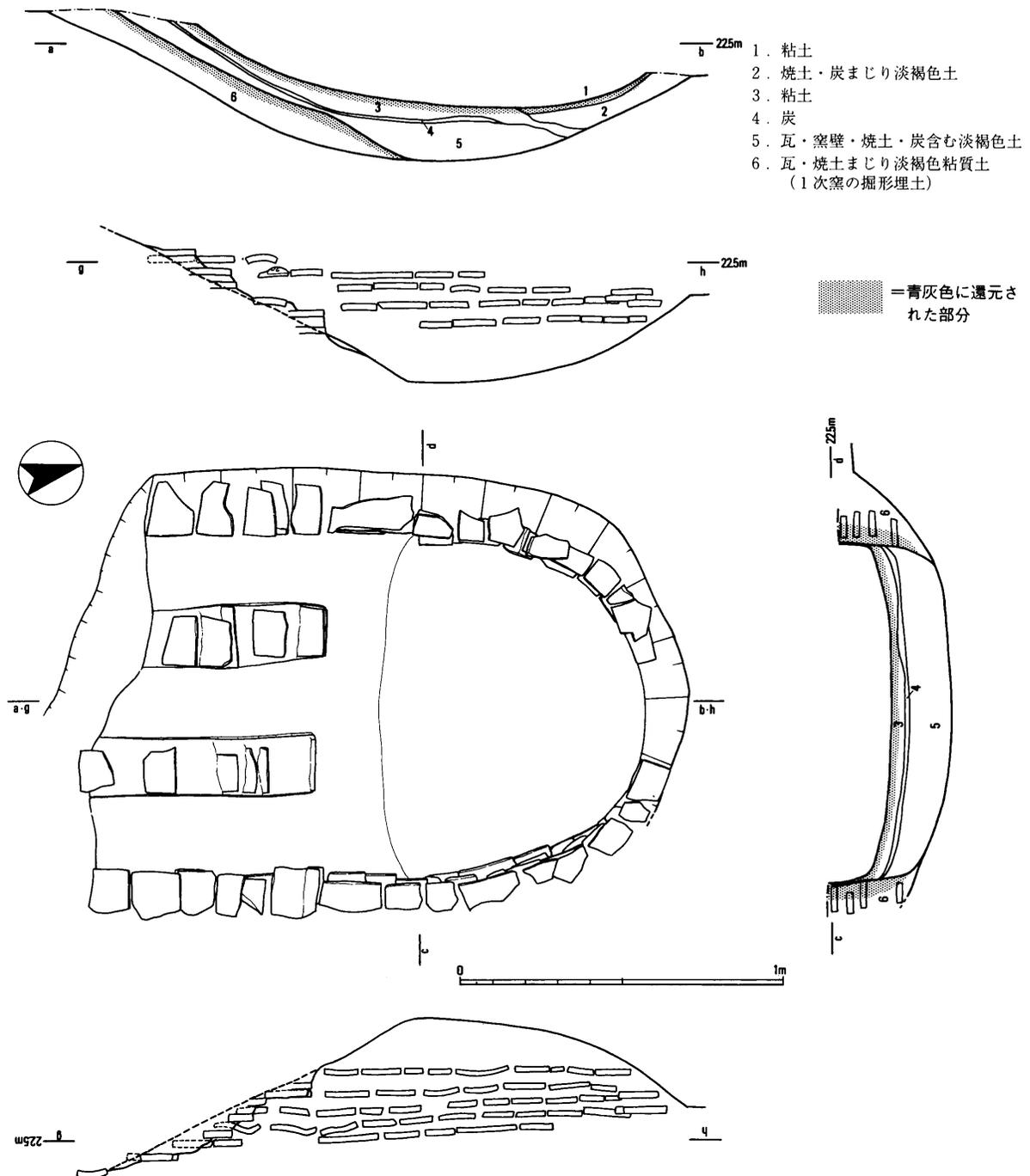


fig.18 SF501 (1次) 平面・立面図及び 1・2次瓦窯土層図 (1:20)

粘土採掘坑群 瓦窯の周囲に認められるもので、土坑SK504やSK516、SZ513などがそれにあたる。不定形の連続した土坑群であり、瓦製作用の粘土を採掘した跡と考えられる。湧水が激しく、完掘は不可能であった。埋土中に瓦片が少量含まれている。

時期不明の遺構

時期不明の遺構には、土坑がある。

土坑SK507(fig.19) 調査区中央付近で検出し

た直径約1.2m、深さ約0.4mの円形の土坑である。埋土は小礫混じり黒褐色系土の単一土層であった。底は平坦に成形されており、中央には4カ所のピットが穿たれている。形態からは縄文時代によくある陥し穴に類似しているが、出土遺物が全くないため断定できない。なお、検出面付近からはチャートの剥片が出土しており、関連も考えられる。

b B地区の調査

A地区の北方約50mにあり、やはり字蚊山地内で

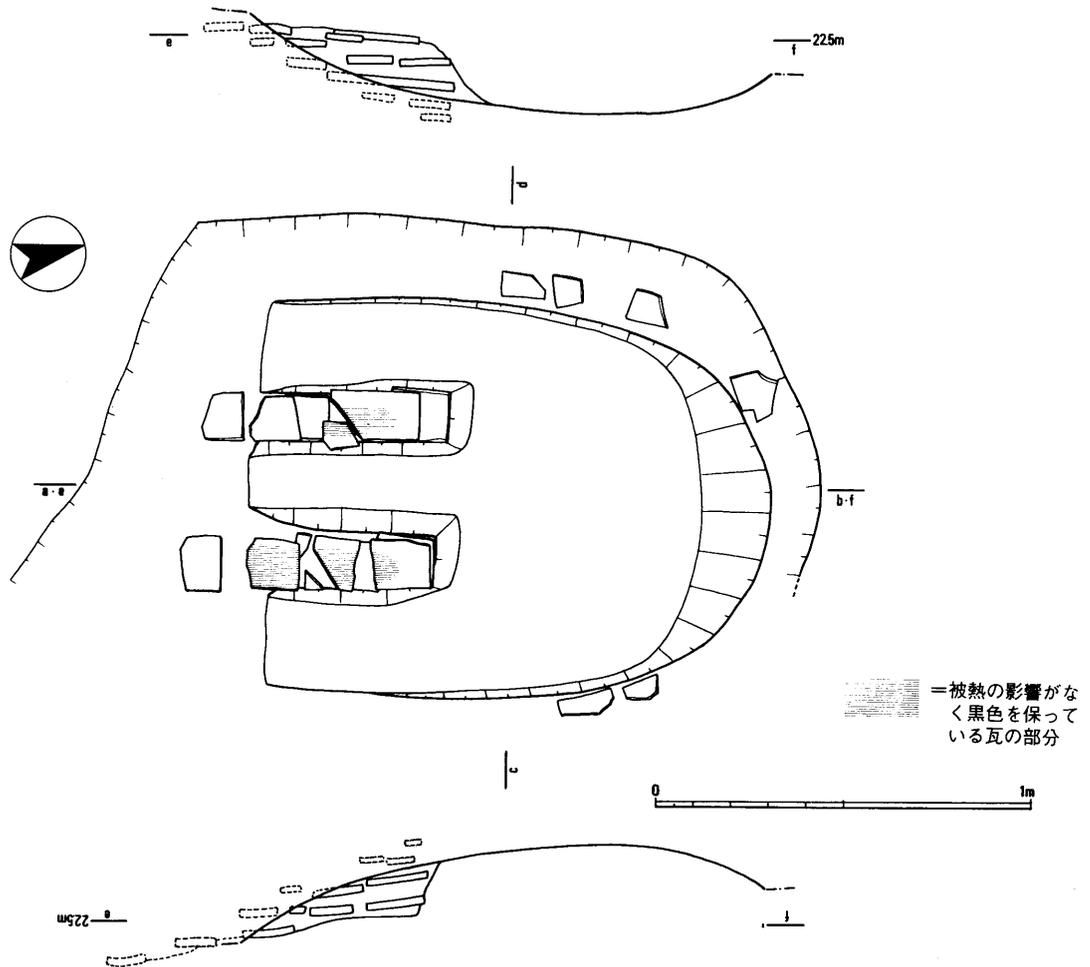


fig.19 S F 501 (2次) 平面・立面図 (1 : 20)

ある。基本層序は、表土として約40cmの客土があり、その直下に約20cmの黒色土（黒ボク）を経て黄褐色系粘質土に至る。黒色土は北側ほど薄くなっており、最北端部では全く認められなかった。遺物包含層に相当するものは認められなかった。

明確な遺構は小溝のみであった。また遺物も表土直下で須恵器壺片と陶器小皿（山皿）、および少量の土師器片を出土したのみである。これらのことから、当該調査区周辺は近畿自動車道にかかる調査の左郡地区と今回のA地区に挟まれた、居住地ではなかった部分に相当するものと考えられる。

註

① 秋田県教育庁弘田柵跡調査事務所【弘田柵跡】第88～91次調査概要(1992)

遺構番号	性格	時期	小地区・現場記号	特徴・形状・計測数値など
5号墳	古墳	古墳	c,e1-SD1	円墳 左郡地区の調査区でも検出。
6号墳	古墳	古墳	a2-SD1	円墳 左郡地区の調査区でも検出。
22号墳	古墳	古墳	b~d5~7-SD	円墳 直径12.5m 土師器甕片
23号墳	古墳	古墳	c10-SD1	円墳 直径8.0m
S K 301	中世墓	Ⅱ a	e2-SK1,2	平面長方形 長1.7m 幅1.0m
S K 302	中世墓	Ⅱ b	e3-SK1	平面台形 長1.0m 幅0.6m
S K 303	土坑	Ⅱ a	e7-SK1	遺物からは、SD304よりも古
S D 304	溝	Ⅱ b~Ⅲ	b~d7-SD1	断面逆台形 区画溝? 幅2.2m 深さ0.6m SD311と並行。火鉢片。
S X 305	中世墓	a	d8-SK1,b~d8-SD1	周溝有 木棺長1.7m 幅不明 墓坑長2.35m 幅1.2m 木質付着した釘。短刀2本。
S K 306	中世墓	Ⅱ a~b	b9-SK1	平面長方形 長1.5m 幅0.9m SX305より新。火鉢片。
S K 307	中世墓	Ⅲ	c9-SK1	平面長方形 長1.3m 幅0.9m
S K 308	中世墓?	Ⅱ b	b10-SK1	平面隅丸方形 幅1.0m 短刀あり。墓とするには土器片多い
S K 309	中世墓	Ⅱ b	c10-SK1	平面長方形 長1.4m 幅1.1m 火鉢片
S K 310	中世墓	Ⅱ a	c11-SK1	平面長方形 長1.5m 幅1.0m 古墳時代土師器(杯・甕片)混入。
S K 311	大溝	Ⅱ a	b10,d11-SD1	断面逆台形 区画溝? 幅2.7m 深さ1.1m 籬羽口片あり SD311と並行。
S K 312	土坑		d9-SK1	平面方形 一辺0.65m
S D 313	溝	Ⅱ a	b~c12-SD1	SD311と並行
S K 314	土坑		c12-SK1	平面円形 径1.4m
S D 315	溝		c13-SD1	不定形
S D 316	溝		d15-SD1	不定形
S K 317	土坑	Ⅱ a~b	b17~18-SK1	平面平行四辺形 建物に伴う土坑の可能性あり
S K 318	土坑	Ⅲ a	c17-SK1	平面長方形 長1.1m 幅0.8m 墓とするには土器片多い
S K 319	土坑	Ⅱ	c17-SK2	平面円形
S K 320	土坑	Ⅱ b	c18-SK1	平面長方形 建物に伴う土坑の可能性あり
S K 321	土坑	Ⅱ b~Ⅲ a	c18-SK2	平面長方形 建物に伴う土坑の可能性あり 木質付着した釘
S E 322	井戸		e18-SK1	平面円形 深さ1.4m
S K 323	土坑		a18-SK1	平面長方形
S K 324	土坑	Ⅱ a	a18-SK2	平面円形
S K 325	土坑	Ⅱ	b18-SK2	平面円形
S K 326	土坑	Ⅱ a	a18-SK3	不定形
S K 327	土坑		a19-SK1	不定形
S K 328	土坑	Ⅱ a	b19-SK1	平面円形
S K 329	土坑	Ⅲ?	c19-SK1	平面円形 青白磁
S K 330	土坑	Ⅱ b	c19-SK2	平面長方形
S K 331	土坑		c19-pit1	平面円形
S K 332	土坑		b20-pit1	平面円形
S K 333	土坑		b20-pit2	平面円形

tab.1 ケカノ辻・角垣内地区遺構一覧表(1)

遺構番号	性格	時期	小地区・現場記号	特徴・形状・計測数値など	
S E 334	井戸	Ⅱ b	b20-SK2	平面方形 深さ1.4m	
S E 335	井戸	Ⅱ b	b20-SK1	平面円形 深さ1.6m	
S K 336	土坑	Ⅱ b	c20-SK1	平面円形	
S E 337	井戸	Ⅱ b	b21-SK1,SE1	円形素掘り 木枠あり。鉄鍋・用途不明銅製品出土。	
S K 338	土坑	Ⅱ b	d22-SK1	浅い。平面図には未記入	
S K 339	土坑		d22-SK2	2基の土坑が重なる。	
S K 340	土坑	Ⅱ b ~ Ⅲ a	e21-SK1	大半が調査区外。	
S D 341	溝	Ⅱ b ~ Ⅳ a	b,c22-SD1	幅1.2m 深さ0.8m 土師器皿類多量	
S K 342	土坑	Ⅱ b	e23-SK1	平面円形	
S D 343	溝		b24-SD1	SD344と一連	
S D 344	溝		d25-SD1	SD343と一連	
S D 345	大溝	Ⅱ b・Ⅳ	b,c,e25-SD1,d25-SD2	幅2.9m深さ1.0m短刀片あり	
S K 346	土坑		c25-SK2	不定形	
S D 347	溝	Ⅱ b	b~e26-SD1	SD345と平行	
S D 348	溝	Ⅱ a・Ⅳ	b~e27-SD1,b26-SD2	幅1.2m 上層には焙烙、瀬戸大窯期の播鉢・天目茶碗含む。	
S D 349	溝	Ⅳ	d27-SD2	幅0.8m	
S D 350	溝		b27-SD1,c.e27-SD2	幅0.8m	
S K 351	土坑		c27-SK1	平面円形 SD349と重なるも前後不明	
S K 352	中世墓	Ⅱ a ~ b	d35-SK1	平面隅丸長方形 長1.3m 幅1.15m	
S K 353	中世墓	Ⅱ a	d39-SK2	長1.8m幅不明 木質付着した釘	
S K 354	中世墓	Ⅱ b ~ Ⅳ a	d39-SK1	平面隅丸長方形 長1.35m 幅0.8m	
S K 355	中世墓	Ⅱ	b40-SK1	平面隅丸長方形 長2.1m, 幅0.9m, 木質付着した釘	
S K 356	中世墓	Ⅱ a	c40-SK1	平面長方形 長1.45m 幅1.05m 木質付着した釘	
S K 357	中世墓	Ⅱ	d40-SK1	平面長方形 長1.5m 幅0.9m 木質付着した釘	
S D 358	溝	I ~ Ⅱ b	c42-SD1,d47-SD1ほか	調査区確認長52.5m	
S K 359	土坑		e42-SK1	平面楕円形	
S K 360	土坑	Ⅱ	e43-SK1	SK361と重なる	
S K 361	土坑	Ⅱ	e43-SK2	SK360と重なる	
S K 362	土坑	Ⅱ a	c43-SK1	SK363と重なる	
S K 363	土坑	Ⅱ a	c43-SK2	SK362と重なる	
S K 364	土坑	Ⅱ a ~ b	c44-SK1	平面円形	
S K 365	土坑	Ⅱ b	c44-SK5	} 重なりあう。前後不明確	
S K 366	土坑		c44-SK3		
S K 367	土坑	Ⅱ a	c44-SK4		四葉硯
S K 368	土坑	Ⅱ	c44-SK2		
S K 369	土坑	Ⅱ a	e43-pit1	ピット状 輪の羽口あり	
S K 370	土坑	Ⅱ a	e44-SK1	大部分調査区外 木質付着した釘	

tab. 2 ケカノ辻・角垣内地区遺構一覧表 (2)

遺構番号	性格	時期	小地区・現場記号	特徴・形状・計測数値など
S K 371	土坑		e44-pit1	ピット状
S K 372	土坑	Ⅱ b	e45-SK1	
S K 373	土坑	Ⅱ a	b45-SK1	
S K 374	土坑	Ⅱ	c46-SK1	平面楕円形
S K 375	土坑	Ⅱ b	c46-SK2	不定形
S K 376	土坑	Ⅱ b	c46-SK3	不定形
S E 377	井戸	Ⅱ a	e47-SK1	円形素掘り 深さ1.8mまで確認
S K 378	土坑	Ⅱ a	e48-SK1	大部分調査区外
S K 379	土坑	Ⅱ b	b50-SK1	
S K 380	土坑	Ⅱ a	c50-SK1	
S E 381	井戸	Ⅱ a	e50-SK1	円形素掘り 深さ1.1mまで確認
S D 382	溝		c52-SD1	幅1.7m
S D 383	溝	Ⅰ・Ⅱ	b52-SD1,c52-SD2ほか	2本の溝がある
S D 384	溝	Ⅱ a	c53-SD1	幅0.5m
S K 385	土坑		d52-SK1	平面方形
S K 386	土坑		e52-SK1	不定形
S E 387	土坑		b54-SK1	不定形
S K 388	土坑		c54-SK2	平面隅丸方形
S D 389	溝	Ⅱ	c54-SD3	不明瞭
S D 390	溝	Ⅲ b	b.c54-SD2,d.e54-SD1	北肩不明(調査区外)
S D 391	大溝	Ⅱ a	c58~71-SD3ほか	区画溝 溝底不統一 途中で数回途切れる 調査区内確認長68m
S D 392	溝	Ⅰ~Ⅱ a	d65~71-SD1	SD391と平行
S K 393	土坑		e59-pit1	平面円形
S K 394	土坑	Ⅱ a	e60-SK2	
S K 395	土坑	Ⅱ b	e60-SK1	平面円形
S K 396	土坑	Ⅱ	d64-SK2	平面長方形
S K 397	土坑	Ⅱ a~b	d65-SK1	平面長方形 SD392と重なるも前後不明
S D 398	大溝	Ⅲ	c~e72-SD1	幅2.7m 深さ0.7m SD391より新
S K 399	溝	Ⅱ a	c73-SK1	SD391 の延長
S K 400	土坑	Ⅱ a	e74-SK1	平面長方形
S K 401	土坑	Ⅱ a・Ⅲ	e74-SK2	平面方形 大部分調査区外
S D 402	大溝	Ⅱ a・Ⅲ	b~d75-SD1	SD398と平行 不定形
S K 403	土坑	Ⅱ a	d75-SK2	底面から土坑2基
S K 404	中世墓	Ⅲ	d76-SK3	平面方形 上部に瀬戸天目茶碗あり
S K 405	中世墓	Ⅲ	d76-SK2	平面円形
S K 406	土坑	Ⅲ a	c76-SK1	深さ1.3m
S K 407	土坑	Ⅲ b	d76-SK1	平面円形

tab. 3 ケカノ辻・角垣内地区遺構一覧表(3)

遺構番号	性 格	時 期	小地区・現場記号	特徴・形状・計測数値など
S K 408	土坑	Ⅲ a	b76-SK1落ち込み	SK449と一部重なる 小刀片・轆の羽口、土器多量、皿類中心 灯明皿あり
S Z 409	土坑群	Ⅲ a	b~c77落ち込み	溝と土坑が重なる
S K 410	土坑	Ⅱ b	c77-SK1	平面円形
S D 411	溝	Ⅲ	d77-SD1	S D 412と同一？
S D 412	溝	Ⅲ a	c~d78-SD1	幅1.2m 北端はSZ409と重なり不明瞭
S K 413	土坑	Ⅲ	a78-SK1	大部分が調査区外
S K 414	土坑	Ⅲ	a78-SK2	大部分が調査区外
S K 415	土坑	Ⅱ	c78-SK2	2基の土坑が重なる
S K 416	土坑	Ⅱ b ~ a ?	c78-SK1	
S K 417	土坑	Ⅲ	d78-SK3	平面長方形
S D 418	溝	Ⅲ	d78-SD2	不明瞭
4 1 9	抹 消			
S K 420	土坑	平安・後	a79-SK1	平面円形 平安の遺物多い
S K 421	土坑	Ⅲ a	a80-SK1	平面隅丸方形 調査区外に広がる 木質付着した釘
S K 422	ピット		b79-pit1	
S K 423	土坑	平安	b79-SK1	平面歪な円形 土錘
S K 424	土坑		b79-SK2	製塩土器(平安時代以前)が混入
S K 425	土坑	I ~ Ⅱ b	b80-SK1の1	SK426と重なる
S K 426	土坑	Ⅱ b ~ Ⅲ a	b80-SK1の2	SK425と重なる
S K 427	中世墓?	I	b80-SK2	平面円形径0.7m
S D 428	溝		イ81-SD1	
S E 429	井戸	Ⅱ b	a81-SK1	平面円形 平安時代の遺物混入
S K 430	土坑	Ⅱ b	c81-SK1	平面隅丸方形
S E 431	井戸	Ⅱ b	b82-SK1	平面楕円形
S K 432	土坑	I ~ Ⅲ a	b82-SK2	
S E 433	井戸	Ⅱ	b82-SK3, b83-SK1	円形素掘り・深さ不明 灰釉陶器混入
S K 434	土坑	Ⅱ a	b83-pit1	水鳥と柳・梅・桜を描いた山茶碗
S D 435	溝	Ⅱ ~ Ⅳ	イ83~84-SD1	SE436付近で途切れる 瀬戸大窯期の播鉢あり
S E 436	井戸	I・Ⅲ?	イ84-SK1, SE1, 口84-SE1	円形素掘り 深さ4.25mまで確認。
S D 437	溝	Ⅱ b	イ~口83~86-SD1~5	
S D 438	溝	Ⅲ ~ Ⅳ	口84-SD3, 口85-SD2	SD445の上層
S D 439	溝		イ85~86-SD1	SK441の上
S K 440	土坑	Ⅱ ~ Ⅲ	イ85-SK1a~d	不定形 埋土中に焼土を含む
S K 441	土坑	Ⅲ a	イ85-SK2	不定形 温石
S Z 442	土坑群	I・Ⅱ・Ⅲ	a~ハ86~88-SK1,2	複数の土坑が重なる S D 445よりも古
S Z 443	土坑群	Ⅱ b	ハ88-SK3	溝の可能性もある
4 4 4	抹 消			

tab. 4 ケカノ辻・角垣内地区遺構一覧表 (4)

遺構番号	性格	時期	小地区・現場記号	特徴・形状・計測数値など	
S D 445	溝		口86-SD4, 口84-SD4, 口85-SD5 口87-SD4	幅 2.1m 深さ1.6m	SD451を含むS Z442よりも新 土師器皿類多量
S D 446	溝		b51-SD1	耕作溝?	
S D 447	溝		b51-SD2	耕作溝?	
S K 448	溝		e58-SK1	不定形	
S K 449	土坑	Ⅲ a	a~c77~79-SK1ほか	不定形 土器多量	
S K 450	土坑	平安中葉	b80-SK3		

tab. 5 ケカノ辻・角垣内地区遺構一覧表 (5)

遺構番号	性格	時期	小地区・現場記号	棟方向	軸方向	根石	特徴・形状・計測数値など
S B 451	掘立柱建物	不明	b14~15付近	不明	N 7° E	有	南北 4 (5?) 間(約10.0m)、東西 3 間(約4.0m)以上
S B 452	掘立柱建物	不明	b15~16付近	東西	N19° E		南北 3 間(約6.3m)、東西 1 間(約2.0m)以上
S B 453	掘立柱建物	不明	b16~18付近	不明	N 7° E		南北 3 (4?) 間(約8.2m)、東西 2 間(約4.2m)以上
S B 454	掘立柱建物	不明	b.c18付近	不明	N 5° E		南北 2 間(約4.0m)以上、東西 3 間(約7.4m)
S B 455	掘立柱建物	Ⅱ a	b~d19.20付近	東西	N 9° E		南北 2 間(約4.8m)、東西 5 間(約7.3m)
S B 456	掘立柱建物	不明	d20~21付近	南北	N 5° E		南北 5 間(約9.6m)、東西 2 間(3.3m)以上
S B 457	掘立柱建物	Ⅱ a	b.c45~46付近	不明	N 9° E		南北 4 間(約8.2m)、東西 3 間(約4.7m)以上
S A 458	柱列	不明	c45~48付近	南北	N17° E		17間(約16.9m)分を検出 柱間は布掘り状につながる
S B 459	掘立柱建物	不明	b45付近	不明	N10° E		南北 2 間(約4.2m)、東西 2 間(約3.5m)以上
S B 460	掘立柱建物	Ⅱ b	b46付近	不明	N 9° E	有	南北 2 間(約4.2m)、東西 1 間(約2.2m)以上
S B 461	掘立柱建物	Ⅱ a	b47~49付近	不明	N 7° E		南北 4 間(約8.1m)以上?、東西 1 間(約2.2m)以上
S A 462	柱列	不明	b49付近	南北	N13° E		3 間(約4.4m)分を検出
S B 463	掘立柱建物	不明	c~e46~47付近	南北	N11° E		南北 3 間(約6.4m)、東西 2 間(約4.9m)
S A 464	柱列	不明	c46~47付近	南北	N 9° E		3 間(約6.4m)分を検出 S B 463の関係?
S B 465	掘立柱建物	不明	e46~48付近	不明	N 9° E	有	南北 5 間(約10.2m)、東西 1 間(約2.0m)以上
S B 466	掘立柱建物	不明	c48~49付近	不明	N10° E	有	南北3間(約6.1m)、東西2間(約4.7m)以上、削平で不明
S B 467	掘立柱建物	Ⅱ a	d57~58付近	南北	N15° E		南北 2 間(約4.1m)、東西 2 間(約4.0m)
S A 468	柱列	Ⅱ a	d58付近	東西	N18° E		2 間(約3.8m)分を検出
S B 469	掘立柱建物	不明	d.e58~60付近	南北	N15° E	有	南北 4 間(約8.2m)、東西 3 間(約6.9m)
S B 470	掘立柱建物	不明	d60~61付近	南北	N17° E		南北 3 (4?) 間(約8.2m)、東西 1 (2?) 間(約4.7m)
S B 471	掘立柱建物	不明	d60~e61付近	南北	N18° E		南北 4 間(約8.8m)、東西 1 間(約2.1m)以上
S A 472	柱列	不明	c75付近	東西	N27° E		2 間(約4.2m)分を検出
S B 473	掘立柱建物	Ⅲ a	イ82~a83付近	南北	N23° E		南北 5 間(約9.1m)、東西 3 間(約6.6m)
S B 474	掘立柱建物	Ⅱ b	イ82~a85付近	不明	N23° E	有	南北 5 間(約11.6m)、東西 1 間(約3.0m)以上

tab. 6 ケカノ辻・角垣内地区掘立柱建物・柱列一覧表 (6)

遺構番号	性格	時期	小地区・現場記号	特徴・形状・計測数値など
S F 501	瓦 窯	近 世	d7-SF501	ロストル 2 本 修復 1 回
S K 502	土 坑	近 世	f4-SK502	円形、ピット状 瓦片含む
S D 503	溝	Ⅱ a ~ b	ℓ 2~k4-SD503	SD508と並行
S K 504	土 坑	近 世	g.h6-SK504	粘土探掘坑
S K 505	土 坑	近 世	e6-SK505	極めて浅い
S K 506	土 坑	不 明	k2-SK506	
S K 507	土 坑	縄文?	f7-SK507	円形 底部に 4 個のピット 遺物なし
S D 508	溝	Ⅱ a ~ b	k2~j4-SD508	SD503と並行。
S K 509	土 坑	近 世	g3-SK509	
S K 510	土 坑	Ⅱ b	c8-SK510	掘立柱建物に伴う
S K 511	土 坑	近 世	d7-SK511	円形直径0.6m瓦投棄土坑
S D 512	溝	Ⅱ b	g7~f10-SD512	
S Z 513	土 坑	近 世	g3-SZ513	粘土探掘土坑
S K 514	土 坑	近 世	f4-SK514	
S K 515	土 坑	Ⅱ	c9-SK515	平面円形。
S K 516	土 坑	近 世	h7-SK516	粘土探掘土坑
S K 517	土 坑	近 世	d7-SK517	S F 501と関連 粘土・炭が互層になって固く堆積
S D 518	溝	近 世	i6~7-SD518	粘土探掘土坑上面部分
S Z 519	土坑群	近 世	k5ほかSZ519	粘土探掘土坑上面部分
S K 520	土 坑	近 世	i5-SK520	粘土探掘土坑上面部分
S K 521	土 坑	近 世	i6-SK521	粘土探掘土坑上面部分

tab. 7 蚊山地区遺構一覧表 (7)

遺構番号	性格	時期	小地区・現場記号	棟方向	軸方向	根石	特徴・形状・計測数値など
S B 522	掘立柱建物	Ⅱ b	a~c8付近	東西	N 7° E		南北 4 間(約5.8m)、東西 4 間(約7.9m) 南東隅に土坑
S B 523	掘立柱建物	不明	a~c8付近	東西	N 6° E	有	南北 3 間(約5.5m)、東西 4 間(約6.1m)

tab. 8 蚊山地区掘立柱建物一覧表 (8)

Ⅳ 調査の成果 ～出土遺物～

今回の調査によって出土した遺物は、ケカノ辻・角垣内地区からは317箱、蚊山地区からは67箱である。以下、それぞれの遺物について概要を記す。個々の詳細は遺物観察表(tab. 9～30)を参照していただきたい。また、各遺構から出土した遺物の所属時期については、以下の時期区分により、遺構一覧表 tab. 1～8 に示している。

1 ケカノ辻・角垣内地区出土の遺物(fig. 20～38)

この地区の出土遺物はその大部分が平安時代末頃から戦国時代(以下、中世とする)のものであり、少量の古墳時代以前および平安時代の遺物を含む。

a 古墳時代以前の遺物

明確な遺構は全くないが、d 7・c 2 5 グリッドから磨石状の遺物が出土している。

b 古墳時代の遺物

古墳時代の遺物としては、土師器杯・甕、須恵器杯蓋がある。いずれも古墳の周溝から出土したものであるが、明確な遺物が出土したのは22・23号墳のみである。22号墳からは、田辺昭三氏による編年^④のTK47型式に並行すると思われる須恵器(1)が出土している。

c 平安時代の遺物

良好な資料とはいえないが、SK423から土師器杯・甕類および土錘が出土している。杯は、図示できないが、内面に暗文を施したのものもある。また、包含層出土ではあるが、899の獣足壺は出土例も少なく、珍しい。これらは、平安時代でも比較的早い時期のものを中心としていると思われる。また、灰釉陶器皿(636)や土師器甕(723)などは、平安時代でも後半のものと考えられる。

d 中世の遺物

中世の遺物には、土師器・陶器・磁器などの土器類、鍋・小刀・釘などの金属製品類、鍋・温石・紡錘車などの石製品類がある。

中世の遺物は膨大な量がある。楠ノ木遺跡では、中世相当時期をⅠ～Ⅳの4期に大別したが^⑤、これは南勢地域の中世時期区分としても今のところ妥当な

ものと考えるので、これに準拠して区分を行う。なお、蚊山遺跡では、左郡地区の報告において前川嘉宏氏による区分があり^⑥、これも参考としながらおおまかな動向を把握しておこう。

Ⅰ期の遺物

藤澤良祐氏による瀬戸の陶器碗類(中世前期に見られる無釉のもの、以下、慣例に倣い山茶碗・山皿と呼称)編年^⑦(以下藤澤山茶碗編年)では3型式から5型式前半にほぼ相当する。土師器では、煮沸具は甕で、南伊勢系土師器群が成立する直前の時期に相当する^⑧。時期的には11世紀第Ⅱ四半期～12世紀第Ⅳ四半期頃に相当する。前半のものとしてはSE436に少量のまとまりがある程度で、量的には極めて少ない。

Ⅱ期の遺物

藤澤山茶碗編年では5型式後半から8型式に相当する。土師器では、鍋は筆者編年の第1～2段階の時期に相当する。時期的には12世紀第Ⅳ四半期末～14世紀第Ⅰ四半期頃に相当すると思われる。遺物の内容により、a・bの2小期に区分する。

Ⅱ期の遺物はⅠ期と比べてかなり多くなる。Ⅱa期では、SD391がこの前半期に位置付けられる。後半期のSE381の資料は良好で、瓦器も伴出しており、山田猛氏による伊賀の瓦器編年^⑨のⅢ段階1型式にする。Ⅱb期は、南伊勢系の鍋第2段階にほぼ相当するものである。明確な資料は少ない。なお、蚊山地区に認められる遺物も大部分がこのⅡ期のものである。

Ⅲ期の遺物

Ⅲ期は、Ⅱ期と比べて明確な遺構こそ減少するものの、遺物量としては相当量ある。瀬戸編年では、藤澤良祐氏による古瀬戸後期様式編年^⑩(以下、藤澤古瀬戸編年)のうち、Ⅰ期～Ⅳ期頃に併行する。土師器鍋では、第3段階としたものにほぼ相当する。年代的には、14世紀第Ⅱ四半期～15世紀第Ⅱ四半期頃に相当しよう。

遺物の内容により、a・bの2小期に区分する。Ⅲa期の良好な資料としてSD412・SK408があり、Ⅲb期の資料にはSZ442上がある。なお、Ⅲ

b期の資料は極めて少なく、調査区内に限定すればⅢb期を当遺跡の中心時期に含めることはできない。

Ⅳ期の遺物

南伊勢系の鍋では、第4段階としたもので、15世紀第Ⅲ四半期～16世紀第Ⅳ四半期頃に相当する。Ⅳ期のものはほとんどない。わずかにS D 345上層やS D 348上層で瀬戸大窯期の播鉢や土師器鍋が認められるに過ぎない。同様なことは左郡地区や蚊山地区でもいえる。

以上の区分を踏まえ、各系統毎にその傾向をみる。

① 土師器類

構成 土師器は、そのほとんどが南伊勢系のものによって構成される。南伊勢系土師器群の構成は以下のとおりである。

- I期 皿・小皿・甕(中・小)・蓋
- II期 皿・小皿・脚台付小皿・台付小皿・鍋(大・中・小)・羽釜
- III期 皿・小皿・台付小皿・鍋(大・中・小)・羽釜・茶釜・盤
- IV期 皿(大・小)・小皿(大・小)・鍋(中・小)・羽釜・茶釜・焙烙・十能形ほか

南伊勢系土師器 当遺跡における南伊勢系土師器の基本的な構成は、楠ノ木遺跡や佐八藤波遺跡^⑧などの南勢地域に見られる傾向と大きくは隔たらないものの、南勢地域に通常見られる土器構成には見られない特殊な様相もある。

まず、脚台付・台付小皿が比較的目立つことが挙げられる。特に脚台付小皿は、多気町・斎宮跡・神宮(内・外宮)でそれぞれ数点が確認されているに過ぎないものである。特に、神宮で出土している土器^⑨と共通するものがこの遺跡で確認されている点は見逃せない事例といえる。

なお、脚台付小皿はⅡa期、台付小皿はⅡa～Ⅲa期に確認できる。

次にミニチュア鍋・羽釜や盤の存在である。前者(299・847・848など)は手法・胎土の特徴からは南伊勢系に含めて考えられる。ただし、形態的には異質なもので、注意を要する。上記脚台付・台付小皿と同様、何らかの祭祀的な行為との関連が考えられる。

508の盤も注意を要する土器である。これと同様

な形態のものは左郡地区のS E 157にもあり、三足を有するものである。したがってこの資料も3足が付く可能性がある。左郡地区のものと異なる点は、口縁部に1個3対ほどの焼成前穿孔を有することである。南伊勢系のもので焼成前に穿孔を有するものは他の器種でもほとんど見られないもので、中北勢地域の在り土器群との関連も考慮せねばならない。

皿類では、南伊勢系A・B系統^⑩のものが原則的に主体を占めている。B系統皿類の変遷については第Ⅵ章で触れている。S K 408出土の472はC系統の、494はD系統の先駆的な存在として把握できるものと思われる。この他では、丸い形態の小皿(553)、やや深手の小皿(806.807)があり、あまり見られない形態である。これらは手法・胎土の特徴からは南伊勢系の範疇で把握できるもので、いずれもⅢ期相当のものと考えられる。今後の系統把握が必要なものである。

なお、皿類では、Ⅲa期以降に外面底に板状圧痕の残るものが見受けられる。これは皿によく認められるものであるが、小皿にもその例は存在する。Ⅱ期相当の皿類にも稀に見られるものの、その数は極めて少なく、Ⅱb期以降の使用素地土の変化・器壁の極薄化と相まった製作工程上の変化と関連する可能性も想定される。

別系統の土器群 別系統と考えられるのはⅠ期ないしはⅡa期と考えられる400.729～735の小皿類、Ⅲ期に相当する530.593.824の椀などである。前者は南伊勢系の一群の可能性もなくはないが、手法的には口縁部に明瞭なヨコナデを施して面をなすものであり、中・北伊勢地域のものである可能性が高い。後者は松阪市・多気町・玉城町のほか、美杉村でも出土している^⑪ものであるが、絶対的な量が少ない。今後注意が必要な土器である。

墨書土器 土師器皿の底部外面に墨書の認められるものが1点ある(688)。単なる落書の類とも見えず、とって文字とも考え難い。とすると、花押と考えたくなるが、土師器皿の底に花押を据える意味が判らず、判断に苦しむ。

② 瓦器類

瓦器類の確認状況は下記のとおりである。

- I期 小椀

Ⅱ期 椀・小皿

873の小椀は大和系のものであろう。275は「伊賀型」の範疇に含まれるものである。

③瓦質土器・瓦質系土器類

当遺跡では、いわゆる瓦質土器のほか、瓦質土器の器種に類似した形態をなす土師質の土器類（以下この類を「瓦質系土器」と仮称^⑧）がある。ただし、今回の調査区では瓦質系土器類は確認されなかった。これらの確認状況は下記のとおりである。

Ⅱ期 火鉢

Ⅲ期 火鉢・風炉

今回の調査によって確認された瓦質土器類は、全て大和産の類に含まれるものと考えられる。このうち、344の火鉢は新しく見ても13世紀前葉までの遺物と供伴しており、伊勢における初現的な出土例として注目できる。

④陶器類

陶器類の確認状況は下記のとおりである。

I期 山茶椀・小椀・練鉢

Ⅱ期 山茶椀・山皿・鉢・練鉢・入子・片口小瓶・壺・注口付小鉢・片口付丸底小鉢・片口付丸底鉢・蓋・甕

Ⅲ期 平椀・天目茶碗・盤・甕・練鉢・折縁皿・卸皿

Ⅳ期 播鉢

器種および産地構成 陶器類は、瀬戸・知多半島（常滑）・渥美半島産のものが認められるが、それ以外のものと断定できるものはない。

瀬戸のものとしては、山茶碗・山皿のほか、古瀬戸中～後期のもの、及び大窯期のものが存在する。古瀬戸様式として分類されている一群は中期のものは少なく、確認されているのは後期、特に藤澤編年の後Ⅰ～後Ⅱ期のものに集中する。大窯期のものは播鉢があるのみで、極めて少ない。

知多半島産のものの中には、103の大甕のように外面のスタンプ文から高坂窯（常滑市）で焼成されたものと特定できるものもあり、流通経路を知るうえで重要である。

渥美産のものは山茶椀・山皿類である。

特殊器種 注口付小鉢(365.366)、蓋(405)、などは特殊な器形で、生産地でもあまり目にしない

ものである。特殊器種とまでは言えないものの、片口椀(242.316.665.761.907)、片口付山茶椀(779)、片口付山皿(312.315)、片口鉢(339.340.368.786)、片口小瓶(881)なども三重県内からの出土例は管見に及ばないものである。胎土・色調の観察からはその生産地は東海諸窯、特に猿投～知多産のものと思われるが、断定はしかねる。蓋は経筒に用いられるものに類似しており、伊勢市・寺原B遺跡^⑨にも出土例がある。

墨書土器 陶器類に見られる墨書は、土師器類に比べて格段に多い。山茶椀では、高台裏に書かれたものに文字、記号(218)などがあり、外面にも文字の書かれたものもある。外面の文字のうち、「侍」と書かれたものが一定の遺構に集中的に認められ、極めて興味深い。山皿では、「上」の字が書かれたものが目立つ。312は外面の4方と底部に「上」と書かれており、その器形が片口を持つ特殊なものであることを考え併せると、祭祀的な意味が濃厚ではないだろうか。

なお、山茶椀では、外面に絵の描かれたものが2点ある。413は外面の3方と底部にモミジが、639は外面の3方に柳と水鳥・梅・桜が、底部に文字（「太郎」か）が書かれた珍品である。

古瀬戸後期の平椀では、815のみ「十」の墨書が見られた。

その他の特徴 瀬戸産と考えられる入子(24)は内面に朱が付着しており、紅皿として用いられた可能性がある。また、216・262・263・315・755のほかS D391出土の山茶椀にも内面に漆の付着したのが見られ、漆器製作に係わった人物（塗師）の存在が想定される。

⑤磁器類

I期 青磁……椀 白磁……椀

Ⅱ期 青磁……椀・皿 白磁……椀・皿

青白磁……椀・皿・合子

Ⅲ期 青白磁……梅瓶・合子・茶入・盤

青磁・白磁・青白磁の類が認められる。量・質ともに、伊勢としては充実していると見てよいのではないか。破片がほとんどであるが、墓S X305からは完形の青磁椀も出土している。器種としては椀が圧倒的に多い。

⑥ 瓦類

軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦がある。丸瓦には図示できるものはない。

軒丸瓦は大きくは蓮華文と巴文の2類に区分できる。蓮華文軒丸瓦は単弁素弁で、弁は線で表現されるものである。中房は無文である。巴文は、①巴頭部が接続するもの、②巴頭部が離れるもの、③巴頭部は離れ、外区に珠文を持つもの、に分けられる。①と②の巴は断面が方形なのに対し、③のそれは半円形を呈する。

軒平瓦は、928は通常の唐草文が凸となるものであるが、930はそれが凹となるものである。928の類は段額を呈するもので、930よりも後出的である。929は一部のみの残存であるため、よく判らない。

平瓦には厚手のものと薄手のものがある。凸面には縄叩き目、凹面には布目を残すものが多い。また、凸面にハナレ砂が明瞭に残るものも多い。

これらの瓦は、遺構での共伴関係や瓦当面の形態から、11世紀後半頃～12世紀末頃までの間に比定で

地区	層位・遺構	軒丸	軒平	丸	平	報告No.
c25	SD345 上土坑?			1		
c26	SD 3 4 7				1	935
e47	SE 3 7 7	1				921
b54	SD 3 9 0				1	
b54	SK 4 0 8				1	
c58	SD 3 9 1		2			930
c64	SD 3 9 1			1	1	
c69	SD 3 9 1				2	934
c70	SD 3 9 1	1				925
d72	SD 3 9 8				1	
d74	SD 4 0 2				1	936
c75	包含層				1	
d75	SD 4 0 2				6	932 933
d75	SK 4 0 3		1			929
c76	(SK2)不明遺構		1			
b77	SZ 4 0 9				1	
b78	SZ 4 0 9				1	
イ85	SK 4 4 1			2	5	
□85	SD 4 4 5	1				923
□85	SD 4 3 7				2	
□85	SD 4 3 8				1	
a85	包含層				1	
□86	SZ 4 4 2	1				924
イ87	SZ 4 4 2			1		
□87	SZ 4 4 2				1	931
□88	SZ 4 4 2	3		5	1	927 922 926
ハ88	SZ 4 4 2		1	5	7	928
ハ88	包含層				1	
イ89	SZ 4 4 2				1	
合 計		7	5	15	37	
		64				

tab.31 瓦出土地点および数量(破片数)一覧表

きるもの(921～926.930)、鎌倉時代頃のもの(927)、室町時代頃のもの(928)がある。

なお、これらの瓦は、調査区内でも特に北部に多い傾向にある(tab.31)。

③ 金属製品類

量的に多いのは釘である。中世墓と考えられるような土坑からは小刀も出土している。また、鉄鍋はⅡ期に相当する時期のものもあり、多量に消費されていた土師器鍋との関係が興味深い。117は青銅製品であるが、用途は不明である。

その他、調査区のほぼ全域から鉄鐸が出土しているが、量は少ない。

④ 石製品類

石鍋・温石・紡錘車・硯・砥石などがある。紡錘車(44)は広円面に渦巻き状の模様がある。この遺物は古墳からの紛れ込みの可能性が高い。82の石鍋は外面に絵が描かれているようであるが、何の絵なのかは判らない。温石(667)は半分ほど欠損しているが、石鍋の転用ではない。鎌倉では多く出土しているが、伊勢での出土は極めて珍しい。硯(223)は13世紀前半頃の遺物と伴出しており、いわゆる四葉硯の呈をなすものであろう。

2 蚊山地区出土の遺物

(fig. 39～41)

蚊山地区の出土遺物には縄文時代以前・中世・江戸時代(以下、近世とする)の遺物がある。大部分は近世でしかも瓦である。

a 縄文時代以前の遺物

SK507の付近からチャート剥片が出土したのみである。所り垣地区の調査例により、旧石器時代まで遡る可能性もある。

b 古墳時代の遺物

調査時点でB区と呼称していた字左郡から、須恵器の壺の頸部が出土した(968)。客土層中の出土であり、谷を隔てて北にある左郡古墳群に伴うものが何らかの要因で移動したものと考えられる。

c 中世の遺物

土師器類を中心に、陶器・磁器類も若干ある。時期的には先の分類のⅡb期が中心である。948の天目茶碗は中国製のものである。

d 近世の遺物

① 土器類

陶器のみで、瀬戸産の椀・播鉢がある。瓦窯に伴う焼土・炭などが多く流入していた層に入っていたもので、椀・播鉢がある。藤澤良祐氏の編年^⑧によると、播鉢(966)は17世紀後半頃に、丸椀(964.965)は18世紀前半頃に相当すると思われる。

② 瓦

瓦窯・粘土採掘土坑・円形土坑および包含層などから出土している。量が多い。種類としては軒丸瓦・鯉面戸瓦・軒棧瓦・棧瓦・一文字瓦などがある。軒丸瓦・一文字瓦などは、一般的な家屋用の瓦というよりは寺院等の屋根や塀に用いられるものではないかと思われる。

註

- ① 田辺昭三『陶邑古窯址群』I (平安学園考古学クラブ 1966) および同氏『須恵器大成』(角川書店 1981)
- ② 伊藤裕偉「楠ノ木遺跡」(『近畿自動車道(勢和～伊勢)埋蔵文化財発掘調査報告』第3分冊 三重県埋蔵文化財センター 1992)
- ③ 前川嘉宏「蚊山遺跡左郡地区」(『近畿自動車道(勢和～伊勢)埋蔵文化財発掘調査報告』第4分冊 三重県埋蔵文化財センター 1993)
- ④ 藤澤氏の山茶椀編年は各所に発表されているため、今回の報告では『尾呂』(瀬戸市教育委員会 1990)所収の論考を基準に、それに用いられている文献に拠った。
- ⑤ 伊藤裕偉「中世南伊勢系の土師器に関する一試論」(『Miehistory』vol.1 1990)
- ⑥ 山田猛「伊賀の瓦器に関する若干の考察」(『中近世土器の基礎研究』II 1986)
- ⑦ 藤澤良祐「瀬戸古窯址群II」(『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要』X 1991)
- ⑧ 岩中淳之「佐八藤波遺跡発掘調査報告」(伊勢市教育委員会 1990)
- ⑨ 佐藤虎雄「神宮の土器」(『紀元二千六百年記念肇國文化論文集』1941)
- ⑩ 伊藤裕偉「多気遺跡群発掘調査報告」(三重県埋蔵文化財センター 1993)
- ⑪ 類例は松阪市・横尾墳墓群(『近畿自動車道(久居～勢和)埋蔵文化財発掘調査概報』II 三重県教育委員会 1986)、多気町・釈尊寺遺跡(『近畿自動車道(久居～勢和)埋蔵文化財発掘調査報告』第1分冊1 三重県教育委員会 1989)、美杉村・多気遺跡群(『多気遺跡群発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター 1993)など。
- ⑫ ここで言う「瓦質系土器類」という用語は、端的に言えば苦肉の策である。この一群は、形態こそ瓦質土器の類として把握が可能であっても、焼成は明らかに土師質であり、その意味では「土師質系土器」と仮称することも可能である。中世の土器生産の系譜を考える時、この類のように、いずれとも判断し兼ねるものが存在する状況は、波瀬B遺跡(玉城町)SE28出土土器(上村安生『波瀬B遺跡発掘調査報告』三重県埋蔵文化財

センター 1992)で、10世紀後半～11世紀初頭の黒色土器と土師器との関係のようにすでに見受けられる。このような場合、「○○系□□質土器」という用語を用いると、その用語に規定され、○○系とした「系譜」の方が強調され、□□質の方が客体的なものであるという意識が生じる。実際、○○系を受け入れることによって□□質が変革されることは事実としてある(吉岡康暢『中世須恵器の研究』1994)。しかし、工人集団の性格は多様なものを想定すべきで、□□質を生産するものが○○系の受入れに対して積極的に対応し、一定のエリア内での流通圏を獲得するような動きを見せた場合、それは□□質であることこそが強調されねばならない。その意味からも、当報告で仮称する「瓦質系土器類」は、将来的には工人集団の性格を追求し(南伊勢系土師器製作工人の製品である可能性も考慮の必要がある)、その系譜を辿ることによって消滅させるべき呼び名なのである。

- ⑬ 中野晴久「中世知多古窯址群の押印文」(『知多半島の歴史と現在』No.4 日本福祉大学 1992)
- ⑭ 角谷泰弘「寺原B遺跡」(『近畿自動車道(勢和～伊勢)埋蔵文化財発掘調査報告』第5分冊 三重県埋蔵文化財センター 1992)
- ⑮ 藤澤良祐「本業焼の研究(2)」(『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要』VII 1988)および同氏「本業焼の研究(3)」(『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要』VIII 1989)

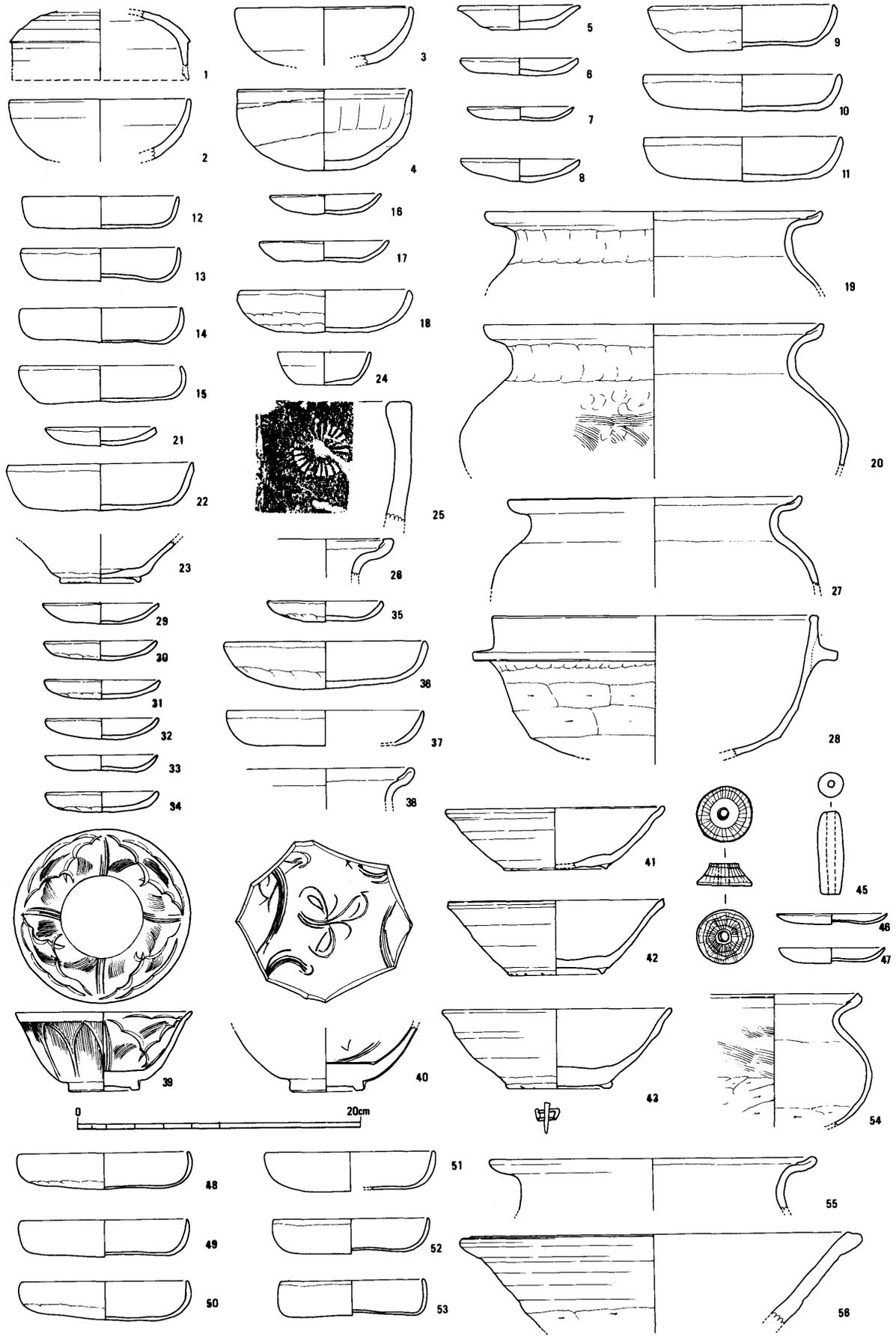


fig.20 ケカノ辻・角垣内地区出土遺物(1) SX305他 (1:4)

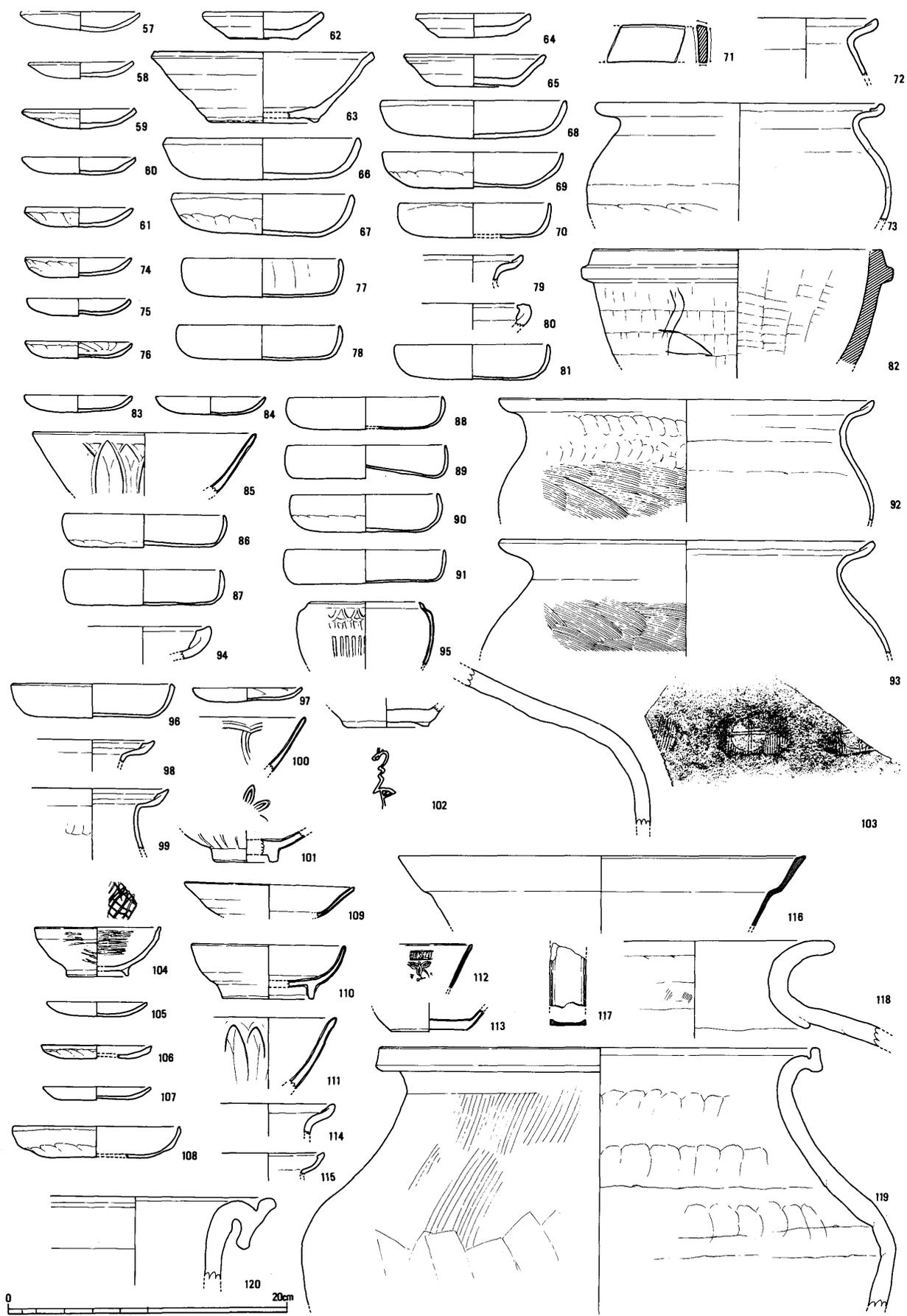


fig.21 ケカノ辻・角垣内地区出土遺物(2) SK317他 (1 : 4)

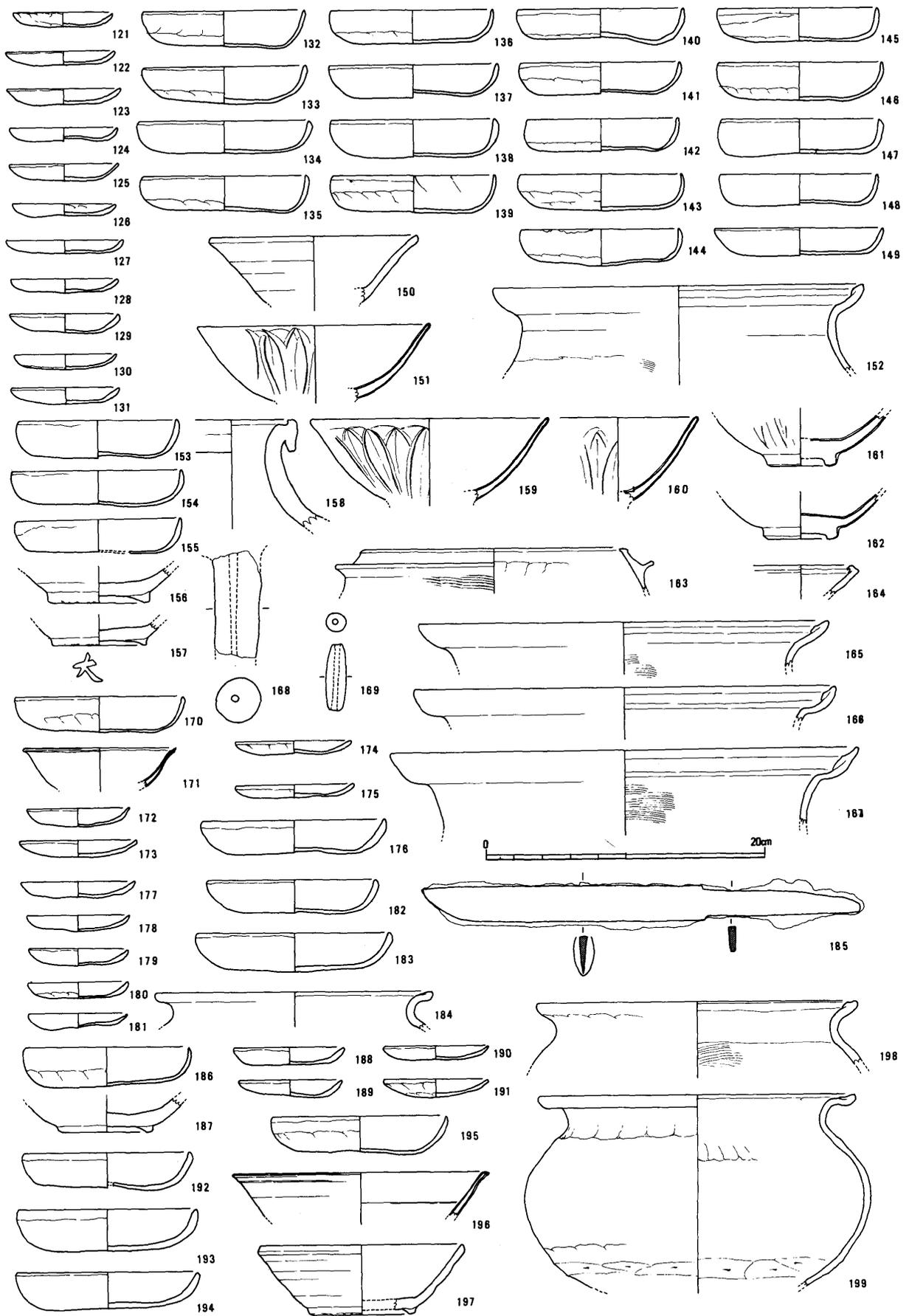


fig.22 ケカノ辻・角垣内地区出土遺物(3) SD341他 (1:4)

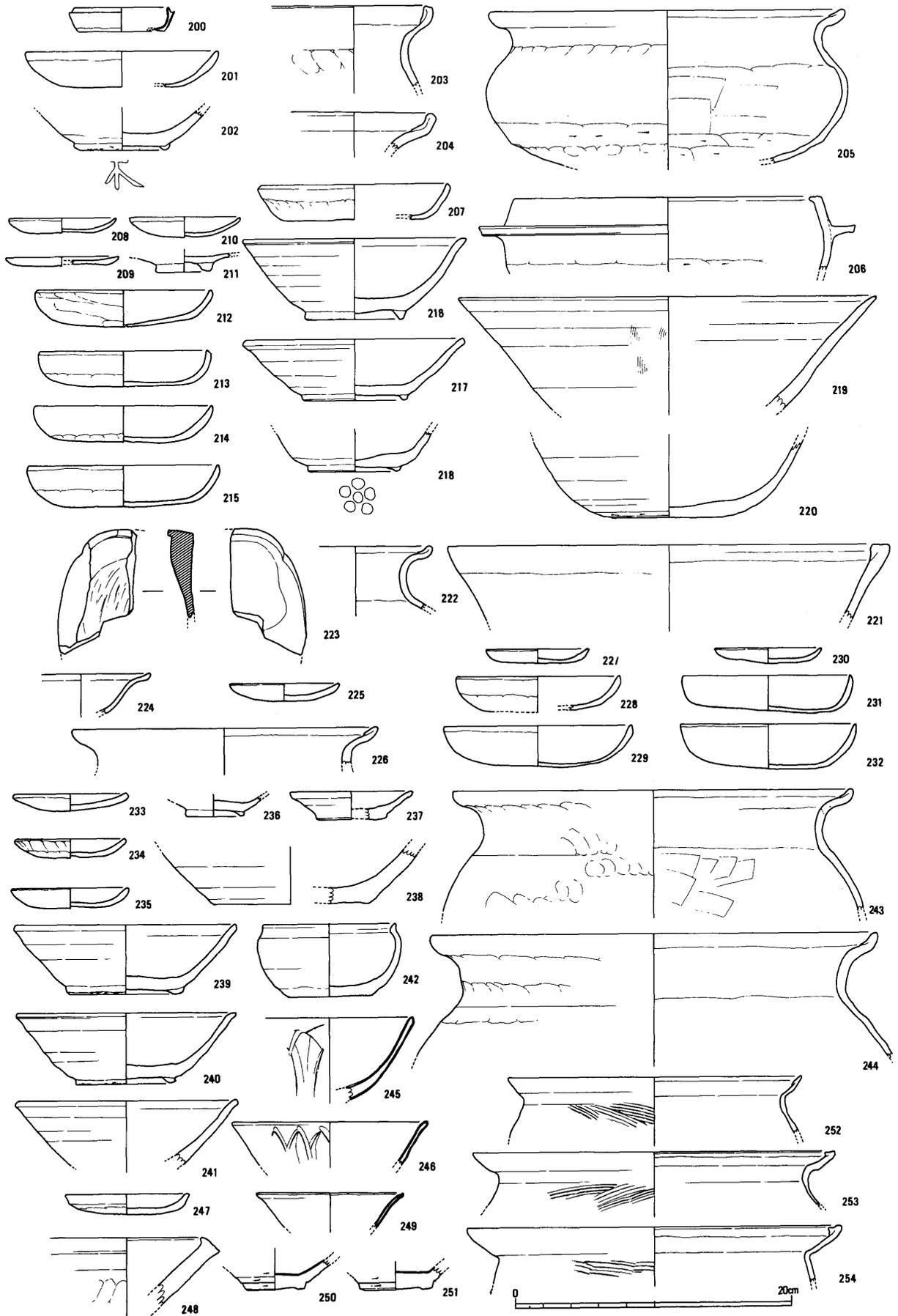


fig.23 ケカノ辻・角垣内地区出土遺物(4) SD364他 (1:4)

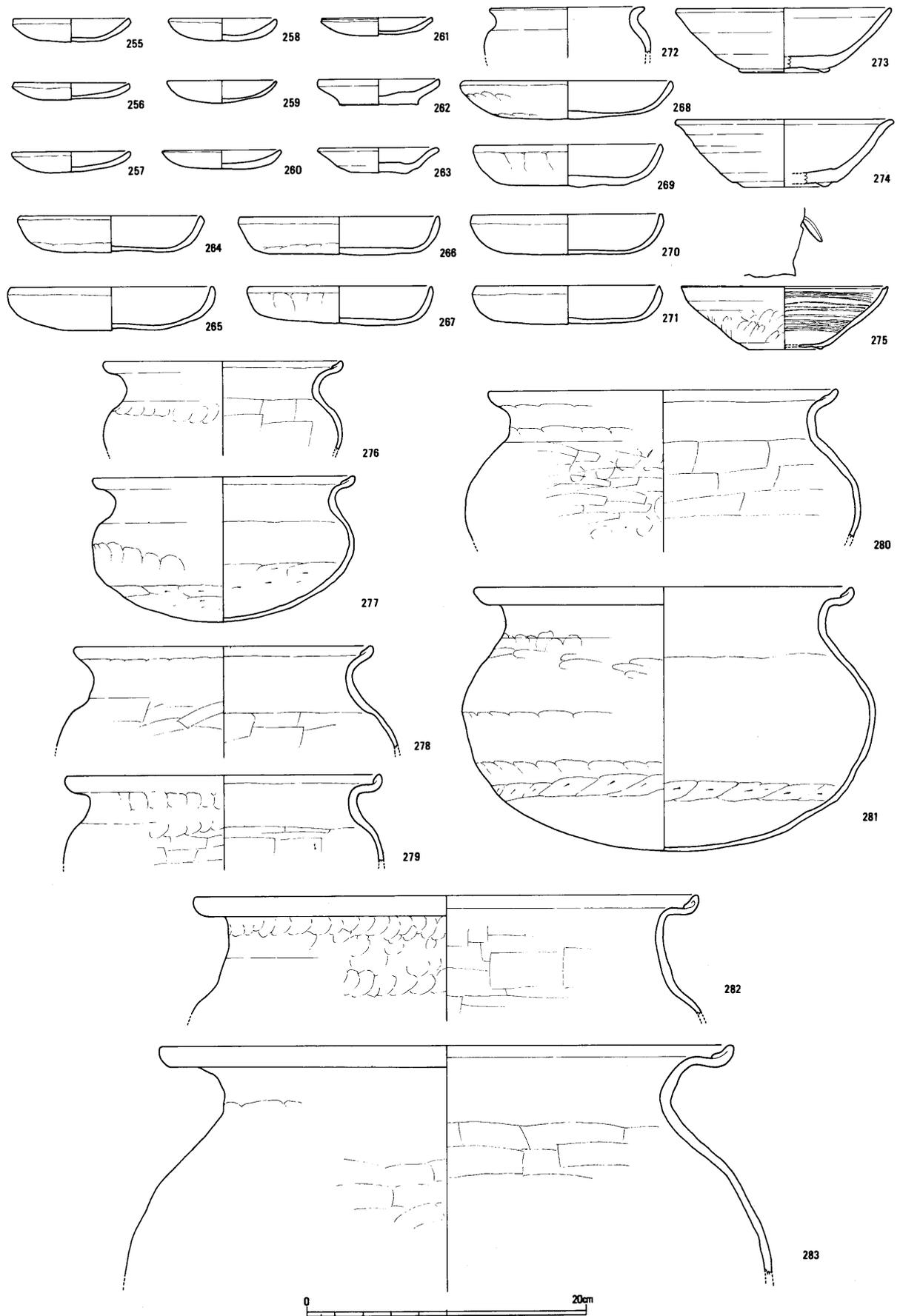


fig.24 ケカノ辻・角垣内地区出土遺物(5) S E 381 (1 : 4)

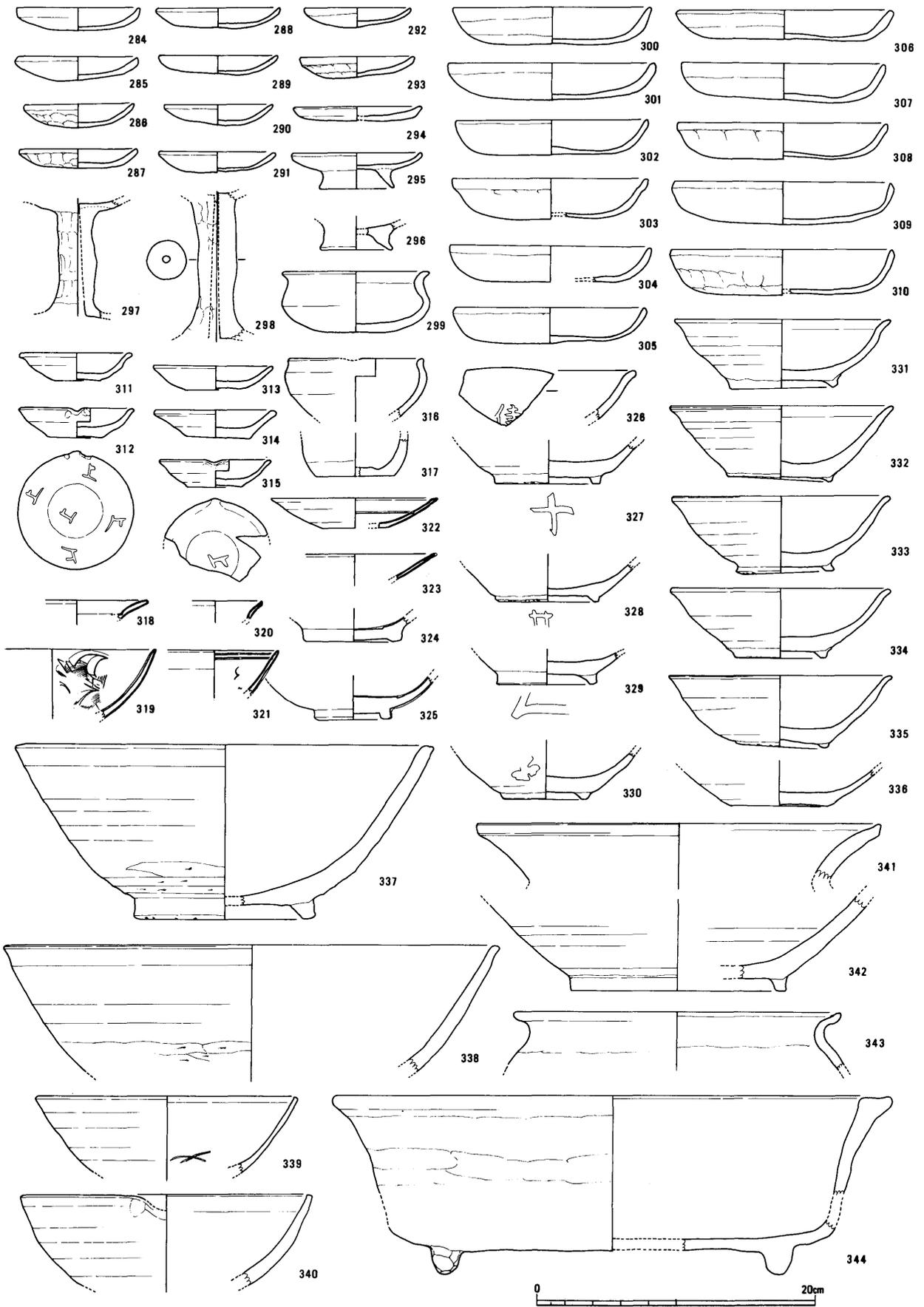


fig.25 ケカノ辻・角垣内地区出土遺物(6) SD391 (1:4)

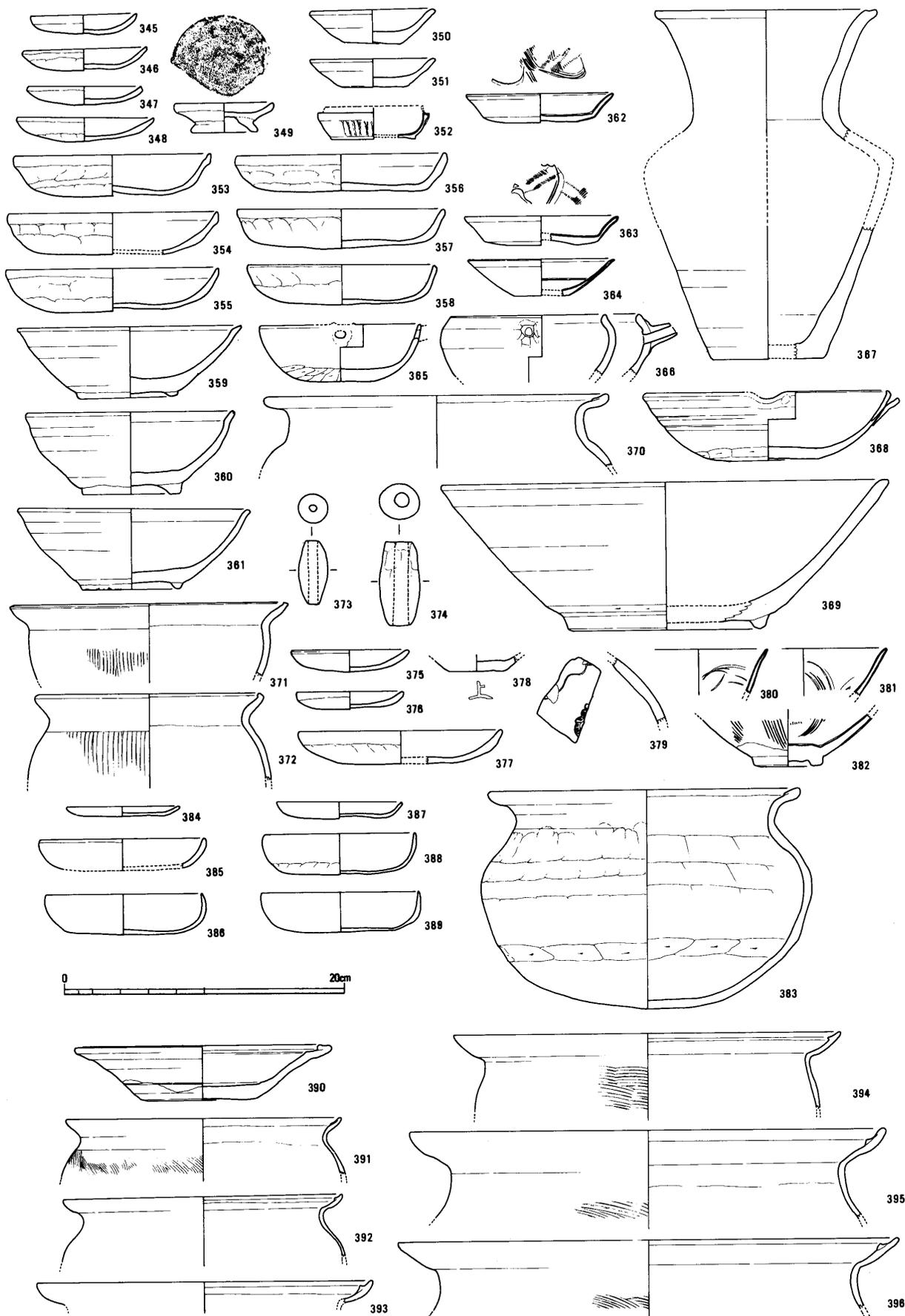


fig.26 ケカノ辻・角垣内地区出土遺物(7) SD391他 (1 : 4)

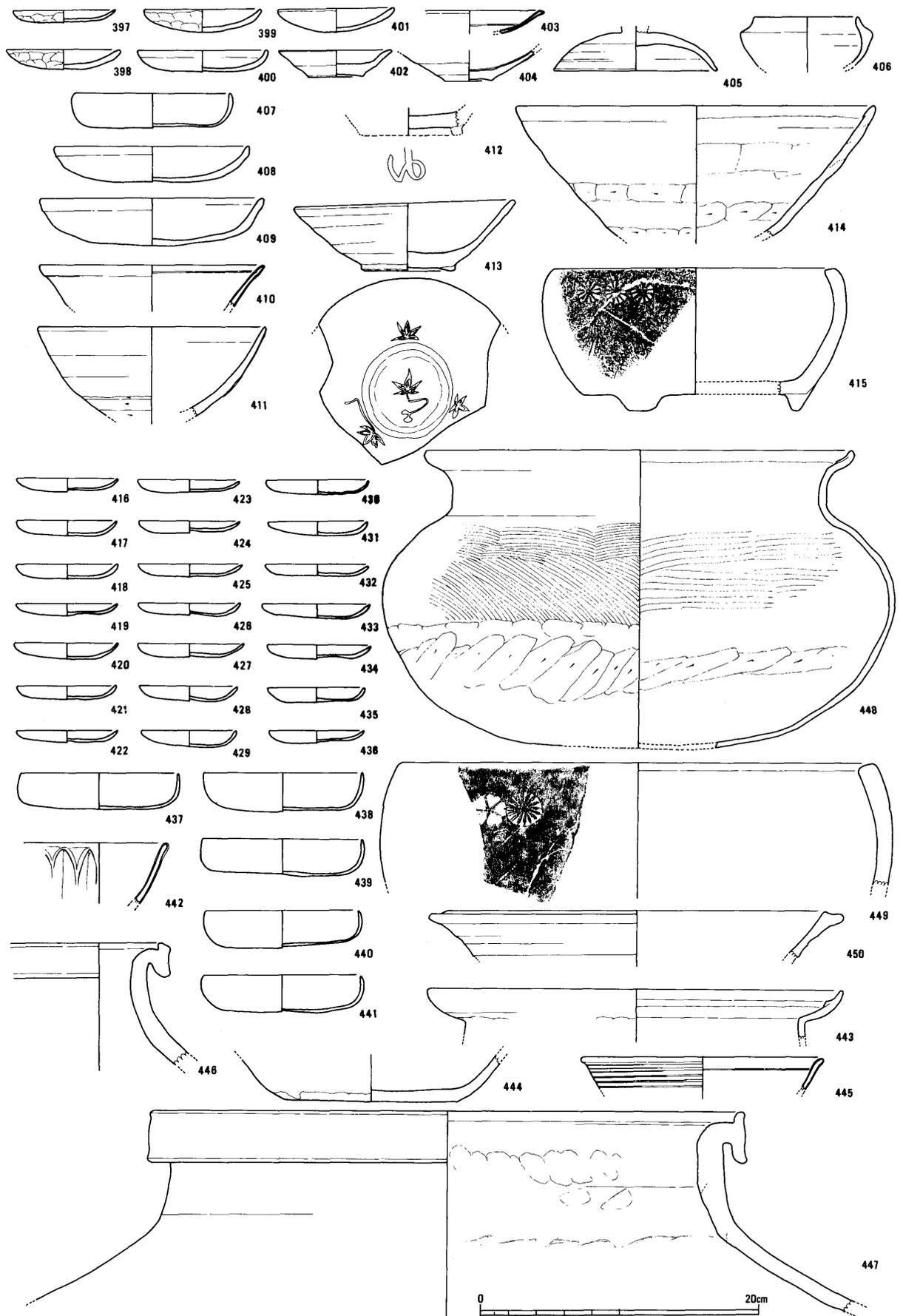


fig.27 ケカノ辻・角垣内地区出土遺物(8) SD402他 (1:4)

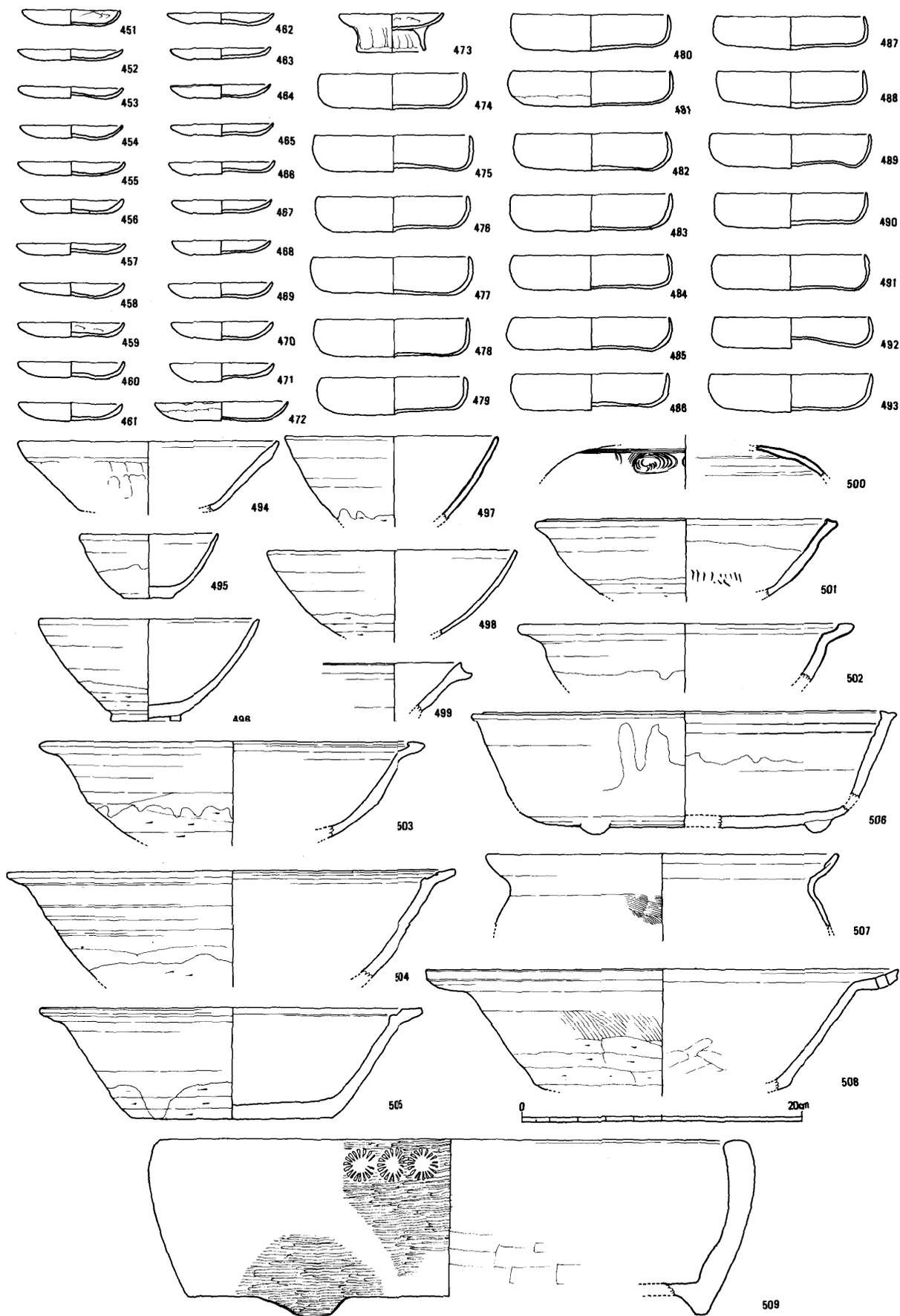


fig.28 ケカノ辻・角垣内地区出土遺物(9) SK 408 (1:4)

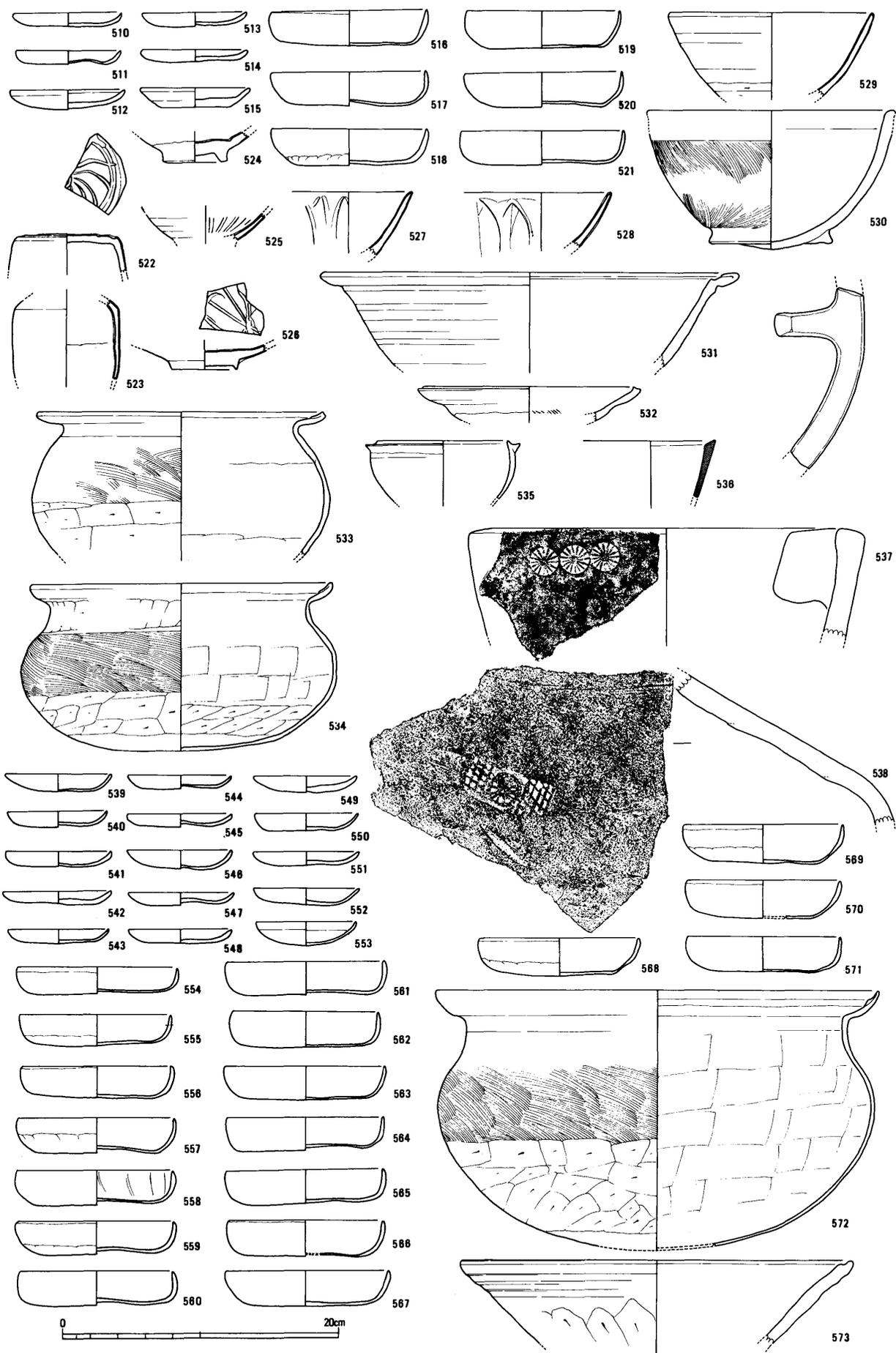


fig.29 ケカノ辻・角垣内地区出土遺物(10) SD412他 (1:4)

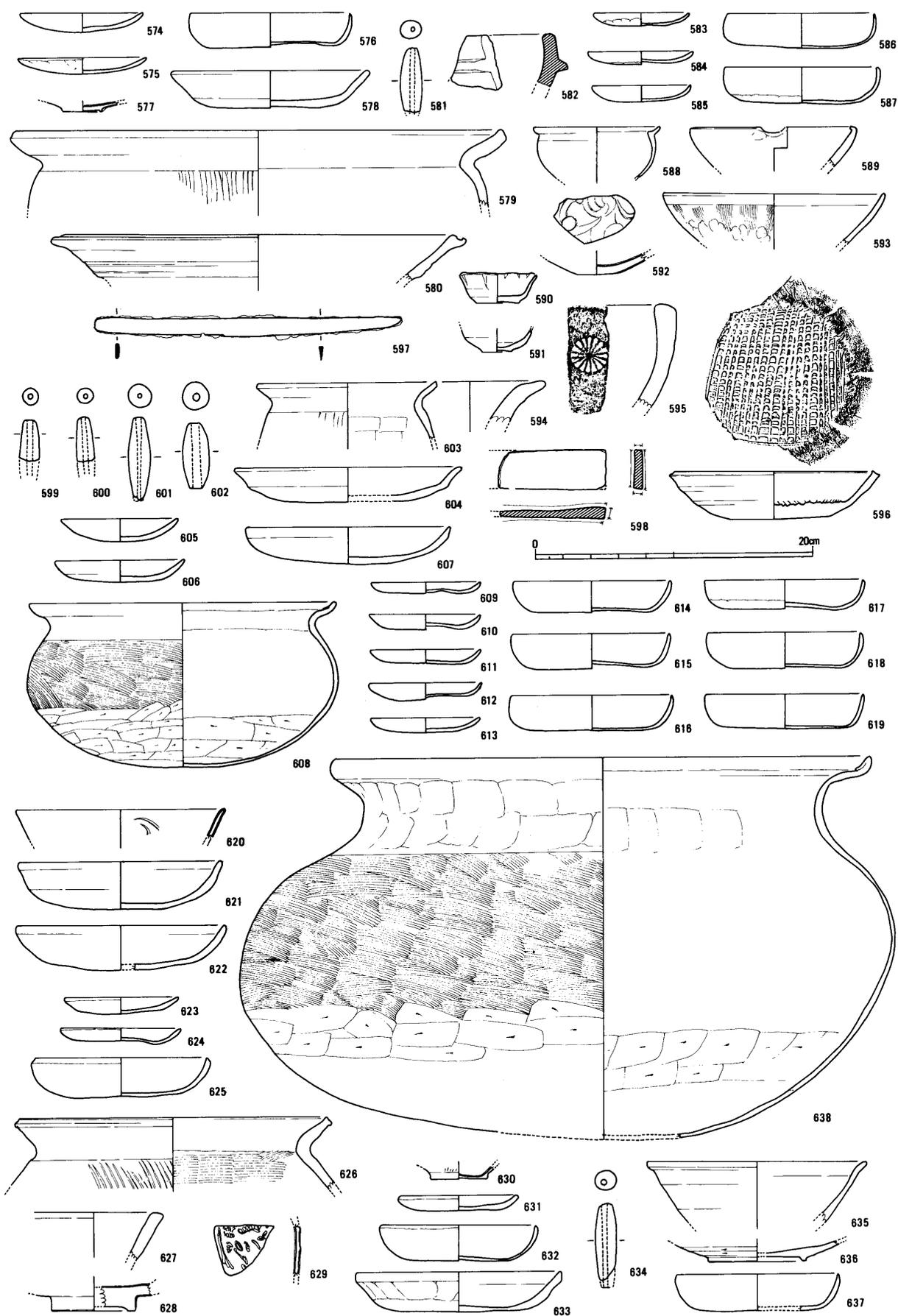


fig.30 ケカノ辻・角垣内地区出土遺物(1) SK410他 (1 : 4)

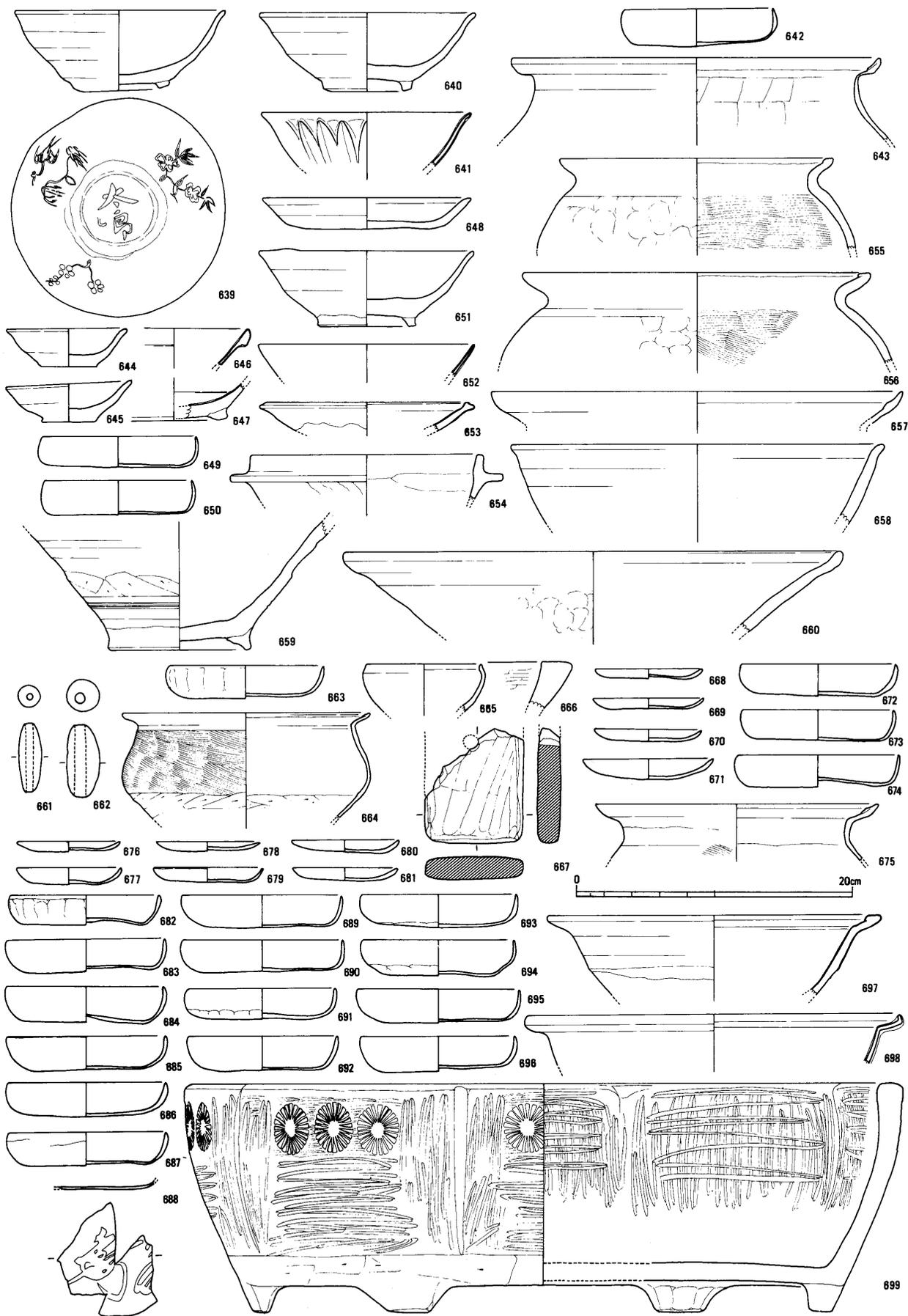


fig.31 ケカノ辻・角垣内地区出土遺物(12) SK434他 (1:4)

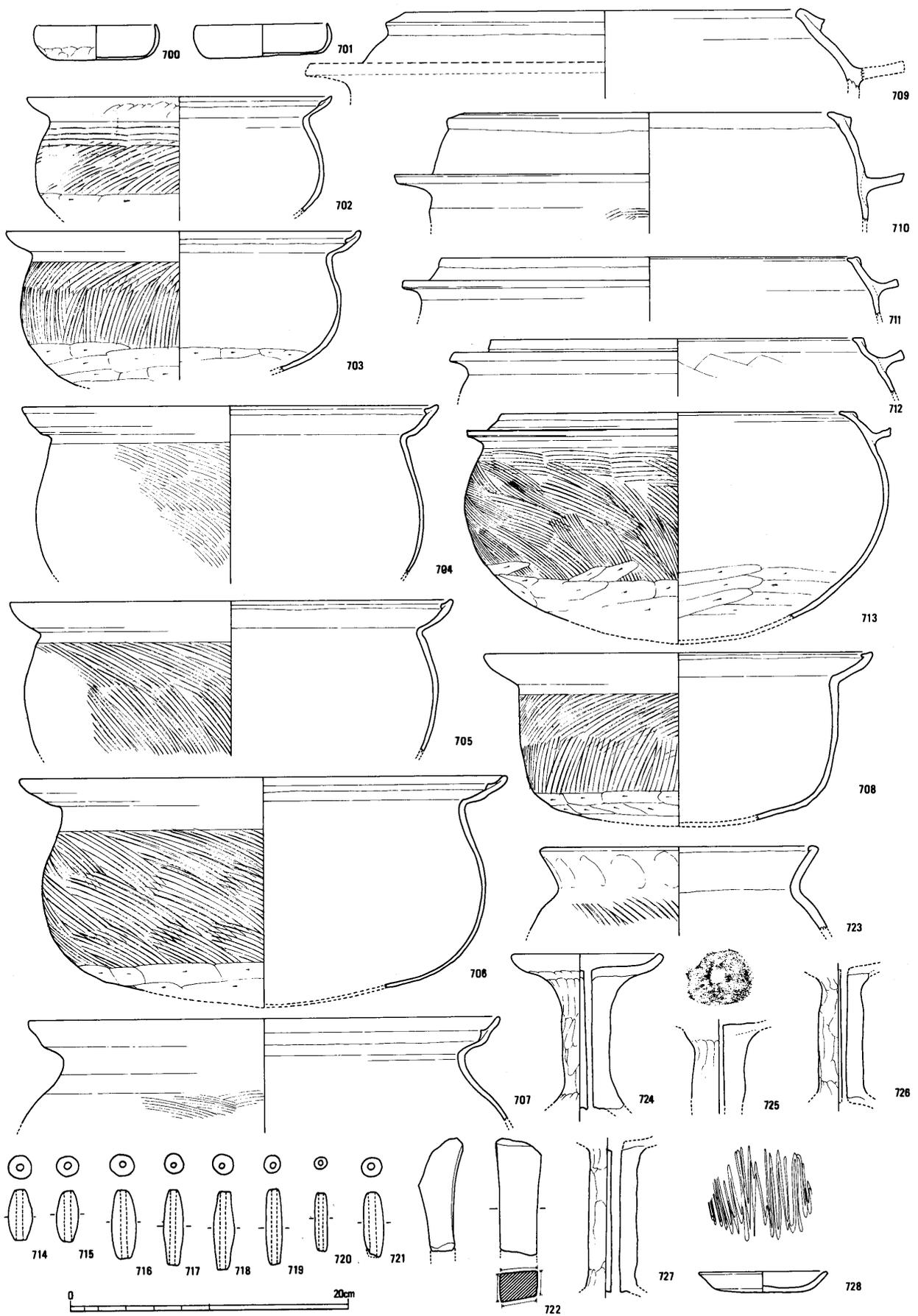


fig.32 ケカノ辻・角垣内地区出土遺物(13) S Z 442上他 (1 : 4)

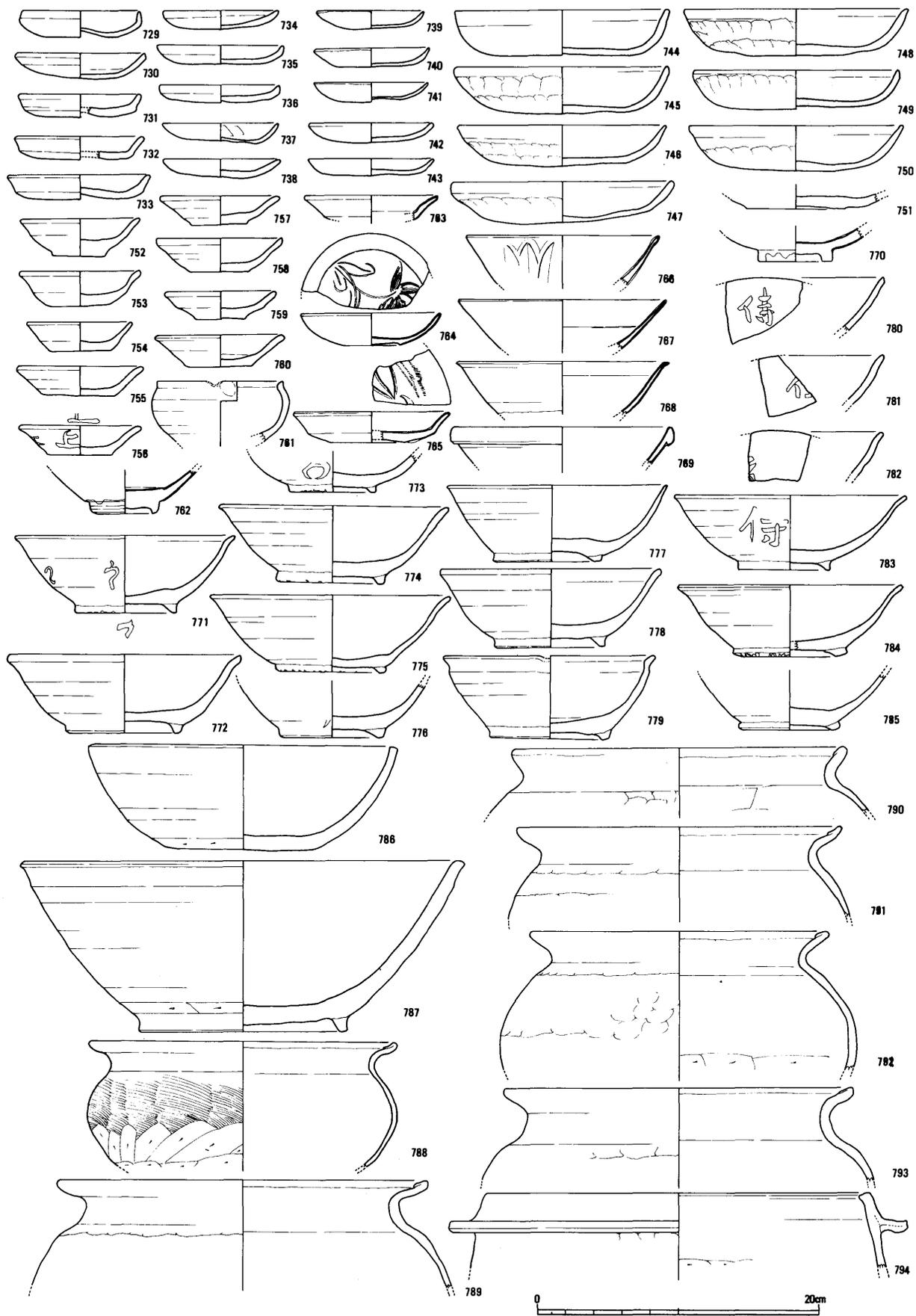


fig.33 ケカノ辻・角垣内地区出土遺物(14) SZ 442 (1 : 4)

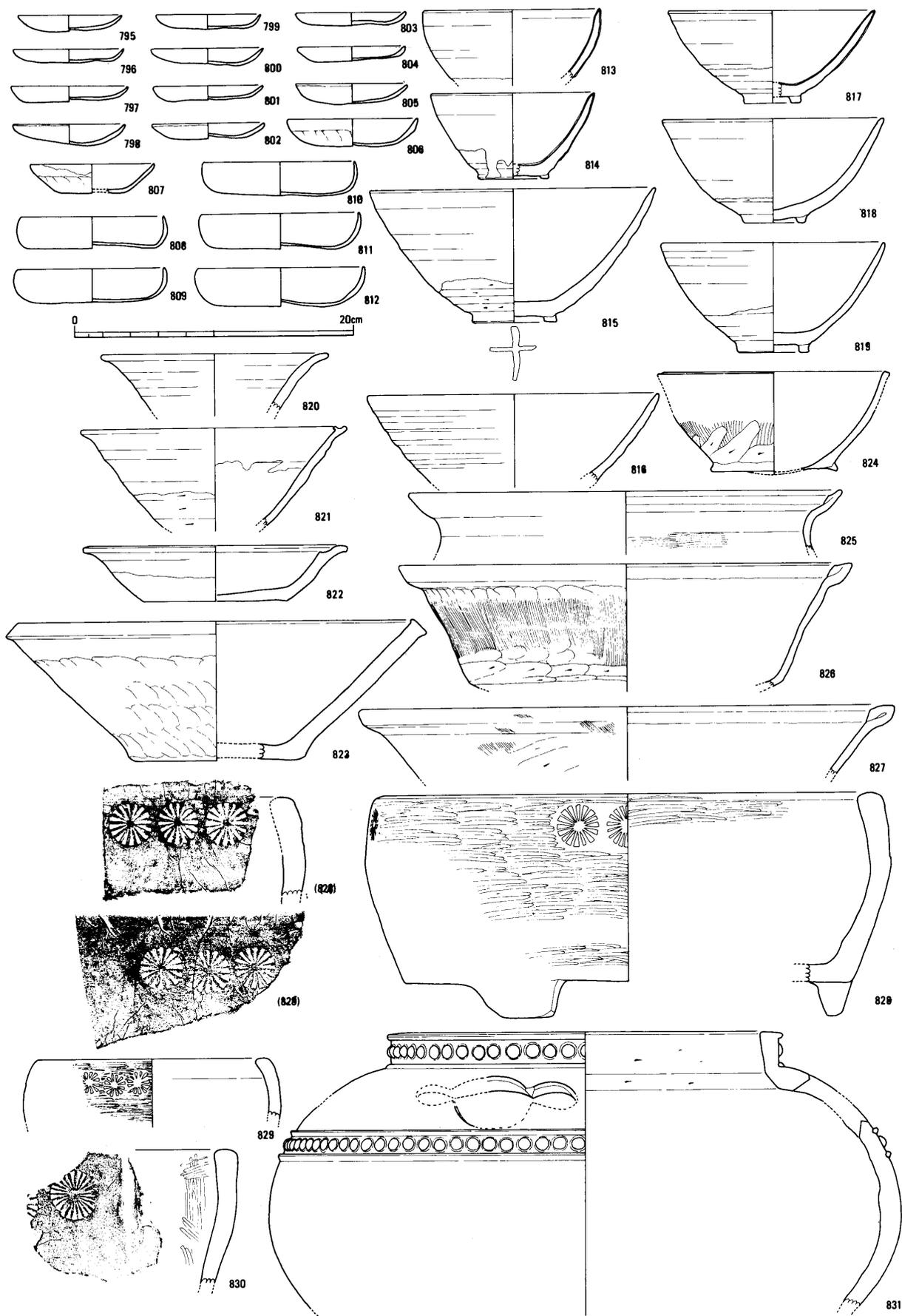


fig.34 ケカノ辻・角垣内地区出土遺物(15) SZ442 (1:4)

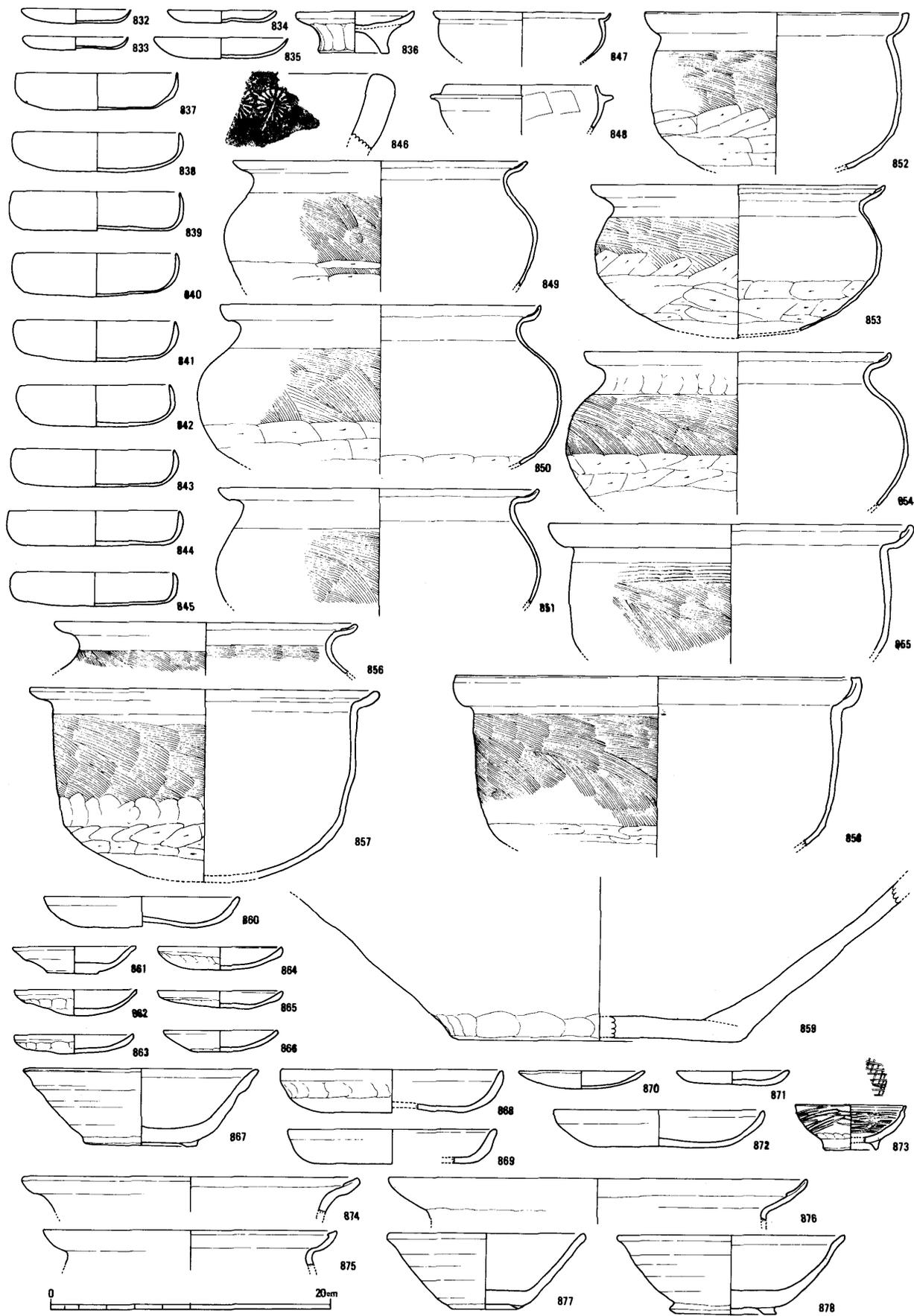


fig. 35 ケカノ辻・角垣内地区出土遺物(16) SK 449他 (1 : 4)

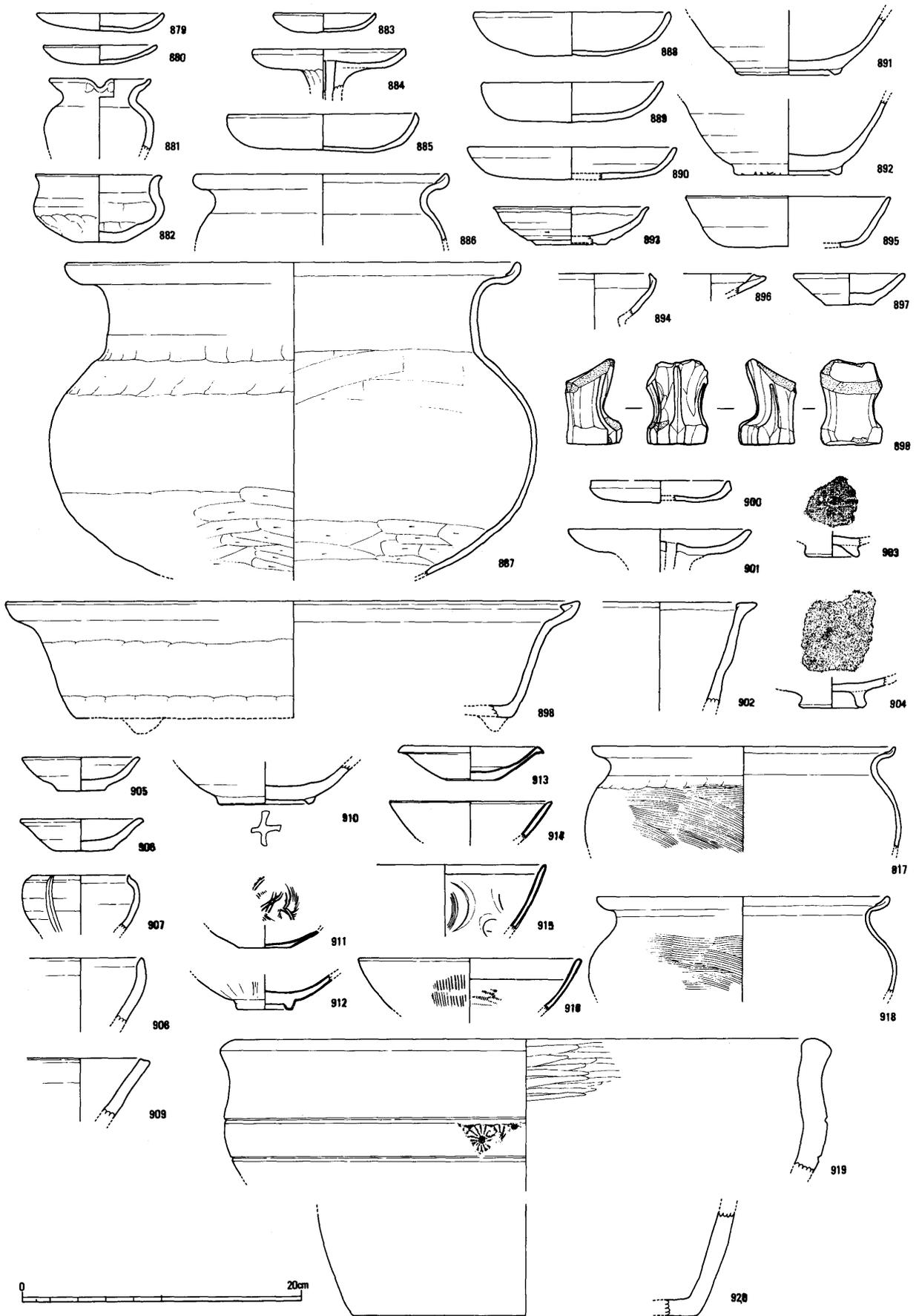


fig.36 ケカノ辻・角垣内地区出土遺物(17) ピット他 (1:4)

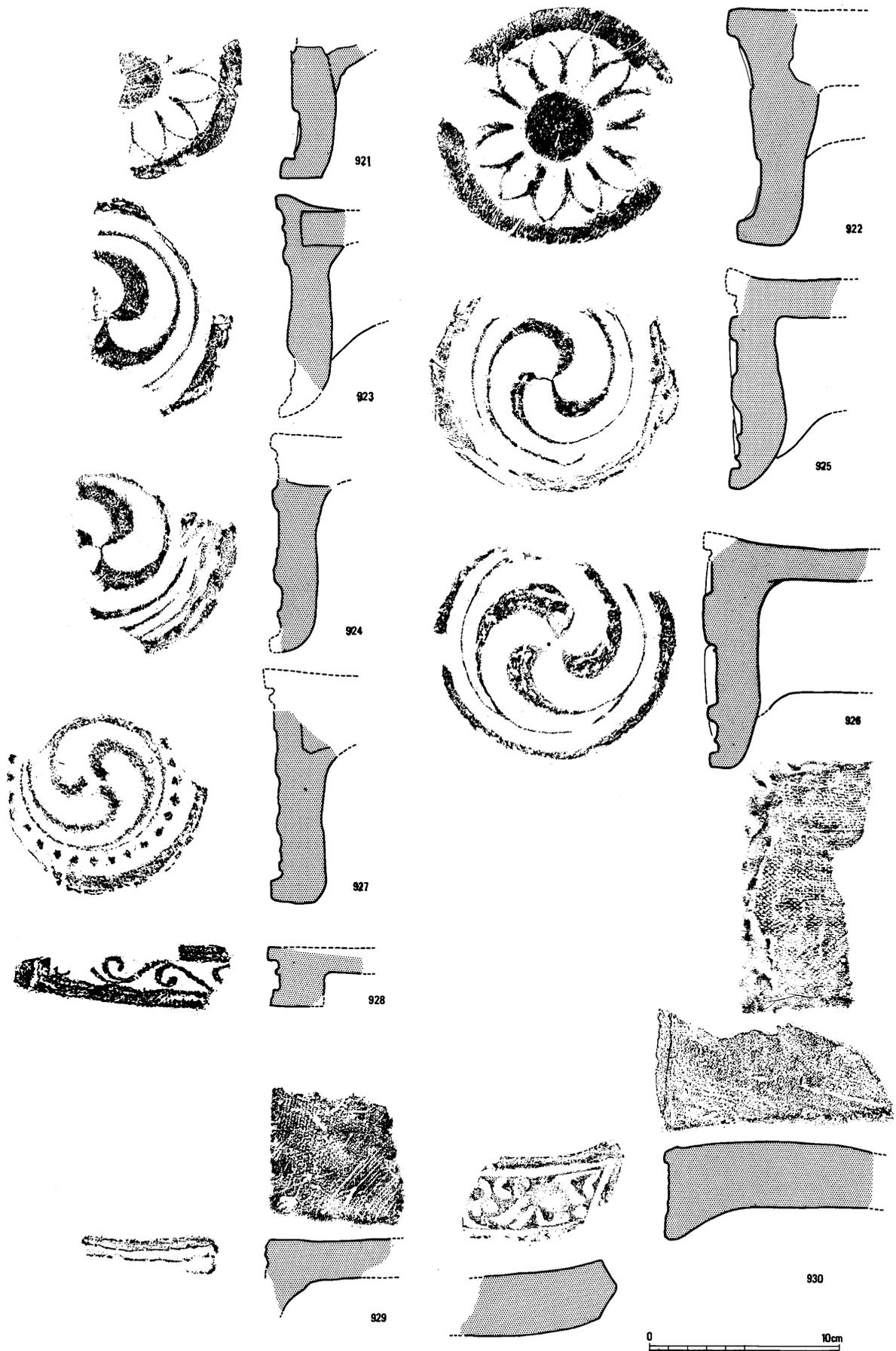


fig.37 ケカノ辻・角垣内地区出土遺物(18) 瓦 (1 : 3)

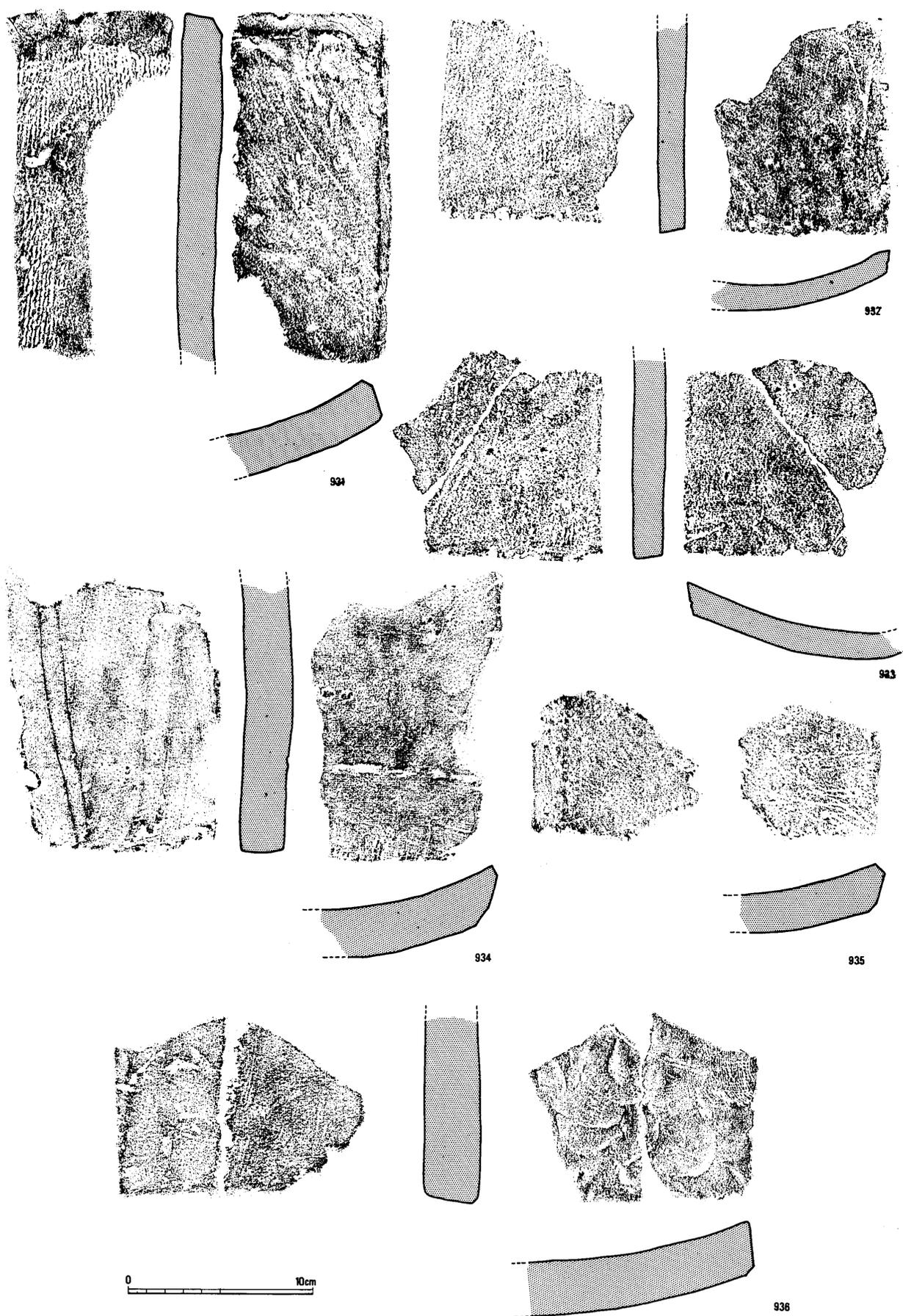


fig.38 ケカノ辻・角垣内地区出土遺物(19) 瓦 (1:3)

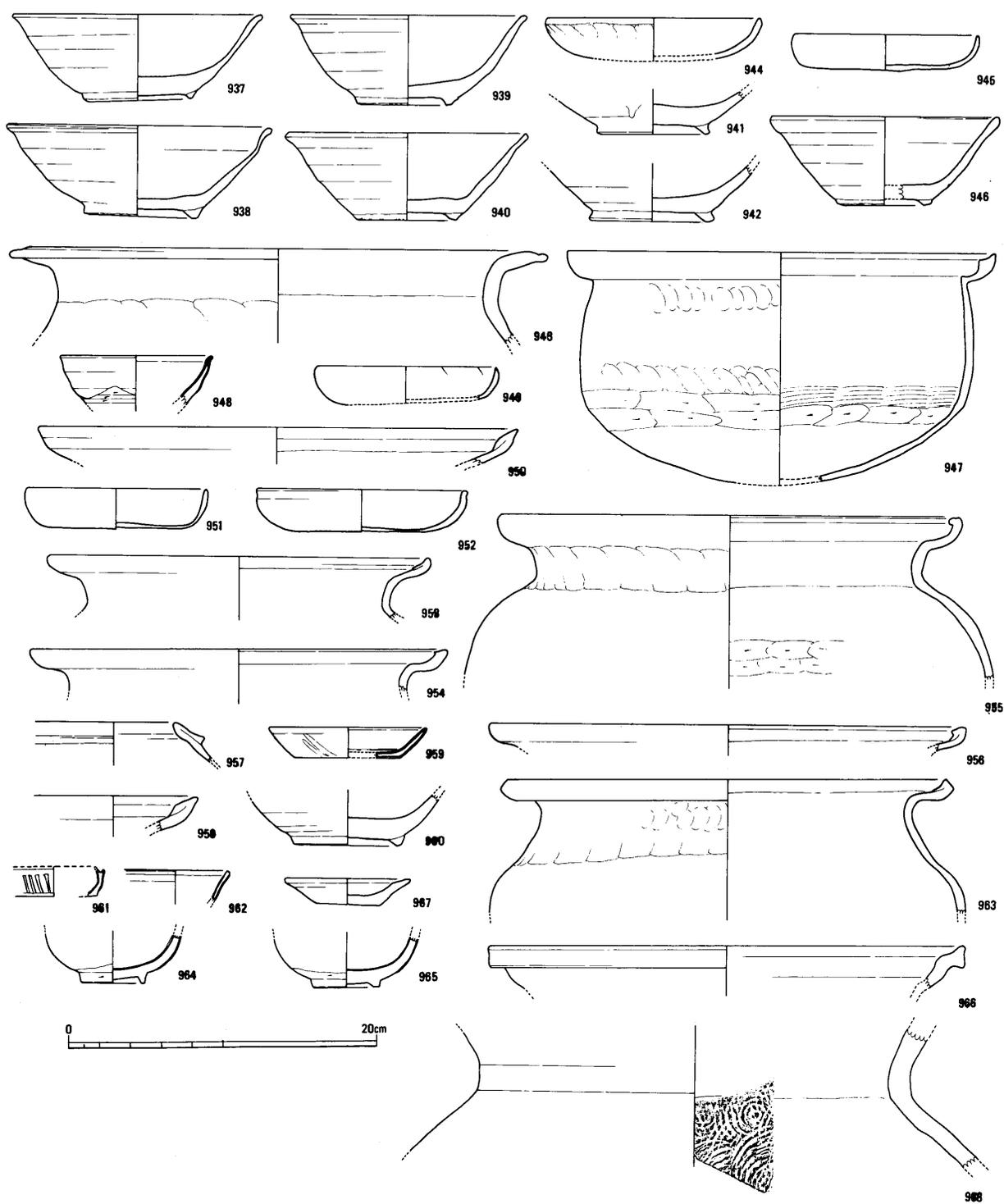


fig.39 蚊山地区出土遺物(1) 土器類 (1:4)

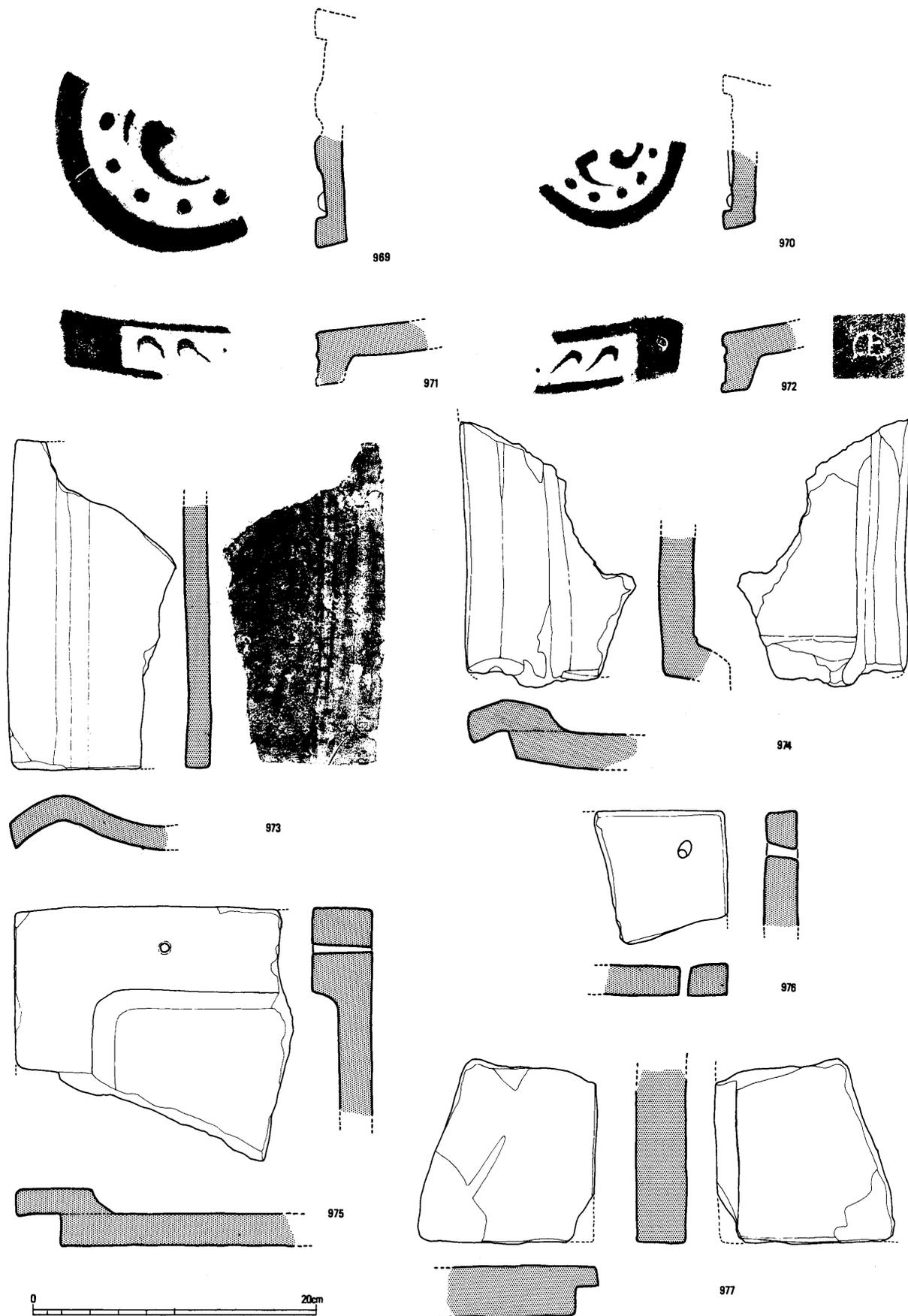


fig.40 蚊山地区出土遺物(2) 瓦 (1:4、972右の拓本のみ1:2)

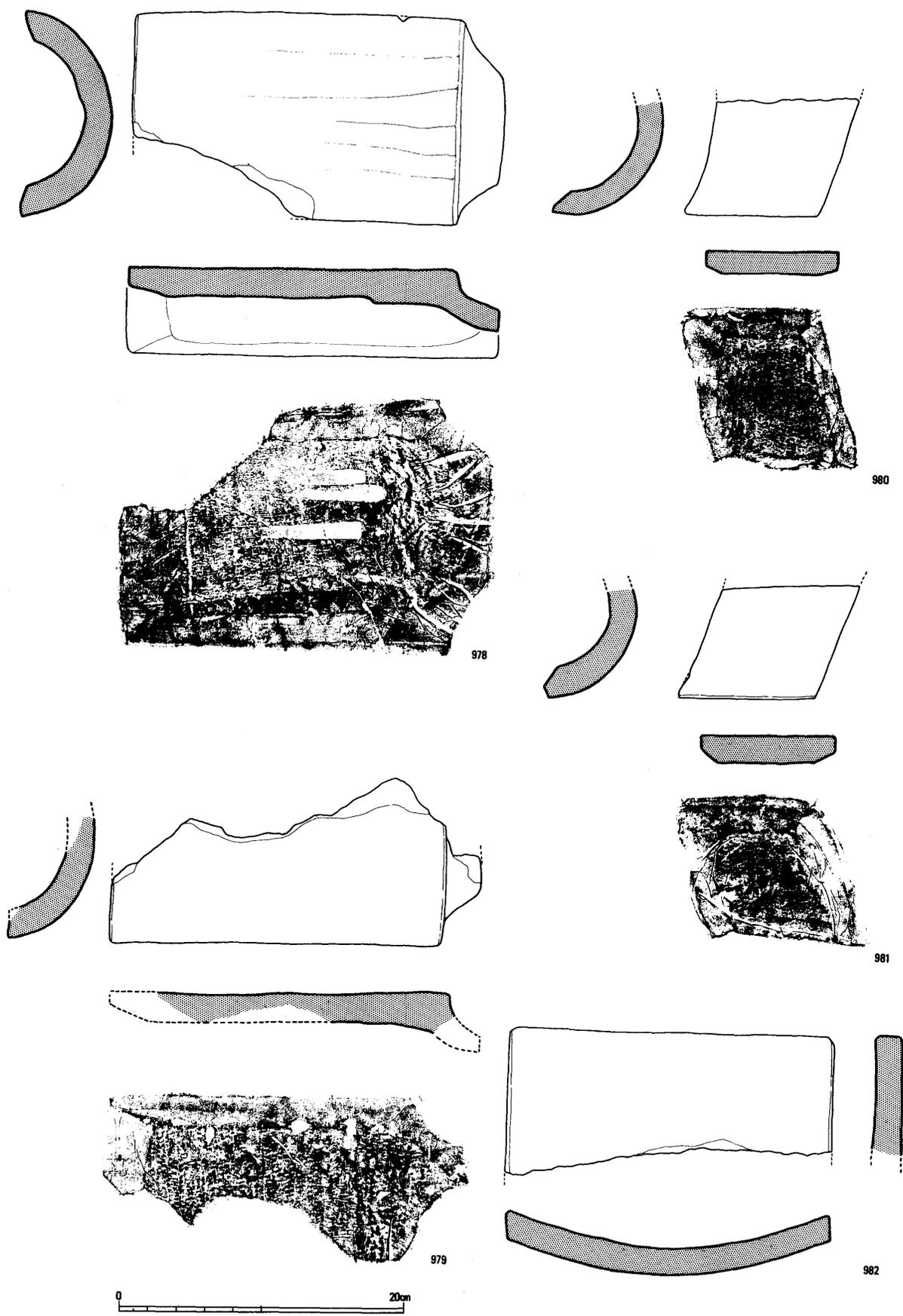


fig.41 蚊山地区出土遺物(3) 瓦 (1 : 4)

番号	実測番号	器種等	出土グロット	遺構・層名など	取上時の称	法量 (cm)	調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考
1	249-4	須恵器 坏	d7	22号墳	SD1	(口)12.4 推定	外;ロクロナデのち回転スリ内;ロクロナデ	密0.5~2mmの小石	堅緻	淡青灰	口縁上部1/9	
2	5-6	土師器 坏	b10	SD311	SD1	(口)13.0	外;ナデのちヨコナデ内;ナデのちヨコナデ	密	良好	明褐色	口縁1/3	23号墳に伴うものであろう
3	6-2	土師器 坏	b10	SD311	SD1	(口)12.4	外;ナデのちヨコナデ内;ナデのちヨコナデ	密	良好	淡橙	口縁1/4	23号墳に伴うものであろう
4	74-1	土師器 坏	c11	SK310	SK1	(口)12.4 (高)5.8	外;ナデのちヨコナデ内;ナデのちヨコナデ	密	良好	淡橙灰	口縁2/3	23号墳に伴うものであろう
5	2-5	陶器 小皿	e2	SK301	SK1	(口)8.8 (高)1.7	外;ロクロナデのち系切り内;ロクロナデ	密	堅緻	灰白	完存	山皿 内面に自然釉付着
6	2-3	土師器 小皿	e2	SK301	SK1	(口)8.4 (高)1.2	外;オサエ・ナデ内;ナデ	密	良好	橙	完存	重さ39g
7	2-6	土師器 小皿	e2	SK301	SK1	(口)7.8 (高)0.9	外;オサエ・ナデ内;ナデ	密	良好	灰褐	完存	内面に釉付着 重さ22g
8	2-4	土師器 小皿	e2	SK301	SK1	(口)8.6 (高)1.6	外;オサエ・ナデ内;ナデ	密	良好	灰褐	完存	重さ32g
9	2-7	土師器 皿	e2	SK301	SK1	(口)13.3 (高)2.9	外;オサエ・ナデ内;ナデ	密	良好	灰褐	ほぼ完存	重さ102g (推定)
10	9-1	土師器 皿	e2	SK301	SK1	(口)14.3 (高)2.6	外;オサエ・ナデのち口縁部にヨコナデ内;ナデ	密	良好	灰褐	ほぼ完存	重さ157g (推定)
11	2-9	土師器 皿	e2	SK301	SK2	(口)13.8 (高)3.2	外;オサエ・ナデのち口縁部にヨコナデ内;ナデ	密	良好	灰褐	完存	重さ155g
12	2-8	土師器 皿	e3	SK302	SK1	(口)11.0 (高)2.3	外;オサエ・ナデのち口縁部にヨコナデ内;ナデ	密	良好	灰褐	2/5	
13	2-2	土師器 皿	e3	SK302	SK1	(口)11.4 (高)2.1	外;オサエ・ナデのち口縁部にヨコナデ内;ナデ	密	良好	灰褐	完存	重さ57g
14	2-1	土師器 皿	e3	SK302	SK1	(口)11.8 (高)2.4	外;オサエ・ナデのち口縁部にヨコナデ内;ナデ	密	良好	灰褐	完存	重さ62g
15	3-4	土師器 皿	c9	SK307	SK1	(口)11.4 (高)2.5	外;オサエ・ナデのち口縁部にヨコナデ内;ナデ	密0.5~2mmの小石(多)	良好	乳褐色	4/5	
16	9-4	土師器 小皿	e7	SK303	SK1	(口)8.2 (高)1.4	外;オサエ・ナデ内;ナデ	粗0.5~2mmの小石	軟	淡橙	9/10	
17	51-7	土師器 小皿	e7	SK303	SK1	(口)9.0 (高)1.5	外;オサエ・ナデ内;ナデ	密0.5~1mmの小石(多)	良好	淡橙	1/2	
18	9-5	土師器 皿	e7	SK303	SK1	(口)12.0 (高)2.9	外;オサエ・ナデのち口縁部にヨコナデ内;ナデ	密	良好	淡橙	1/3	
19	9-3	土師器 皿	e7	SK303	SK1	(口)24.0	外;オサエ・ナデのち口縁部にヨコナデ内;ナデ	粗	良好	淡橙	口縁1/3	
20	9-2	土師器 皿	e7	SK303	SK1	(口)24.2	外;オサエ・ナデ・ハクメのちヨコナデ内;ナデ	粗	良好	淡黄橙	口縁1/5	
21	11-2	土師器 小皿	d7	SD304	SD1	(口)7.9 (高)1.4	外;オサエ・ナデ内;ナデ	密0.5~1mmの小石	良好	橙	完存	重さ27g
22	11-3	土師器 皿	d7	SD304	SD1	(口)13.2 (高)3.3	外;オサエ・ナデのち口縁部にヨコナデ内;ナデ	密0.5~1mmの小石	良好	淡黄~淡黄橙	1/2	歪大きい
23	252-2	陶器 椀	b7	SD304	SD1	(高台)5.9	外;ロクロナデのち系切り高台にナデ内;オコナ	密0.5~2mmの小石	堅緻	淡灰	高台1/2	山茶椀 瀬戸北部系
24	262-1	陶器 入子	d7	SD304	SD1	(口)8.6 (高)2.3	外;ロクロナデのち底部にヘラナデ内;ロクロナデ	密0.5~1mmの小石	堅緻	淡褐	口縁1/2	瀬戸北部系 内面に朱が付着しており、紅皿と思われる。
25	53-2	瓦質土器 火舎	c7	SD304	SD1	(口)-	外;ナデのちスタンプ文・輪花内;ナデ	密0.5~3mmの小石	良好	暗灰	口縁部片	
26	264-2	土師器 皿	d7	SD304	SD1	(口)-	外;ヨコナデ内;ヨコナデ	密0.5~2mmの小石	良好	淡褐	口縁部片	外面に煤付着
27	52-2	土師器 皿	c7	SD304	SD1	(口)21.0	外;ナデのちヨコナデ内;板ナデのちヨコナデ	密0.5~1mmの小石	良好	淡橙	口縁1/10	外面に煤付着
28	11-1	土師器 羽釜	d7	SD304	SD1	(口)23.4	外;オサエ・ナデのちヨコナデ内;ナデ	密0.5~5mmの小石(多)	やや軟	淡黄灰	口縁2/5	外面に煤付着
29	10-10	土師器 小皿	b8	SX305 埋葬施設	SK1	(口)8.3 (高)1.5	外;オサエ・ナデ内;ナデ	密	やや軟	明褐色	完存	成形痕残る 重さ37g
30	10-3	土師器 小皿	b8	SX305 埋葬施設	SK1	(口)8.1 (高)1.4	外;オサエ・ナデ内;ナデ	粗0.5~2mmの小石(多)	良好	淡黄橙	9/10	30~32・34・35は、手法・胎土が共通する。
31	10-4	土師器 小皿	b8	SX305 埋葬施設	SK1	(口)8.2 (高)1.4	外;オサエ・ナデ内;ナデ	粗0.5~2mmの小石(多)	良好	淡黄橙	完存	重さ28g
32	10-1	土師器 小皿	b8	SX305 埋葬施設	SK1	(口)8.0 (高)1.5	外;オサエ・ナデ内;ナデ	粗0.5~4mmの小石(多)	良好	淡黄橙	完存	重さ28g
33	51-8	土師器 小皿	b8	SX305 埋葬施設	SK1	(口)8.0 (高)1.1	外;オサエ・ナデ内;ナデ	密	良好	淡橙	9/10	
34	10-2	土師器 小皿	b8	SX305 埋葬施設	SK1	(口)8.1 (高)1.5	外;オサエ・ナデ内;ナデ	粗0.5~2mmの小石(多)	良好	淡黄橙	完存	重さ33g
35	10-5	土師器 小皿	b8	SX305 埋葬施設	SK1	(口)8.0 (高)1.5	外;オサエ・ナデ内;ナデ	粗0.5~2mmの小石(多)	良好	淡黄橙	完存	重さ37g
36	10-6	土師器 皿	b8	SX305 埋葬施設	SK1	(口)14.9 (高)3.4	外;オサエ・ナデのちヨコナデ内;ナデのちヨコナデ	粗0.5~3mmの小石(多)	良好	淡黄橙	9/10	重さ140g (推定)
37	82-4	土師器 皿	b8	SX305 周溝	SD1	(口)14.0 (高)2.5	外;オサエ・ナデのちヨコナデ内;ナデのちヨコナデ	密	良好	淡黄橙	1/6	
38	7-1	土師器 皿	b8	SX305 周溝	SD1	(口)-	外;ヨコナデ内;ヨコナデ	密	良好	明褐色	口縁部片	外面に煤付着
39	23-2	磁器 椀	b8	SX305 埋葬施設	SK1	(口)12.4 (高)5.6	外;ケスリ出し高台、陸刻蓮葉文内;蓮葉文	密	堅緻	釉;淡緑	完存	青磁 泉原系
40	7-5	磁器 椀	b8	SX305 周溝	SD1	(高台)5.4	外;ケスリ出し高台内;陸刻花文	密	堅緻	釉;淡緑	高台完存	青磁 椀部は意図的な打ち欠きか
41	3-2	陶器 椀	b8	SX305 周溝	SD1	(口)15.8 (高)4.4	外;オコナデのち系切り、貼り付け高台内;オコナ	粗	堅緻	淡灰	口縁1/4	山茶椀 猿投・知多 高台に粗殺痕
42	3-1	陶器 椀	b8	SX305 周溝	SD1	(口)15.5 (高)5.3	外;オコナデのち系切り、貼り付け高台内;オコナ	粗0.5~4mmの小石	堅緻	淡灰	口縁1/4	山茶椀 知多 高台に粗殺痕
43	23-1	陶器 椀	b8	SX305 周溝	SD1	(口)16.1 (高)5.7	外;オコナデのち系切り、貼り付け高台内;オコナ	密0.5~2mmの小石	堅緻	淡灰	口縁一部欠損のみ	山茶椀 知多 高台に粗殺痕
44	13-6	石製 紡錘車	b10	SK308	SK1 No. 9	(底)4.0 (高)1.6	頂部無文、側面2条の線刻			淡緑灰	完存	滑石製 古墳に伴うものかも知れない 重さ28g
45	13-5	土製 鐘	b10	SK308	SK1 No. 5	(長)5.8 (幅)1.8	外;オサエ・ナデ内;円柱状の抜き痕	密	良好	淡褐	完存	重さ約15g

tab.10 ケカノ辻・角垣内地区出土遺物観察表 (1)

番号	実測番号	器種等	出土グロット	遺構・層名など	取上時の名称	法量 (cm)	調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考
46	5-3	土師器 小皿	b10	SK308	SK1 No.4	(口)7.9 (高)0.8	外; オサエのちナデ 内; ナデ	密0.5~1mmの 小石	良好	淡黄	完存	重さ20g
47	6-4	土師器 小皿	b10	SK308	SK1	(口)7.0 (高)1.1	外; オサエのちナデ 内; ナデ	密	良好	淡黄橙	約1/2	
48	5-2	土師器 皿	b10	SK308	SK1 No.2	(口)12.3 (高)2.6	外; オサエのちナデ 内; ナデ	密0.5~1mmの 小石	良好	淡黄橙	4/5	
49	51-6	土師器 皿	b10	SK308	SK1 No.3	(口)11.8 (高)2.6	外; オサエのちナデ 内; ナデ	密0.5~1mmの 小石	良好	淡黄橙	ほぼ完存	重さ51g (推定)
50	5-4	土師器 皿	b10	SK308	SK1 No.1	(口)11.9 (高)2.7	外; オサエのちナデ 内; ナデ	密0.5~1mmの 小石	良好	淡黄橙	9/10	重さ65g (推定)
51	51-5	土師器 皿	b10	SK308	SK1 No.6	(口)12.2 (高)2.8	外; オサエのちナデ 内; ナデ	密0.5~1mmの 小石	良好	淡黄橙	1/2	
52	5-1	土師器 皿	b10	SK308	SK1 No.7	(口)11.3 (高)2.5	外; オサエのちナデ 内; ナデ	密0.5~3mmの 小石	良好	淡黄橙	ほぼ完存	重さ61g (推定)
53	80-2	土師器 皿	b10	SK308	SK1 No.8	(口)11.2 (高)2.6	外; オサエのちナデ 内; ナデ; 工具のあたり	密0.5~1mmの 小石	良好	淡黄橙	ほぼ完存	重さ62g (推定)
54	253- 8	土師器 鍋	b10	SK308	SK1	(口)-	外; 片・片のちヨコナデ・スリ 外; 板のちヨコナデ・スリ	粗0.5~3mmの 小石	良好	淡茶灰	1/5	3片を図上復元
55	6-5	土師器 鍋	b10	SK308	SK1	(口)23.4	外; オサエのちヨコナデ 内; ナデのちヨコナデ	密0.5~2mmの 小石	良好	暗黄橙	1/8	外面に煤付着
56	52-1	陶器 ねり鉢	b10	SK308	SK1	(口)28.6	外; 回転のち回転スリ 内; 回転ナデ	密0.5~2mmの 小石	堅緻	灰	1/10	
57	8-5	土師器 小皿	b17	SK317	SK1	(口)8.6 (高)1.4	外; オサエ・ナデ 内; ナデ	密0.5~1mmの 小石	良好	暗橙	完存	重さ34g
58	8-2	土師器 小皿	b17	SK317	SK1	(口)7.6 (高)1.2	外; オサエ・ナデ 内; ナデ	密0.5~1mmの 小石	良好	暗橙	完存	重さ23g
59	4-2	土師器 小皿	b17	SK317	SK1	(口)8.0 (高)1.3	外; オサエ・ナデ 内; ナデ	密0.5~1mmの 小石、赤色粒	良好	暗橙	完存	重さ36g
60	1-6	土師器 小皿	b17	SK317	SK1	(口)8.2 (高)1.2	外; オサエ・ナデ 内; ナデ	密0.5~1mmの 小石	良好	淡橙	完存	重さ24g
61	4-5	土師器 小皿	b17	SK317	SK1	(口)7.8 (高)1.4	外; オサエ・ナデ 内; ナデ	密0.5~1mmの 小石	良好	淡橙	完存	重さ29g
62	4-1	陶器 小皿	b17	SK317	SK1	(口)8.7 (高)1.9	外; 020ナデのち糸切り 内; ロクロナデ	密0.5~1mmの 小石	堅緻	淡黄灰	1/3	山皿
63	253- 6	陶器 椀	b17	SK317	SK1	(口)16.1 (高)5.1	外; 020ナデのち糸切り、高 台にヨコナデ 内; 020ナデ	密0.5~3mmの 小石	堅緻	淡灰	1/3	山茶椀(知多) 高台に粗粒痕
64	8-4	陶器 小皿	b18	SK317	SK1	(口)8.4 (高)1.7	外; 020ナデのち糸切り 内; ロクロナデ	密0.5~1mmの 小石	堅緻	淡灰	完存	山皿
65	8-3	陶器 小皿	b18	SK317	SK1	(口)10.2 (高)2.3	外; 020ナデのち糸切り 内; ロクロナデ	密0.5~1mmの 小石	堅緻	淡灰黄	2/5	山皿
66	8-1	土師器 皿	b17	SK317	SK1	(口)14.2 (高)3.0	外; 片・片のちヨコナデ 内; ナデ	密0.5~2mmの 小石	良好	淡橙	ほぼ完存	
67	8-6	土師器 皿	b18	SK317	SK1	(口)13.4 (高)3.0	外; 片・片のちヨコナデ 内; ナデ	密0.5~2mmの 小石	良好	淡橙	4/5	
68	8-7	土師器 皿	b18	SK317	SK1	(口)13.7 (高)2.7	外; 片・片のちヨコナデ 内; ナデ	密0.5~2mmの 小石	良好	淡黄橙	完存	重さ112g
69	1-4	土師器 皿	b17	SK317	SK1	(口)13.1 (高)2.6	外; 片・片のちヨコナデ 内; ナデ	密0.5~2mmの 小石	良好	暗橙	完存	重さ82g
70	1-5	土師器 皿	b17	SK317	SK1	(口)11.2 (高)2.5	外; 片・片のちヨコナデ 内; ナデ	密0.5~1mmの 小石	良好	淡黄橙	口縁完存	
71	15-4	砥石	b18	SK317	SK1	(幅)2.6	両端欠損、全面に使用痕					粘板岩製
72	8-8	土師器 鍋	b18	SK317	SK1	(口)-	外; オサエのちヨコナデ 内; ナデのちヨコナデ	粗0.5~3mmの 小石	良好	暗橙	口縁部片	外面に煤付着
73	4-3	土師器 鍋	b17	SK317	SK1	(口)20.8	外; 片・片のちヨコナデ 内; 片・片、ヨコナデ	粗0.5~2mmの 小石	良好	暗橙	口縁1/5	外面に煤付着
74	51-3	土師器 小皿	c17	SK318	SK1 No.6	(口)7.8 (高)1.4	外; オサエ・ナデ 内; ナデ	密0.5~1mmの 小石	良好	淡黄橙	完存	重さ23g
75	51-3	土師器 小皿	c17	SK318	SK1 No.4	(口)7.6 (高)1.2	外; オサエ・ナデ 内; ナデ	密0.5~1mmの 小石	良好	淡黄橙	完存	内面に布目痕あり 重さ19g
76	1-2	土師器 小皿	c17	SK318	SK1 No.1	(口)7.8 (高)1.2	外; オサエ・ナデ 内; ナデ(板?貝?)	密0.5~1mmの 小石	良好	淡橙	ほぼ完存	
77	51-1	土師器 皿	c17	SK318	SK1 No.5	(口)11.8 (高)2.8	外; 片・片のちヨコナデ 内; ナデ(工具で縦方向)	密0.5~1mmの 小石	良好	淡黄橙	口縁1/5	
78	1-1	土師器 皿	c17	SK318	SK1 No.3	(口)11.9 (高)2.4	外; 片・片のちヨコナデ 内; ナデ	密0.5~1mmの 小石	良好	淡黄橙	完存	重さ57g
79	15-3	土師器 鍋	c17	SK318	SK1	(口)-	外; ナデのちヨコナデ 内; ナデのちヨコナデ	密0.5~1mmの 小石	良好	暗黄橙	口縁部片	外面に煤付着
80	253- 10	土師器 鍋	c18	SK320	SK1 南西	(口)-	外; ヨコナデ 内; ヨコナデ	密0.5~2mmの 小石	良好	暗黄橙	口縁部片	外面に煤付着
81	1-3	土師器 皿	c18	SK320	SK1	(口)11.2 (高)2.5	外; 片・片のちヨコナデ 内; ナデ	密0.5~1mmの 小石	良好	淡黄橙	ほぼ完存	
82	53-1	石製 鍋	c18	SK320	SK1 南西	(口)21.0	外; 横方向のケズリ 内; 縦方向のケズリ			褐灰	口縁1/5	滑石製 外面鍔下に煤付着 外面に銀刻の絵画?あり
83	55-5	土師器 小皿	c18	SK321	SK2 No.9	(口)7.9 (高)1.3	外; オサエ・ナデ 内; ナデ	密0.5~2mmの 小石	良好	暗黄橙	1/10	
84	18-5	土師器 小皿	c18	SK321	SK2 南西	(口)8.0 (高)1.4	外; オサエ・ナデ 内; ナデ	密0.5~1mmの 小石	良好	淡黄	完存	重さ19g
85	18-6	磁器 椀	c18	SK321	SK2 南西	(口)16.1	外; 陸奥通弁文のち釉 内; 釉	密	堅緻	釉; 片 -灰	口縁1/6	青磁 龍泉窯系
86	55-3	土師器 皿	c18	SK321	SK2 No.7	(口)11.7 (高)2.4	外; 片・片のちヨコナデ 内; ナデ	密0.5~1mmの 小石	良好	淡黄橙	口縁1/2	
87	18-1	土師器 皿	c18	SK321	SK2 No.2	(口)11.8 (高)2.5	外; 片・片のちヨコナデ 内; ナデ	密0.5~2mmの 小石	良好	灰白	口縁7/8	
88	55-6	土師器 皿	c18	SK321	SK2 No.11	(口)11.4 (高)2.4	外; 片・片のちヨコナデ 内; ナデ(工具)	密0.5~2mmの 小石	良好	淡黄	口縁1/3	
89	55-4	土師器 皿	c18	SK321	SK2 No.8	(口)11.8 (高)2.5	外; オサエ・ナデ 内; ナデ	密0.5~1mmの 小石	良好	淡黄	口縁1/2	
90	18-4	土師器 皿	c18	SK321	SK2 No.4	(口)11.3 (高)2.7	外; オサエ・ナデ 内; ナデ	密0.5~1mmの 小石	良好	淡黄	完存	重さ56g

tab.11 ケカノ辻・角垣内地区出土遺物観察表(2)

番号	実測番号	器種等	出土 グロット	遺構・層 名など	取上時の 名称	法量 (c.m)	調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考
91	18-2	土師器 皿	c18	SK321	SK2 No.5	(口)11.6 (高)2.4	外;オサエ・ナデ 内;ナデ(工具)	粗0.5~3mmの 小石	良好	淡黄橙	口縁3/4	
92	19-1	土師器 鍋	c18	SK321	SK2 北東	(口)27.1	外;ナデのちヨコナデ 内;ナデのちヨコナデ	粗0.5~2mmの 小石(多)	やや軟	灰黄褐	口縁1/6	外面に煤付着
93	19-2	土師器 鍋	c18	SK321	SK2 北東	(口)27.3	外;ナデのちヨコナデ 内;ナデのちヨコナデ	粗0.5~2mmの 小石(多)	やや軟	褐灰	口縁1/6	外面に煤付着
94	253- 11	土師器 鍋	c19	SK330	SK2 北	(口)-	外;ヨコナデ 内;ヨコナデ	粗0.5~2mmの 小石	良好	淡褐	口縁部片	外面に煤付着
95	252- 3	磁器 合子	c19	SK329	SK1 西	(口)8.0	外;陸刻文、口縁部無軸 内;軸、口縁部無軸	密	堅緻	軸;白 ~淡青	口縁1/10	青白磁 景德鎮窯系? 口壳
96	21-1	土師器 皿	b20	SK335	SK1	(口)11.8 (高)2.5	外;オサエ・ナデ 内;ナデ	密0.5~4mmの 小石	やや軟	淡黄橙	口縁1/4	
97	21-2	土師器 小皿	b20	SK335	SK1	(口)8.0 (高)1.0	外;オサエ・ナデ 内;ナデ(工具)	密0.5~2mmの 小石	やや軟	淡黄橙	口縁1/2	
98	21-3	土師器 鍋	b20	SK335	SK1	(口)-	外;ヨコナデ 内;ヨコナデ	粗0.5~2mmの 小石	良好	暗黄橙	口縁部片	外面に煤付着
99	254- 1	土師器 鍋	b20	SK335	SK1	(口)-	外;オサエのちヨコナデ 内;ナデのちヨコナデ	粗0.5~2mmの 小石	良好	淡褐	口縁部片	外面に煤付着
100	21-4	磁器 椀	b20	SK335	SK1	(口)-	外;軸 内;陸刻文、軸	密	堅緻	軸;灰 ~淡青	口縁部片	青磁 龍泉窯系
101	21-5	磁器 椀	b20	SK335	SK1	(高台) 4.2	外;蓮弁文、軸 内;陸刻文、軸	密	堅緻	軸;灰 ~淡青	高台1/4	青磁 龍泉窯系
102	20-4	陶器 椀	b20	SK335	SK1	(高台) 6.1	外;蓮弁文のち糸切り、貼 り付け高台 内;回転ナ	粗0.5~2mmの 小石	堅緻	灰白	高台1/4	山茶椀 高台に粉殻痕 底部に墨書「あたや」?
103	257- 1	陶器 椀	b20	SK335	SK1	-	外;ナデのち押印文 内;ナデ	粗0.5~4mmの 小石	堅緻	淡赤灰	体部片	常滑 押印文から高坂窯産と見 られる
104	20-3	瓦器 小椀	b21	SE337	SK1 南西	(口)9.1 (高)3.6	外;ナデのちヨコナデ 内;ナデ	粗0.5~2mmの 小石	良好	暗灰	高台1/4	大和?
105	54-5	土師器 小皿	b21	SE337	SE1 3層	(口)7.3 (高)1.1	外;オサエ・ナデ 内;ナデ	密0.5~2mmの 小石	良好	淡黄 黒褐	口縁1/2	
106	20-1	土師器 小皿	b21	SE337	SE1 南西	(口)8.0 (高)1.0	外;オサエ・ナデ 内;ナデ	密0.5~1mmの 小石	やや軟	淡黄橙	口縁1/2	
107	13-2	土師器 小皿	b21	SE337	SE1 4層	(口)7.8 (高)1.0	外;オサエ・ナデ 内;ナデ	密0.5~1mmの 小石	良好	淡黄橙	完存	重さ26g
108	38-2	土師器 皿	b21	SE337	SE1 壺形	(口)12.3 (高)2.3	外;ナデのちヨコナデ 内;ナデ	密0.5~1mmの 小石	良好	淡黄	口縁1/4	
109	54-8	磁器 皿	b21	SE337	SE1 南西	(口)12.4	外;施軸 内;施軸	密	堅緻	灰白~ 淡青	口縁1/10	白磁 口壳
110	38-4	磁器 杯	b21	SE337	SE1 4層	(口)11.3 (高)3.9	外;施軸 内;施軸	密	堅緻	軸; 淡緑灰	1/4	青磁 高台接地面のみ施軸なし 器壁一部赤染
111	38-3	磁器 椀	b21	SE337	SE1	(口)-	外;陸刻蓮弁文のち施軸 内;施軸	密	堅緻	軸; 淡緑黄	口縁部片	青磁 龍泉窯系
112	55-9	磁器 椀	b21	SE337	SE1 北東	(口)-	外;施軸 内;陽刻花・雷文のち施軸	密	堅緻	白	口縁部片	白磁 景德鎮窯系 口壳
113	193- 3	磁器 皿	b21	SE337	SK1 北東	(底)5.4	外;施軸 内;施軸	密	堅緻	白灰	底部2/3	白磁 底部にも薄く施軸
114	20-2	土師器 鍋	b21	SE337	SE1 南西	(口)-	外;ヨコナデ 内;ヨコナデ	粗0.5~1mmの 小石	良好	淡黄橙	口縁部片	外面に煤付着
115	253- 9	土師器 鍋	b21	SE337	SE1 北西	(口)-	外;ヨコナデ 内;ヨコナデ	粗0.5~1mmの 小石	良好	淡茶灰	口縁部片	
116	251- 1	鉄製品 鍋	b21	SE337	SK1 南東	(口)29.4	(幅)3.1				口縁1/8	
117	251- 5	鋼製品 用途不明	b21	SE337	SK1 南東	(口)-						
118	38-5	陶器 壺	b21	SE337	SE2 4層	(口)-	外;ナデのちヨコナデ 内;ナデのちヨコナデ	粗0.5~3mmの 小石	堅緻	淡灰	口縁1/10	常滑 外面に灰軸のような自 然軸
119	39-1	陶器 壺	b21	SE337	SE2	(口)32.0	外;ナデのちヨコナデ 内;ナデのちヨコナデ	粗0.5~1mmの 小石	堅緻	淡赤褐	口縁1/4	常滑
120	38-6	陶器 壺	b20	SK334	SK2	(口)-	外;ナデのちヨコナデ 内;ナデのちヨコナデ	粗0.5~1mmの 小石	堅緻	灰赤褐	口縁部片	常滑産
121	14-9	土師器 小皿	b22	SD341	SD1 No.72	(口)7.2 (高)1.1	外;オサエ・ナデ 内;ナデ(工具)	密0.5~1mmの 小石	良好	淡黄橙	ほぼ完存	重さ17g(推定)
122	14-4	土師器 小皿	b22	SD341	SD1 No.60	(口)7.8 (高)1.1	外;オサエ・ナデ 内;ナデ(工具)	密0.5~1mmの 小石	良好	淡黄橙	ほぼ完存	内面の工具痕は弧状を呈す 重さ19g(推定)
123	14-3	土師器 小皿	c22	SD341	SD1 No.16	(口)8.2 (高)1.2	外;オサエ・ナデ 内;ナデ	密0.5~1mmの 小石	良好	淡黄橙	完存	
124	16-1	土師器 小皿	b22	SD341	SD1 No.11	(口)7.9 (高)1.0	外;オサエ・ナデ 内;ナデ	密0.5~1mmの 小石	やや軟	淡黄橙	完存	重さ18g
125	12-5	土師器 小皿	b22	SD341	SD1 No.49	(口)8.0 (高)1.2	外;オサエ・ナデ 内;ナデ	密0.5~1mmの 小石	良好	淡橙灰	完存	素地接合痕あり 重さ25g
126	14-8	土師器 小皿	c22	SD341	SD1 No.5	(口)7.4 (高)1.0	外;オサエ・ナデ 内;ナデ(工具)	密0.5~1mmの 小石	良好	淡黄橙	ほぼ完存	重さ23g(推定)
127	28-1	土師器 小皿	b22	SD341	SD1 No.39	(口)8.4 (高)1.0	外;オサエ・ナデ 内;ナデ	密0.5~1mmの 小石	良好	淡黄橙	ほぼ完存	重さ25g(推定)
128	79-1	土師器 小皿	b22	SD341	SD1 No.35	(口)7.8 (高)1.0	外;オサエ・ナデ 内;ナデ	密0.5~2mmの 小石	良好	淡黄橙	完存	重さ24g
129	28-2	土師器 小皿	c22	SD341	SD1	(口)8.0 (高)1.2	外;オサエ・ナデ 内;ナデ	密0.5~1mmの 小石	良好	淡黄橙	ほぼ完存	重さ24g(推定)
130	77-2	土師器 小皿	b22	SD341	SD1 No.25	(口)7.4 (高)1.1	外;オサエ・ナデ 内;ナデ	密0.5~1mmの 小石	良好	淡黄橙	完存	重さ21g
131	16-7	土師器 小皿	b22	SD341	SD1 No.85-2	(口)7.9 (高)1.2	外;オサエ・ナデ 内;ナデ	密0.5~2mmの 小石	やや軟	淡黄褐	完存	重さ25g
132	16-4	土師器 皿	b22	SD341	SD1 No.83	(口)11.7 (高)2.8	外;オサエ・ナデ 内;板ナデ	密0.5~2mmの 小石	やや軟	淡黄褐	完存	重さ61g
133	16-3	土師器 皿	b22	SD341	SD1 No.79	(口)12.0 (高)3.3	外;オサエ・ナデ 内;ナデ	密0.5~2mmの 小石	やや軟	乳褐	完存	重さ67g
134	14-7	土師器 皿	c22	SD341	SD1	(口)12.3 (高)2.3	外;オサエ・ナデ 内;ナデ	密0.5~2mmの 小石	良好	淡橙	3/5	
135	16- 10	土師器 皿	c22	SD341	SD1 No.17	(口)12.3 (高)2.8	外;オサエ・ナデ 内;ナデ	密0.5~2mmの 小石	やや軟	淡黄褐	完存	重さ70g

tab.12 ケカノ辻・角垣内地区出土遺物観察表(3)

番号	実測 番号	器種等	出土 グロット	遺構・層 名など	取上時の 名称	法量 (cm)	調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考
136	14-6	土師器 皿	c22	SD341	SD1 No.10	(口)11.7 (高)2.4	外;オサエ・ナデ 内;ナデ	密0.5~1mmの 小石	良好	淡橙	ほぼ完存	
137	77-1	土師器 皿	b22	SD341	SD1 No.1	(口)12.2 (高)2.4	外;オサエ・ナデ 内;ナデ	密0.5~1mmの 小石	良好	淡黄橙	完存	重さ72g
138	28-3	土師器 皿	c22	SD341	SD1	(口)12.0 (高)2.6	外;オサエ・ナデ 内;ナデ	密0.5~1mmの 小石	良好	淡黄橙	1/2	
139	12-3	土師器 皿	c22	SD341	SD1 No.2	(口)12.2 (高)2.6	外;オサエ・ナデ 内;ナデ(工具)	密0.5~1mmの 小石	良好	淡橙灰	ほぼ完存	内面の工具痕は弧状を呈す 重さ72g
140	14-5	土師器 皿	b22	SD341	SD1 No.65	(口)12.2 (高)2.1	外;オサエ・ナデ 内;ナデ	密0.5~1mmの 小石	良好	淡黄橙	完存	重さ75g
141	16-6	土師器 皿	b22	SD341	SD1 No.85-1	(口)11.9 (高)2.4	外;オサエ・ナデ 内;ナデ	密0.5~1mmの 小石	やや軟	淡黄橙	完存	重さ63g
142	16-8	土師器 皿	b22	SD341	SD1 No.85-2	(口)11.1 (高)2.4	外;オサエ・ナデ 内;ナデ	密0.5~1mmの 小石	やや軟	淡黄	完存	外面底に板状圧痕 重さ56g
143	16-2	土師器 皿	b22	SD341	SD1 No.27	(口)12.1 (高)2.7	外;オサエ・ナデ 内;ナデ	密0.5~1mmの 小石	やや軟	淡黄橙	完存	重さ85g
144	12-6	土師器 皿	c22	SD341	SD1 No.6	(口)11.7 (高)2.2	外;オサエ・ナデ 内;ナデ	密0.5~1mmの 小石	良好	明橙灰	完存	口縁部に油煙痕 重さ66g
145	12-1	土師器 皿	b22	SD341	SD1 No.71	(口)11.5 (高)2.4	外;オサエ・ナデ 内;ナデ	密0.5~1mmの 小石	良好	淡褐灰	口縁3/4	
146	16-5	土師器 皿	b22	SD341	SD1 No.85-1	(口)11.9 (高)2.8	外;オサエ・ナデ 内;ナデ	密0.5~1mmの 小石	やや軟	淡黄橙	完存	重さ63g
147	12-2	土師器 皿	b22	SD341	SD1 No.54	(口)12.2 (高)2.5	外;オサエ・ナデ 内;ナデ	密0.5~1mmの 小石	良好	淡橙灰	完存	重さ69g
148	12-4	土師器 皿	b22	SD341	SD1 No.49	(口)11.2 (高)2.2	外;オサエ・ナデ 内;ナデ	密0.5~1mmの 小石	良好	淡褐灰	ほぼ完存	重さ66g(推定)
149	12-7	土師器 皿	b22	SD341	SD1 No.47	(口)12.2 (高)2.0	外;オサエ・ナデ 内;ナデ	密0.5~1mmの 小石	良好	淡橙灰	口縁1/6	
150	28-4	陶器 椀	c22	SD341	SD1	(口)14.8	外;口コナデ 内;口コナデ	密0.5~2mmの 小石	堅緻	灰白	口縁1/4	山茶椀 口縁部に自然釉
151	55-2	磁器 椀	b22	SD341	SD1 No.81	(口)16.9	外;陸刻蓮弁文のち施釉 内;施釉	密	堅緻	釉 淡緑灰	口縁1/10	青磁 龍泉窯系
152	28-5	土師器 鍋	c22	SD341	SD1	(口)14.8	外;ハケメのちヨコナデ 内;ナデのちヨコナデ	粗0.5~2mmの 小石	良好	淡茶灰	口縁1/5	外面に煤付着
153	26-3	土師器 皿	d25	SD345	SD2	(口)11.4 (高)2.8	外;オサエ・ナデ 内;ナデ(工具)	密0.5~1mmの 小石	やや軟	淡黄褐	ほぼ完存	重さ66g(推定)
154	25-8	土師器 皿	c25	SD345	SD1	(口)12.4 (高)2.5	外;オサエ・ナデ 内;ナデ	密0.5~2mmの 小石	軟	乳褐	完存	重さ66g
155	25-3	土師器 皿	d25	SD345	SD2	(口)12.0 (高)2.3	外;オサエ・ナデ 内;ナデ	密0.5~2mmの 小石	良好	乳褐	口縁完存	
156	26-2	陶器 椀	d25	SD345	SD2	(高台) 7.2	外;口コナデのち糸切り、高 台上にヨコナデ 内;口コナデ	密0.5~2mmの 小石	堅緻	淡灰	高台完存	山茶椀(知多?) 高台に粗殺痕
157	26-4	陶器 椀	d25	SD345	SD2	(高台) 7.0	外;口コナデのち糸切り、高 台上にヨコナデ 内;口コナデ	粗0.5~3mmの 小石	堅緻	淡灰	高台完存	山茶椀 高台に粗殺痕 高台に墨書「大」 常滑産
158	25-1	陶器 椀	b25	SD345	SD1	(口)ー	外;ヨコナデ 内;ヨコナデ	粗0.5~4mmの 小石	堅緻	暗赤灰	口縁部片	
159	25-3	磁器 椀	c25	SD345	SD1	(口)17.2	外;陸刻蓮弁文のち施釉 内;施釉	密	堅緻	釉 淡緑青	口縁1/5	青磁 龍泉窯系
160	54-6	磁器 椀	c25	SD345	SD1 (上)	(口)ー	外;陸刻蓮弁文のち施釉 内;施釉	密	堅緻	釉 淡緑黄	口縁部片	青磁 龍泉窯系
161	54-9	磁器 椀	e25	SD345	SD1	(高台) 5.0	外;陸刻蓮弁文のち施釉 内;ケズリ出し高台、施釉	密	堅緻	釉 緑灰	高台1/4	青磁 龍泉窯系
162	55-1	磁器 椀	d25	SD345	SD2	(高台) 5.6	外;施釉 内;ケズリ出し高台、施釉	密	堅緻	釉 緑灰	高台2/5	青磁 龍泉窯系
163	25-7	土師器 羽釜	c25	SD345	SD1	(口)19.3	外;ハケメのちヨコナデ 内;ナデのちヨコナデ	粗0.5~2mmの 小石	良好	淡褐	口縁1/8	外面に煤付着
164	25-5	土師器 鍋	c25	SD345	SD1	(口)ー	外;ヨコナデ 内;ヨコナデ	密0.5~1mmの 小石	良好	淡茶灰	口縁部片	
165	25-5	土師器 鍋	c25	SD345	SD1	(口)29.2	外;ナデのちヨコナデ 内;ハケメのちヨコナデ	粗0.5~2mmの 小石	良好	淡褐	口縁1/8	
166	25-6	土師器 鍋	c25	SD345	SD1	(口)30.4	外;ナデのちヨコナデ 内;ナデのちヨコナデ	粗0.5~2mmの 小石	良好	淡褐	口縁1/8	外面に煤付着
167	25-4	土師器 鍋	c25	SD345	SD1	(口)33.5	外;ナデのちヨコナデ 内;ハケメのちヨコナデ	粗0.5~2mmの 小石	良好	淡褐	口縁1/8	外面に煤付着
168	26-1	土師器 脚台付小皿	d25	SD345	SD2	(脚柱) 3.2	外;オサエ・ナデ 内;円楯状具の抜き痕	密0.5~1mmの 小石	良好	淡黄褐	脚柱完存	脚柱上端に接合面残存
169	25-2	土製 鍾	c25	SD345	SD1	(長)4.8 (幅)1.5	外;オサエ・ナデ 内;円楯状具の抜き痕	密0.5~1mmの 小石	良好	黄褐	ほぼ完存	
170	17-8	土師器 皿	d39	SK354	SK1 No.3	(口)12.3 (高)2.7	外;オサエ・ナデ 内;ナデ	密0.5~2mmの 小石	やや軟	乳褐	口縁1/4	素地接合痕あり
171	54-7	磁器 皿	c19	SK329	SK1 東	(口)11.1	外;施釉 内;施釉	密	堅緻	淡灰白	口縁1/10	白磁 口壳
172	24-2	土師器 小皿	b40	SK355	SK1 No.4	(口)7.4 (高)1.3	外;オサエ・ナデ 内;ナデ	粗0.5~2mmの 小石	やや軟	淡橙灰	完存	外面に植物圧痕あり 重さ23g
173	51-9	土師器 小皿	b40	SK355	SK1 No.2	(口)8.4 (高)1.2	外;オサエ・ナデ 内;ナデ(工具)	粗0.5~1mmの 小石	良好	暗橙	1/2	
174	24-3	土師器 小皿	c40	SK356	SK1 sec.内	(口)8.4 (高)1.0	外;オサエ・ナデ 内;ナデ	粗0.5~2mmの 小石、赤色粒	良好	淡橙灰	口縁1/2	
175	51-10	土師器 小皿	c40	SK356	SK1 No.1	(口)8.6 (高)0.9	外;オサエ・ナデ 内;ナデ	粗0.5~2mmの 小石、赤色粒	良好	淡黄橙	2/5	
176	24-1	土師器 皿	c40	SK356	SK1 No.3	(口)13.4 (高)2.4	外;ハケメのちヨコナデ 内;ナデ	粗0.5~2mmの 小石、赤色粒	やや軟	明橙灰	口縁1/4	
177	17-3	土師器 小皿	d35	SK352	SK1 No.3	(口)8.1 (高)1.2	外;オサエ・ナデ 内;ナデ	粗0.5~3mmの 小石	やや軟	明橙灰	完存	外面に素地接合痕 重さ24g
178	17-5	土師器 小皿	d35	SK352	SK1 No.4	(口)7.4 (高)1.2	外;オサエ・ナデ 内;ナデ	粗0.5~1mmの 小石	やや軟	明橙灰	完存	重さ17g
179	54-3	土師器 小皿	d35	SK352	SK1	(口)7.2 (高)1.2	外;オサエ・ナデ 内;ナデ	粗0.5~3mmの 小石	やや軟	淡黄橙	9/10	
180	17-7	土師器 小皿	d35	SK352	SK1 No.7	(口)7.2 (高)1.1	外;オサエ・ナデ 内;ナデ	粗0.5~2mmの 小石	やや軟	淡橙灰	完存	重さ19g

tab.13 ケカノ辻・角垣内地区出土遺物観察表(4)

番号	実測 番号	器種等	出土 グロット	遺構・層 名など	取上時の 名称	法量 (cm)	調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考
181	17-6	土師器 小皿	d35	SK352	SK1 No.5	(口)7.1 (高)1.2	外;オサエ・ナデ 内;ナデ	粗0.5~2mmの 小石	やや軟	淡橙灰	完存	外面に素地接合痕 重さ20g
182	17-2	土師器 皿	d35	SK352	SK1 No.2	(口)12.5 (高)2.3	外;オサエ・ナデのちヨコナデ 内;ナデ	密0.5~2mmの 小石	やや軟	明橙灰	口縁7/8	秩分が付着 外面に素地接合痕
183	17-1	土師器 皿	d39	SK353	SK2 No.1	(口)13.9 (高)2.8	外;オサエ・ナデのちヨコナデ 内;ナデ	粗0.5~3mmの 小石	良好	淡橙灰	口縁7/8	
184	54-4	土師器 鉢	d35	SK352	SK1	(口)20.1	外;ヨコナデ 内;ナデのちヨコナデ	密0.5~2mmの 小石	やや軟	淡黄灰	口縁1/2	
195	251- 2	鉄 小刀	d35	SK352	SK1 No.6	(長)31.6					完存	木質の痕が残る
186	25- 11	土師器 皿	e26	SK347	SD1	(口)12.1 (高)2.9	外;オサエ・ナデ 内;ナデ	粗0.5~2mmの 小石	やや軟	淡黄褐	ほぼ完存	口縁部に油煙痕付着 重さ53g
187	25-9	陶器 椀	c26	SK347	SD1	(口)7.0 (高)1.2	外;オサエ・ナデのち系切り、高 台にヨコナデ 内;オサエ・ ナデ	粗0.5~3mmの 小石	堅緻	淡灰	高台3/4	山茶碗(知多)
188	56-6	土師器 小皿	c43	SD358	SD2	(口)8.0 (高)1.2	外;オサエ・ナデ 内;ナデ	密0.5~2mmの 小石	やや軟	淡黄橙	ほぼ完存	
189	56-7	土師器 小皿	c43	SD358	SD2	(口)7.5 (高)1.1	外;オサエ・ナデ 内;ナデ	密0.5~1mmの 小石、赤色粒	やや軟	淡黄橙	3/4	
190	33-3	土師器 小皿	c43	SD358	SD2	(口)7.8 (高)1.1	外;オサエ・ナデ 内;ナデ	密0.5~1mmの 小石	やや軟	淡黄橙	2/3	
191	54-2	土師器 小皿	c43	SD358	SD2	(口)7.8 (高)1.4	外;オサエ・ナデ 内;ナデ	密0.5~2mmの 小石	良好	淡黄橙	ほぼ完存	
192	54-1	土師器 皿	c43	SD358	SD2	(口)12.3 (高)2.7	外;オサエ・ナデのちヨコナデ 内;ナデ	粗0.5~2mmの 小石	やや軟	淡黄橙	4/5	
193	33-5	土師器 皿	c43	SD358	SD2	(口)13.1 (高)3.0	外;オサエ・ナデのちヨコナデ 内;ナデ	粗0.5~4mmの 小石	やや軟	淡黄橙	1/3	
194	56-8	土師器 皿	c43	SD358	SD2	(口)13.4 (高)2.6	外;オサエ・ナデ 内;ナデ	密0.5~2mmの 小石、赤色粒	やや軟	淡黄橙	ほぼ完存	
195	33-4	土師器 皿	c43	SD358	SD2	(口)12.8 (高)2.9	外;オサエ・ナデのちヨコナデ 内;ナデ	粗0.5~3mmの 小石	やや軟	淡黄橙	2/3	
196	33-6	磁器 椀	c43	SD358	SD2	(口)19.5	外;施釉 内;施釉	密	堅緻	淡白灰	口縁部片	白磁
197	33-2	陶器 椀	c43	SD358	SD2	(口)14.9 (高)5.1	外;オサエ・ナデのち系切り、高 台にヨコナデ 内;オサエ・ ナデ	粗0.5~8mmの 小石	堅緻	灰	1/4	山茶碗(知多) 自然釉付着 高台に粗粒痕
198	45-4	土師器 鉢	c47	SD358	SD1	(口)26.2	外;オサエ・ナデのちヨコナデ 内;ハケメのちヨコナデ	粗0.5~2mmの 小石	良好	淡黄橙	口縁1/4	
199	33-1	土師器 鉢	c43	SD358	SD2	(口)23.0	外;オサエ・ナデのちヨコナデ 内;ハケメのちヨコナデ	粗0.5~2mmの 小石	良好	淡黄橙 ~灰褐	口縁1/2	外面に煤付着
200	57-1	磁器 合子	c44	SK364	SK1	(口)6.9 (高)1.7	外;オサエ・ナデのち系切り、高 台にヨコナデ 内;オサエ・ ナデ	密	堅緻	釉 灰白	口縁1/5	青白磁?
201	35-4	土師器 皿	c44	SK364	SK1	(口)14.0 (高)2.5	外;オサエ・ナデのちヨコナデ 内;ナデ	粗0.5~2mmの 小石	やや軟	暗褐	1/3	内面に炭化物付着
202	36-3	陶器 椀	c44	SK364	SK1	(口)7.0 (高)1.2	外;オサエ・ナデのち系切り、高 台にヨコナデ 内;オサエ・ ナデ	粗0.5~3mmの 小石	堅緻	青灰	底部2/3	山茶碗(知多) 高台に粗粒痕 底に墨書「木」?
203	35-2	土師器 鉢	c44	SK364	SK1	(口)7.0 (高)1.2	外;オサエ・ナデのちヨコナデ 内;ナデのちヨコナデ	粗0.5~2mmの 小石	良好	黄橙	口縁部片	外面に煤付着
204	35-3	土師器 鉢	c44	SK364	SK1	(口)7.0 (高)1.2	外;オサエ・ナデのちヨコナデ 内;ヨコナデ	粗0.5~2mmの 小石	良好	黄橙	口縁部片	外面に煤付着
205	35-1	土師器 鉢	c44	SK364	SK1	(口)26.0	外;オサエ・ナデのちヨコナデ 内;ハケメのちヨコナデ	粗0.5~5mmの 小石	やや軟	淡黄橙 ~黒褐	口縁1/3	外面に煤付着
206	56-5	土師器 羽釜	c44	SK364	SK1	(口)22.4	外;ナデのちヨコナデ 内;ナデのちケズリ	粗0.5~2mmの 小石	良好	淡黄橙	口縁1/5	外面に素地接合痕
207	191- 5	土師器 皿	e43	SK369	pit1	(口)14.0 (高)2.6	外;オサエ・ナデのちヨコナデ 内;ナデ	粗0.5~2mmの 小石	良好	淡黄橙	1/3	外面に素地接合痕
208	29- 11	土師器 小皿	c44	SK367	SK4	(口)7.9 (高)1.1	外;オサエ・ナデ 内;ナデ	密0.5~1mmの 小石	良好	淡橙	ほぼ完存	重さ22g(推定)
209	57-2	土師器 小皿	c44	SK367	SK4	(口)8.2 (高)0.7	外;オサエ・ナデ 内;ナデ	密0.5~1mmの 小石	良好	淡橙	1/3	
210	56-4	土師器 小皿	c44	SK367	SK4	(口)8.0 (高)1.5	外;オサエ・ナデ 内;ナデ	密0.5~1mmの 小石	良好	淡黄橙	ほぼ完存	
211	57-6	土師器 台付小皿	c44	SK367	SK4	(高台) 2.0	外;オサエ・ナデ 内;ナデ	密0.5~1mmの 小石	良好	淡橙		口縁部不使用
212	29- 10	土師器 皿	c44	SK367	SK4	(口)12.8 (高)2.7	外;オサエ・ナデのちヨコナデ 内;ナデ	粗0.5~1mmの 小石、赤色粒	良好	淡橙	7/10	
213	56-1	土師器 皿	c44	SK367	SK4	(口)12.3 (高)2.7	外;オサエ・ナデのちヨコナデ 内;ナデ	粗0.5~1mmの 小石	やや軟	淡黄橙	7/10	
214	29-9	土師器 皿	c44	SK367	SK4	(口)13.0 (高)2.5	外;オサエ・ナデのちヨコナデ 内;ナデ	密0.5~1mmの 小石	良好	淡灰白	2/5	
215	61-2	土師器 皿	c44	SK367	SK4	(口)13.8 (高)3.0	外;オサエ・ナデのちヨコナデ 内;ナデ	密0.5~2mmの 小石	やや軟	淡黄橙	4/5	
216	61-3	陶器 椀	c44	SK367	SK4	(口)16.2 (高)5.9	外;オサエ・ナデのち系切り、高 台にヨコナデ 内;オサエ・ ナデ	粗0.5~2mmの 小石	堅緻	灰	3/5	山茶碗(知多) 高台に粗粒痕 内面に塗付着
217	32-4	陶器 椀	c44	SK367	SK4	(口)16.1 (高)4.5	外;オサエ・ナデのち系切り、高 台にヨコナデ 内;オサエ・ ナデ	粗0.5~2mmの 小石	堅緻	灰	1/4	山茶碗(知多?) 高台に粗粒痕 内面に自然釉付着
218	27-3	陶器 椀	c44	SK367	SK4	(高台) 6.8	外;オサエ・ナデのち系切り、高 台にヨコナデ 内;オサエ・ ナデ	密0.5~2mmの 小石	堅緻	黄灰	高台4/5	山茶碗(知多?) 高台に粗粒痕 底に墨書(梅文)
219	61-1	陶器 ねり鉢	c44	SK367	SK4	(口)30.4	外;ハケメのちヨコナデ 内;ヨコナデ	密0.5~7mmの 小石	堅緻	灰	口縁1/10	山茶碗質
220	57-4	陶器 鉢	c44	SK367	SK4	(底)9.2	外;ヨコナデのちケズリ 内;ヨコナデ	密0.5~1mmの 小石	堅緻	灰	底2/3	産地不明
221	57-5	土師器 鉢	c44	SK367	SK4	(口)32.2	外;ナデのちヨコナデ 内;ヨコナデ	粗0.5~2mmの 小石	良好	淡黄橙	口縁1/5	
222	32-5	土師器 鉢	c44	SK367	SK4	(口)7.0 (高)1.2	外;ナデのちヨコナデ 内;ナデのちヨコナデ	粗0.5~2mmの 小石	良好	淡黄橙	口縁部片	
223	45-3	石製 硯	c44	SK367	SK4	(隆高) 1.7	上;海は磨り減っている				1/4	四葉硯 粘板岩系の素材
224	36-5	陶器 椀?	c44	SK368	SK2	(口)7.0 (高)1.2	外;ヨコナデ 内;ヨコナデ	粗0.5~2mmの 小石	堅緻	明灰	口縁部片	山茶碗質 産地不明
225	32-7	土師器 小皿	c46	SK376	SK3	(口)8.0 (高)1.4	外;オサエ・ナデ 内;ナデ	密0.5~1mmの 小石	良好	淡橙	1/4	外面に粗粒付着痕

tab.14 ケカノ辻・角垣内地区出土遺物観察表(5)

番号	実測番号	器種等	出土グロット	遺構・層名など	取上時の名称	法量 (cm)	調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考
226	63-6	土師器 鍋	c61	SD361	SD3	(口)22.2 (高)1.1	外;ナデのちヨコナデ 内;ナデのちヨコナデ	粗0.5~2mmの 小石	良好	淡橙	口縁1/10	
227	29-7	土師器 小皿	e44	SK370	SK1	(口)7.4 (高)1.1	外;オサエ・ナデ 内;ナデ	密0.5~1mmの 小石	良好	淡橙	完存	重さ20g
228	45-2	土師器 皿	e44	SK370	SK1	(口)12.1 (高)1.1	外;オサエ・ナデ 内;ナデ	粗0.5~1mmの 小石	良好	淡黄橙	7/10	
229	36-1	土師器 皿	c43	SK363	SK2	(口)13.9 (高)3.0	外;ナヒ・ナデのちヨコナデ 内;ナデ(工具)	粗0.5~2mmの 小石	軟	灰白	ほぼ完存	
230	29-7	土師器 小皿	e45	SK372	SK1	(口)7.8 (高)1.1	外;オサエ・ナデ 内;ナデ	密0.5~1mmの 小石	良好	淡橙	1/2	
231	29-5	土師器 皿	e45	SK372	SK1	(口)12.6 (高)2.3	外;ナヒ・ナデのちヨコナデ 内;ナデ	粗0.5~5mmの 小石	良好	淡橙	ほぼ完存	重さ77g(推定)
232	29-3	土師器 皿	e45	SK372	SK1	(口)12.8 (高)3.2	外;ナヒ・ナデのちヨコナデ 内;ナデ	粗0.5~2mmの 小石	良好	淡橙	ほぼ完存	重さ84g(推定)
233	28-6	土師器 小皿	e47	SE377	SK1	(口)8.6 (高)1.2	外;オサエ・ナデ 内;ナデ	粗0.5~1mmの 小石	良好	淡橙	完存	重さ39g
234	29-1	土師器 小皿	e47	SE377	SK1	(口)8.1 (高)1.4	外;オサエ・ナデ 内;ナデ	密0.5~1mmの 小石	良好	淡黄橙	完存	重さ30g
235	29-2	土師器 小皿	e47	SE377	SK1	(口)8.6 (高)1.4	外;オサエ・ナデ 内;ナデ	密0.5~2mmの 小石	良好	淡黄橙	完存	重さ37g
236	41-4	陶器 小椀	e47	SE377	SK1	(高台)4.3	外;クワナのち系切り、高 台にヨコナデ 内;クワナ	密0.5~2mmの 小石	堅緻	灰白	高台完存	瀬戸? 内面に自然釉付着
237	41-2	陶器 小皿	e47	SE377	SK1	(口)9.0 (底)2.1	外;クワナのち系切り 内;クワナ	粗0.5~2mmの 小石	堅緻	灰白	1/8	山皿(知多) 口縁部に自然釉付着
238	53-3	陶器 鉢	e47	SE377	SK1	(底)11.2	外;クワナ 内;クワナ	粗0.5~2mmの 小石	堅緻	褐灰	1/10	産地不明
239	32-2	陶器 椀	e47	SE377	SK1	(口)16.2 (高)5.0	外;クワナのち系切り、高 台にヨコナデ 内;クワナ	粗0.5~2mmの 小石	堅緻	灰白	1/5	山茶椀(知多) 高台に粗粒痕
240	41-1	陶器 椀	e47	SE377	SK1	(口)16.0 (高)5.2	外;クワナのち系切り、高 台にヨコナデ 内;クワナ	粗0.5~2mmの 小石	堅緻	明褐灰	高台完存	山茶椀(瀬美?) 高台に粗粒痕 内面に墨付着、硯に使用か?
241	32-1	陶器 椀	e47	SE377	SK1	(口)16.2	外;クワナ 内;クワナ	粗0.5~6mmの 小石	堅緻	灰白	1/4	山茶椀(知多)
242	41-3	陶器 片口椀	e47	SE377	SK1	(口)9.7 (高)5.2	外;クワナのち系切り 内;クワナ	粗0.5~2mmの 小石	堅緻	灰褐	1/4	山茶椀系(瀬戸?) 内面に自然釉付着
243	50-2	土師器 鍋	e47	SE377	SK1	(口)29.1	外;ナヒ・ナデのちヨコナデ 内;板ナデのちヨコナデ	粗0.5~2mmの 小石	良好	淡橙灰	1/4	
244	50-1	土師器 鍋	e47	SE377	SK1	(口)32.4	外;ナヒ・ナデのちヨコナデ 内;ナデのちヨコナデ	粗0.5~2mmの 小石	軟	淡橙灰	1/2	外面に煤付着
245	59-5	磁器 椀	c50	SK380	SK1	(口)-	外;隆刻蓮弁文のち施釉 内;施釉	密	堅緻	釉 緑灰	口縁部片	青磁 龍泉窯系
246	30-7	磁器 椀	c54	SD389	SD3	(口)14.2	外;隆刻蓮弁文のち施釉 内;施釉	密	堅緻	釉 淡緑灰	口縁1/8	青磁 龍泉窯系
247	30-5	土師器 小皿	b53	SD384	SD3	(口)9.1 (高)1.5	外;ナヒ・ナデのちヨコナデ 内;ナデ	粗0.5~2mmの 小石	やや軟	淡橙灰	7/8	
248	25-4-5	陶器 ねり鉢	c54	SD390	SD2 下層	(口)-	外;ナヒ・ナデのちヨコナデ 内;ナデ	粗0.5~4mmの 小石	堅緻	淡褐	口縁部片	常滑産
249	62-5	磁器 皿	d54	SD390	SD2	(口)10.9	外;クワリのち施釉 内;クワリのち施釉	密	堅緻	釉 淡灰白	1/10	白磁 口壳
250	25-4-3	陶器 椀	c54	SD390	SD2 下層	(高台)4.6	外;クワリのち施釉 内;施釉	密0.5~2mmの 小石	堅緻	釉 淡黄緑	高台完存	瀬戸 平椀
251	25-4-4	陶器 椀	b54	SD390	SD2	(高台)4.6	外;クワリのち施釉 内;施釉	密0.5~2mmの 小石	堅緻	釉 淡黄緑	高台完存	瀬戸 平椀
252	46-1	土師器 鍋	c54	SD390	SD2 下層	(口)21.5	外;ハケメのちヨコナデ 内;ナデのちヨコナデ	粗0.5~2mmの 小石	良好	淡橙灰	口縁1/6	外面に煤付着
253	46-2	土師器 鍋	d54	SD390	SD1	(口)26.4	外;ハケメのちヨコナデ 内;ナデのちヨコナデ	粗0.5~2mmの 小石	良好	淡橙灰	口縁1/8	外面に煤付着
254	60-2	土師器 鍋	d54	SD390	SD1	(口)27.3	外;ハケメのちヨコナデ 内;ナデのちヨコナデ	粗0.5~2mmの 小石	良好	淡橙	口縁1/10	外面に煤付着
255	47-3	土師器 小皿	e50	SE381	SK1	(口)8.4 (高)1.6	外;ナヒ・ナデのちヨコナデ 内;ナデ	粗0.5~2mmの 小石	やや軟	淡黄褐	完存	重さ48g
256	47-1	土師器 小皿	e50	SE381	SK1	(口)8.4 (高)1.8	外;ナヒ・ナデのちヨコナデ 内;ナデ	粗0.5~2mmの 小石	やや軟	淡黄橙	ほぼ完存	重さ34g(推定)
257	48-1	土師器 小皿	e50	SE381	SK1	(口)8.5 (高)1.6	外;ナヒ・ナデのちヨコナデ 内;ナデ	粗0.5~3mmの 小石	やや軟	黄橙	ほぼ完存	重さ39g(推定)
258	47-5	土師器 小皿	e50	SE381	SK1	(口)7.8 (高)1.6	外;ナヒ・ナデのちヨコナデ 内;ナデ	粗0.5~2mmの 小石	やや軟	淡黄橙	ほぼ完存	口縁部に油煙灰付着 重さ33g(推定)
259	48-2	土師器 小皿	e50	SE381	SK1	(口)7.9 (高)1.6	外;オサエ・ナデ 内;ナデ	粗0.5~2mmの 小石、赤色粒	やや軟	淡黄橙	完存	重さ29g
260	47-2	土師器 小皿	e50	SE381	SK1	(口)8.5 (高)1.4	外;ナヒ・ナデのちヨコナデ 内;ナデ	粗0.5~4mmの 小石	やや軟	淡黄橙	ほぼ完存	重さ40g(推定)
261	58-7	土師器 小皿	e50	SE381	SK1	(口)8.0 (高)1.3	外;ナヒ・ナデのちヨコナデ 内;ナデ	粗0.5~2mmの 小石	良好	淡橙	ほぼ完存	重さ30g(推定)
262	47-4	陶器 小皿	e50	SE381	SK1	(口)8.8 (高)1.8	外;クワナのち系切り 内;クワナ	粗0.5~2mmの 小石	堅緻	灰白	1/2	山皿 内面に漆付着
263	49-4	陶器 小皿	e50	SE381	SK1	(口)8.7 (高)1.9	外;クワナのち系切り 内;クワナ	密0.5~2mmの 小石	堅緻	明青灰	口縁1/4	山皿(知多) 内面に漆付着
264	58-4	土師器 皿	e50	SE381	SK1	(口)13.4 (高)2.6	外;ナヒ・ナデのちヨコナデ 内;ナデのちヨコナデ	密0.5~1mmの 小石	良好	淡黄橙	1/2	
265	58-6	土師器 皿	e50	SE381	SK1	(口)14.8 (高)3.1	外;ナヒ・ナデのちヨコナデ 内;ナデのちヨコナデ	密0.5~1mmの 小石	良好	淡褐灰	1/2	内面に炭化物付着
266	49-5	土師器 皿	e50	SE381	SK1	(口)14.4 (高)2.7	外;ナヒ・ナデのちヨコナデ 内;ナデのちヨコナデ	粗0.5~3mmの 小石	やや軟	淡黄橙	2/3	
267	49-2	土師器 皿	e50	SE381	SK1	(口)13.5 (高)2.8	外;ナヒ・ナデのちヨコナデ 内;ナデのちヨコナデ	密0.5~2mmの 小石	やや軟	淡黄橙	完存	重さ101g
268	40-1	土師器 皿	e50	SE381	SK1	(口)15.3 (高)2.7	外;ナヒ・ナデのちヨコナデ 内;ナデのちヨコナデ	粗0.5~1mmの 小石	良好	淡褐灰	1/2	内面に炭化物(煤?)付着
269	48-3	土師器 皿	e50	SE381	SK1	(口)13.6 (高)3.1	外;ナヒ・ナデのちヨコナデ 内;ナデのちヨコナデ	粗0.5~4mmの 小石	やや軟	黄橙	2/3	
270	49-3	土師器 皿	e50	SE381	SK1	(口)13.8 (高)3.4	外;ナヒ・ナデのちヨコナデ 内;ナデのちヨコナデ	密0.5~2mmの 小石、赤色粒	やや軟	黄橙	5/6	

tab.15 ケカノ辻・角垣内地区出土遺物観察表(6)

番号	実測 番号	器種等	出土 グロット	遺構・層 名など	取上時の 名称	法量 (cm)	調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考
271	58-5	土師器 皿	e50	SE381	SK1	(口)13.7 (高)2.8	外; 丸・片のちヨコナデ 内; ナデのちヨコナデ	粗0.5~2mmの 小石	良好	灰黄緑	3/8	
272	62-2	土師器 鍋	e50	SE381	SK1	(口)11.2	外; 丸・片のちヨコナデ 内; ナデのちヨコナデ	粗0.5~2mmの 小石(多)	良好	淡黄緑	1/4	ミニチュア 外面に煤付着
273	62-1	陶器 椀	e50	SE381	SK1	(口)15.6 (高)4.6	外; 020ナデのち系切り、高 台にヨコナデ 内; 020ナデ	密0.5~2mmの 小石	堅緻	淡青灰	1/2	山茶椀(混美?)
274	47-6	陶器 椀	e50	SE381	SK1	(口)15.8 (高)4.9	外; 020ナデのち系切り、高 台にヨコナデ 内; 020ナデ	粗0.5~2mmの 小石	堅緻	灰黄	1/4	山茶椀(知多?)
275	47-6	瓦器 椀	e50	SE381	SK1	(口)15.0 (高)4.5	外; オサエのちヨコナデ 内; 丸のちヨコナデのちミガキ	粗0.5~2mmの 小石	良好	暗灰	3/4	伊賀産 e48-pit出土片と接合
276	48-4	土師器 鍋	e50	SE381	SK1	(口)17.3	外; 丸・片のちヨコナデ 内; 板ナデのちヨコナデ	粗0.5~2mmの 小石(多)	良好	淡黄緑	1/2	
277	42-2	土師器 鍋	e50	SE381	SK1	(口)17.3 (高)10.3	外; 丸・片のちヨコナデ ・ツリ	粗0.5~4mmの 小石、赤色粒	良好	暗褐	4/5	外面に煤付着
278	48-5	土師器 鍋	e50	SE381	SK1	(口)21.6	外; 丸・片のちヨコナデ 内; 板ナデのちヨコナデ	粗0.5~2mmの 小石(多)	良好	橙	口縁2/5	外面に煤付着
279	62-4	土師器 鍋	e50	SE381	SK1	(口)22.8	外; 丸・板ナデのちヨコナデ 内; 板ナデのちヨコナデ	粗0.5~2mmの 小石(多)	良好	黄橙	口縁1/3	外面に煤付着
280	49-1	土師器 鍋	e50	SE381	SK1	(口)25.2	外; 丸・板ナデのちヨコナデ 内; 板ナデのちヨコナデ	粗0.5~2mmの 小石(多)	良好	黄橙	口縁2/5	
281	43-1	土師器 鍋	e50	SE381	SK1	(口)27.4 (高)19.4	外; 丸・片のちヨコナデ ・ツリ	粗0.5~2mmの 小石	良好	褐灰	7/10	外面に煤、内面底に炭化物付着
282	62-3	土師器 鍋	e50	SE381	SK1	(口)36.4	外; 丸・片のちヨコナデ 内; 板ナデのちヨコナデ	粗0.5~2mmの 小石(多)	良好	淡黄緑	口縁1/4	外面に煤付着
283	44-1	土師器 鍋	e50	SE381	SK1	(口)41.3	外; 丸・板ナデのちヨコナデ 内; 板ナデのちヨコナデ	粗0.5~2mmの 小石(多)	良好	暗褐	口縁完存	外面に煤付着
284	69-1	土師器 小皿	c64	SD391	SD3	(口)8.8 (高)1.6	外; 丸・片のちヨコナデ 内; ナデ	密0.5~2mmの 小石	良好	淡褐	ほぼ完存	重さ43g(推定)
285	69-2	土師器 小皿	c64	SD391	SD3	(口)8.9 (高)1.7	外; 丸・片のちヨコナデ 内; ナデ	密0.5~1mmの 小石	良好	淡褐	完存	重さ45g 外面に素地接合痕
286	66-1	土師器 小皿	c62	SD391	SD3	(口)7.9 (高)1.7	外; 丸・片のちヨコナデ 内; ナデ	粗0.5~2mmの 小石	やや軟	淡黄緑	ほぼ完存	重さ28g(推定)
287	66-4	土師器 小皿	c62	SD391	SD3	(口)8.5 (高)1.4	外; 丸・片のちヨコナデ 内; ナデ	密0.5~1mmの 小石	やや軟	淡黄緑	ほぼ完存	重さ38g(推定) 外面に素地接合痕 口縁部に油煙灰付着
288	69-5	土師器 小皿	c63	SD391	SD3	(口)8.8 (高)1.4	外; 丸・片のちヨコナデ 内; ナデ	密0.5~1mmの 小石	良好	淡褐	完存	外面に素地接合痕 重さ39g
289	66-3	土師器 小皿	c62	SD391	SD3	(口)8.5 (高)1.5	外; 丸・片のちヨコナデ 内; ナデ	粗0.5~2mmの 小石	やや軟	淡黄	完存	重さ35g
290	69-6	土師器 小皿	c63	SD391	SD3	(口)7.8 (高)1.4	外; 丸・片のちヨコナデ 内; ナデ	密0.5~1mmの 小石	良好	淡褐	9/10	
291	70-3	土師器 小皿	c63	SD391	SD3	(口)8.4 (高)1.4	外; 丸・片のちヨコナデ 内; ナデ	密0.5~1mmの 小石	良好	暗褐	3/4	口縁部に油煙灰付着
292	69-3	土師器 小皿	c64	SD391	SD3	(口)8.5 (高)1.4	外; 丸・片のちヨコナデ 内; ナデ	密0.5~1mmの 小石	良好	黄褐	完存	重さ30g 外面に素地接合痕
293	66-2	土師器 小皿	c62	SD391	SD3	(口)8.2 (高)1.6	外; 丸・片のちヨコナデ 内; ナデ	粗0.5~2mmの 小石	やや軟	淡黄緑	完存	重さ40g 外面に素地接合痕
294	65-3	土師器 小皿	c62	SD391	SD3	(口)9.3 (高)1.6	外; 丸・片のちヨコナデ 内; ナデ	粗0.5~2mmの 小石	やや軟	淡黄	9/10	
295	68-3	土師器 台付小皿	c63	SD391	SD3	(口)9.5 (高)2.6	外; 丸・片のちヨコナデ 内; オサエ・ナデ	密0.5~2mmの 小石	やや軟	淡褐	3/5	
296	71-2	土師器 台付小皿	c61	SD391	SD3	(高台) 5.3	外; 丸・片のちヨコナデ 内; 布目痕	密0.5~1mmの 小石	良好	淡橙	高台1/3	
297	68-4	土師器 脚台付小皿	c63	SD391	SD3	(脚柱) 2.3	外; オサエ・ナデ 内; ナデ	密0.5~2mmの 小石	軟	淡褐	脚柱完存	
298	82-2	土師器 脚台付小皿	c59	SD391	SD3	(脚柱) 2.9	外; オサエ・ナデ 内; ナデ	密0.5~1mmの 小石	良好	淡黄	脚柱完存	
299	79-2	土師器 鍋	c64	SD391	SD3	(口)10.6 (高)4.4	外; 丸・片のちヨコナデ 内; 丸・片のちヨコナデ	粗0.5~4mmの 小石	良好	淡褐	3/5	外面に煤、内面に炭化物付着 ミニチュア
300	68-2	土師器 皿	c64	SD391	SD3	(口)14.3 (高)2.6	外; 丸・片のちヨコナデ 内; ナデ	粗0.5~4mmの 小石	やや軟	淡褐	9/10	
301	66-7	土師器 皿	c63	SD391	SD3	(口)15.0 (高)2.7	外; 丸・片のちヨコナデ 内; ナデ	粗0.5~5mmの 小石	やや軟	淡黄	4/5	
302	72-4	土師器 皿	c63	SD391	SD3	(口)14.0 (高)2.5	外; 丸・片のちヨコナデ 内; ナデ	粗0.5~2mmの 小石	やや軟	淡黄緑	ほぼ完存	重さ126g(推定)
303	84-1	土師器 皿	c64	SD391	SD3	(口)14.1 (高)2.9	外; 丸・片のちヨコナデ 内; ナデ	粗0.5~2mmの 小石(多)	良好	淡橙	1/4	
304	66-6	土師器 皿	c61	SD391	SD3	(口)14.4 (高)2.6	外; 丸・片のちヨコナデ 内; ナデ	粗0.5~2mmの 小石	やや軟	淡黄緑	2/5	
305	72-3	土師器 皿	c63	SD391	SD3	(口)14.0 (高)2.6	外; 丸・片のちヨコナデ 内; ナデ	密0.5~2mmの 小石	やや軟	淡黄緑	3/5	
306	70-2	土師器 皿	c63	SD391	SD3	(口)15.8 (高)2.2	外; 丸・片のちヨコナデ 内; ナデ	密0.5~2mmの 小石	良好	淡赤灰	1/2	外面に素地接合痕
307	84-2	土師器 皿	c64	SD391	SD3	(口)14.9 (高)2.8	外; 丸・片のちヨコナデ 内; ナデ	密0.5~2mmの 小石	良好	灰黄緑	完存	重さ166g
308	233 -1	土師器 皿	c64	SD391	SD3	(口)15.2 (高)2.6	外; 丸・片のちヨコナデ 内; ナデ	密0.5~2mmの 小石	良好	淡橙	1/3	
309	69-4	土師器 皿	c63	SD391	SD3	(口)16.1 (高)3.0	外; 丸・片のちヨコナデ 内; ナデ	密0.5~2mmの 小石	良好	淡褐	2/5	
310	66-5	土師器 皿	c62	SD391	SD3	(口)16.2 (高)3.2	外; 丸・片のちヨコナデ 内; ナデ	粗0.5~1mmの 小石	良好	淡黄緑	3/5	
311	59-8	陶器 小皿	c62	SD391	SD3	(口)8.2 (高)2.0	外; ロクロナデのち系切り 内; ロクロナデ	密0.5~2mmの 小石	堅緻	褐灰	3/4	山皿
312	78-1	陶器 小皿	c58	SD391	SD3	(口)8.3 (高)2.1	外; ロクロナデのち系切り 内; ロクロナデ	密0.5~2mmの 小石	堅緻	淡灰	完存	片口付山皿 底、外面四方に墨書「上」
313	63-1	陶器 小皿	c61	SD391	SD3	(口)8.6 (高)1.7	外; ロクロナデのち系切り 内; ロクロナデ	密0.5~2mmの 小石	堅緻	淡灰		山皿(瀬戸?)
314	68-1	陶器 小皿	c63	SD391	SD3	(口)8.8 (高)1.9	外; ロクロナデのち系切り 内; ロクロナデ	密0.5~2mmの 小石	堅緻	白灰	7/10	山皿
315	63-3	陶器 小皿	c60	SD391	SD3	(口)8.0 (高)2.0	外; ロクロナデのち系切り 内; ロクロナデ	粗0.5~2mmの 小石	堅緻	灰	1/3	片口付山皿 底に墨書「上」

tab.16 ケカノ辻・角垣内地区出土遺物観察表(7)

番号	実測 番号	器種等	出土 グロット	遺構・層 名など	取上時の 名 称	法 量 (c m)	調整・技法の特徴	胎 土	焼 成	色 調	残 存 度	備 考
316	191 -4	陶器 片口椀	c63	S D 3 9 1	S D 3	(口)9.8	外;ロクロナデ 内;ロクロナデ	密0.5~2mmの 小石	堅緻	灰白	口縁1/3	外面に自然釉付着
317	51- 12	陶器 底部	c59	S D 3 9 1	S D 3	(底)5.6	外;ロクロナデのち系切り 内;ロクロナデ	密0.5~1mmの 小石	堅緻	褐灰	1/4	
318	72-2	磁器 小皿	c63	S D 3 9 1	S D 3	(口)-	外;施釉 内;施釉	密	堅緻	釉 明緑灰	口縁部片	青磁
319	73-2	磁器 椀	c63	S D 3 9 1	S D 3	(口)-	外;施釉 内;陰刻施文のち施釉	密	堅緻	釉 緑灰	口縁部片	青磁
320	72-6	磁器 小皿	c63	S D 3 9 1	S D 3	(口)-	外;施釉 内;施釉	密	堅緻	釉 緑灰	口縁部片	青磁
321	52-3	磁器 椀	c59	S D 3 9 1	S D 3	(口)-	外;施釉 内;陰刻文のち施釉	密	堅緻	釉 緑灰	口縁部片	青磁
322	72-5	磁器 小皿	c63	S D 3 9 1	S D 3	(口)12.1 (高)2.2	外;施釉(底面除く) 内;施釉	密	堅緻	釉 明緑灰	1/3	青白磁
323	72-1	磁器 小皿	c63	S D 3 9 1	S D 3	(口)-	外;施釉 内;施釉	密	堅緻	釉 灰白	口縁部片	白磁
324	63-2	磁器 椀	c60	S D 3 9 1	S D 3	(底)7.1	外;ロクロナデ 内;施釉	密	堅緻	灰白		白磁
325	65-2	磁器 椀	c62	S D 3 9 1	S D 3	(底)5.6	外;ロクロナデのち系釉 内;陰刻施文のち施釉	密	堅緻	釉 灰緑	高台完存	青磁 龍泉窯系
326	27-2	陶器 椀	c61	S D 3 9 1	S D 3	(口)-	外;ロクロナデ 内;ロクロナデ	密0.5~1mmの 小石	堅緻	灰白	口縁部片	山茶椀(知多?) 外面に墨書「侍」
327	31-2	陶器 椀	c62	S D 3 9 1	S D 1	(高台) 7.8	外;ロクロナデのち系切り、高 台にヨコナデ 内;ロクロナデ	密0.5~1mmの 小石	堅緻	褐灰	高台9/10	山茶椀(瀬戸?)高台に粗粒痕 底面に墨書「十」
328	27-1	陶器 椀	c58	S D 3 9 1	S D 3	(高台) 7.6	外;ロクロナデのち系切り、高 台にヨコナデ 内;ロクロナデ	密0.5~1mmの 小石	堅緻	体淡灰 高台灰	高台完存	山茶椀(知多?)高台に粗粒痕 底面に墨書「廿」
329	31-3	陶器 椀	c64	S D 3 9 1	S D 1	(高台) 7.2	外;ロクロナデのち系切り、高 台にヨコナデ 内;ロクロナデ	密0.5~1mmの 小石	堅緻	褐灰	高台1/2	山茶椀(知多?) 底面に墨書
330	37-4	陶器 椀	c64	S D 3 9 1	S D 3	(高台) 6.2	外;ロクロナデのち系切り、高 台にヨコナデ 内;ロクロナデ	密0.5~4mmの 小石	堅緻	褐灰	高台2/5	山茶椀(渥美) 外面に墨書
331	61-4	陶器 椀	c63	S D 3 9 1	S D 3	(口)15.6 (高)5.0	外;ロクロナデのち系切り、高 台にヨコナデ 内;ロクロナデ	密0.5~2mmの 小石	堅緻	灰	9/10	山茶椀(渥美)
332	60-3	陶器 椀	c58	S D 3 9 1	S D 3	(口)16.2 (高)5.2	外;ロクロナデのち系切り、高 台にヨコナデ 内;ロクロナデ	密0.5~2mmの 小石	堅緻	黄灰	9/10	山茶椀(知多?)高台に粗粒痕
333	59-6	陶器 椀	c60	S D 3 9 1	S D 3	(口)15.8 (高)5.4	外;ロクロナデのち系切り、高 台にヨコナデ 内;ロクロナデ	密0.5~5mmの 小石	堅緻	灰白	5/8	山茶椀(渥美?)高台に粗粒痕
334	60-1	陶器 椀	c59	S D 3 9 1	S D 3	(口)16.0 (高)5.0	外;ロクロナデのち系切り、高 台にヨコナデ 内;ロクロナデ	密0.5~2mmの 小石	堅緻	褐灰		山茶椀(知多?)高台に粗粒痕
335	59-7	陶器 椀	c61	S D 3 9 1	S D 3	(口)16.2 (高)5.1	外;ロクロナデのち系切り、高 台にヨコナデ 内;ロクロナデ	密0.5~2mmの 小石	堅緻	灰白	5/8	山茶椀(渥美)高台に粗粒痕
336	63-4	陶器 椀	c60	S D 3 9 1	S D 3	(底)7.0	外;ロクロナデのち系切り 内;ロクロナデ	密0.5~2mmの 小石	堅緻	灰	1/2	
337	77-3	陶器 ねり鉢	c61	S D 3 9 1	S D 3	(口)30.0 (高)12.6	外;ロクロナデのち系切り、高 台にヨコナデ 内;ロクロナデ	粗0.5~2mmの 小石	堅緻	褐灰	1/4	高台に粗粒痕
338	65-1	陶器 ねり鉢	c62	S D 3 9 1	S D 3	(口)35.8	外;ロクロナデのち系切り、高 台にヨコナデ 内;ロクロナデ	粗0.5~4mmの 小石	堅緻	灰	1/6	外面に自然釉
339	70-1	陶器 鉢	c64	S D 3 9 1	S D 3	(口)18.9	外;ロクロナデ 内;ロクロナデ	密0.5~1mmの 小石	堅緻	灰白	1/5	内面に自然釉、内面にへらあたり、 産地不明
340	191 -3	陶器 鉢	c64	S D 3 9 1	S D 3	(口)21.0	外;ロクロナデ 内;ロクロナデ	密0.5~1mmの 小石	堅緻	灰	3/8	産地不明
341	63-5	陶器 蓋	c61	S D 3 9 1	S D 3	(口)29.2	外;ロクロナデ 内;ロクロナデ	密0.5~1mmの 小石	堅緻	灰緑	1/8	
342	61-5	陶器 ねり鉢	c63	S D 3 9 1	S D 1	(高台) 15.8	外;ナデのちヨコナデ、高 台にヨコナデ 内;ロクロナデ	密0.5~2mmの 小石	堅緻	灰	1/3	
343	65-4	土師器 鉢	c62	S D 3 9 1	S D 3	(口)23.8	外;ナデのちヨコナデ 内;ナデのちヨコナデ	密0.5~2mmの 小石	良好	淡黄橙	1/10	外面に煤付着
344	71-1	瓦質土器 盤	c58 c61・63	S D 3 9 1	S D 3	(口)40.4	外;ナデのちヨコナデ 内;ナデ	密0.5~3mmの 小石	良好	暗灰	1/10	外面に粗粒痕
345	86-6	土師器 小皿	c70	S D 3 9 1	S D 1	(口)7.6 (高)1.4	外;ナデのちヨコナデ 内;ナデ	粗0.5~2mmの 小石	良好	淡橙	完存	重さ29g 口縁部に油煙痕付着
346	88-1	土師器 小皿	c68	S D 3 9 1	S D 1	(口)8.6 (高)1.4	外;ナデのちヨコナデ 内;ナデ	粗0.5~2mmの 小石	良好	淡黄橙	完存	重さ37g 外面に裏地接合痕
347	145 -5	土師器 小皿	c68	S D 3 9 1	S D 1	(口)8.2 (高)1.4	外;ナデのちヨコナデ 内;ナデ	粗0.5~2mmの 小石	良好	褐灰	完存	
348	86-5	土師器 小皿	c68	S D 3 9 1	S D 1	(口)9.8 (高)1.6	外;ナデのちヨコナデ 内;ナデ	粗0.5~2mmの 小石	良好	淡黄橙	完存	重さ51g 外面に裏地接合痕
349	78-2	土師器 台付小皿	c67	S D 3 9 1	S D 1	(口)7.1 (高)2.1	外;ナデのちヨコナデ 内;布目痕(皿部)・ナデ	粗0.5~2mmの 小石	やや軟	淡茶灰	口縁3/5	内面の布目痕は型によるものか
350	67-6	陶器 小皿	c67	S D 3 9 1	S D 1	(口)9.0 (高)2.3	外;ロクロナデのち系切り 内;ロクロナデ	密0.5~1mmの 小石	堅緻	淡灰	完存	山皿
351	84-3	陶器 小皿	c65	S D 3 9 1	S D 3	(口)9.0 (高)2.1	外;ロクロナデのち系切り 内;ロクロナデ	密0.5~1mmの 小石	堅緻	淡灰	3/4	山皿(知多)
352	159 -12	磁器 合子	c70	S D 3 9 1	S D 1	(底)6.1	外;陰刻文のち施釉(上半) 内;施釉	密	堅緻	淡青白	1/4	青白磁
353	232 -10	土師器 皿	c69	S D 3 9 1	S D 1	(口)14.2 (高)3.0	外;ナデのちヨコナデ 内;ナデ	粗0.5~2mmの 小石	良好	淡橙	1/2	
354	232 -9	土師器 皿	c66~ 67	S D 3 9 1	S D 1	(口)15.3 (高)3.0	外;ナデのちヨコナデ 内;ナデ	粗0.5~2mmの 小石	良好	淡黄橙	4/5	
355	86-3	土師器 皿	c68	S D 3 9 1	S D 1	(口)15.2 (高)3.1	外;ナデのちヨコナデ 内;ナデ	粗0.5~2mmの 小石(多)	良好	淡黄橙	ほぼ完存	重さ160g(推定) 外面底に板状汗痕
356	86-2	土師器 皿	c67	S D 3 9 1	S D 1	(口)15.3 (高)2.6	外;ナデのちヨコナデ 内;ナデ	粗0.5~2mmの 小石(多)	良好	淡黄橙	ほぼ完存	重さ185g(推定) 外面に裏地接合痕
357	86-1	土師器 皿	c67	S D 3 9 1	S D 1	(口)15.0 (高)2.8	外;ナデのちヨコナデ 内;ナデ	粗0.5~2mmの 小石(多)	良好	淡黄橙	完存	重さ179g 外面に裏地接合痕
358	88-2	土師器 皿	c70	S D 3 9 1	S D 1	(口)13.8 (高)2.8	外;ナデのちヨコナデ 内;ナデ	粗0.5~2mmの 小石	良好	淡黄橙	完存	重さ189g 外面に裏地接合痕
359	85-3	陶器 椀	c65	S D 3 9 1	S D 3	(口)16.1 (高)5.1	外;ロクロナデのち系切り、高 台にヨコナデ 内;ロクロナデ	密0.5~2mmの 小石	堅緻	灰白	高台完存	山茶椀(渥美) 外面に自然釉
360	92-1	陶器 椀	c73	S D 3 9 1	S K 1	(口)15.0 (高)5.9	外;ロクロナデのち系切り、高 台にヨコナデ 内;ロクロナデ	密0.5~1mmの 小石	堅緻	灰白	高台完存	山茶椀(渥美)

tab.17 ケカノ辻・角垣内地区出土遺物観察表(8)

番号	実測番号	器種等	出土グリップ	遺構・層名など	取上時の名称	法量 (cm)	調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考
361	86-4	陶器	c66	SD391	SD1	(口)16.8 (高)15.9	外;020ナデのち糸切り、高台上ヨコナデ内;020ナデ	密0.5~2mmの小石	堅緻	灰白	高台7/8	山茶碗(知多)高台上に粉發痕内面に墨付着(現に使用?)
362	85-2	磁器	c66	SD391	SD1	(口)10.6 (高)12.0	外;ロクログズリのち施軸内;陰刻施文のち施軸	密	堅緻	釉 緑灰	1/2	青磁 同安窯系
363	84-4	磁器	c66	SD391	SD1	(口)11.1 (高)12.0	外;ロクログズリのち施軸内;陰刻施文のち施軸	密	堅緻	釉 明緑灰	1/3	青磁 同安窯系
364	87-3	磁器	c67	SD391	SD1	(口)10.8 (高)12.6	外;ロクログズリのち施軸内;陰刻直線文のち施軸	密	堅緻	釉 白緑灰	1/3	青白磁
365	90-8	陶器	c70	SD391	SD1	(口)11.6 (高)14.1	外;020ナデのち糸切りのち下半にナズリ内;020ナデ	密0.5~2mmの小石	堅緻	淡灰	2/5	山茶碗系 焼成前穿孔による注口を持つ
366	96-3	陶器	c66	SD391	SD1	(口)11.2	外;020ナデのち穿孔・注口ナズリ内;020ナデ	密0.5~3mmの小石	堅緻	灰白	1/3	山茶碗系 焼成前穿孔による注口を持つ
367	84-5	陶器	c65	SD391	SD3	(口)15.0 (底)9.2	外;ロクロナデ内;ロクロナデ	密0.5~3mmの小石	堅緻	暗灰	口縁1/8 底1/4	2片
368	191-2	陶器	c65	SD391	SD3	(口)17.8 (高)15.0	外;020ナデのち糸切りのち下半にナズリ内;020ナデ	密0.5~3mmの小石	堅緻	灰	3/8	産地不明
369	85-1	陶器	c66	SD391	SD1	(口)32.2 (高)18.5	外;020ナデのちナズリのち高台上ヨコナデ内;020ナデ	密0.5~5mmの小石	堅緻	灰	口縁1/6	山茶碗系 高台上に粉發痕
370	165-4	土師器	c68	SD391	SD1	(口)24.8	外;ナデのちヨコナデ内;板ナデのちヨコナデ	粗0.5~3mmの小石	良好	淡黄橙	1/5	
371	88-3	土師器	c71	SD391	SD2	(口)20.0	外;ハケメのちヨコナデ内;ナデのちヨコナデ	粗0.5~2mmの小石	良好	橙	1/4	混入遺物
372	87-1	土師器	c66	SD391	SD1	(口)16.6	外;ハケメのちヨコナデ内;ナデのちヨコナデ	粗0.5~2mmの小石	良好	暗橙	1/6	混入遺物
373	73-3	土製	c69	SD391	SD1	(長)4.5 (幅)2.2	外;オサエ・ナデ内;棒状工具の抜き取り痕	密0.5~1mmの小石	良好	淡橙	完存	
374	87-2	土製	c67	SD391	SD1	(長)6.0 (幅)2.9	外;オサエ・ナデ内;棒状工具の抜き取り痕	密0.5~1mmの小石	良好	淡黄橙	完存	
375	67-1	土師器	d67	SK392	SD1	(口)8.4 (高)11.6	外;011ナデのちヨコナデ内;ナデ	密0.5~1mmの小石	良好	淡黄橙	3/5	
376	67-7	土師器	d67	SK392	SD1	(口)7.8 (高)11.2	外;011ナデのちヨコナデ内;ナデ	密0.5~1mmの小石	やや軟	淡橙	完存	重さ27g
377	67-2	土師器	d67	SK392	SD1	(口)14.8 (高)12.4	外;011ナデのちヨコナデ内;ナデ	密0.5~1mmの小石	良好	淡橙		
378	37-1	陶器	d66	SK392	SD3	(口)14.8 (底)3.8	外;ロクロナデのち糸切り内;ロクロナデ	密0.5~2mmの小石	堅緻	淡灰	底部完存	山皿(知多?) 底部に墨書「上」
379	82-6	陶器	d66	SK392	SD1		外;陰刻文のち施軸内;ロクロナデ	密0.5~1mmの小石	堅緻	釉 淡黄	体部片	緑釉陶器
380	67-9	磁器	d67	SK392	SD1	(口)-	外;施軸内;陰刻文のち施軸	密	堅緻	釉 灰緑	口縁部片	青磁 龍泉窯系
381	67-10	磁器	d67	SK392	SD1	(口)-	外;施軸内;陰刻文のち施軸	密	堅緻	釉 灰緑	口縁部片	青磁 龍泉窯系
382	73-1	磁器	d67	SK392	SD1	(高台)5.0	外;陰刻文のち施軸内;陰刻文のち施軸	密	堅緻	釉 緑灰	高台1/5	青磁 同安窯系
383	89-1	土師器	d67	SK392	SD1	(口)22.8 (高)15.9	外・内;011ナデのちヨコナデ・ナズリ	密0.5~2mmの小石(多)	良好	淡黄橙	体部5/6	外面に煤付着
384	67-3	土師器	d65	SK397	SK1	(口)8.1 (高)10.7	外;011ナデのちヨコナデ内;ナデ	密0.5~2mmの小石	良好	淡黄橙	1/3	
385	67-4	土師器	d65	SK397	SK1	(口)12.0	外;011ナデのちヨコナデ内;ナデ	密0.5~1mmの小石	良好	淡黄橙	口縁1/3	
386	230-4	土師器	d76	SK404	SK3	(口)11.3 (高)12.9	外;オサエ・ナデ内;ナデ	密0.5~3mmの小石	良好	淡黄	口縁9/10	
387	110-2	土師器	c72~79	SK407	SK1の2	(口)9.1 (高)11.2	外;オサエ・ナデ内;ナデ	密0.5~1mmの小石	良好	淡黄	9/10	
388	101-3	土師器	d76	SK407	SK1	(口)11.2 (高)3.0	外;オサエ・ナデ内;ナデ	密0.5~1mmの小石	良好	淡灰黄	完存	重さ53g
389	112-2	土師器	d77	SD411	SD1	(口)11.6 (高)12.9	外;オサエ・ナデ内;ナデ	密0.5~1mmの小石	良好	淡黄	ほぼ完存	外面に薬地接合痕
390	90-7	陶器	c72	SK398	SD1	(口)18.6 (高)13.9	外;020ナデのち糸切りのち施軸内;020ナデのち施軸	密0.5~1mmの小石	堅緻	釉 淡黄	口縁1/2	古瀬戸 折縁中皿
391	145-3	土師器	b72	SK398	SD1	(口)19.8	外;ハケメのちヨコナデ内;ナデのちヨコナデ	密0.5~2mmの小石	良好	淡黄	口縁1/4	
392	91-2	土師器	d72	SK398	SD1	(口)20.1	外;ナデのちヨコナデ内;ナデのちヨコナデ	密0.5~2mmの小石	良好	淡黄橙	口縁1/4	外面に煤付着
393	160-4	土師器	d72	SK398	SD1	(口)24.1	外;ヨコナデ内;ヨコナデ	密0.5~2mmの小石	良好	淡黄橙	口縁1/3	外面に煤付着
394	91-3	土師器	c72	SK398	SD1	(口)27.8	外;ハケメのちヨコナデ内;ナデのちヨコナデ	粗0.5~3mmの小石	良好	褐灰	口縁1/3	外面に煤付着
395	160-3	土師器	d72	SK398	SD1	(口)34.2	外;ハケメのちヨコナデ内;ナデのちヨコナデ	密0.5~2mmの小石	良好	淡黄橙	口縁1/10	外面に煤付着
396	91-1	土師器	b72	SK398	SD1	(口)36.0	外;ハケメのちヨコナデ内;ナデのちヨコナデ	密0.5~3mmの小石	良好	淡黄橙	口縁1/4	外面に煤付着
397	90-1	土師器	b75	SD402	SD1	(口)7.4 (高)10.9	外;オサエ・ナデ内;ナデ	密0.5~1mmの小石	良好	淡黄橙	完存	重さ18g
398	90-3	土師器	d74	SD402	SD1	(口)8.2 (高)11.4	外;オサエ・ナデ内;ナデ	粗0.5~2mmの小石	良好	灰黄褐	3/4	外面に薬地接合痕
399	90-2	土師器	b75	SD402	SD1	(口)8.4 (高)11.7	外;オサエ・ナデ内;ナデ	粗0.5~2mmの小石	良好	淡黄橙	完存	重さ46g
400	90-4	土師器	d74	SD402	SD1	(口)9.4 (高)11.6	外;011ナデのちヨコナデ内;ナデ	粗0.5~2mmの小石	良好	灰黄褐	7/8	
401	95-3	土師器	d75	SD402	SD1	(口)8.4 (高)11.8	外;オサエ・ナデ内;ナデ	粗0.5~2mmの小石	良好	淡黄	完存	重さ37g
402	95-6	陶器	d75	SD402	SD1	(口)8.3 (高)11.9	外;ロクロナデのち糸切り内;ロクロナデ	密0.5~3mmの小石	堅緻	灰白	口縁1/2	山皿(知多)
403	95-4	磁器	d75	SD402	SD1	(口)-	外;施軸内;施軸	密	堅緻	釉 明緑灰	口縁部片	青白磁
404	96-2	陶器	d74	SD402	SD1	(底)3.6	外;ロクロナデのち糸切り内;ロクロナデのち施軸	密0.5~1mmの小石	堅緻	釉 淡黄	底部1/3	古瀬戸
405	92-2	陶器	d74	SD402	SD1	(口)11.9	外;ロクロナデのちケズリ内;ロクロナデ	密0.5~1mmの小石	堅緻	灰	口縁3/5	経筒の蓋のようなものか

tab.18 ケカノ辻・角垣内地区出土遺物観察表(9)

番号	実測番号	器種等	出土グリット	遺構・層名など	取上時の名称	法量 (cm)	調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考
406	92-5	土師器 坏?	d75	SD402	SD1	(口)7.8 (高)2.5	外;ナデのちヨコナデ 内;ナデ	密0.5~1mmの 小石	良好	暗黄橙	口縁2/5	外面に煤、内面に炭化物?付着
407	90-6	土師器 皿	b75	SD402	SD1	(口)11.4 (高)2.5	外;オサエ・ナデ 内;ナデ	密0.5~2mmの 小石	良好	淡黄橙	完存	重さ63g
408	95-2	土師器 皿	b75	SD402	SD1	(口)14.0 (高)2.6	外;オサエ・ナデ 内;ナデ	密0.5~2mmの 小石	良好	淡黄	2/5	外面に素地接合痕
409	95-1	土師器 皿	d74	SD402	SD1	(口)16.2 (高)3.4	外;オサエ・ナデ 内;ナデ	粗0.5~2mmの 小石	良好	淡橙	3/4	外面に素地接合痕
410	95-5	磁器 椀	d75	SD402	SD1	(口)16.2	外;施軸 内;陰刻施文のち施軸	密	堅緻	釉 灰緑	口縁1/10	青磁 龍泉窯系
411	92-3	陶器 椀	b75	SD402	SD1	(口)16.2	外;オサエ・ナデ 内;施軸	密0.5~2mmの 小石	堅緻	釉 淡黄	口縁2/5	瀬戸 平椀
412	37-5	陶器 椀	d75	SD402	SD1	(高台)一	外;糸切り 内;口クロナデ	密0.5~2mmの 小石	堅緻	釉 褐灰	底部片	山茶椀(知多) 外面に墨書
413	96-4	陶器 椀	d75	SD402	SD1	(口)15.8 (高)4.8	外;口クロナデのち糸切り、高 台にヨコナデ 内;口クロナデ	密0.5~2mmの 小石	堅緻	灰白	高台完存	山茶椀(知多) 外面3方と底に煙葉の墨書
414	93-2	土師器 鉢	d75	SD402	SD1	(口)26.0	外;オサエ・ナデのちヨコナデ 内;ナデ	密0.5~2mmの 小石	良好	暗灰黄	口縁1/10	鍋の製作手法と同様
415	97-1	瓦質土器 火鉢	b75	SD402	SD1	(口)20.2 (高)10.2	外;ミガキのちスタンプ文 内;ナデ	密0.5~2mmの 小石	良好	灰白	口縁1/4	脚は3方向と見られるが、残存 は1カ所のみ
416	209 -6	土師器 小皿	c76	SK406	SK1	(口)7.3 (高)1.0	外;オサエ・ナデ 内;ナデ	密0.5~1mmの 小石	良好	淡黄	完存	重さ15g
417	209 -8	土師器 小皿	c76	SK406	SK1	(口)7.2 (高)1.1	外;オサエ・ナデ 内;ナデ	密0.5~1mmの 小石	良好	淡黄橙	完存	重さ17g
418	225- 1	土師器 小皿	c76	SK406	SK1	(口)7.4 (高)1.0	外;オサエ・ナデ 内;ナデ	密0.5~1mmの 小石	良好	淡黄	ほぼ完存	重さ19g(推定)
419	225- 8	土師器 小皿	c76	SK406	SK1	(口)7.4 (高)0.9	外;オサエ・ナデ 内;ナデ	密0.5~1mmの 小石	良好	淡黄橙	3/4	
420	225- 6	土師器 小皿	c76	SK406	SK1	(口)7.4 (高)1.2	外;オサエ・ナデ 内;ナデ	密0.5~1mmの 小石	良好	淡黄	3/4	内面のナデからは器を丸くしよ うとする意識が見られる
421	225- 9	土師器 小皿	c76	SK406	SK1	(口)7.2 (高)1.0	外;オサエ・ナデ 内;ナデ	密0.5~1mmの 小石	良好	淡黄橙	5/6	
422	225- 4	土師器 小皿	c76	SK406	SK1	(口)7.3 (高)0.9	外;オサエ・ナデ 内;ナデ	密0.5~1mmの 小石	良好	灰白	ほぼ完存	重さ15g(推定)
423	225- 2	土師器 小皿	c76	SK406	SK1	(口)7.4 (高)0.9	外;オサエ・ナデ 内;ナデ	密0.5~1mmの 小石	良好	淡黄	完存	重さ17g
424	225- 5	土師器 小皿	c76	SK406	SK1	(口)7.3 (高)0.9	外;オサエ・ナデ 内;ナデ	密0.5~1mmの 小石	良好	淡黄	6/7	
425	225- 2	土師器 小皿	c76	SK406	SK1	(口)7.5 (高)1.0	外;オサエ・ナデ 内;ナデ	密0.5~1mmの 小石	良好	淡黄	完存	重さ17g
426	209- 5	土師器 小皿	c76	SK406	SK1	(口)7.4 (高)1.0	外;オサエ・ナデ 内;ナデ	密0.5~1mmの 小石	良好	淡黄	完存	重さ16g
427	209- 7	土師器 小皿	c76	SK406	SK1	(口)7.7 (高)1.0	外;オサエ・ナデ 内;ナデ	密0.5~1mmの 小石	良好	灰白	ほぼ完存	重さ21g(推定)
428	209- 3	土師器 小皿	c76	SK406	SK1	(口)7.1 (高)1.1	外;オサエ・ナデ 内;ナデ	密0.5~1mmの 小石	良好	灰白	完存	重さ15g
429	209- 2	土師器 小皿	c76	SK406	SK1	(口)7.0 (高)1.2	外;オサエ・ナデ 内;ナデ	密0.5~1mmの 小石	良好	淡黄橙	完存	重さ17g
430	214- 3	土師器 小皿	c76	SK406	SK1	(口)7.7 (高)1.0	外;オサエ・ナデ 内;ナデ	密0.5~1mmの 小石	良好	淡黄橙	完存	重さ16g 外面底に板状圧痕
431	214- 3	土師器 小皿	c76	SK406	SK1	(口)7.2 (高)1.1	外;オサエ・ナデ 内;ナデ	密0.5~1mmの 小石	良好	淡黄橙	完存	重さ17g
432	214- 3	土師器 小皿	c76	SK406	SK1	(口)7.6 (高)1.0	外;オサエ・ナデ 内;ナデ	密0.5~1mmの 小石	良好	淡黄橙	完存	重さ19g
433	225- 2	土師器 小皿	c76	SK406	SK1	(口)7.7 (高)1.0	外;オサエ・ナデ 内;ナデ	密0.5~1mmの 小石	良好	暗黄橙	3/4	
434	209- 4	土師器 小皿	c76	SK406	SK1	(口)7.5 (高)1.0	外;オサエ・ナデ 内;ナデ	密0.5~1mmの 小石	良好	淡黄橙	完存	重さ17g
435	209- 4	土師器 小皿	c76	SK406	SK1	(口)7.0 (高)1.0	外;オサエ・ナデ 内;ナデ	密0.5~1mmの 小石	良好	淡黄橙	完存	口縁部に油煙痕付着 重さ19g
436	225- 10	土師器 小皿	c76	SK406	SK1	(口)6.8 (高)1.0	外;オサエ・ナデ 内;ナデ	密0.5~1mmの 小石	良好	淡橙	3/4	
437	224- 6	土師器 皿	c76	SK406	SK1	(口)11.5 (高)2.6	外;オサエ・ナデ 内;ナデ	密0.5~1mmの 小石	良好	淡黄	ほぼ完存	重さ56g(推定)
438	101- 1	土師器 皿	c76	SK406	SK1	(口)11.6 (高)2.8	外;オサエ・ナデ 内;ナデ	密0.5~1mmの 小石	良好	淡黄橙	完存	重さ53g 外面底に板状圧痕
439	104- 1	土師器 皿	c76	SK406	SK1	(口)11.6 (高)2.6	外;オサエ・ナデ 内;ナデ	密0.5~1mmの 小石	良好	灰白	完存	重さ59g 内面に炭化物付着
440	249- 2	土師器 皿	c76	SK406	SK1	(口)11.2 (高)2.7	外;オサエ・ナデ 内;ナデ	密0.5~1mmの 小石	良好	灰白	ほぼ完存	重さ50g(推定)
441	249- 1	土師器 皿	c76	SK406	SK1	(口)11.2 (高)2.7	外;オサエ・ナデ 内;ナデ	密0.5~2mmの 小石	良好	淡黄橙	ほぼ完存	重さ59g(推定)
442	103- 3	磁器 椀	c76	SK406	SK1	(口)一	外;陰刻蓮弁文のち施軸 内;施軸	密	堅緻	釉 緑灰	口縁部片	青磁 龍泉窯系
443	255- 2	土師器 鉢	c76	SK406	SK1	(口)29.9	外;ナデのちヨコナデ 内;ナデのちヨコナデ	密0.5~2mmの 小石	良好	淡褐	口縁1/4	外面に煤付着
444	231- 2	陶器 盤	c76	SK406	SK1	(底)12.3	外;口クロナデのちスリ 内;施軸(刷毛塗り)	密0.5~2mmの 小石	堅緻	灰白	底2/3	古瀬戸
445	103- 2	磁器 椀	c76	SK406	SK1	(底)12.3	外;陰刻直線文のち施軸 内;施軸	密	堅緻	釉 緑灰	口縁1/2	青磁
446	105- 3	陶器 皿	c76	SK406	SK1	(口)一	外;回転ナデ 内;回転ナデ	密0.5~4mmの 小石	堅緻	釉 黄灰	口縁部片	常滑
447	217- 1	陶器 皿	c76	SK406	SK1	(口)42.8	外;ナデのち回転ナデ 内;ナデのち回転ナデ	密0.5~5mmの 小石	堅緻	明赤褐	口縁2/5	常滑
448	196- 1	土師器 鉢	e60	SK395	SK1	(口)31.0	外・内;ナデ・ハケメのち ヨコナデ・ケズリ	粗0.5~2mmの 小石	良好	淡黄橙	口縁1/3	外面に煤付着
449	111- 2	瓦質土器 火鉢	c78	SK416	SK1	(口)34.4	外;ミガキのちスタンプ文 内;ミガキ	密0.5~2mmの 小石	良好	灰	口縁1/10	
450	117- 7	陶器 ねり鉢	a78	SK414	SK2	(口)30.0	外;口クロナデ 内;口クロナデ	粗0.5~4mmの 小石	やや軟	黄灰	口縁1/2	瀬戸?

tab.19 ケカノ辻・角垣内地区出土遺物観察表(10)

番号	実測番号	器種等	出土 グロット	遺構・層 名など	取上時の 名称	法量 (cm)	調整・技法の特徴	胎土	焼成 色調	残存度	備考	
451	138 -2	土師器 小皿	b76	SK408	SK1	(口)7.0 (高)1.1	外; オサエ・ナデ 内; ナデ(工具)	密0.5~3mmの 小石	良好	淡黄橙	完存	重さ18g
452	105 -2	土師器 小皿	b76	SK408	SK1	(口)7.4 (高)0.9	外; オサエ・ナデ 内; ナデ	密0.5~1mmの 小石	良好	灰白	完存	重さ16g
453	105 -1	土師器 小皿	b76	SK408	SK1	(口)7.6 (高)0.8	外; オサエ・ナデ 内; ナデ	密0.5~1mmの 小石	良好	淡黄	完存	重さ14g
454	159 -3	土師器 小皿	b76	SK408	SK1	(口)7.5 (高)0.9	外; オサエ・ナデ 内; ナデ	密0.5~1mmの 小石	良好	淡黄	ほぼ完存	重さ19g(推定)
455	137 -3	土師器 小皿	b76	SK408	SK1	(口)7.7 (高)1.0	外; オサエ・ナデ 内; ナデ	密0.5~1mmの 小石	良好	淡黄橙	完存	重さ17g
456	99-3	土師器 小皿	b76	SK408	SK1	(口)7.4 (高)1.0	外; オサエ・ナデ 内; ナデ	密0.5~1mmの 小石	良好	淡黄橙	完存	重さ16g
457	214 -6	土師器 小皿	b76	SK408	SK1	(口)7.8 (高)1.0	外; オサエ・ナデ 内; ナデ	密0.5~1mmの 小石	良好	淡黄橙	完存	重さ20g 内面に炭化物(油煙?)付着
458	214 -5	土師器 小皿	b76	SK408	SK1	(口)7.6 (高)0.9	外; オサエ・ナデ 内; ナデ	密0.5~1mmの 小石	良好	淡黄橙	完存	重さ17g 外面に紫地接合痕
459	213 -7	土師器 小皿	b76	SK408	SK1	(口)7.8 (高)1.1	外; オサエ・ナデ 内; ナデ	密0.5~1mmの 小石	良好	淡黄橙	ほぼ完存	重さ19g
460	159 -2	土師器 小皿	b76	SK408	SK1	(口)7.8 (高)1.2	外; オサエ・ナデ 内; ナデ	密0.5~1mmの 小石	良好	淡黄橙	ほぼ完存	重さ20g(推定)
461	214 -7	土師器 小皿	b76	SK408	SK1	(口)7.7 (高)1.3	外; オサエ・ナデ 内; ナデ	密0.5~1mmの 小石	良好	灰白	ほぼ完存	
462	213 -10	土師器 小皿	b76	SK408	SK1	(口)7.7 (高)1.0	外; オサエ・ナデ 内; ナデ	密0.5~1mmの 小石	良好	淡黄橙	ほぼ完存	重さ18g(推定)
463	159 -5	土師器 小皿	b76	SK408	SK1	(口)7.1 (高)0.9	外; オサエ・ナデ 内; ナデ	密0.5~1mmの 小石	良好	淡黄橙	完存	重さ15g
464	137 -4	土師器 小皿	b76	SK408	SK1	(口)7.3 (高)1.0	外; オサエ・ナデ 内; ナデ	密0.5~1mmの 小石	良好	淡黄橙	完存	重さ16g
465	213 -9	土師器 小皿	b76	SK408	SK1	(口)7.4 (高)1.0	外; オサエ・ナデ 内; ナデ	密0.5~1mmの 小石	良好	淡黄橙	ほぼ完存	重さ17g(推定)
466	214 -2	土師器 小皿	b76	SK408	SK1	(口)7.5 (高)1.1	外; オサエ・ナデ 内; ナデ	密0.5~1mmの 小石	良好	淡黄橙	完存	重さ18g
467	214 -2	土師器 小皿	b76	SK408	SK1	(口)7.2 (高)1.0	外; オサエ・ナデ 内; ナデ	密0.5~1mmの 小石	良好	淡黄	完存	重さ15g
468	225 -12	土師器 小皿	b76	SK408	SK1	(口)7.1 (高)1.1	外; オサエ・ナデ 内; ナデ	密0.5~1mmの 小石	良好	淡黄	完存	重さ17g
469	230 -3	土師器 小皿	b76	SK408	SK1	(口)7.6 (高)1.1	外; オサエ・ナデ 内; ナデ	密0.5~3mmの 小石	良好	淡黄	4/5	
470	213 -11	土師器 小皿	b76	SK408	SK1	(口)7.3 (高)1.3	外; オサエ・ナデ 内; ナデ	密0.5~1mmの 小石	良好	淡黄	ほぼ完存	重さ20g(推定)
471	213 -6	土師器 小皿	b76	SK408	SK1	(口)7.5 (高)1.3	外; オサエ・ナデ 内; ナデ	密0.5~1mmの 小石	良好	淡黄	ほぼ完存	重さ18g(推定)
472	256 -1	土師器 小皿	b76	SK408	SK1	(口)9.6 (高)1.4	外; オサエ・ナデ 内; ナデ	密0.5~1mmの 小石	良好	淡黄灰	4/5	大形小皿(中皿) 口縁部に油煙痕付着
473	255 -5	土師器 台付小皿	b76	SK408	おちこみ 3	(口)7.8 (高)2.7	外; オサエ・ナデ 内; ナデ	密0.5~1mmの 小石	良好	淡茶灰	口縁2/5	
474	215 -4	土師器 皿	b76	SK408	SK1	(口)10.7 (高)2.6	外; オサエ・ナデ 内; ナデ	密0.5~1mmの 小石	良好	淡黄橙	完存	重さ66g
475	213 -4	土師器 皿	b76	SK408	SK1	(口)11.6 (高)2.6	外; オサエ・ナデ 内; ナデ	密0.5~1mmの 小石	良好	淡黄橙	ほぼ完存	重さ58g(推定) 外面底に板状圧痕
476	213 -5	土師器 皿	b76	SK408	SK1	(口)11.0 (高)2.6	外; オサエ・ナデ 内; ナデ	密0.5~1mmの 小石	良好	淡黄	9/10	
477	215 -3	土師器 皿	b76	SK408	SK1	(口)11.2 (高)2.8	外; オサエ・ナデ 内; ナデ	密0.5~1mmの 小石	良好	淡黄	ほぼ完存	重さ60g(推定) 外面底に渦巻き状の紋目
478	98-4	土師器 皿	b76	SK408	SK1	(口)11.2 (高)2.7	外; オサエ・ナデ 内; ナデ	密0.5~1mmの 小石	良好	灰白	ほぼ完存	重さ51g(推定) 外面底に板状圧痕
479	213 -1	土師器 皿	b76	SK408	SK1	(口)10.7 (高)2.2	外; オサエ・ナデ 内; ナデ	密0.5~1mmの 小石	良好	淡黄橙	ほぼ完存	重さ46g(推定) 外面底に板状圧痕
480	215 -7	土師器 皿	b76	SK408	SK1	(口)11.0 (高)2.8	外; オサエ・ナデ 内; ナデ	密0.5~1mmの 小石	良好	灰白	7/8	外面底に渦巻き状の紋目
481	98-5	土師器 皿	b76	SK408	SK1	(口)11.4 (高)2.0	外; オサエ・ナデ 内; ナデ	密0.5~1mmの 小石	良好	灰白	完存	重さ51g 外面底に板状圧痕
482	213 -3	土師器 皿	b76	SK408	SK1	(口)10.8 (高)2.8	外; オサエ・ナデ 内; ナデ	密0.5~1mmの 小石	良好	淡黄橙	ほぼ完存	重さ51g(推定)
483	101 -3	土師器 皿	b76	SK408	SK1	(口)11.6 (高)2.6	外; オサエ・ナデ 内; ナデ	密0.5~1mmの 小石	良好	淡黄橙	完存	重さ59g 外面底に板状圧痕
484	99-1	土師器 皿	b76	SK408	SK1	(口)11.2 (高)2.5	外; オサエ・ナデ 内; ナデ	密0.5~1mmの 小石	良好	灰白	完存	重さ53g
485	213 -2	土師器 皿	b76	SK408	SK1	(口)11.2 (高)2.3	外; オサエ・ナデ 内; ナデ	密0.5~1mmの 小石	良好	淡黄橙	ほぼ完存	重さ52g
486	215 -1	土師器 皿	b76	SK408	SK1	(口)11.3 (高)2.6	外; オサエ・ナデ 内; ナデ	密0.5~1mmの 小石	良好	淡黄橙	完存	重さ50g 外面底に板状圧痕
487	98-7	土師器 皿	b76	SK408	SK1	(口)10.8 (高)2.3	外; オサエ・ナデ 内; ナデ	密0.5~1mmの 小石	良好	灰白	ほぼ完存	重さ51g(推定)
488	98-3	土師器 皿	b76	SK408	SK1	(口)10.8 (高)2.6	外; オサエ・ナデ 内; ナデ	密0.5~1mmの 小石	良好	淡黄橙	ほぼ完存	重さ52g(推定) 外面底に板状圧痕
489	101 -4	土師器 皿	b76	SK408	SK1	(口)11.6 (高)2.4	外; オサエ・ナデ 内; ナデ	密0.5~1mmの 小石	良好	淡黄橙	完存	重さ52g
490	215 -5	土師器 皿	b76	SK408	SK1	(口)10.8 (高)2.4	外; オサエ・ナデ 内; ナデ	密0.5~1mmの 小石	良好	灰白	完存	重さ53g
491	215 -6	土師器 皿	b76	SK408	SK1	(口)10.9 (高)2.5	外; オサエ・ナデ 内; ナデ	密0.5~1mmの 小石	良好	灰白	ほぼ完存	重さ47g(推定)
492	98-6	土師器 皿	b76	SK408	SK1	(口)11.4 (高)2.2	外; オサエ・ナデ 内; ナデ	密0.5~1mmの 小石	良好	淡黄橙	ほぼ完存	重さ52g(推定)
493	215 -2	土師器 皿	b76	SK408	SK1	(口)11.3 (高)2.6	外; オサエ・ナデ 内; ナデ	密0.5~1mmの 小石	良好	淡黄橙	3/4	外面底に板状圧痕
494	256 -2	土師器 皿	b76	SK408	SK1	(口)10.6 (高)4.6	外; 991・117のちヨコナデ 内; ナデのちヨコナデ	密0.5~2mmの 小石	良好	淡茶灰	口縁1/8	大皿
495	94-2	陶器 小椀	b76	SK408	おちこみ 3	(口)10.0 (高)4.6	外; 02017のち糸切りのち 施軸 内; 施軸	密0.5~1mmの 小石	堅緻	釉 淡緑黄	口縁1/3	瀬戸

tab.20 ケカノ辻・角垣内地区出土遺物観察表(11)

番号	実測番号	器種等	出土 グロット	遺構・層 名など	取上時の 名称	法量 (cm)	調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考
496	94-1	陶器 椀	b76	SK408	おちこみ 3	(口)15.9 (高)7.4	外;ロコナデ・糸切り・ズリ 高台にヨサテ・施釉	密0.5~1mmの 小石	堅緻	釉 淡緑黄	口縁1/3	瀬戸 平椀
497	93-1	陶器 椀	b76	SK408	SK1	(口)15.6	外;ロコナデのちズリのち施 釉内;施釉	密0.5~1mmの 小石	堅緻	釉 淡緑	口縁3/10	瀬戸 平椀
498	98-1	陶器 椀	b76	SK408	おちこみ	(口)18.2	外;ロコナデのちズリのち施 釉内;施釉	密0.5~1mmの 小石	堅緻	釉 灰緑	口縁1/6	瀬戸 平椀
499	252 -4	陶器 ねり鉢	b76	SK408	SK1	(口)-	外;ロコナデ 内;ロコナデ	密0.5~4mmの 小石	堅緻	淡灰	口縁部片	瀬戸
500	99-4	磁器 瓶	b76	SK408	SK1	-	外;陰刻梅状文のち施釉 内;施釉	密	堅緻	釉 明緑灰	体部片	青白磁 梅瓶
501	100 -1	陶器 鉢	b76	SK408	おちこみ	(口)22.0	外;ロコナデのちズリのち施 釉内;施釉	密0.5~2mmの 小石	堅緻	釉 淡緑黄	口縁1/6	瀬戸
502	98-2	陶器 鉢	b76	SK408	SK1	(口)24.2	外;ロコナデのちズリのち施 釉内;施釉	密0.5~1mmの 小石	堅緻	釉 淡黄	口縁1/4	瀬戸 折縁深皿
503	93-3	陶器 鉢	b76	SK408	SK1	(口)28.0	外;ロコナデのちズリのち施 釉内;施釉	密0.5~2mmの 小石	堅緻	釉 淡緑黄	口縁1/8	瀬戸 折縁深皿
504	100 -2	陶器 鉢	b76	SK408	SK1	(口)32.3	外;ロコナデのちズリのち施 釉内;施釉	密0.5~2mmの 小石	堅緻	釉 淡黄	口縁1/4	瀬戸 折縁深皿
505	102 -1	陶器 鉢	b76	SK408	SK1	(口)27.9 (高)8.0	外;ロコナデのち糸切りのち ズリのち施釉内;施釉	密0.5~3mmの 小石	堅緻	釉 淡黄	口縁1/7	瀬戸 折縁深皿 2片を図上復元
506	102 -2	陶器 鉢	b76	SK408	SK1	(口)30.6	外;ロコナデのちズリのち施 釉内;施釉	密0.5~2mmの 小石	堅緻	釉 淡緑黄	口縁1/8	瀬戸 3足?(1方のみ残存) 2片を図上復元
507	255 -1	土師器 鉢	b76	SK408	SK1	(口)30.6	外;ハコナデのちヨコナデ 内;ナデのちヨコナデ	密0.5~1mmの 小石	良好	淡褐	口縁1/5	外面に煤付着
508	255 -3	土師器 鉢	b76 c76	SK408 SK406	ハコナ SK1	(口)34.0	外;ハコナデのちヨコナデ・ズ リ内;ナデのちヨコナデ	密0.5~2mmの 小石	良好	淡黄灰	口縁1/5	口縁部に焼成前穿孔(2個1対 ?)あり
509	94- 3-4	瓦質土師 火鉢	b76	SK408	SK1	(口)43.6	外;ミガキのちスタンプ文 内;ナデ	密0.5~2mmの 小石	良好	明褐灰	底部1/5	土師質を呈す 数片を図上復元 3足?(1方のみ残存)
510	220 -3	土師器 小皿	c78	SZ409	おちこみ 2	(口)7.8 (高)1.0	外;オサエ・ナデ 内;ナデ	密0.5~1mmの 小石	良好	淡黄	完存	重さ26g
511	223 -6	土師器 小皿	b78	SZ409	SK1	(口)7.7 (高)1.0	外;オサエ・ナデ 内;ナデ	密0.5~1mmの 小石	良好	淡黄橙	4/5	外面底に粗粒底付着
512	120 -2	土師器 小皿	c78	SZ409	おちこみ 2	(口)8.4 (高)1.5	外;ハコナデのちヨコナデ 内;ナデのちヨコナデ	密0.5~1mmの 小石	良好	灰白	11/12	口縁部に油煙底付着
513	220 -2	土師器 小皿	c78~ 79	SZ409	SK1の 2	(口)7.6 (高)1.0	外;オサエ・ナデ 内;ナデ	密0.5~1mmの 小石	良好	灰白	完存	重さ22g
514	140 -1	土師器 小皿	c78	SZ409	SK1	(口)7.8 (高)1.0	外;オサエ・ナデ 内;ナデ	密0.5~1mmの 小石	良好	淡黄	1/2	
515	110 -4	土師器 小皿	b77	SZ409	SK1 西土手	(口)7.8 (高)1.5	外;ロコナデのち糸切り 内;ロコナデ	密0.5~1mmの 小石	堅緻	黄灰	口縁1/4	山皿
516	220 -7	土師器 皿	b78	SZ409	SK1 右群	(口)11.2 (高)2.6	外;オサエ・ナデ 内;ナデ	密0.5~2mmの 小石	良好	淡黄橙	完存	
517	220 -5	土師器 皿	b78	SZ409	SK1土 器群2-1	(口)11.3 (高)2.5	外;オサエ・ナデ 内;ナデ	密0.5~1mmの 小石	良好	淡黄	5/6	
518	80-1	土師器 皿	b78	SZ409	SK1	(口)11.5 (高)2.7	外;オサエ・ナデ 内;ナデ	密0.5~2mmの 小石	良好	淡黄	完存	外面底に板状圧痕 重さ53g
519	221 -4	土師器 皿	b78	SZ409	SK1土 器群2-1	(口)11.1 (高)2.8	外;オサエ・ナデ 内;ナデ	密0.5~1mmの 小石	良好	淡黄橙	3/4	
520	220 -4	土師器 皿	b78	SZ409	SK1土 器群2-1	(口)11.1 (高)2.5	外;オサエ・ナデ 内;ナデ	密0.5~1mmの 小石	良好	淡黄橙	完存	外面底に素地接合痕 重さ59g
521	220 -6	土師器 皿	b78	SZ409	SK1 右群	(口)12.1 (高)2.5	外;オサエ・ナデ 内;ナデ	密0.5~3mmの 小石	良好	淡黄橙	7/8	
522	195 -2	磁器 合子	b78	SZ409	おちこみ 7.8	(上端) 7.8	外;放射状陰刻文のち施釉 内;ロコナデ	密	堅緻	釉 淡緑灰	蓋上部 1/3	青白磁
523	121 -4	磁器 茶入	b78	SZ409	おちこみ 7.8	(体上) 7.8	外;施釉 内;施釉	密	堅緻	釉 淡緑	体部上半 1/5	青磁
524	124 -1	磁器 椀	b78	SZ409	おちこみ 5.0	(高台) 5.0	外;ズリ・陰刻文のち施釉 内;陰刻文のち施釉	密	堅緻	釉 明青灰	高台完存	青磁 同安窯系
525	114 -2	磁器 椀	c77	SZ409	おちこみ (土坑群) 4.8	(高台上) 4.8	外;施釉 内;陰刻文のち施釉	密	堅緻	釉 淡青白	椀下部 1/5	青白磁
526	118 -2	磁器 椀	c78	SZ409	おちこみ 4.8	(高台) 4.8	外;ズリのち施釉 内;陽刻文のち施釉	密	堅緻	釉 明緑灰	高台1/4	青白磁
527	118 -2	磁器 椀	c78	SZ409	おちこみ	(口)-	外;陰刻蓮弁文のち施釉 内;施釉	密	堅緻	釉 緑灰	口縁部片	青磁 龍泉窯系
528	110 -6	磁器 椀	b77	SZ409	おちこみ	(口)-	外;陰刻蓮弁文のち施釉 内;施釉	密	堅緻	釉 灰緑	口縁部片	青磁 龍泉窯系
529	110 -5	陶器 椀	b77	SZ409	おちこみ	(口)15.2	外;ズリのち施釉 内;施釉	密0.5~1mmの 小石(多)	堅緻	釉 淡緑黄	口縁1/3	瀬戸 平椀
530	118 -1	土師器 椀	c78	SZ409	おちこみ	(口)18.2 (高)10.1	外;ハケメのちヨコナデ 内;ナデのちヨコナデ	粗0.5~2mmの 小石	良好	淡橙	高台3/4	
531	111 -1	陶器 盤	b77	SZ409	おちこみ	(口)30.6	外;ズリのち施釉 内;施釉	密0.5~2mmの 小石	堅緻	釉 灰白	口縁1/8	瀬戸 折縁深皿
532	110 -7	陶器 鉢	b77	SZ409	おちこみ	(口)16.2	外;ロコナデのち施釉 内;キザミのち施釉	密0.5~1mmの 小石	堅緻	釉 灰白	口縁1/8	瀬戸
533	123 -1	土師器 鉢	c79	SZ409	SK1の 2	(口)21.0	外;ハコナデのちヨコナデ・ズ リ内;ナデのちヨコナデ・ズ リ	密0.5~2mmの 小石	良好	灰黄	口縁1/3	
534	120 -3	土師器 鉢	b78	SZ409	SK1	(口)22.0	外;ハコナデのちヨコナデ・ズ リ内;ナデのちヨコナデ・ズ リ	密0.5~2mmの 小石	良好	淡黄	口縁9/10	外面に煤付着
535	112 -6	土師器 小形羽釜	c77	SZ409	おちこみ	(底)9.2	外;ナデのちヨコナデ 内;ナデのちヨコナデ	密0.5~1mmの 小石	良好	灰白	口縁ほぼ 完存	ミニチュア?
536	251 -3	鉄製 鍋	c77	SZ409	おちこみ	(口)-					口縁部片	
537	113 -1	瓦質土師 火舎	c77	SZ409	おちこみ	(口)29.0	外;ミガキのちスタンプ文 内;ナデのちミガキ	粗0.5~3mmの 小石	良好	灰黄	口縁1/4	土師質を呈す 2片
538	218 -1	陶器 鉢	c77	SZ409	おちこみ	(体上)	外;ナデのちスタンプ文 内;オサエ・ナデ	粗0.5~7mmの 小石	堅緻	暗赤褐	体部片	常滑
539	206 -9	土師器 小皿	d78	SD412	SD1	(口)7.8 (高)1.3	外;オサエ・ナデ 内;ナデ	密0.5~1mmの 小石	良好	灰白	5/6	
540	207 -4	土師器 小皿	d78	SD412	SD1	(口)7.6 (高)1.1	外;オサエ・ナデ 内;ナデ	密0.5~1mmの 小石	良好	淡黄	完存	重さ20g

tab.21 ケカノ辻・角垣内地区出土遺物観察表(12)

番号	実測 番号	器種等	出土 グロット	遺構・層 名など	取上時の 名称	法量 (c.m)	調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考
541	206 -5	土師器 小皿	d78	SD412	SD1	(口)7.8 (高)1.1	外;オサエ・ナデ 内;ナデ	密0.5~1mmの 小石	良好	淡黄	ほぼ完存	重さ23g(推定)
542	206 -2	土師器 小皿	d78	SD412	SD1	(口)7.9 (高)0.9	外;オサエ・ナデ 内;ナデ	密0.5~1mmの 小石	良好	灰白	ほぼ完存	重さ25g(推定)
543	206 -1	土師器 小皿	d78	SD412	SD1	(口)7.4 (高)1.0	外;オサエ・ナデ 内;ナデ	密0.5~1mmの 小石	良好	淡黄	1/2	
544	115 -9	土師器 小皿	d78	SD412	SD1 No.29	(口)7.6 (高)1.0	外;オサエ・ナデ 内;ナデ	密0.5~2mmの 小石	良好	淡黄橙	完存	重さ20g
545	207 -5	土師器 小皿	d78	SD412	SD1	(口)7.8 (高)1.0	外;オサエ・ナデ 内;ナデ	密0.5~1mmの 小石	良好	淡黄	ほぼ完存	重さ20g(推定) 内面のナデ工具は二枚目か
546	112 -3	土師器 小皿	d78	SD412	SD1	(口)7.9 (高)1.3	外;オサエ・ナデ 内;ナデ	密0.5~1mmの 小石	良好	淡黄	ほぼ完存	重さ22g(推定)
547	206 -8	土師器 小皿	d78	SD412	SD1	(口)7.7 (高)1.0	外;オサエ・ナデ 内;ナデ	密0.5~1mmの 小石	良好	淡黄	ほぼ完存	重さ22g(推定)
548	204 -2	土師器 小皿	d78	SD412	SD1	(口)7.7 (高)1.1	外;オサエ・ナデ 内;ナデ	密0.5~1mmの 小石	良好	淡黄橙	完存	重さ22g
549	223 -8	土師器 小皿	d78	SD412	SD1	(口)7.6 (高)1.2	外;オサエ・ナデ 内;ナデ	密0.5~1mmの 小石	良好	灰白	1/3	外面に素地接合痕
550	115 -2	土師器 小皿	d78	SD412	SD1 No.10	(口)7.6 (高)1.3	外;オサエ・ナデ 内;ナデ	密0.5~1mmの 小石	良好	淡黄	9/10	
551	115 -5	土師器 小皿	d78	SD412	SD1 No.24	(口)7.5 (高)1.0	外;オサエ・ナデ 内;ナデ	密0.5~1mmの 小石	良好	淡黄橙	9/10	
552	115 -5	土師器 小皿	d78	SD412	SD1 No.12	(口)7.7 (高)1.1	外;オサエ・ナデ 内;ナデ	密0.5~1mmの 小石	良好	淡黄	2/3	
553	206 -3	土師器 小皿	d78	SD412	SD1	(口)7.4 (高)1.7	外;オサエ・ナデ 内;ナデのちヨコナデ	密0.5~1mmの 小石	良好	灰白	1/2	口縁に油煙痕付着
554	213 -2	土師器 皿	d78	SD412	SD1 No.4	(口)11.6 (高)2.0	外;オサエ・ナデ 内;ナデ	密0.5~1mmの 小石	良好	淡黄	2/3	外面に素地接合痕
555	213 -3	土師器 皿	d78	SD412	SD1 No.30	(口)11.1 (高)2.3	外;オサエ・ナデ 内;ナデ	密0.5~1mmの 小石	良好	灰白	完存	重さ52g
556	203 -3	土師器 皿	d78	SD412	SD1 No.16	(口)11.3 (高)2.3	外;オサエ・ナデ 内;ナデ	密0.5~2mmの 小石	良好	淡黄	4/5	
557	223 -1	土師器 皿	d78	SD412	SD1 No.3	(口)11.3 (高)2.6	外;オサエ・ナデ 内;ナデ	密0.5~2mmの 小石	良好	淡黄	1/2	外面底に板状圧痕
558	115 -4	土師器 皿	d78	SD412	SD1 No.23	(口)11.8 (高)2.6	外;オサエ・ナデ 内;ナデ	密0.5~1mmの 小石	良好	灰白	ほぼ完存	外面に素地接合痕 重さ54g(推定)
559	115 -7	土師器 皿	d78	SD412	SD1 No.26	(口)11.8 (高)2.5	外;オサエ・ナデ 内;ナデ	密0.5~1mmの 小石	良好	淡黄	2/5	
560	121 -1	土師器 皿	a80	SK421	SK1 B群	(口)11.4 (高)2.5	外;オサエ・ナデ 内;ナデ	密0.5~1mmの 小石	良好	灰白	完存	重さ64g
561	207 -7	土師器 皿	d78	SD412	SD1	(口)11.5 (高)2.3	外;オサエ・ナデ 内;ナデ	密0.5~1mmの 小石	良好	灰白	4/5	
562	223 -5	土師器 皿	d78	SD412	SD1 No.14	(口)11.0 (高)2.7	外;オサエ・ナデ 内;ナデ	密0.5~2mmの 小石	良好	灰白	完存	重さ45g
563	203 -2	土師器 皿	d78	SD412	SD1 No.15	(口)11.6 (高)2.5	外;オサエ・ナデ 内;ナデ	密0.5~1mmの 小石	良好	灰白	口縁完存	
564	203 -1	土師器 皿	d78	SD412	SD1 No.15	(口)11.6 (高)2.4	外;オサエ・ナデ 内;ナデ	密0.5~2mmの 小石	良好	淡黄	ほぼ完存	重さ52g(推定) 外面底に板状圧痕
565	203 -4	土師器 皿	d78	SD412	SD1 No.17	(口)11.6 (高)2.5	外;オサエ・ナデ 内;ナデ	密0.5~2mmの 小石	良好	灰白	2/3	
566	203 -5	土師器 皿	d78	SD412	SD1 No.18	(口)11.4 (高)2.6	外;オサエ・ナデ 内;ナデ	密0.5~1mmの 小石	良好	灰白	5/6	
567	207 -6	土師器 皿	d78	SD412	SD1 No.22	(口)11.9 (高)2.7	外;オサエ・ナデ 内;ナデ	密0.5~1mmの 小石	良好	淡黄	ほぼ完存	重さ70g(推定)
568	115 -6	土師器 皿	d78	SD412	SD1 No.25	(口)11.8 (高)2.8	外;オサエ・ナデ 内;ナデ	粗0.5~2mmの 小石	良好	灰白	完存	重さ59g
569	115 -1	土師器 皿	d78	SD412	SD1 No.7	(口)11.8 (高)2.7	外;オサエ・ナデ 内;ナデ	密0.5~2mmの 小石	良好	淡黄橙	ほぼ完存	重さ64g(推定)
570	115 -8	土師器 皿	d78	SD412	SD1	(口)11.5 (高)2.7	外;オサエ・ナデ 内;ナデ	密0.5~2mmの 小石	良好	淡黄	口縁完存	
571	223 -4	土師器 皿	d78	SD412	SD1 No.5	(口)11.2 (高)2.5	外;オサエ・ナデ 内;ナデ	密0.5~2mmの 小石	良好	淡黄	4/5	外面底に板状圧痕
572	127 -1	土師器 鍋	d78	SD412	SD1 No.11	(口)32.2	外;オサエ・ナデ 内;ナデのちヨコナデ	粗0.5~3mmの 小石	良好	淡黄	口縁5/12	外面に煤付着
573	252 -5	陶器 ねり鉢	d78	SD412	SD1	(口)29.8	外;クロナデのちケズリ 内;クロナデ	密0.5~4mmの 小石	堅緻	淡灰	口縁1/8	瀬戸
574	221 -2	土師器 小皿	c77	SK410	SK1	(口)9.0 (高)1.4	外;オサエ・ナデ 内;ナデ	粗0.5~1mmの 小石	良好	暗橙	1/3	口縁部に油煙痕付着
575	223 -7	土師器 小皿	d77	SK410	SK1	(口)9.3 (高)1.2	外;オサエ・ナデ 内;ナデ	粗0.5~1mmの 小石	良好	暗橙	5/12	
576	221 -6	土師器 小皿	d77	SK410	SK1	(口)11.6 (高)2.5	外;オサエ・ナデ 内;ナデ	密0.5~1mmの 小石	良好	淡黄橙	3/4	外面底に板状圧痕
577	116 -4	磁器 小皿	a79	SK420	SK1	(底)3.0	外;ケズリ出し高台のち施 釉内;施釉	密	堅緻	釉 明緑灰	高台3/4	青磁
578	116 -2	土師器 坏	a79	SK420	SK1	(口)14.4 (高)2.7	外;オサエ・ナデ 内;ナデのちヨコナデ	粗0.5~2mmの 小石	良好	橙	口縁2/5	
579	116 -1	土師器 坏	a79	SK420	SK1	(口)35.9	外;ハケメのちヨコナデ 内;ナデのちヨコナデ	密0.5~3mmの 小石	良好	淡黄橙	口縁1/10	
580	116 -5	陶器 ねり鉢	a79	SK420	SK1	(口)30.0	外;クロナデ 内;クロナデ	粗0.5~5mmの 小石	堅緻	灰黄	口縁1/10	瀬戸
581	125 -2	土製 鍾	a80	SK421	SK1	(幅)1.6	外;オサエ・ナデ 内;円錐状具の抜き痕	密0.5~1mmの 小石	良好	淡黄橙	端部欠損	
582	125 -3	石製 鍾	a80	SK421	SK1	(口)-	外;ケズリ 内;ケズリ				口縁部片	滑石製 外面に煤付着 側面に2次加工痕あり
583	125 -4	土師器 小皿	a80	SK421	SK1	(口)7.0 (高)1.0	外;オサエ・ナデ 内;ナデ	密0.5~1mmの 小石	良好	淡黄橙	完存	重さ14g
584	124 -4	土師器 小皿	a80	SK421	SK1 B群	(口)7.4 (高)1.0	外;オサエ・ナデ 内;ナデ	密0.5~1mmの 小石	良好	淡黄橙	完存	重さ19g
585	124 -2	土師器 小皿	a80	SK421	SK1 B群	(口)7.3 (高)1.2	外;オサエ・ナデ 内;ナデ	密0.5~2mmの 小石	良好	灰白	完存	重さ18g

tab.22 ケカノ辻・角垣内地区出土遺物観察表(13)

番号	実測 番号	器種等	出土 グロット	遺構・層 名など	取上時の 名	法量 (cm)	調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考
586	129 -1	土師器 皿	a80	SK421	SK1 B群	(口)11.2 (高)2.5	外;オサエ・ナデ 内;ナデ	粗0.5~2mmの 小石	良好	淡黄	完存	重さ49g
587	129 -2	土師器 皿	a80	SK421	SK1 B群	(口)11.5 (高)2.4	外;オサエ・ナデ 内;ナデ	粗0.5~1mmの 小石	良好	淡黄	完存	外面底に板状圧痕
588	125 -1	土師器 鍋	a80	SK421	SK1	(口)9.2	外;オサエのちヨコナデ 内;ナデのちヨコナデ	密0.5~1mmの 小石	良好	淡黄橙	口縁1/6	ミニチュア
589	125 -5	陶器 小鉢	a80	SK421	SK1	(口)12.2	外;ロクロナデ 内;ロクロナデ	密0.5~1mmの 小石	堅緻	灰白	口縁1/8	片口付 外面に釉(自然?)
590	124 -5	陶器 入子	a80	SK421	SK1	(口)5.6 (高)2.2	外;ロクロナデのち糸切りのち 輪花 内;ロクロナデ	密0.5~1mmの 小石	堅緻	灰白	口縁1/2	瀬戸?
591	124 -6	陶器 小杯	a80	SK421	SK1	(底)2.1	外;ロクロナデのち糸切りのち 施釉 内;ロクロナデ	密0.5~1mmの 小石	堅緻	暗赤褐	1/2	
592	129 -6	磁器 皿	a80	SK421	SK1	(底)3.4	外;ロクロナデのちスリのち施 釉 内;陸刻文のち施釉	密	堅緻	釉 白青	底部1/2	青白磁
593	129 -3	土師器 椀	a80	SK421	SK1	(口)16.1	外;オサエのちヨコナデ 内;ハケメのちヨコナデ	密0.5~2mmの 小石	良好	淡黄	口縁3/7	
594	129 -4	陶器 鉢	a80	SK421	SK1	(口)-	外;ヨコナデ 内;ヨコナデ	密0.5~2mmの 小石	堅緻	黄灰	口縁部片	常滑
595	124 -7	瓦質土器 火鉢	a80	SK421	SK1	(口)-	外;スタンプ文・磨耗 内;磨耗	粗0.5~2mmの 小石	良好	淡黄	口縁部片	土師質
596	123 -2	陶器 割皿	a80	SK421	SK1 C群	(口)15.3 (高)3.4	外;ロクロナデのち糸切り 内;ロクロナデのち卸目	密0.5~2mmの 小石	堅緻	釉 淡黄	口縁2/5	外面底に板状圧痕
597	251 -4	鉄製 小刀	a80	SK421	SK1 B群	(長)24.1	刃部は使用にためかかなり すり減っている				ほぼ完存	
598	124 -9	石製 砥石	a80	SK421	SK1	(幅)2.9	全面に使用痕あり				約1/2?	粘板若裂?
599	117 -2	土製 鉢	b79	SK423	SK1	(幅)1.4	外;オサエ・ナデ 内;円棒状工具の抜き痕	粗0.5~2mmの 小石	良好	灰白	約1/2?	
600	117 -3	土製 鉢	b79	SK423	SK1	(幅)0.8	外;オサエ・ナデ 内;円棒状工具の抜き痕	密0.5~1mmの 小石	良好	暗橙	約1/2?	
601	117 -1	土製 鉢	b79	SK423	SK1	(幅)1.6 (長)5.9	外;オサエ・ナデ 内;円棒状工具の抜き痕	密0.5~1mmの 小石	良好	暗黄橙	ほぼ完存	
602	129 -9	土製 鉢	b79	SK423	SK1	(幅)2.0 (長)4.8	外;オサエ・ナデ 内;円棒状工具の抜き痕	密0.5~1mmの 小石	良好	淡黄	完存	重さ15g
603	129 -8	土師器 鉢	b79	SK423	SK1	(口)13.0	外;ハケメのちヨコナデ 内;板ナデのちヨコナデ	密0.5~1mmの 小石	良好	淡赤橙	口縁1/3	
604	121 -2	土師器 皿	b79	SK423	SK1	(口)16.4	外;オサエのちヨコナデ 内;ナデのちヨコナデ	密0.5~1mmの 小石	良好	橙	口縁1/6	外面に煤付着
605	126 -2	土師器 小皿	b80	SK425	SK1の1 No.3	(口)8.4 (高)1.7	外;オサエのちヨコナデ 内;ナデのちヨコナデ	密0.5~2mmの 小石	良好	淡黄橙	口縁3/5	
606	126 -2	土師器 小皿	b80	SK425	SK1	(口)9.2 (高)1.6	外;オサエのちヨコナデ 内;ナデのちヨコナデ	粗0.5~2mmの 小石	良好	暗橙	口縁5/6	
607	126 -1	土師器 皿	b80	SK425	SK1の1 No.1	(口)14.8 (高)2.7	外;オサエのちヨコナデ 内;ナデのちヨコナデ	粗0.5~2mmの 小石	良好	淡黄橙	口縁3/4	
608	126 -4	土師器 鍋	b80	SK425	SK1の1 No.4	(口)22.2 (高)12.0	外;オサエのちヨコナデ・スリ 内;オサエのちヨコナデ・スリ	粗0.5~2mmの 小石	良好	淡黄橙	体部1/3	外面に煤付着
609	205 -10	土師器 小皿	c79	SK426	SK1の2 No.15	(口)8.0 (高)0.9	外;オサエ・ナデ 内;ナデ	粗0.5~2mmの 小石(多)	良好	淡黄橙	3/4	
610	204 -4	土師器 小皿	c79	SK426	SK1の2 No.12	(口)9.0 (高)1.1	外;オサエ・ナデ 内;ナデ	粗0.5~2mmの 小石(多)	良好	淡黄	ほぼ完存	重さ22g(推定)
611	204 -1	土師器 小皿	c79	SK426	SK1の2 No.7	(口)9.0 (高)1.0	外;オサエ・ナデ 内;ナデ	粗0.5~2mmの 小石(多)	良好	淡黄橙	ほぼ完存	重さ23g(推定)
612	205 -7	土師器 小皿	c79	SK426	SK1の2 No.12	(口)8.2 (高)1.1	外;オサエ・ナデ 内;ナデ	粗0.5~2mmの 小石(多)	良好	淡黄橙	ほぼ完存	重さ21g(推定)
613	205 -7	土師器 小皿	c79	SK426	SK1の2 No.3	(口)7.9 (高)1.1	外;オサエ・ナデ 内;ナデ	粗0.5~1mmの 小石	良好	淡黄橙	完存	重さ23g
614	205 -1	土師器 皿	c79	SK426	SK1の2 No.4	(口)11.6 (高)2.2	外;オサエ・ナデ 内;ナデ	粗0.5~2mmの 小石(多)	良好	灰白	7/10	外面底に板状圧痕
615	205 -2	土師器 皿	c79	SK426	SK1の2 No.5	(口)11.6 (高)2.5	外;オサエ・ナデ 内;ナデ	粗0.5~2mmの 小石	良好	淡黄	ほぼ完存	重さ55g(推定) 外面底に 板状圧痕 外面に裏地接合痕
616	204 -7	土師器 皿	c79	SK426	SK1の2 No.9	(口)11.9 (高)2.6	外;オサエ・ナデ 内;ナデ	粗0.5~2mmの 小石(多)	良好	淡黄	ほぼ完存	外面底に板状圧痕 外面に裏地接合痕
617	205 -4	土師器 皿	c79	SK426	SK1の2 No.16	(口)11.6 (高)2.2	外;オサエ・ナデ 内;ナデ	粗0.5~2mmの 小石	良好	淡黄	ほぼ完存	外面に裏地接合痕
618	204 -3	土師器 皿	c79	SK426	SK1の2 No.13	(口)11.3 (高)2.6	外;オサエ・ナデ 内;ナデ	粗0.5~2mmの 小石(多)	良好	淡黄	1/2	
619	204 -9	土師器 皿	c79	SK426	SK1の2 No.8	(口)11.6 (高)2.4	外;オサエ・ナデ 内;ナデ	粗0.5~2mmの 小石(多)	良好	淡黄	1/2	
620	131 -4	磁器 椀	b80	SK427	SK2	(口)15.2	外;施釉 内;陸刻文のち施釉	密	堅緻	釉 緑灰	口縁1/12	青磁 龍泉系
621	130 -1	土師器 皿	b80	SK427	SK2 No.1	(口)14.9 (高)3.5	外;オサエのちヨコナデ 内;ナデのちヨコナデ	密0.5~2mmの 小石	良好	淡黄橙	3/4	
622	130 -4	土師器 皿	b80	SK427	SK2 No.3	(口)15.3 (高)3.2	外;オサエのちヨコナデ 内;ナデのちヨコナデ	粗0.5~2mmの 小石	良好	暗黄橙	3/4	
623	131 -2	土師器 小皿	a81	SK429	SK1	(口)7.3 (高)1.2	外;オサエ・ナデ 内;ナデ	密0.5~1mmの 小石	良好	淡黄橙	1/3	
624	131 -1	土師器 小皿	a81	SK429	SK1	(口)8.7 (高)1.1	外;オサエ・ナデ 内;ナデ	密0.5~1mmの 小石	良好	暗橙	完存	外面底に成形時の螺旋状オサエ 痕明瞭 重さ23g
625	130 -6	土師器 皿	a81	SK429	SK1	(口)13.1 (高)2.9	外;オサエ・ナデ 内;ナデ	密0.5~1mmの 小石	良好	灰白	1/3	
626	131 -5	土師器 鉢	a81	SK429	SK1	(口)23.1	外;ハケメのちヨコナデ 内;ハケメのちヨコナデ	密0.5~2mmの 小石	良好	淡黄橙	口縁1/8	混入遺物
627	132 -3	土師器 鉢?	b82	SK431	SK1	(口)-	外;オサエのちヨコナデ 内;ナデのちヨコナデ	密0.5~1mmの 小石	良好	淡黄橙	口縁部片	
628	132 -1	磁器 椀	b82	SK431	SK1	(底)6.2	外;ケズリ出し高台のち施 釉 内;施釉	密	堅緻	釉 灰	底部片	青磁 2次的被熱
629	131 -7	磁器 壺?	b82	SK431	SK1	-	外;隔刻花文のち施釉 内;施釉	密	堅緻	釉 明緑灰	体部片	青白磁
630	134 -5	磁器 小杯	b82	SK432	SK2	(底)4.2	外;ロクロナデのち施文 内;施釉	密	堅緻	釉 灰白	底部1/8	白磁

tab.23 ケカノ辻・角垣内地区出土遺物観察表(14)

番号	実測番号	器種等	出土グロット	遺構・層名など	取上時の名称	法量 (cm)	調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考
631	134-7	土師器 小皿	b82	SK432	SK2	(口)9.7 (高)1.0	外; オサエ・ナデ 内; ナデ	粗0.5~1mmの小石	良好	淡黄橙	4/5	
632	134-6	土師器 小皿	b82	SK432	SK2	(口)11.6 (高)2.6	外; オサエ・ナデ 内; ナデ	粗0.5~3mmの小石	良好	灰白	1/3	
633	130-3	土師器 皿	b82	SK432	SK2	(口)15.0 (高)2.9	外; ヲサエ・ナデのちヨコナデ 内; ナデのちヨコナデ	粗0.5~2mmの小石	良好	暗黄橙	1/4	
634	134-8	土製 鐘	b82	SK433	SK3	(幅)1.7	外; オサエ・ナデ 内; 円錐状工具の抜き痕	粗0.5~2mmの小石	良好	灰白	端部欠損	
635	135-1	陶器 碗	b83	SK433	SK1	(口)16.0	外; ロクロナデ 内; ロクロナデ	粗0.5~1mmの小石	堅緻	灰	口縁1/6	山茶碗
636	135-2	陶器 皿	b83	SK433	SK1	(高台)7.1	外; ロクロナデのちスリのち高台にヨコナデ 内; 施釉	密0.5~1mmの小石	堅緻	釉 明緑灰 灰白	高台1/4	灰陶器(K14)
637	130-5	土師器 皿	c81	SK430	SK1 No.1	(口)12.0 (高)2.6	外; オサエ・ナデ 内; ナデ	密0.5~1mmの小石	良好	灰白		
638	197-1	土師器 銅	H88	SK443	SK3	(口)39.2	外; ヲサエ・ナデのちヨコナデ・スリ 内; ナデのちヨコナデ・スリ	密0.5~2mmの小石	良好	暗黄橙	口縁2/5	外面に煤付着
639	190-2	陶器 碗	b83	SK434	pit No.1	(口)15.3 (高)5.7	外; ロクロナデのちスリ切りのち高台にヨコナデ 内; ロクロナデ	粗0.5~6mmの小石	堅緻	灰白	完存	山茶碗(澁美) 外面に墨書絵画 底部に墨書「太郎」?
640	136-1	陶器 碗	I84	SD435	SD1	(口)15.6 (高)5.8	外; ロクロナデのちスリ切りのち高台にヨコナデ 内; ロクロナデ	粗0.5~3mmの小石	やや軟	灰白	5/12	山茶碗(澁美)
641	153-5	磁器 碗	I85	SK440	SK1 1区	(口)15.2	外; 陸奥運弁文のち施釉 内; 施釉	密	堅緻	釉 明緑灰	口縁1/6	青磁 龍泉窯系
642	136-2	土師器 皿	O84	SD437	SD2	(口)11.1 (高)2.7	外; オサエ・ナデ 内; ナデ	密0.5~1mmの小石	良好	灰白	3/4	
643	128-3	土師器 銅	O86	SD437	SD3	(口)27.0	外; ヲサエ・ナデのちヨコナデ 内; ヲサエ・ナデのちヨコナデ	粗0.5~2mmの小石	良好	淡黄橙	口縁1/5	
644	153-3	陶器 小皿	I84	SE436	SE1	(口)9.2 (高)2.9	外; ロクロナデのちスリ切りのち高台にヨコナデ 内; ロクロナデ	粗0.5~2mmの小石	堅緻	黄灰	完存	山皿(知多)
645	153-2	陶器 小皿	I84	SE436	SE1	(口)9.2 (高)2.8	外; ロクロナデのちスリ切りのち高台にヨコナデ 内; ロクロナデ	密0.5~2mmの小石	堅緻	灰白	口縁2/3	山皿(知多) 内外面一部黒染
646	142-1	磁器 碗	I84	SE436	SK1	(口)ー	外; 施釉 内; 施釉	密	堅緻	釉 灰白	口縁部片	白磁
647	142-1	磁器 碗	I84	SE436	SE1	(高台)ー	外; ロクロナデのちスリ切りのち高台にヨコナデ 内; 施釉	密	堅緻	釉 灰白	高台部片	白磁
648	142-5	土師器 皿	I84	SE436	SK1	(口)15.2 (高)2.2	外; ヲサエ・ナデのちヨコナデ 内; ナデのちヨコナデ	粗0.5~2mmの小石	良好	淡黄橙	口縁1/4	内外面一部黒染
649	140-5	土師器 皿	I84	SE436	SK1	(口)11.2 (高)2.2	外; オサエ・ナデ 内; ナデ	粗0.5~2mmの小石	良好	灰白	完存	重さ47g
650	140-4	土師器 皿	I84	SE436	SK1	(口)10.6 (高)2.5	外; オサエ・ナデ 内; ナデ	粗0.5~2mmの小石	良好	淡黄	完存	
651	153-1	陶器 碗	I84	SE436	SK1	(口)15.6 (高)5.5	外; ロクロナデのちスリ切りのち高台にヨコナデ 内; ロクロナデ	密0.5~2mmの小石	堅緻	灰白	口縁1/3	山茶碗(瀬戸?) 輪花あり 内面に自然釉
652	128-1	磁器 碗	I84	SE436	SK1	(口)15.8	外; 施釉 内; 施釉	密	堅緻	釉 白	口縁1/10	白磁
653	128-2	陶器 卸皿	I84	SE436	SK1	(口)15.6	外; ロクロナデのちスリ切りのち高台にヨコナデ 内; ロクロナデのちスリ切りのち高台にヨコナデ	密0.5~3mmの小石	堅緻	釉 灰白	口縁1/10	瀬戸
654	153-4	土師器 羽釜	I84	SE436	SK1 c	(口)17.0	外; ナデのちヨコナデ 内; ヲコナデのちスリ	粗0.5~2mmの小石	良好	暗黄橙	口縁1/6	外面に煤付着
655	143-4	土師器 罎	I84	SE436	SK1	(口)20.0	外; オサエのちヨコナデ 内; ハケメのちヨコナデ	粗0.5~2mmの小石	良好	淡黄橙	口縁1/12	外面に煤付着
656	154-2	土師器 罎	I84	SE436	SE1	(口)25.2	外; オサエのちヨコナデ 内; ハケメのちヨコナデ	粗0.5~2mmの小石	良好	淡黄橙	口縁1/8	外面に煤付着
657	143-2	土師器 銅	I84	SE436	SK1	(口)30.0	外; ヲコナデ 内; ヲコナデ	密0.5~1mmの小石	良好	淡黄橙	口縁1/8	外面に煤付着
658	154-1	陶器 ねり鉢	O84	SE436	SE1	(口)27.2	外; ロクロナデ 内; ロクロナデ	密0.5~2mmの小石	堅緻	褐灰	口縁1/7	
659	142-6	陶器 ねり鉢	I84	SE436	SK1	(高台)10.3	外; ロクロナデのちスリ切りのち高台にヨコナデ 内; ロクロナデ	密0.5~3mmの小石	堅緻	褐灰	高台1/4	瀬戸?
660	143-1	土師器 鉢	I84	SE436	SK1	(口)36.2	外; ヲサエ・ナデのちヨコナデ 内; ナデのちヨコナデ	粗0.5~2mmの小石	良好	暗黄褐	口縁1/12	内面に炭化物 口縁部は確認せず
661	142-2	土製 鐘	I84	SE436	SK1	(長)5.1 (幅)1.8	外; オサエ・ナデ 内; 円錐状工具の抜き痕	粗0.5~2mmの小石	良好	淡黄	完存	重さ12g
662	136-6	土製 鐘	O84	SD438	SD3	(長)5.4 (幅)2.4	外; オサエ・ナデ 内; 円錐状工具の抜き痕	密0.5~2mmの小石	良好	淡黄橙	完存	重さ26g
663	137-9	土師器 皿	O85	SD438	SD2	(口)11.5 (高)2.3	外; オサエ・ナデ 内; ナデ	密0.5~2mmの小石	良好	淡黄	3/4	外面底に板状圧痕
664	138-1	土師器 銅	O85	SD438	SD2	(口)18.1	外; ナデのちヨコナデ・スリ 内; ナデのちヨコナデ・スリ	密0.5~1mmの小石	良好	淡黄橙	体部1/2	
665	140-7	陶器 片口碗	I85	SK441	SK2	(口)9.6	外; ロクロナデ 内; ロクロナデ	密0.5~1mmの小石	堅緻	灰白	口縁1/10	山茶碗質
666	140-6	瓦質土器 火鉢	I85	SK441	SK2	(口)ー	外; ナデのちヨコナデ 内; ミガキ	密0.5~4mmの小石	良好	褐灰	口縁部片	
667	154-3	石製 温石	I85	SK441	SK2	(幅)7.2	外; ケズリのち穿孔			褐灰	約1/2	滑石製
668	224-7	土師器 小皿	I85	SK441	SK2	(口)7.8 (高)0.8	外; オサエ・ナデ 内; ナデ	粗0.5~1mmの小石	良好	淡灰	ほぼ完存	重さ20g(推定)
669	145-1	土師器 小皿	I85	SK441	SK2	(口)8.1 (高)0.8	外; オサエ・ナデ 内; ナデ	粗0.5~2mmの小石(多)	良好	淡黄橙	完存	重さ23g
670	144-8	土師器 小皿	I85	SK441	SK2	(口)7.9 (高)0.9	外; オサエ・ナデ 内; ナデ	粗0.5~2mmの小石(多)	良好	淡黄橙	完存	重さ18g
671	145-6	土師器 小皿	I85	SK441	SK2	(口)9.6 (高)1.5	外; オサエ・ナデ 内; ナデ	粗0.5~2mmの小石	良好	淡黄橙	3/4	
672	224-2	土師器 皿	I85	SK441	SK2	(口)11.9 (高)2.3	外; オサエ・ナデ 内; ナデ	密0.5~1mmの小石	良好	淡黄	完存	重さ75g
673	144-7	土師器 皿	I85	SK441	SK2	(口)11.2 (高)2.2	外; オサエ・ナデ 内; ナデ	密0.5~1mmの小石	良好	淡黄橙	完存	外面底に円形にめぐるオサエ痕 重さ56g
674	224-1	土師器 皿	I85	SK441	SK2	(口)11.5 (高)2.3	外; オサエ・ナデ 内; ナデ	密0.5~1mmの小石	良好	淡黄	完存	重さ52g
675	140-8	土師器 銅	I85	SK441	SK2	(口)20.6	外; ヲサエ・ナデのちヨコナデ 内; ナデのちヨコナデ	粗0.5~2mmの小石	良好	淡黄	口縁1/8	口縁部外面に裏地接合痕

tab.24 ケカノ辻・角垣内地区出土遺物観察表 (15)

番号	実測番号	器種等	出土ケルツ	遺構・層名など	取上時の名称	法量 (cm)	調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考
676	228 -6	土師器 小皿	○86	SD445	SD4	(口)7.6 (高)0.9	外; オサエ・ナデ 内; ナデ	粗0.5~2mmの 小石	良好	淡黄橙	完存	重さ19g
677	228 -7	土師器 小皿	○86	SZ442	SK1	(口)7.6 (高)1.2	外; オサエ・ナデ 内; ナデ	密0.5~1mmの 小石	良好	淡黄	ほぼ完存	重さ24g (推定)
678	228 -4	土師器 小皿	○86	SD445	SD4	(口)7.4 (高)0.8	外; オサエ・ナデ 内; ナデ	粗0.5~1mmの 小石	良好	灰白	ほぼ完存	重さ22g (推定)
679	137 -6	土師器 小皿	○84	SD445	SD4	(口)7.9 (高)1.0	外; オサエ・ナデ 内; ナデ	粗0.5~1mmの 小石	良好	淡黄橙	完存	重さ21g
680	228 -6	土師器 小皿	○86	SD445	SD4	(口)7.3 (高)0.9	外; オサエ・ナデ 内; ナデ	粗0.5~1mmの 小石	良好	灰白	完存	重さ24g
681	228 -5	土師器 小皿	○86	SD445	SD4	(口)7.6 (高)0.9	外; オサエ・ナデ 内; ナデ	粗0.5~1mmの 小石	良好	淡黄	完存	外面に素地接合痕 重さ23g
682	137 -1	土師器 皿	○84	SD445	SD4	(口)11.0 (高)2.1	外; オサエ・ナデ 内; ナデ	粗0.5~2mmの 小石	良好	淡黄	10/11	外面底に板状圧痕
683	146 -8	土師器 皿	○86	SD445	SD4	(口)11.9 (高)2.4	外; オサエ・ナデ 内; ナデ	粗0.5~1mmの 小石	良好	淡黄	完存	外面に素地接合痕 重さ51g
684	137 -2	土師器 皿	○84	SD445	SD4	(口)11.5 (高)2.6	外; オサエ・ナデ 内; ナデ	密0.5~2mmの 小石	良好	灰白	完存	重さ53g
685	137 -5	土師器 皿	○84	SD445	SD4	(口)11.8 (高)2.5	外; オサエ・ナデ 内; ナデ	密0.5~1mmの 小石	良好	灰白	完存	
686	141 -1	土師器 皿	○85	SD445	SD5	(口)11.6 (高)2.4	外; オサエ・ナデ 内; ナデ	密0.5~2mmの 小石	良好	淡黄橙	完存	外面底に円形にめぐるオサエ痕 重さ60g
687	141 -2	土師器 皿	○85	SD445	SD5	(口)11.6 (高)2.4	外; オサエ・ナデ 内; ナデ	密0.5~2mmの 小石	良好	暗黄橙	完存	外面に素地接合痕 重さ59g
688	37- 2・3	土師器 皿	○85	SD445	SD5	-	外; オサエ・ナデ 内; ナデ	密0.5~1mmの 小石	良好	淡黄橙	底部片	外面底に墨書「花押」?
689	227 -3	土師器 皿	○86	SD445	SD4	(口)11.8 (高)2.3	外; オサエ・ナデ 内; ナデ	粗0.5~3mmの 小石	良好	淡黄	完存	外面底に板状圧痕 重さ52g
690	227 -2	土師器 皿	○86	SD445	SD4	(口)11.9 (高)2.3	外; オサエ・ナデ 内; ナデ	粗0.5~2mmの 小石	良好	淡黄	ほぼ完存	重さ60g (推定)
691	146 -6	土師器 皿	○86	SD445	SD4	(口)11.0 (高)2.3	外; オサエ・ナデ 内; ナデ	粗0.5~2mmの 小石	良好	淡黄	ほぼ完存	外面底に板状圧痕 重さ55g (推定)
692	224 -3	土師器 皿	○85	SD445	SD5	(口)11.2 (高)2.4	外; オサエ・ナデ 内; ナデ	密0.5~1mmの 小石	良好	灰白	完存	重さ57g
693	226 -2	土師器 皿	○86	SD445	SD4	(口)11.1 (高)2.4	外; オサエ・ナデ 内; ナデ (工具)	粗0.5~2mmの 小石	良好	淡黄	完存	内面のナデ工具は半円形 重さ55g
694	180 -4	土師器 皿	○87	SD445	SD4	(口)11.2 (高)2.6	外; オサエ・ナデ 内; ナデ	粗0.5~1mmの 小石	良好	淡黄	完存	重さ58g
695	180 -6	土師器 皿	○87	SD445	SD4	(口)11.9 (高)2.5	外; オサエ・ナデ 内; ナデ	粗0.5~1mmの 小石	良好	淡黄	完存	重さ47g
696	224 -5	土師器 皿	○85	SD445	SD5	(口)11.1 (高)2.4	外; オサエ・ナデ 内; ナデ	密0.5~1mmの 小石	良好	淡黄	完存	重さ56g
697	137 -7	陶器 盤	○84	SD445	SD4	(口)24.4	外; 020ナデのちツリのち施 軸内; 施軸	密0.5~1mmの 小石	堅緻	釉 灰緑	口縁1/8	瀬戸 折縁深皿
698	138 -5	磁器 磁器	○85	SD445	SD5	(口)27.6	外; 施軸 内; 施軸	密	堅緻	釉 淡緑	口縁1/10	青磁
699	139 -1	瓦質土器 火鉢	○85	SD445	SD1	(口)52.2 (高)16.9	外; ナデのちツリのちツカ のちスタンプ文	密0.5~2mmの 小石	良好	灰	口縁1/2	底部の足は4カ所 口縁の輪花は8葉
700	180 -2	土師器 皿	ハ88	SZ442 上	SK2	(口)8.8 (高)2.6	外; オサエ・ナデ 内; ナデ	密0.5~1mmの 小石	良好	淡黄	口縁5/8	
701	180 -1	土師器 皿	ハ88	SZ442 上	SK2	(口)9.6 (高)2.3	外; オサエ・ナデ 内; ナデ	密0.5~1mmの 小石	良好	灰白	口縁5/8	
702	178 -1	土師器 鍋	ハ88	SZ442 上	SK2	(口)22.0	外; ハケメのちヨコナデ 内; ナデのちヨコナデ	密0.5~2mmの 小石	良好	淡黄橙	口縁1/5	外面に煤付着
703	170 -2	土師器 鍋	ハ88	SZ442 上	SK2	(口)25.6	外; ハケメのちヨコナデ 内; ナデのちヨコナデ	密0.5~2mmの 小石	良好	淡黄橙	口縁5/8	外面に煤付着
704	175 -2	土師器 鍋	ハ88	SZ442 上	SK2	(口)30.1	外; ハケメのちヨコナデ 内; ナデのちヨコナデ	密0.5~2mmの 小石(多)	良好	暗黄橙	口縁1/2	外面に煤付着
705	178 -2	土師器 鍋	ハ88	SZ442 上	SK2	(口)32.1	外; ハケメのちヨコナデ 内; ナデのちヨコナデ	密0.5~2mmの 小石	良好	淡黄	口縁3/8	外面に煤付着
706	179 -1	土師器 鍋	ハ88	SZ442 上	SK2	(口)35.4	外; ハケメのちヨコナデ 内; ナデのちヨコナデ	密0.5~2mmの 小石	良好	淡黄	口縁1/2	外面に煤付着
707	174 -4	土師器 鍋	ハ88	SZ442 上	SK2	(口)34.2	外; ハケメのちヨコナデ 内; ナデのちヨコナデ	密0.5~2mmの 小石	良好	淡黄	口縁1/8	外面に煤付着
708	175 -1	土師器 鍋	ハ88	SZ442 上	SK2	(口)28.2	外; ハケメのちヨコナデ 内; ナデのちヨコナデ	密0.5~2mmの 小石	良好	淡黄橙	口縁1/4	外面に煤付着
709	174 -1	土師器 羽釜	ハ88	SZ442 上	SK2	(口)31.8	外; ナデのちヨコナデ 内; ナデのちヨコナデ	密0.5~2mmの 小石	良好	淡黄	口縁1/12	
710	180 -7	土師器 羽釜	ハ88	SZ442 上	SK2	(口)29.4	外; ハケメ・ナデのちヨコナデ 内; 板ナデのちヨコナデ	密0.5~2mmの 小石	良好	淡黄橙	口縁1/8	外面に煤付着
711	174 -3	土師器 羽釜	ハ88	SZ442 上	SK2	(口)30.6	外; ハケメ・ナデのちヨコナデ 内; ナデのちヨコナデ	密0.5~2mmの 小石	良好	淡黄	口縁1/4	外面に煤付着
712	171 -1	土師器 羽釜	ハ88	SZ442 上	SK2	(口)27.4	外; ハケメ・ナデのちヨコナデ 内; 板ナデのちヨコナデ	密0.5~2mmの 小石	良好	淡黄橙	口縁2/5	外面に煤付着
713	177 -1	土師器 羽釜	ハ88	SZ442 上	SK2	(口)26.2	外; ハケメのちヨコナデ 内; ナデのちヨコナデ	密0.5~2mmの 小石	良好	淡黄橙	口縁5/6	外面に煤付着
714	166 -4	土製 鍾	イ87	SZ442	SK1	(長)3.7 (幅)1.9	外; オサエ・ナデ 内; 円棒状具の抜き痕	密0.5~1mmの 小石	良好	淡黄	完存	重さ10g
715	155 -3	土製 鍾	ア86	SZ442	SK1	(長)3.6 (幅)1.6	外; オサエ・ナデ 内; 円棒状具の抜き痕	密0.5~1mmの 小石	良好	暗橙	完存	重さ8g
716	166 -7	土製 鍾	イ87	SZ442	SK1	(長)5.1 (幅)1.8	外; オサエ・ナデ 内; 円棒状具の抜き痕	密0.5~1mmの 小石	良好	淡黄	完存	重さ13g
717	167 -2	土製 鍾	ハ87	SZ442	SK1	(長)5.5 (幅)1.5	外; オサエ・ナデ 内; 円棒状具の抜き痕	密0.5~1mmの 小石	良好	暗褐	完存	重さ10g
718	167 -1	土製 鍾	ハ87	SZ442	SK1	(長)5.6 (幅)1.5	外; オサエ・ナデ 内; 円棒状具の抜き痕	密0.5~1mmの 小石	良好	褐灰	完存	重さ11g
719	144 -6	土製 鍾	○86	SZ442	SK1	(長)5.5 (幅)1.2	外; オサエ・ナデ 内; 円棒状具の抜き痕	密0.5~1mmの 小石	良好	灰黄	完存	重さ7g
720	144 -4	土製 鍾	○86	SZ442	SK1	(長)4.2 (幅)0.9	外; オサエ・ナデ 内; 円棒状具の抜き痕	密0.5~1mmの 小石	良好	暗橙	完存	重さ3g

tab.25 ケカノ辻・角垣内地区出土遺物観察表(16)

番号	実測 番号	器種等	出土 グロット	遺構・層 名など	取上時の 名称	法量 (cm)	調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考
721	144 -5	石製 錘	○86	SZ442	SK1	(長)4.7 (幅)1.5	外;オサエ・ナデ 内;円棒状具の抜き痕	密0.5~1mmの 小石	良好	淡黄	ほぼ完存	重さ8g(推定)
722	155 -4	砥石	a86	SZ442	SK1	(幅)3.2	小口面を除く面に使用痕	-	-	-	端部欠損	砂岩質
723	173 -2	土師器 罌	イ87	SZ442	SK1	(口)20.2	外;ナレ・ナメのちヨコナデ 内;ナデのちヨコナデ	密0.5~2mmの 小石	良好	淡黄橙	口縁1/4	
724	165 -1	土師器 脚台付小皿	○88	SZ442	SK1	(口)11.0	外;ナレ・ナメのちヨコナデ 内;円棒状具抜き痕・布目	粗0.5~5mmの 小石	良好	灰白	口縁1/4	
725	161 -7	土師器 脚台付小皿	○88	SZ442	SK1	(脚柱) 3.1	外;オサエ・ナデ 内;円棒状具抜き痕・布目	粗0.5~2mmの 小石	良好	淡黄橙	脚柱1/2	
726	165 -2	土師器 脚台付小皿	○88	SZ442	SK1	(脚柱) 3.3	外;オサエ・ナデ 内;円棒状具抜き痕	粗0.5~2mmの 小石	良好	灰黄褐	脚柱完存	
727	182 -2	土師器 脚台付小皿	ハ89	SZ442	SK1	(脚柱) 3.5	外;オサエ・ナデ 内;円棒状具抜き痕	粗0.5~2mmの 小石	良好	淡黄	脚柱完存	
728	194 -3	瓦器 小皿	○87	SZ442	SK1	(口)9.3 (高)1.5	外;オサエのちヨコナデ 内;ナデのちミガキ	密0.5~1mmの 小石	良好	灰	口縁3/4	
729	182 -1	土師器 小皿	イ88	SZ442	SK1	(口)8.8 (高)1.9	外;ナレ・ナメのちヨコナデ 内;ナデのちヨコナデ	密0.5~1mmの 小石	良好	明褐灰	口縁1/10	
730	184 -5	土師器 小皿	ハ89	SZ442	SK1	(口)9.2 (高)1.9	外;ナレ・ナメのちヨコナデ 内;ナデのちヨコナデ	密0.5~2mmの 小石	良好	淡黄橙	ほぼ完存	中北勢系? 重さ47g(推定)
731	172 -5	土師器 小皿	イ87	SZ442	SK1	(口)8.8 (高)1.7	外;ナレ・ナメのちヨコナデ 内;ナデのちヨコナデ	密0.5~2mmの 小石	良好	暗橙	口縁1/3	中北勢系?
732	167 -4	土師器 小皿	ハ87	SZ442	SK1	(口)9.2 (高)1.6	外;ナレ・ナメのちヨコナデ 内;ナデのちヨコナデ	密0.5~1mmの 小石	良好	淡赤橙	口縁2/3	中北勢系?
733	172 -4	土師器 小皿	a87	SZ442	SK	(口)10.2 (高)1.7	外;ナレ・ナメのちヨコナデ 内;ナデのちヨコナデ	密0.5~4mmの 小石	良好	暗橙	口縁1/2	中北勢系?
734	148 -2	土師器 小皿	○86	SZ442	SK1	(口)8.2 (高)1.4	外;ナレ・ナメのちヨコナデ 内;ナデのちヨコナデ	密0.5~3mmの 小石	良好	淡黄橙	口縁1/2	
735	161 -3	土師器 小皿	○88	SZ442	SK1	(口)9.0 (高)1.3	外;ナレ・ナメのちヨコナデ 内;ナデのちヨコナデ	密0.5~1mmの 小石	良好	暗黄橙	完存	口縁部に油煙灰付着 重さ43g
736	172 -6	土師器 小皿	イ87	SZ442	SK1	(口)8.6 (高)1.2	外;ナレ・ナメのちヨコナデ 内;ナデのちヨコナデ	密0.5~3mmの 小石	良好	灰	7/10	外面に素地接合痕
737	159 -1	土師器 小皿	○86	SZ442	SK1	(口)8.2 (高)1.3	外;オサエ・ナデ 内;板ナデ	密0.5~1mmの 小石	良好	灰白	完存	外面に素地接合痕 重さ30g
738	184 -4	土師器 小皿	ハ89	SZ442	SK1	(口)8.4 (高)1.3	外;オサエ・ナデ 内;ナデ	密0.5~1mmの 小石	良好	淡黄橙	7/8	外面に素地接合痕
739	229 -2	土師器 小皿	○86	SZ442	SK1	(口)7.8 (高)1.2	外;オサエ・ナデ 内;ナデ	密0.5~1mmの 小石	良好	淡黄	一部欠損 のみ	重さ23g
740	159 -9	土師器 小皿	○86	SZ442	SK1	(口)8.2 (高)1.4	外;オサエ・ナデ 内;ナデ	密0.5~1mmの 小石	良好	淡黄橙	完存	重さ33g
741	232 -1	土師器 小皿	○86	SZ442	SK1	(口)8.4 (高)1.4	外;オサエ・ナデ 内;ナデ	密0.5~1mmの 小石	良好	淡黄橙	ほぼ完存	重さ28g(推定)
742	148 -8	土師器 小皿	○86	SZ442	SK1	(口)9.0 (高)1.4	外;オサエ・ナデ 内;ナデ	粗0.5~2mmの 小石	良好	淡黄橙	ほぼ完存	重さ43g(推定)
743	148 -6	土師器 小皿	○86	SZ442	SK1	(口)9.0 (高)1.2	外;オサエ・ナデ 内;ナデ	粗0.5~1mmの 小石	良好	黒褐	1/2	内面に炭化物付着
744	166 -5	土師器 皿	○87	SZ442	SK1	(口)15.4 (高)3.2	外;ナレ・ナメのちヨコナデ 内;ナデのちヨコナデ	粗0.5~2mmの 小石	良好	淡黄	ほぼ完存	重さ199g(推定)
745	164 -2	土師器 皿	ハ87	SZ442	SK1	(口)15.4 (高)3.4	外;ナレ・ナメのちヨコナデ 内;ナデのちヨコナデ	粗0.5~2mmの 小石	良好	淡黄橙	完存	外面に素地接合痕 重さ192g
746	151 -4	土師器 皿	イ86	SZ442	SK1	(口)15.0 (高)2.9	外;ナレ・ナメのちヨコナデ 内;ナデのちヨコナデ	密0.5~2mmの 小石	良好	淡黄橙	ほぼ完存	
747	144 -2	土師器 皿	○86	SZ442	SK1	(口)16.0 (高)3.0	外;ナレ・ナメのちヨコナデ 内;ナデのちヨコナデ	粗0.5~2mmの 小石	良好	淡黄橙	7/8	
748	164 -3	土師器 皿	○87	SZ442	SK1	(口)16.1 (高)3.3	外;ナレ・ナメのちヨコナデ 内;ナデのちヨコナデ	粗0.5~2mmの 小石	良好	淡黄橙	4/9	
749	185 -1	土師器 皿	ハ89	SZ442	SK1	(口)15.0 (高)2.8	外;ナレ・ナメのちヨコナデ 内;ナデのちヨコナデ	粗0.5~1mmの 小石	良好	淡黄橙	1/2	外面底に板状圧痕
750	164 -1	土師器 皿	○88	SZ442	SK1	(口)15.6 (高)3.2	外;ナレ・ナメのちヨコナデ 内;ナデのちヨコナデ	粗0.5~2mmの 小石	良好	黄橙	9/10	外面に素地接合痕
751	159 -10	土師器 皿	○86	SZ442	SK1	(底)7.1	外;ロクロナデのち系切り 内;ロクロナデ	粗0.5~2mmの 小石	良好	淡黄橙	底部完存	ロクロ土師器
752	149 -7	陶器 小皿	○86	SZ442	SK1	(口)8.6 (高)3.6	外;ロクロナデのち系切り 内;ロクロナデ	密0.5~2mmの 小石	堅緻	灰白	1/4	山皿
753	166 -1	陶器 小皿	イ87	SZ442	SK1	(口)8.6 (高)3.5	外;ロクロナデのち系切り 内;ロクロナデ	粗0.5~2mmの 小石	堅緻	黄灰	1/3	山皿 内面に鉄分付着
754	150 -6	陶器 小皿	○88	SZ442	SK1	(口)7.6 (高)2.1	外;ロクロナデのち系切り 内;ロクロナデ	密0.5~2mmの 小石	堅緻	灰	口縁3/4	山皿(知多?)
755	166 -2	陶器 小皿	イ87	SZ442	SK1	(口)9.0 (高)2.1	外;ロクロナデのち系切り 内;ロクロナデ	粗0.5~2mmの 小石	堅緻	褐灰	口縁2/5	山皿 内面に漆付着
756	22-4 1	陶器 小皿	○88	SZ442	SK1	(口)8.8 (高)2.1	外;ロクロナデのち系切り 内;ロクロナデ	密0.5~1mmの 小石	堅緻	明褐灰	2/5	山皿 内面見込みと外面に墨書「上」
757	172 -2	陶器 小皿	ハ88	SZ442	SK1	(口)8.6 (高)2.1	外;ロクロナデのち系切り 内;ロクロナデ	密0.5~1mmの 小石	堅緻	灰白	口縁5/8	山皿
758	161 -5	陶器 小皿	○88	SZ442	SK1	(口)9.0 (高)2.4	外;ロクロナデのち系切り 内;ロクロナデ	密0.5~1mmの 小石	堅緻	褐灰	口縁1/2	山皿(知多?)
759	150 -7	陶器 小皿	○88	SZ442	SK1	(口)8.0 (高)2.0	外;ロクロナデのち系切り 内;ロクロナデ	粗0.5~1mmの 小石	堅緻	灰白	口縁1/4	山皿(知多?)
760	150 -8	陶器 小皿	○88	SZ442	SK1	(口)9.3 (高)2.2	外;ロクロナデのち系切り 内;ロクロナデ	密0.5~2mmの 小石	堅緻	灰黄	口縁2/5	山皿(知多?)
761	169 -2	陶器 片口椀	ハ88	SZ442	SK1	(口)9.0	外;ロクロナデのち片口 内;ロクロナデ	密0.5~2mmの 小石	堅緻	灰白	口縁1/4	山茶碗質
762	149 -4	磁器 椀	イ86	SZ442	SK1	(高台) 5.0	外;ナレ・ナメ出し高台のち施釉 内;洗線のち施釉	密	堅緻	釉 緑黄	高台1/2	青磁
763	166 -6	磁器 小皿	イ87	SZ442	SK1	(口)9.6	外;施釉 内;施釉	密	堅緻	釉 緑灰	口縁1/8	青磁
764	172 -1	磁器 小皿	ハ88	SZ442	SK1	(口)10.0 (高)2.3	外;ナレ・ナメ出し高台のち施釉 内;陰刻花文のち施釉	密	堅緻	釉 緑灰	口縁1/2	青磁 丸皿
765	169 -2	磁器 小皿	a87	SZ442	SK1	(口)11.2 (高)2.2	外;ナレ・ナメ出し高台のち施釉 内;陰刻文のち施釉	密	堅緻	釉 緑黄	口縁1/8	青磁 同安窯系

tab.26 ケカノ辻・角垣内地区出土遺物観察表(17)

番号	実測番号	器種等	出土 グロット	遺構・層 名など	取上時の 名称	法量 (cm)	調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考
766	173 -3	磁器 椀	087	SZ442	SK1	(口)14.0	外; 彫刻蓮弁文のち施軸 内; 施軸	密	堅緻	釉 明緑灰	口縁1/10	青磁 龍泉窯系
767	148 -7	磁器 椀	086	SZ442	SK1	(口)14.8	外; 施軸 内; 陰刻直線のち施軸	密	堅緻	釉 灰白	口縁1/10	白磁
768	166 -3	磁器 椀	187	SZ442	SK1	(口)15.2	外; 施軸 内; 陰刻直線のち施軸	密	堅緻	釉 灰白	口縁1/8	白磁
769	161 -4	磁器 椀	088	SZ442	SK1	(口)16.0	外; 施軸 内; 施軸	密	堅緻	釉 灰白	口縁1/5	白磁
770	157 -3	磁器 椀	a86	SZ442	SK1	(高台) 7.3	外; 外出し高台のち施軸 内; 施軸	密	堅緻	釉 緑灰	高台3/8	青磁
771	22-2	陶器 椀	ハ88	SZ442	SK1	(口)15.8 (高)5.5	外; 020ナデのち糸切り、高 台にヨコナデ 内; 020ナデ	密0.5~2mmの 小石	堅緻	褐灰	3/5	山茶椀(猿投知多) 高台に粗粒 痕 外面・底部に墨書(不明)
772	164 -5	陶器 椀	ハ88	SZ442	SK1	(口)16.6 (高)5.6	外; 020ナデのち糸切り、高 台にヨコナデ 内; 020ナデ	密0.5~2mmの 小石	堅緻	灰白	口縁1/5	山茶椀
773	22-3 -5	陶器 椀	088	SZ442	SK1	(高台) 6.2	外; 020ナデのち糸切り、高 台にヨコナデ 内; 020ナデ	密0.5~2mmの 小石	堅緻	褐灰	高台完存	山茶椀(渥美) 外面に墨書 高台に粗粒痕
774	162 -4	陶器 椀	088	SZ442	SK1	(口)16.4 (高)5.4	外; 020ナデのち糸切り、高 台にヨコナデ 内; 020ナデ	密0.5~2mmの 小石	堅緻	灰白	口縁1/2	山茶椀(猿投知多) 高台に粗粒 痕 内面に塗付着
775	164 -4	陶器 椀	088	SZ442	SK1	(口)17.2 (高)5.2	外; 020ナデのち糸切り、高 台にヨコナデ 内; 020ナデ	密0.5~2mmの 小石	堅緻	灰白	口縁1/4	山茶椀(猿投知多) 高台に粗粒痕
776	15-6	陶器 椀	088	SZ442	SK1	(高台) 7.6	外; 020ナデのち糸切り、高 台にヨコナデ 内; 020ナデ	密0.5~2mmの 小石	堅緻	褐灰	高台1/3	山茶椀(渥美) 外面に墨書
777	157 -2	陶器 椀	088	SZ442	SK1	(口)15.8 (高)5.4	外; 020ナデのち糸切り、高 台にヨコナデ 内; 020ナデ	密0.5~2mmの 小石	堅緻	灰白	高台4/5	山茶椀 高台に粗粒痕
778	172 -3	陶器 椀	ハ88	SZ442	SK1	(口)15.8 (高)5.6	外; 020ナデのち糸切り、高 台にヨコナデ 内; 020ナデ	密0.5~2mmの 小石	堅緻	灰白	口縁1/2	山茶椀(瀬戸?) 高台に粗粒痕
779	191 -1	陶器 椀	189	SZ442	SK1	(口)15.2 (高)5.8	外; 020ナデのち糸切り、高 台にヨコナデ 内; 020ナデ	密0.5~2mmの 小石	堅緻	灰	口縁5/11	片口付山茶椀(瀬戸?) 高台に粗粒痕
780	27-4	陶器 椀	088	SZ442	SK1	(口)-	外; ロクロナデ 内; ロクロナデ	密0.5~2mmの 小石	堅緻	褐灰	口縁部片	山茶椀(猿投知多) 外面に墨書「侍」
781	31-4 -2	陶器 椀	088	SZ442	SK1	(口)-	外; ロクロナデ 内; ロクロナデ	密0.5~1mmの 小石	堅緻	褐灰	口縁部片	山茶椀 外面に墨書「侍」
782	80-4	陶器 椀	086	SZ442	SK1	(口)-	外; ロクロナデ 内; ロクロナデ	密0.5~1mmの 小石	堅緻	灰白	口縁部片	山茶椀 外面に墨書(不明)
783	22-1	陶器 椀	088	SZ442	SK1	(口)16.7 (高)5.3	外; 020ナデのち糸切り、高 台にヨコナデ 内; 020ナデ	密0.5~2mmの 小石	堅緻	褐灰	1/2	山茶椀(渥美?) 外面に墨書「侍」
784	150 -4	陶器 椀	186	SZ442	SK2	(口)16.2 (高)5.1	外; 020ナデのち糸切り、高 台にヨコナデ 内; 020ナデ	粗0.5~2mmの 小石	堅緻	灰白	口縁1/6	山茶椀(瀬戸?) 高台に粗粒痕
785	167 -5	陶器 椀	088	SZ442	SK1	(高台) 7.2	外; 020ナデのち糸切り、高 台にヨコナデ 内; 020ナデ	密0.5~2mmの 小石	堅緻	灰	高台完存	山茶椀(渥美?)
786	157 -1	陶器 鉢	088	SZ442	SK1	(口)22.0 (高)7.4	外; ロクロナデのちケズリ 内; ロクロナデ	密0.5~2mmの 小石	堅緻	灰	口縁5/12	山茶椀質
787	169 -1	陶器 ねり鉢	189	SZ442	SK1	(口)31.8 (高)12.2	外; 回転ナデのち回転ナデ のち高台にヨコナデ	密0.5~4mmの 小石	堅緻	灰	高台1/2	山茶椀質(猿投知多?)
788	173 -1	土師器 銅	087	SZ442	SK1	(口)22.0	外; ハケのちヨコナデ 内; ナデのちヨコナデ	密0.5~2mmの 小石	良好	淡黄橙	口縁1/4	
789	170 -1	土師器 銅	ハ88	SZ442	SK1	(口)28.6	外; ナデのちヨコナデ 内; ナデのちヨコナデ	密0.5~1mmの 小石	良好	淡黄橙	口縁1/4	外面に煤付着
790	151 -2	土師器 銅	186	SZ442	SK2	(口)24.0	外; ナデのちヨコナデ 内; 板ナデのちヨコナデ	密0.5~1mmの 小石	やや軟	淡黄橙	口縁1/8	外面に素地接合痕
791	182 -3	土師器 銅	ハ89	SZ442	SK1	(口)23.2	外; ナデのちヨコナデ 内; ナデのちヨコナデ	密0.5~1mmの 小石	良好	淡黄橙	口縁3/8	外面に煤付着
792	161 -1	土師器 銅	088	SZ442	SK1	(口)21.4	外; 011・ナデのちヨコナデ 内; ナデのちヨコナデ	密0.5~3mmの 小石	良好	淡黄	口縁1/5	外面に煤付着
793	161 -2	土師器 銅	088	SZ442	SK2	(口)25.0	外; ナデのちヨコナデ 内; 板ナデのちヨコナデ	密0.5~2mmの 小石	良好	淡黄橙	口縁1/4	外面に煤付着
794	122 -2	土師器 羽釜	a80	SK421	SK1	(口)27.6	外; 011・ナデのちヨコナデ 内; ナデのちヨコナデ	密0.5~1mmの 小石	良好	淡橙	口縁1/3	外面以下に煤付着
795	232 -3	土師器 小皿	086	SZ442	SK1	(口)7.5 (高)1.2	外; オサエ・ナデ 内; ナデ	密0.5~5mmの 小石	良好	淡黄橙	ほぼ完存	重さ23g(推定)
796	232 -4	土師器 小皿	086	SZ442	SK1	(口)7.8 (高)1.0	外; オサエ・ナデ 内; ナデ	密0.5~2mmの 小石	良好	灰白	完存	重さ23g
797	232 -5	土師器 小皿	086	SZ442	SK1	(口)8.2 (高)1.2	外; オサエ・ナデ 内; ナデ	密0.5~2mmの 小石	良好	淡黄	完存	重さ23g
798	159 -6	土師器 小皿	086	SZ442	SK1	(口)8.2 (高)1.4	外; オサエ・ナデ 内; ナデ	密0.5~2mmの 小石	良好	淡黄	完存	重さ22g
799	232 -8	土師器 小皿	086	SZ442	SK1	(口)7.6 (高)1.1	外; オサエ・ナデ 内; ナデ	密0.5~2mmの 小石	良好	淡黄橙	完存	重さ20g
800	159 -7	土師器 小皿	086	SZ442	SK1	(口)8.2 (高)1.2	外; オサエ・ナデ 内; 板ナデ	密0.5~2mmの 小石	良好	淡黄	完存	重さ26g
801	232 -6	土師器 小皿	086	SZ442	SK1	(口)7.9 (高)1.1	外; オサエ・ナデ 内; ナデ	密0.5~2mmの 小石	良好	淡黄	15/16	外面に素地接合痕 重さ26g
802	159 -8	土師器 小皿	086	SZ442	SK1	(口)8.2 (高)1.1	外; オサエ・ナデ 内; ナデ	密0.5~1mmの 小石	良好	灰白	ほぼ完存	外面底に工具当たり痕 重さ26g(推定)
803	208 -11	土師器 小皿	086	SZ442	SK1	(口)8.0 (高)1.0	外; オサエ・ナデ 内; ナデ	密0.5~1mmの 小石	良好	淡黄	ほぼ完存	重さ20g(推定)
804	208 -10	土師器 小皿	086	SZ442	SK1	(口)7.8 (高)1.1	外; オサエ・ナデ 内; ナデ	密0.5~1mmの 小石	良好	淡黄橙	完存	重さ19g
805	232 -5	土師器 小皿	086	SZ442	SK1	(口)8.0 (高)1.5	外; オサエ・ナデ 内; ナデ	密0.5~2mmの 小石	良好	淡黄橙	ほぼ完存	外面に素地接合痕 重さ26g(推定)
806	150 -5	土師器 小皿	186	SZ442	SK1	(口)9.4 (高)2.0	外; 011・ナデのちヨコナデ 内; ナデのちヨコナデ	密0.5~1mmの 小石	良好	淡黄橙	口縁2/3	
807	149 -2	土師器 小皿	086	SZ442	SK1	(口)9.0 (高)2.1	外; 011・ナデのちヨコナデ 内; ナデのちヨコナデ	密0.5~1mmの 小石	良好	灰白	口縁1/5	口縁部に油煙付着 ヘソ皿の系統?
808	155 -1	土師器 皿	a86	SZ442	SK1	(口)10.2 (高)2.5	外; オサエ・ナデ 内; ナデ	密0.5~2mmの 小石	良好	淡黄橙	完存	重さ46g
809	172 -7	土師器 皿	087	SZ442	SK1	(口)11.6 (高)2.5	外; オサエ・ナデ 内; ナデ	密0.5~2mmの 小石	良好	淡黄橙	ほぼ完存	重さ52g(推定)
810	149 -1	土師器 皿	086	SZ442	SK1	(口)11.0 (高)2.3	外; オサエ・ナデ 内; ナデ	密0.5~2mmの 小石	良好	淡黄	完存	重さ57g

tab.27 ケカノ辻・角垣内地区出土遺物観察表(18)

番号	実測 番号	器種等	出土 グロット	遺構・層 名など	取上時の 名称	法量 (cm)	調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考
811	144 -1	土師器 皿	○86	SZ442	SK1	(口)11.4 (高)2.6	外;オサエ・ナデ 内;ナデ	粗0.5~2mmの 小石	良好	淡黄橙	完存	重さ66g
812	229 -6	土師器 皿	○86	SZ442	SK1	(口)12.1 (高)2.7	外;オサエ・ナデ 内;ナデ	粗0.5~2mmの 小石	良好	淡黄	5/6	
813	194 -2	陶器 椀	a86	SZ442	SK1	(口)13.0	外;020ナデのちナズリ のちスリ 内;施釉	密0.5~1mmの 小石	堅緻	釉 黒褐	口縁1/12	天目茶碗
814	150 -4	陶器 椀	a86	SZ442	SK1	(口)11.9 (高)6.2	外;020ナデのち系切りのち 高台上にヨコナデのち施釉	密0.5~2mmの 小石	堅緻	釉 黒褐	高台1/4	天目茶碗 瀬戸
815	15-5	陶器 椀	a86	SZ442	SK1	(口)20.6 (高)9.6	外;020ナデ→系切り→ナズリ →高台上にヨコナデ→施釉	密0.5~2mmの 小石	堅緻	釉 淡緑灰	高台完存	平椀 瀬戸 高台内面に墨書「十」
816	158 -2	陶器 椀	a86	SZ442	SK1	(口)21.0	外;施釉 内;施釉	密0.5~2mmの 小石	堅緻	釉 灰黄	口縁1/4	平椀 瀬戸
817	156 -1	陶器 椀	a86	SZ442	SK1	(口)15.0 (高)6.7	外;020ナデ→系切り→ナズリ →高台上にヨコナデ→施釉	密0.5~2mmの 小石	堅緻	釉 淡黄	口縁5/8	平椀 瀬戸
818	158 -4	陶器 椀	a86	SZ442	SK1	(口)16.1 (高)7.5	外;020ナデ→系切り→ナズリ →高台上にヨコナデ→施釉	密0.5~2mmの 小石	堅緻	釉 灰白	口縁1/4	平椀 瀬戸
819	157 -4	陶器 椀	a86	SZ442	SK1	(口)16.2 (高)7.9	外;020ナデ→系切り→ナズリ →高台上にヨコナデ→施釉	密0.5~1mmの 小石	堅緻	釉 灰白	口縁1/3	平椀 瀬戸
820	149 -5	陶器 椀?	イ86	SZ442	SK1	(口)16.4	外;施釉 内;施釉	粗0.5~2mmの 小石	堅緻	釉 淡黄	口縁1/6	瀬戸?
821	158 -3	陶器 鉢	a86	SZ442	SK1	(口)19.1	外;020ナデのちナズリ のちスリ 内;020ナデのち施釉	密0.5~2mmの 小石	堅緻	釉 灰白	口縁1/3	瀬戸
822	160 -5	陶器 鉢	a86	SZ442	SK1	(口)19.1 (高)4.0	外;020ナデのち系切りのち 施釉 内;施釉	密0.5~1mmの 小石	堅緻	釉 淡緑黄	口縁1/4	瀬戸 内面にトチン痕3カ所
823	168 -1	陶器 ねり鉢	a87	SZ442	SK	(口)30.2 (高)10.1	外;ナメのちヨコナデ 内;ナデ	粗0.5~2mmの 小石	堅緻	暗橙	口縁1/4	常滑
824	155 -2	土師器 椀	a86	SZ442	SK1	(口)16.8 (高)7.2	外;ナメのちナズリ・ヨコナ 内;ナデ	密0.5~3mmの 小石	良好	淡黄橙	口縁1/6	
825	148 -1	土師器 鍋	○86	SZ442	SK1	(口)31.4	外;ナデのちヨコナデ 内;ハケメのちヨコナデ	粗0.5~2mmの 小石	良好	淡黄	口縁1/5	外面に素地接合痕
826	200 -1	土師器 盤	○86	SD445	SD4	(口)32.8	外;ナメのちヨコナデ・ナズ リ 内;ナデのちヨコナデ	粗0.5~1mmの 小石	良好	淡黄	口縁3/4	
827	173 -4	土師器 盤	○87	SD445	SK1	(口)38.8	外;ナメのちヨコナデ・ナズ リ 内;ナデのちヨコナデ	粗0.5~2mmの 小石	良好	淡黄	口縁1/10	
828	156 -1	瓦質土器 火鉢	a86	SZ442	SK1	(口)36.7 (高)16.1	外;足貼り付けのちミガキ のちスタンプ文	密0.5~6mmの 小石	良好	灰	口縁3/5	
829	150 -2	瓦質土器 火鉢	a86	SZ442	SK1	(口)16.6	外;ミガキのちスタンプ文 内;ナデのちヨコナデ	粗0.5~2mmの 小石	良好	灰	口縁1/4	
830	144 -3	瓦質土器 火鉢	○86	SZ442	SK1	(口)---	外;ミガキのちスタンプ文・輪花 内;ナデのちミガキ	粗0.5~2mmの 小石	良好	灰	口縁部片	
831	152 -1	瓦質土器 風炉	イ86	SZ442	SK1	(口)28.6	外;ナメのちヨコナデのち浮文 ・窓 内;ナデのちケズリ	密0.5~2mmの 小石	良好	灰	口縁1/4	
832	230 -2	土師器 小皿	a77	SK449	SK1	(口)7.8 (高)1.1	外;オサエ・ナデ 内;ナデ	密0.5~1mmの 小石	良好	淡黄	ほぼ完存	重さ20g(推定)
833	211 -5	土師器 小皿	a77	SK449	SK1 No.29	(口)7.6 (高)1.0	外;オサエ・ナデ 内;ナデ	密0.5~2mmの 小石	良好	灰白	ほぼ完存	
834	211 -2	土師器 小皿	a77	SK449	SK1 No.9	(口)7.9 (高)1.0	外;オサエ・ナデ 内;ナデ	密0.5~2mmの 小石	良好	淡黄橙	完存	重さ17g
835	211 -7	土師器 小皿	a77	SK449	SK1 No.31	(口)9.6 (高)1.5	外;オサエ・ナデ 内;ナデ	密0.5~2mmの 小石	良好	淡黄	1/3	
836	110 -3	土師器 台付小皿	b77	SK449	おちこみ	(口)8.6 (高)2.9	外;ナメのちヨコナデ 内;ナデのちヨコナデ	密0.5~1mmの 小石	良好	灰白	口縁3/5	
837	221 -5	土師器 皿	b77	SZ409	おちこみ	(口)11.4 (高)2.8	外;オサエ・ナデ 内;ナデ	密0.5~2mmの 小石	良好	淡黄	口縁1/2	
838	212 -5	土師器 皿	a77	SK449	SK1 No.10	(口)12.1 (高)2.8	外;オサエ・ナデ 内;ナデ	密0.5~2mmの 小石	良好	淡黄	口縁1/2	外面底に板状圧痕
839	220 -1	土師器 皿	a77	SK449	SK1 No.24	(口)12.0 (高)2.7	外;オサエ・ナデ 内;ナデ	密0.5~2mmの 小石	良好	淡黄橙	口縁3/5	
840	230 -8	土師器 皿	a77	SK449	SK1 No.44	(口)11.6 (高)3.0	外;オサエ・ナデ 内;ナデ	密0.5~2mmの 小石	良好	淡黄	口縁9/10	
841	211 -9	土師器 皿	a77	SK449	SK1 No.43	(口)11.5 (高)2.9	外;オサエ・ナデ 内;ナデ	密0.5~3mmの 小石	良好	淡黄	ほぼ完存	外面底に板状圧痕 重さ59g(推定)
842	212 -1	土師器 皿	a77	SK449	SK1 No.25	(口)10.8 (高)3.0	外;オサエ・ナデ 内;ナデ	密0.5~3mmの 小石	良好	灰白	口縁9/10	口縁部に油煙痕付着
843	212 -3	土師器 皿	a77	SK449	SK1 No.32	(口)11.4 (高)2.7	外;オサエ・ナデ 内;ナデ	密0.5~1mmの 小石	良好	淡黄	口縁1/5	
844	212 -2	土師器 皿	a77	SK449	SK1 No.34	(口)12.4 (高)2.5	外;オサエ・ナデ 内;ナデ	密0.5~2mmの 小石	良好	淡黄	口縁4/5	
845	230 -5	土師器 皿	a77	SK449	SK1 No.11	(口)12.0 (高)2.4	外;オサエ・ナデ 内;ナデ	密0.5~3mmの 小石	良好	淡黄	ほぼ完存	重さ59g(推定)
846	111 -3	瓦質土器 火鉢	b77	SZ409	おちこみ	(口)---	外;ミガキのちスタンプ文 内;ナデ	密0.5~2mmの 小石(多)	良好	暗橙	口縁部片	土師質
847	193 -7	土師器 小形鍋	b77	SZ409	おちこみ	(口)12.8	外;ナデのちヨコナデ 内;ナデのちヨコナデ	密0.5~1mmの 小石	良好	淡黄	口縁1/12	ミニチュア鍋
848	193 -6	土師器 小形羽釜	b77	SZ409	おちこみ	(口)12.8	外;ナデのちヨコナデ 内;板ナデのちヨコナデ	密0.5~1mmの 小石	良好	淡黄	口縁1/10	ミニチュア羽釜
849	104 -4	土師器 鍋	a77	SK449	SK1	(口)21.2	外;ナメのちヨコナデ・ナズ リ 内;ナメのちヨコナ デ	密0.5~2mmの 小石	良好	淡黄	口縁1/4	
850	107 -1	土師器 鍋	a77	SK449	SK1 No.12	(口)23.0	外;ナメのちヨコナデ・ナズ リ 内;ナメのちヨコナ デ	密0.5~2mmの 小石(多)	良好	暗黄	体部1/6	外面に煤付着
851	107 -2	土師器 鍋	a77	SK449	SK1 No.2	(口)23.0	外;ナメのちヨコナデ 内;ナメのちヨコナ デ	密0.5~2mmの 小石(多)	良好	暗黄橙	口縁1/6	外面に煤付着
852	104 -2	土師器 鍋	a77	SK449	SK1	(口)19.0	外;ナメのちヨコナデ・ナズ リ 内;ナメのちヨコナ デ	密0.5~2mmの 小石	良好	灰白	口縁1/8	外面に煤付着
853	110 -1	土師器 鍋	b77	SZ409	おちこみ	(口)21.3	外;ナメのちヨコナデ・ナズ リ 内;ナメのちヨコナ デ	粗0.5~1mmの 小石(多)	良好	淡黄	口縁5/8	
854	108 -1	土師器 鍋	a77	SK449	SK1	(口)22.0	外;ナメのちヨコナデ・ナズ リ 内;ナメのちヨコナ デ	密0.5~2mmの 小石(多)	良好	暗黄橙	口縁2/3	外面に煤付着
855	104 -3	土師器 鍋	a77	SK449	SK1	(口)26.2	外;ナメのちヨコナデ 内;ナメのちヨコナ デ	密0.5~2mmの 小石	良好	淡黄	口縁1/5	外面に煤付着

tab.28 ケカノ辻・角垣内地区出土遺物観察表(19)

番号	実測番号	器種等	出土グロト	遺構・層名など	取上時の名称	法量 (c.m)	調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考
856	120-1	土師器 鍋	a77	SK449	SK1 No.38	(口)21.9	外;ナシ・ナメのちヨコナデ 内;ハケメのちヨコナデ	密0.5~2mmの 小石	良好	淡黄	口縁1/3	外面に煤付着
857	109-1	土師器 鍋	a77	SK449	SK1	(口)26.2	外;ナシ・ナメのちヨコナデ・ナ 内;ナシのちヨコナデ	密0.5~2mmの 小石(多)	良好	暗黄橙	口縁1/2	内面に炭化物、外面に煤付着
858	106-1	土師器 鍋	a77	SK449	SK1 No.37	(口)29.4	外;ナシ・ナメのちヨコナデ・ナ 内;ナシのちヨコナデ	密0.5~2mmの 小石	良好	淡黄	口縁3/8	外面に煤付着
859	219-1	陶器 甕	b77	SZ409	おちこみ	(底)21.4	外;オサエ・ナデ 内;オサエ・ナデ	粗0.5~6mmの 小石	聖緻	明赤褐	底部1/2	常滑
860	189-2	土師器 皿	b83	SK434	pit1 No.2	(口)14.1 (高)2.2	外;ナシ・ナメのちヨコナデ 内;ナデのちヨコナデ	密0.5~1mmの 小石	良好	淡黄橙	口縁1/3	
861	184-3	陶器 小皿	e18	pit2	pit2	(口)8.9 (高)1.9	外;ロクロナデのち系切りの 内;ロクロナデ	密0.5~1mmの 小石	聖緻	灰白	口縁5/8	山皿(知多?)
862	183-7	土師器 小皿	b19	pit2 (SB455)	pit2	(口)8.8 (高)1.9	外;ナシ・ナメのちヨコナデ 内;ナデ	密0.5~1mmの 小石	良好	淡黄橙	口縁1/2	
863	183-6	土師器 小皿	b19	pit2 (SB455)	pit2	(口)8.6 (高)1.4	外;ナシ・ナメのちヨコナデ 内;ナデ	密0.5~1mmの 小石	良好	淡黄橙	完存	外面に素地接合痕
864	183-5	土師器 小皿	b19	pit2 (SB455)	pit2	(口)9.0 (高)1.6	外;ナシ・ナメのちヨコナデ 内;ナデ	密0.5~1mmの 小石	良好	淡黄橙	完存	外面に素地接合痕
865	183-3	土師器 小皿	b19	pit2 (SB455)	pit2	(口)9.0 (高)1.3	外;ナシ・ナメのちヨコナデ 内;ナデ	密0.5~1mmの 小石	良好	淡黄橙	口縁2/3	
866	188-9	土師器 小皿	b19	pit2 (SB455)	pit2	(口)8.2 (高)1.6	外;ナシ・ナメのちヨコナデ 内;ナデ	密0.5~2mmの 小石	良好	暗黄橙	口縁1/2	
867	75-1	陶器 椀	c17	pit3	pit3	(口)17.0 (高)5.4	外;ロクロナデのち系切りのち 高台にヨコナデ 内;ロクロナデ	密0.5~1mmの 小石	聖緻	灰	完存	山茶椀(渥美)
868	183-2	土師器 皿	b12	pit1	pit1	(口)16.0 (高)3.1	外;ナシ・ナメのちヨコナデ 内;ナデのちヨコナデ	密0.5~2mmの 小石(多)	良好	暗黄橙	口縁1/3	
869	229-9	土師器 皿	b16	pit2	pit2	(口)15.1 (高)2.5	外;ナシ・ナメのちヨコナデ 内;ナデのちヨコナデ	密0.5~2mmの 小石	良好	暗黄橙	口縁1/4	外面に素地接合痕
870	188-9	土師器 小皿	b20	pit3 (SB455)	pit3	(口)9.1 (高)1.3	外;ナシ・ナメのちヨコナデ 内;ナデ	密0.5~1mmの 小石	良好	暗黄橙	口縁3/5	
871	188-2	土師器 小皿	d22	pit2	pit2	(口)8.1 (高)1.1	外;オサエ・ナデ 内;ナデ	密0.5~2mmの 小石	良好	灰白	口縁3/5	
872	184-2	土師器 皿	d24	pit1	pit1	(口)15.2 (高)2.6	外;ナシ・ナメのちヨコナデ 内;ナデのちヨコナデ	密0.5~2mmの 小石	良好	淡黄	口縁3/8	
873	38-1	瓦器 小椀	c21	pit2	pit2	(口)8.0 (高)3.2	外;ナシ・ナメのちヨコナデ 内;ナデのちミガキ	密0.5~1mmの 小石	良好	灰	口縁1/4	大和系
874	187-6	土師器 鍋	b45	pit1	pit1	(口)24.2	外;ヨコナデ 内;ヨコナデ	密0.5~2mmの 小石	良好	灰白	口縁1/10	
875	189-7	土師器 鍋	c45	pit1	pit1	(口)21.0	外;ヨコナデ 内;ヨコナデ	密0.5~1mmの 小石	良好	淡黄	口縁1/12	外面に煤付着
876	188-7	土師器 鍋	c26	pit2	pit2	(口)30.1	外;ヨコナデ 内;ヨコナデ	密0.5~1mmの 小石	良好	灰白	口縁1/12	外面に煤付着
877	187-1	陶器 椀	b46	pit5	pit5	(口)14.4 (高)5.4	外;ロクロナデのち系切りのち 高台にヨコナデ 内;ロクロナデ	密0.5~2mmの 小石	聖緻	灰	口縁5/6	山茶椀(瀬戸)内面に煤付着 高台に粗粒痕
878	30-3	陶器 椀	c48	pit4	pit4	(口)16.4 (高)5.5	外;ロクロナデのち系切りのち 高台にヨコナデ 内;ロクロナデ	密0.5~2mmの 小石	聖緻	褐灰	口縁1/3	山茶椀(渥美)
879	188-3	土師器 小皿	b44	pit1	pit1	(口)9.1 (高)1.2	外;オサエ・ナデ 内;ナデ	密0.5~2mmの 小石	良好	淡黄橙	口縁2/3	
880	187-8	土師器 小皿	b48	pit9	pit9	(口)8.1 (高)1.3	外;オサエ・ナデ 内;ナデ	密0.5~2mmの 小石(多)	良好	暗褐	口縁1/2	
881	46-3	陶器 片口小瓶	b47	pit1	pit1	(口)7.4	外;ロクロナデ 内;ロクロナデ	粗0.5~1mmの 小石	聖緻	褐灰	口縁1/4	山茶椀質
882	187-7	土師器 小形鍋	e48	pit1	pit1	(口)9.0 (高)4.8	外;ナシ・ナメのちヨコナデ 内;ナデのちヨコナデ	密0.5~1mmの 小石(多)	良好	淡黄褐	口縁2/5	ミニチュア鍋 外面に煤付着
883	189-3	土師器 小皿	e48	pit1	pit1	(口)7.6 (高)1.3	外;ナシ・ナメのちヨコナデ 内;ナデ	密0.5~2mmの 小石	良好	淡黄橙	口縁3/4	外面に素地接合痕
884	190-1	土師器 脚台付小皿	e48	pit1	pit1	(口)11.0	外;ナシ・ナメのちヨコナデ 内;ナデ、棒状具抜き痕	密0.5~2mmの 小石	良好	淡黄褐	口縁1/4	皿部内面に成形時の布目圧痕
885	187-3	土師器 皿	e48	pit1	pit1	(口)13.8 (高)2.6	外;ナシ・ナメのちヨコナデ 内;ナデ	密0.5~2mmの 小石	良好	橙	口縁1/2	
886	189-5	土師器 鍋	e48	pit1	pit1	(口)18.4	外;ナデのちヨコナデ 内;ナデのちヨコナデ	密0.5~2mmの 小石	良好	淡黄橙	口縁1/4	外面に煤付着
887	192-1	土師器 鍋	e48	pit1	pit1	(口)32.8	外;ナシ・ナメのちヨコナデ・ナ 内;板ナメのちヨコナデ・ナ	粗0.5~3mmの 小石(多)	良好	暗黄橙	口縁5/12	外面に煤付着
888	189-1	土師器 皿	c49	pit2	pit2	(口)14.2 (高)3.1	外;ナシ・ナメのちヨコナデ 内;ナデ	密0.5~2mmの 小石	良好	淡黄橙	口縁3/8	
889	187-5	土師器 皿	b48	pit1	pit1	(口)13.1 (高)2.9	外;ナシ・ナメのちヨコナデ 内;ナデ	密0.5~2mmの 小石	良好	淡黄橙	口縁1/3	
890	242-4	土師器 皿	b83	SK434	pit1	(口)15.1 (高)2.3	外;ナシ・ナメのちヨコナデ 内;ナデ	粗0.5~1mmの 小石	良好	淡黄橙	口縁1/4	
891	242-7	陶器 椀	b83	SK434	pit1	(高台) 7.8	外;ロクロナデのち系切りのち 高台にヨコナデ 内;ロクロナデ	粗0.5~1mmの 小石	聖緻	灰	高台完存	山茶椀(渥美) 高台に砂圧痕
892	242-6	陶器 椀	b83	SK434	pit1	(高台) 7.8	外;ロクロナデのち系切りのち 高台にヨコナデ 内;ロクロナデ	粗0.5~2mmの 小石	聖緻	灰白	高台5/6	山茶椀(渥美) 高台に粗粒痕
893	191-7	陶器 小皿	e59	pit1	pit1	(口)10.1 (高)2.8	外;ロクロナデのちロクロナデの ち施釉 内;ロクロナデのち釉	密0.5~2mmの 小石	聖緻	釉 淡緑灰	口縁1/12	瀬戸 緑釉皿
894	248-9	土師器 鍋	e59	pit1	pit1	(口)---	外;ヨコナデ 内;ヨコナデ	密0.5~1mmの 小石	良好	淡黄	口縁部片	外面に煤付着
895	210-5	土師器 皿	a83	pit5	pit5	(口)14.6	外;ナデのちヨコナデ 内;ナデのちヨコナデ	密0.5~1mmの 小石	良好	暗橙	口縁1/5	
896	242-3	土師器 鍋	a84	pit1	pit1	(口)---	外;ヨコナデ 内;ヨコナデ	粗0.5~1mmの 小石	良好	灰褐	口縁部片	外面に煤付着
897	189-3	陶器 小皿	a83	pit6	pit6	(口)8.1 (高)2.2	外;ロクロナデのち系切りの 内;ロクロナデ	密0.5~1mmの 小石	聖緻	灰白	口縁5/12	山皿
898	184-1	土師器 盤	b47	pit1	pit1	(口)41.2	外;ナシ・ナメのちヨコナデ 内;ナデのちヨコナデ	密0.5~3mmの 小石	良好	淡黄橙	口縁1/4	3足付くものと想定される
899	194-1	須恵器 黙足壺	H88	包含層	包	---	ナデのち指をカットにて表 現する	密0.5~2mmの 小石	聖緻	灰白	1足完存	
900	59-4	土師器 小皿	d46	不明	SK1	(口)---	外;ナシ・ナメのちヨコナデ 内;ナデのちヨコナデ	密0.5~1mmの 小石	良好	淡黄橙	口縁1/8	口縁に油煙痕付着

tab.29 ケカノ辻・角垣内地区出土遺物観察表(20)

番号	実測番号	器種等	出土グロット	道標・層名など	取上時の名称	法量 (cm)	調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考
901	199-3	土師器 脚台付小皿	不明	不明	不明	(口)13.2	外; ヌレ・ナデのちヨコナデ内; ナデ、棒状具抜き痕	密0.5~3mmの小石	良好	淡黄褐	口縁1/3	皿部内面に成形時の布目圧痕
902	132-2	土師器 鉢	c80	不明	SK1	(口)ー	外; オサエのちヨコナデ内; ナデのちヨコナデ	粗0.5~1mmの小石(多)	良好	淡黄橙	口縁部片	
903	199-5	土師器 台付小皿	不明	不明	不明1	(高台)4.0	外; 布目痕のちヨコナデ内; ナデのちヨコナデ	密0.5~2mmの小石	良好	淡黄	高台完存	
904	199-4	土師器 台付小皿	不明	不明	不明1	(高台)4.9	外; 布目痕のちヨコナデ内; ナデのちヨコナデ	密0.5~3mmの小石	良好	淡黄	高台完存	
905	193-1	陶器 小皿	ハ85	包含層	包	(口)8.6 (高)2.3	外; ロクロナデのち系切り内; ロクロナデ	密0.5~1mmの小石	堅緻	淡黄灰	口縁5/6	山皿(瀬戸?)
906	193-2	陶器 小皿	ハ85	包含層	包	(口)8.8 (高)2.2	外; ロクロナデのち系切り内; ロクロナデ	密0.5~1mmの小石	堅緻	灰白	口縁2/3	山皿(知多?) 内面に漆付着
907	57-6	陶器 合子	c44	SK364~367	SK群 上層	(口)7.0	外; ロクロナデのち縦線内; ロクロナデ	密0.5~1mmの小石	堅緻	白灰	口縁1/3	山茶椀質
908	56-8	陶器 鉢	b44	不明	SK1	(口)ー	外; ロクロナデ内; ロクロナデ	密0.5~2mmの小石	堅緻	褐灰	口縁部片	産地不明
909	57-7	陶器 鉢	c44	SK364~367	SK群 上層	(口)ー	外; ヨコナデ内; ヨコナデ	密0.5~1mmの小石	堅緻	暗赤	口縁部片	常滑か?
910	22-7	陶器 椀	d77	不明	SK1	(高台)6.8	外; ロクロナデのち系切りのち高台にヨコナデ内; ロクロナデ	粗0.5~3mmの小石	堅緻	淡灰	高台完存	山茶椀(知多猿投) 高台に剥殻痕、墨書「十」
911	72-8	磁器 小皿	c63	不明	SD3	(底)3.7	外; ナデのち施釉内; 陸刻文のち施釉	密	堅緻	釉明緑灰	底1/5	青白磁 龍泉窯系
912	198-4	磁器 椀	不明	不明	不明	(高台)4.2	外; ナデのち施釉内; 陸刻蓮弁文のち施釉	密	堅緻	釉淡緑灰	高台3/5	青磁 龍泉窯系
913	188-5	磁器 小皿	c10	包含層	包	(口)10.6 (高)2.4	外; クズリのち施釉内; 施釉	密	堅緻	釉淡緑白	口縁1/5	青白磁 景徳鎮窯系
914	82-7	磁器 小椀?	不明	不明	不明	(口)11.9	外; 施釉内; 施釉	密	堅緻	釉明緑灰	口縁1/2	青白磁 口壳
915	198-3	磁器 椀	d76	包含層	包	(口)ー	外; 施釉内; 陸刻文のち施釉	密	堅緻	釉緑灰	口縁部片	青磁
916	96-1	磁器 椀	c75	不明	SK1	(口)16.0	外; ハケメ文のち施釉内; ハケメ文のち施釉	密	堅緻	釉淡緑黄	口縁1/2	青磁 同安窯系
917	121-3	土師器 鍋	c76	不明	SK2	(口)22.0	外; ヌレ・ナメのちヨコナデ内; ナデのちヨコナデ	密0.5~1mmの小石(多)	良好	淡黄橙	口縁1/4	
918	122-1	土師器 鍋	c76	不明	SK2	(口)21.2	外; ヌレ・ナメのちヨコナデ内; ナデのちヨコナデ	密0.5~1mmの小石(多)	良好	暗黄橙	口縁1/4	外面に煤付着
919	195-1	瓦質土器 火鉢	c76	包含層	包	(口)44.0	外; ミガキのちスタンプ文内; ミガキ	密0.5~1mmの小石	良好	暗褐	口縁1/6	
920	222-1	瓦質土器 器種不明	不明	不明	不明	(底)25.2	外; 磨滅内; ナデ	密0.5~2mmの小石	良好	暗灰	底1/6	
921	80-5	軒丸瓦	e47	SE377	SK1		外; 凸線表現の単弁葉弁蓮弁文内; ナデのちクズリ	密0.5~2mmの小石	良好	暗緑灰	瓦当2/5	
922	163-1	軒丸瓦	o88	SZ442	SK1	(径)12.0	外; 凸線表現の単弁葉弁蓮弁文内; ナデ	密0.5~2mmの小石	良好	淡褐灰	瓦当3/4	中房に文様なし
923	138-4	軒丸瓦	o85	SD445	SD5		外; 巴文内; ナデ	密0.5~2mmの小石	良好	黄灰	瓦当2/5	
924	149-3	軒丸瓦	o86	SZ442	SK1	(径)10.2	外; 巴文内; ナデ	粗0.5~2mmの小石	良好	黄灰	瓦当2/5	瓦当面にハナレ砂付着
925	88-4	軒丸瓦	c70	SD391	SD1	(径)11.5	外; 巴文、丸瓦部ナデ内; ナデ、丸瓦部布目	粗0.5~2mmの小石	良好	灰白	瓦当4/5	
926	163-2	軒丸瓦	o88	SZ442	SK1	(径)12.4	外; 巴文、丸瓦部ナデ内; ナデ、丸瓦部布目	粗0.5~4mmの小石	良好	灰	瓦当4/5	巴の中央に小突起あり
927	162-2	軒丸瓦	o88	SZ442	SK1	(径)12.1	外; 巴文、圓線、珠文帯内; ナデ	粗0.5~5mmの小石	良好	淡灰	瓦当4/5	
928	177-3	軒平瓦	ハ88	SZ442 上	SK2	(幅)3.1	外; 唐草文内; ナデ	粗0.5~4mmの小石	良好	暗黄橙		段頸
929	119-1	軒平瓦	d75	SK403	SK2		外; 文様不明	粗0.5~2mmの小石	良好	淡黄		
930	64-1	軒平瓦	c58	SD391	SD3	(幅)4.5	外; ポジティブな唐草文平瓦部布目内; ナデ	粗0.5~3mmの小石(多)	良好	灰		瓦当面にハナレ砂付着
931	186-1	平瓦	o87	SZ442	SK1	(幅)2.3	凹; 布目、糸切り痕凸; 縄叩き目痕	粗0.5~3mmの小石(多)	良好	灰白		端面は面取り
932	216-1	平瓦	d75	SD402	SD1	(幅)1.5	凹; 布目、糸切り痕凸; 縄叩き目痕	粗0.5~3mmの小石(多)	良好	灰		端面は面取り 凸面はハナレ砂多い
933	250-1	平瓦	d75	SD402	SD1	(幅)1.4	凹; 布目、糸切り痕凸; 縄叩き目痕	粗0.5~4mmの小石(多)	良好	灰		端面は面取り 凸面はハナレ砂多い
934	81-1	平瓦	c69	SD391	SD1	(幅)2.6	凹; ナデ、模骨痕凸; ナデ	粗0.5~4mmの小石(多)	良好	灰白		
935	25-10	平瓦	c26	SD347	SD1	(幅)2.4	凹; 布目凸; 磨耗	粗0.5~4mmの小石	やや軟	黄褐		端面は面取り
936	249-3	平瓦	d74	SD402	SD1	(幅)3.1	凹; 布目、ナデ凸; ナデ	粗0.5~4mmの小石	やや軟	淡褐		

tab.30 ケカノ辻・角垣内地区出土遺物観察表(21)

番号	実測 番号	器種等	出土 グロット	遺構・層 名など	取上時の 名 称	法 量 (c m)	調 整 ・ 技 法 の 特 徴	胎 土	焼 成	色 調	残 存 度	備 考
937	1-2	陶器 椀	12	SD503	SD503 No.6	(口)16.3 (高)5.6	外;020ナデのち系切り、高 台上にヨコナデ 内;020ナ デ	密0.5~2mmの 小石	堅緻	灰白	9/10	山茶碗(澁美)
938	1-3	陶器 椀	12	SD503	SD503 No.7	(口)17.4 (高)6.0	外;020ナデのち系切り、高 台上にヨコナデ 内;020ナ デ	密0.5~2mmの 小石	堅緻	灰白	9/10	山茶碗(澁美) 高台上に粗殺痕
939	1-1	陶器 椀	12	SD503	SD503	(口)15.4 (高)5.9	外;020ナデのち系切り、高 台上にヨコナデ 内;020ナ デ	密0.5~2mmの 小石	堅緻	灰白	9/10	山茶碗(澁美?)高台上に粗殺痕 内面に重ね焼き痕(粗殺痕)
940	1-5	陶器 椀	12	SD503	SD503	(口)16.0 (高)5.7	外;020ナデのち系切り、高 台上にヨコナデ 内;020ナ デ	密0.5~2mmの 小石	堅緻	灰白	1/3	山茶碗(知多) 高台上に粗殺痕
941	1-6	陶器 椀	k3	SD503	SD503 No.3	(口)16.3 (高)7.4	外;020ナデのち系切り、高 台上にヨコナデ 内;020ナ デ	密0.5~2mmの 小石	堅緻	灰白	高台1/3	山茶碗(澁美) 外面に灰釉掛け掛け?
942	1-4	陶器 椀	12	SD503	SD503 No.8	(口)17.4 (高)9.2	外;020ナデのち系切り、高 台上にヨコナデ 内;020ナ デ	密0.5~2mmの 小石	堅緻	灰白	高台1/2	山茶碗(澁美) 内面に重ね焼き痕
943	2-1	陶器 壺	12	SD503	SD503 No.4	(口)35.3	外;ヨコナデ 内;ヨコナデ	密0.5~3mmの 小石	堅緻	赤褐	口縁1/4	常滑
944	1-7	土師器 皿	12	SD503	SD503 No.9	(口)14.2	外;ナデのちヨコナデ 内;ナデのちヨコナデ	密0.5~2mmの 小石	良好	暗橙	口縁1/4	
945	3-1	土師器 皿	J4	SD508	SD508 No.1	(口)12.3	外;ナデのちヨコナデ 内;ナデのちヨコナデ	密0.5~2mmの 小石	良好	淡褐	口縁9/10	外面に素地接合痕
946	3-4	陶器 椀	k2	SD508	SD508	(口)15.2 (高)5.8	外;020ナデのち系切りのち 高台上にヨコナデ 内;020ナ デ	密0.5~3mmの 小石	堅緻	灰白	2/5	山茶碗(知多) 高台上に粗殺痕
947	2-2	土師器 鍋	k3	SD508	SD508 No.2	(口)28.3	外;ナデのちヨコナデ 内;ナデのちヨコナデ	粗0.5~2mmの 小石	良好	淡黄橙	1/2	外面に煤付着
948	4-5	陶器 椀	c8	SK510	SK510	(口)10.0	外;020ナデのちスリ 内;ナデ	密0.5~1mmの 小石	堅緻	軸 黒褐	1/4	天目茶碗(中国)
949	4-3	土師器 皿	c8	SK510	SK510	(口)12.1	外;ナデのちヨコナデ 内;ナデのちヨコナデ	粗0.5~2mmの 小石	良好	淡黄橙	3/4	外面に素地接合痕
950	5-1	土師器 鍋	c8	SK510	SK510	(口)31.4	外;ヨコナデ 内;ヨコナデ	粗0.5~1mmの 小石	良好	淡黄橙	口縁1/6	
951	5-7	土師器 皿	b8	pit3 (SBS22)	pit3	(口)12.0 (高)2.7	外;オサエ・ナデ 内;ナデ	密0.5~1mmの 小石	良好	淡黄	口縁1/4	
952	3-1	土師器 皿	f10	SD512	SD512	(口)13.9	外;ナデのちヨコナデ 内;ナデのちヨコナデ	密0.5~2mmの 小石	良好	暗黄橙	1/2	
953	3-5	土師器 鍋	f10	SD512	SD512	(口)25.2	外;ナデのちヨコナデ 内;ナデのちヨコナデ	粗0.5~1mmの 小石	良好	淡橙	口縁1/6	外面に煤付着
954	3-8	土師器 鍋	f10	SD512	SD512	(口)27.4	外;ナデのちヨコナデ 内;ナデのちヨコナデ	粗0.5~1mmの 小石	良好	淡橙	口縁1/6	
955	4-1	土師器 鍋	f10	SD512	SD512	(口)30.6	外;ナデのちヨコナデ 内;ナデのちヨコナデ	粗0.5~2mmの 小石	良好	淡橙	口縁7/10	外面に煤付着
956	5-4	土師器 鍋	i5	SD518	SD518	(口)31.4	外;ヨコナデ 内;ヨコナデ	粗0.5~2mmの 小石	良好	淡橙	口縁1/10	
957	5-2	土師器 羽釜	f4	SK514	SK514	(口)1	外;ヨコナデ 内;ヨコナデ	粗0.5~2mmの 小石	良好	淡橙	口縁部片	
958	5-3	土師器 鍋	c9	SK515	SK515	(口)1	外;ヨコナデ 内;ヨコナデ	粗0.5~1mmの 小石	良好	淡橙	口縁部片	
959	7-6	磁器 小皿	g9	灰褐色土	灰褐色土	(口)10.4 (高)2.0	外;陸刻文?のち施釉 内;施釉	密	堅緻	軸 明緑灰	口縁1/4	青磁 口壳
960	7-1	陶器 椀	d6	暗褐色土	暗褐色土	(高)7.2	外;020ナデのち系切りのち 高台上にヨコナデ 内;020ナ デ	密0.5~2mmの 小石	堅緻	灰黄	高台完存	山茶碗(澁美)
961	6-6	磁器 合子	k3	表土	表土	(底)1	外;陸刻文のち施釉 内;施釉	密	堅緻	軸 淡緑灰	底部片	青白磁
962	6-9	磁器 椀	k3	表土	表土	(口)1	外;施釉 内;施釉	密	堅緻	軸 淡緑灰	口縁1/4	青白磁 口壳
963	4-2	土師器 鍋	g9	灰褐色土	灰褐色土	(口)29.8	外;ナデのちヨコナデ 内;ナデのちヨコナデ	粗0.5~2mmの 小石	良好	明橙	口縁1/5	外面に煤付着
964	6-5	陶器 椀	f10	表土	表土	(高台)4.2	外;020ナデのちスリ 内;施釉	密0.5~2mmの 小石	堅緻	軸 茶	高台1/4	瀬戸 丸椀
965	6-3	陶器 椀	g11	表土	表土	(高台)4.4	外;020ナデのちスリ 内;施釉	密0.5~1mmの 小石	堅緻	軸 茶	高台1/4	瀬戸 丸椀
966	6-4	陶器 搦鉢	f10	表土	表土	(口)31.4	外;施釉 内;施釉	密0.5~1mmの 小石	堅緻	軸 暗赤褐	口縁1/6	瀬戸
967	6-2	陶器 小皿	B区	表土	表土	(口)9.3 (高)1.7	外;ロクロナデのち系切り 内;ロクロナデ	粗0.5~2mmの 小石	堅緻	灰白	4/5	山皿(知多)
968	6-1	須恵器 壺	B区	表土	表土	(頸)28.6	外;タタキメのちヨコナデ 内;タタキメのちヨコナデ	粗0.5~3mmの 小石	堅緻	灰	頸部1/4	
969	23-2	軒丸瓦	k6	SK504	SK504	(径)16.9	外;巴文・珠文帯 内;ナデ	密0.5~2mmの 小石	良好	黒灰	瓦当1/3	三尊寺山門・観音堂に同瓦あり
970	23-1	軒椀瓦	k5	SZ519	SZ519	(径)11.0	外;巴文・珠文帯 内;ナデ	密0.5~2mmの 小石	良好	黒褐	丸瓦当 1/3	
971	24-1	軒椀瓦	d7	SK511	SK511	(厚)4.0	外;唐草文 内;ナデ	密0.5~1mmの 小石	良好	暗黄橙	平瓦当 2/5	
972	24-2	軒椀瓦	d7	SF501 西040 r7	SF501	(厚)4.1	外;唐草文 内;ナデ	密0.5~1mmの 小石	良好	黒灰	平瓦当 2/5	外区外縁に○に上の刻印
973	11-1	椀瓦	i5	SK520	SK520	(厚)1.6	外;ナデ 内;ナデ	密0.5~1mmの 小石	良好	灰		
974	13-1	軒椀瓦?	e6	SK505	SK505	(厚)2.5	外;ナデ 内;ナデ	粗0.5~2mmの 小石	良好	灰		
975	20-1	一字瓦	g3	SK509	SK509	(厚)2.3	外;ナデ 内;ナデ	粗0.5~2mmの 小石	良好	灰		釘穴あり
976	18-2	平瓦?	d7	SK511	SK511	(厚)2.1	外;ナデ 内;ナデ	密0.5~2mmの 小石	良好	灰		釘穴あり
977	10-1	一字瓦?	h5	表土	表土	(厚)3.6	外;ナデ 内;ナデ	密0.5~2mmの 小石	良好	灰		
978	21-1	丸瓦		表土	表土	(長)26.4	外;ナデ 内;布状圧痕・棒具痕	密0.5~3mmの 小石	良好	灰		端面は面取り
979	15-1	丸瓦		表土	表土	(長)26.2	外;ナデ 内;布状圧痕	密0.5~2mmの 小石	良好	灰		端面は面取り
980	22-2	鞆面戸瓦		表土	表土	(幅)9.9	外;ナデ 内;布状圧痕	密0.5~2mmの 小石	良好	灰		端面は面取り
981	22-1	鞆面戸瓦		表土	表土	(幅)9.8	外;ナデ 内;布状圧痕	密0.5~2mmの 小石	良好	灰		端面は面取り
982	8-1	平瓦		表土	表土	(幅)23.2	外;ナデ 内;ナデ	密0.5~2mmの 小石	良好	灰白		端面は面取り

tab.31 蚊山地区出土遺物観察表 (22)

V 調査資料の科学分析

瓦窯SF501の考古地磁気年代

富山大学理学部地球科学教室

広岡公夫・田中彰子

はじめに

土が焼かれると、冷えるときに、含まれている磁性鉱物が地磁気の方向に熱残留磁化を獲得するという性質を利用して、焼土の残留磁化方向から遺構の年代を推定することができる。これが考古地磁気年代推定法である。考古地磁気データが蓄積するとともに、年代推定の精度も向上してきた。しかし、その結果、過去の日本では、地球磁場方向の地域差が現在よりもっと大きかった時期があったこと（広岡、1977;1989）などの問題点も明らかになってきた。特に、14世紀から18世紀にかけては、本州中央部（近畿・中部・関東地方）と西日本（中国西部～九州北部）では、偏角に大きな違いがあったこと（広岡、1993）が判明し、この期間については、西日本用の考古地磁気永年変化曲線と本州中部用のものを別に用意しなければならなくなってきた。幸い、17・18世紀については、標準としている西南日本の考古地磁気永年変化曲線（Hirooka, 1971）は東海地方のデータを基に描かれているので、標準曲線の補正は必要でない。

考古地磁気試料の採取と測定

年代を推定するためには、焼土の残留磁化の方向を詳しく知らなければならないので、試料として採取した焼土が窯体内でどのような方位になっていたかが正確に測られた定方位サンプルでなければならない。このときの方位測定の精度が推定年代値の精度を左右するので、できるだけ正確に測らねばならない。そして、その焼土が最終焼成終了以降動いていない部分でなければならない。更に、遺構の部位によって残留磁化方向が異なることがあるので、よく焼けて、しかも、正確に地磁気の方向を記憶している部分からサンプリングをすることが最も重要である。古窯では床面が上記の条件を満足するので、サンプリングは窯中央部の床で行うことが多い。今

回の蚊山遺跡瓦窯では、ロストルの間の床面から14個の試料（試料番号EM 1～14）を採取した。

残留磁化の測定には、夏原技研製のリングコア型スピナー磁力計（SSM-85型）を使用し、6回置き直し法で測定した。

採取してきた試料が持っている残留磁化を自然残留磁化（natural remanent magnetization、略してNRM）といい、これには磁化方向や強度が変わりにくい磁氣的に安定な成分が多く含まれているが、試料によっては弱い磁場でもすぐに方向を変えてしまうような非常に不安定な磁化成分も含まれていることがあり、このような場合には不安定な磁化成分が最終焼成後の長い堆積期間中に、地球磁場や周りのものが作る磁場の影響を受けて磁化方向を変えてしまっていることがある。このように、NRMは色々な安定性の磁化成分から成り立っている。不安定な磁化成分は、誤差のもととなるので消して仕舞わなければならない。不安定成分の消去には、交流消磁法という実験手段を用いる。焼かれた温度が低く、磁化強度が弱い時には不安定な成分が多くなる。

地磁気を遮蔽した無磁場空間内にソレノイド・コイルをおき、そのコイルに交流電流を流す。コイル内に発生する交番磁場によって、コイル内に置かれた試料は交番磁場で磁氣的に揺すられて、不安定な磁化成分が消去される。実験の手順は、まず、全試料について、NRMの測定を行い、磁化方向のまとも具合や磁化強度を知る。次いで、交番磁場の強さを適当な段階に設定し、交流消磁を行い、消磁後に磁化測定を行う。この段階で磁化のまとも具合に改善が認められないときには、更に高い消磁磁場の段階で消磁を行う。この手順を繰り返して、何段階もの消磁を行うことを段階交流消磁という。今回は500eの1段階で消磁実験を行った。

NRM 測定の結果得られた偏角、伏角、磁化強度はtab.32に、500eの消磁後のそれはtab.33に

示されている。どちらの結果でも、4個の試料(E M6,9,13,14)の磁化方向は他の試料のそれから少し外れている。これには、試料採取の際の方位測定の誤差か、試料として採った部分がなんらかの原因で磁化獲得後に動いたかなどの理由が考えられるが、いずれにしても、昔の地磁気を忠実に記録しているものとは考えにくいので、蚊山遺跡瓦窯の平均磁化方向を計算する統計処理の際には除外した。これらの試料には、表中に*印が付されている。

平均磁化方向と磁化のばらつきの大きさを求める統計計算には、フィッシャーの方法(Fisher,1953)を用いた。統計計算では、平均偏角・平均伏角・95%レベルのフィッシャーの信頼角($\alpha 95$)・フィッシャーの精度係数(K)および平均磁化強度を求める。

ここで $\alpha 95$ は、真の磁化方向が、平均磁化方向(平均偏角・平均伏角)のまわり $\pm \alpha 95$ の範囲に95%の確率で存在することを示しており、平均磁化方向がどれくらいの誤差を持っているかを表す値である。測定試料が多くなるほどその平均磁化方向の信頼度が高くなるので、同一遺構からの試料数が多くなるほど $\alpha 95$ の値は小さくなる。通常、上記のように1遺構から10~15個程度の試料を採ることになっている。よく焼けた窯跡の場合には、磁化のばらつきが多少大きなものでも $\alpha 95$ は 3° 以内におさまる。

Kは、個々の試料の磁化方向の平均的なばらつきの程度を表すパラメータである。この値が大きいはばらつきが少ないことを意味し、通常よく焼かれた焼土遺構では500以上の値となる。また、この値は試料の数には関係なく、その遺構の個々の試料の磁化方向のばらつきがどの程度であることを示している。統計計算の結果はtab.34に示されている。 $\alpha 95$ はNRMでも 1.08° 、消磁後は 0.83° となり、非常にまとまりの良いことがわかる。ことに、消磁後はKの値も3000を越えており、そのことがよくわかる。したがって、ここでは、より、まとまりの良い500e消磁後の結果を考古地磁気データとして採用する。

考古地磁気年代

tab.34の考古地磁気データを考古地磁気永年変化曲線上にプロットすると、fig.42のようになる。白丸が50年ごとの地磁気の方向を表わし、黒丸が測定結果(蚊山地区瓦窯SF501の平均磁化方向)、それを囲む円がフィッシャーの信頼円($\alpha 95$)を示す。上述のように、17~18世紀については、東海地方ではこの永年変化曲線を補正する必要はないので、これを標準曲線として採用した。図からわかるように、測定結果は、18世紀の永年変化曲線より少し伏角が浅い方にずれているが、もともと、この永年変化曲線には多少の誤差が含まれているので、これくらいのずれがあっても仕方がない。黒丸に一番近い部分の永年変化曲線の年代が推定年代値を与えるので、考古地磁気推定年代は次のようになろう。

瓦窯SF501 A.D. 1735 \pm 15年

引用文献

- R.A.Fisher(1953) Dispersion on a sphere, Proceedings of Royal Society of London, Series A, vol.217, 295-305.
- Kimio Hirooka (1971) Archaeomagnetic study for the past 2,000 years in Southwest Japan, Memoirs of Faculty of Science, Kyoto University, Series of Geology & Mineralogy, vol.38, 167-207
- 広岡公夫(1977)考古地磁気および第四紀古地磁気研究の最近の動向、第四紀研究 vol.15 200-203
- 広岡公夫(1989)古代手工業生産遺跡の自然科学的考察、一考古地磁気学、古地磁気学の立場から一、「北陸の手工業生産」、北陸古代手工業生産史研究会編、真陽社 225-284
- 広岡公夫(1993)年代測定の手法、季刊考古学(特集 須恵器の編年とその時代) 第42号 75-77

試料番号	偏角 (° E)	伏角 (°)	磁化強度 ($\times 10^{-4}$ emu/g)
EM1	2.5	41.6	18.1
2	1.5	44.6	18.6
3	2.9	40.8	9.2
4	2.7	40.6	9.70
5	2.2	40.8	7.29
6	0.4	38.2	8.44
* 7	2.2	43.6	12.6
8	4.2	42.3	9.01
* 9	-1.7	40.5	90.3
10	0.9	43.2	32.9
11	5.2	42.9	11.5
12	5.4	44.0	10.6
* 13	10.6	34.5	17.1
* 14	2.5	40.3	71.5

* : 統計計算の際に除外したもの。

tab.32 瓦窯 S F 501 の N R M の磁化測定結果

試料番号	偏角 (° E)	伏角 (°)	磁化強度 ($\times 10^{-4}$ emu/g)
EM1	1.3	42.0	18.0
2	2.0	44.9	18.5
3	3.9	41.6	9.06
4	2.4	41.6	9.59
5	3.4	42.3	7.03
* 6	-0.7	40.1	8.14
7	1.4	44.1	12.6
8	3.5	42.8	8.99
* 9	-0.8	41.3	8.87
10	2.4	44.1	32.7
11	3.2	44.1	11.4
12	3.2	44.1	10.3
* 13	9.9	35.1	16.9
* 14	4.1	47.7	6.90

* : 統計計算の際に除外したもの。

tab.33 瓦窯 S F 501 50 Oe 消磁後の磁化測定結果

遺構名	消磁段階	N	D	I	α_{95}	K	平均磁化強度 ($\times 10^{-4}$ emu/g)
			(° E)	(°)	(°)		
瓦窯SF501 (NRM)	10	2.9	42.4	1.08	1994.3	14.0	()
	50 Oe	10	2.6	43.2	0.83	3359.6	13.8

N : 試料個数、D : 平均偏角、I : 平均伏角、 α_{95} : フィッシャーの信頼角、
K : フィッシャーの精度係数。
() は年代推定のための考古地磁気データとして採用しなかったものを示す。

tab.34 瓦窯 S F 501 の考古地磁気測定結果

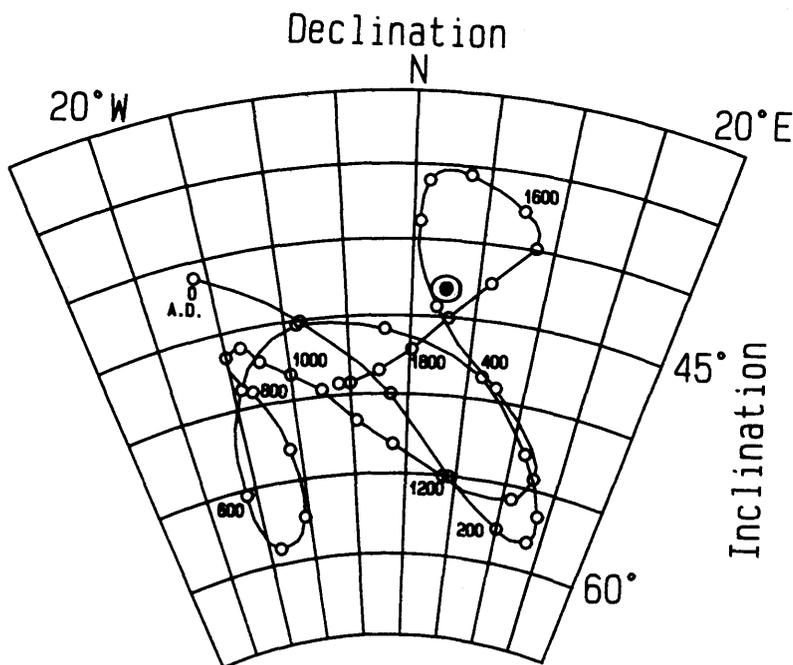


fig.42 西南日本の考古地磁気永年変化と瓦窯 S F 501 の考古地磁気測定結果

Ⅵ 調査のまとめと検討

岩出遺跡群の調査は今回の調査も含めると4次となり、調査面積も19,941㎡にも及ぶ。中世を中心とした遺跡の総調査面積としては、現状では明和町に所在する斎宮跡に続くものといえる。岩出遺跡群の調査によって、南勢地域における中世集落の検討はかなりの深化が見られることとなろう。

この章では今回の調査も含め、岩出遺跡群において認められたことをまとめ、今後の検討課題の提示も含めて若干の考察を行うこととする。

1 左郡古墳群について

左郡古墳群の状況については、今回の調査成果も踏まえて前川嘉宏氏によって検討されている^①。そのためあまり付け加えることはないが、当古墳群周辺の古墳群のあり方との比較から、いくつかの問題点を指摘しておこう。

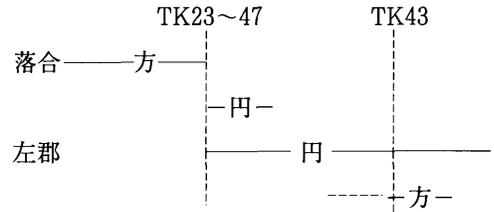
a 群構成と所属時期

H1左郡地区の調査を含め、都合23基の古墳が確認されている。いずれも削平を受け、埋葬施設が明らかかなものは横穴式石室墳を除いては1基もない。周溝から出土した土器を見ると、田辺昭三氏による大阪・陶邑編年のTK23～TK209型式に併行するものであり、おおよそ5世紀末頃～7世紀初頭にかけて形成された古墳群と見なしてよい。墳形には円墳・方墳がある。

全ての古墳から土器が出土しているわけではないので断定的なことは言いにくいだが、当古墳群の変遷には以下の興味深いものがある。まず、初現期に築かれた古墳(5.7.23)はいずれも円墳であり、末期(7世紀初頭頃)に築かれたものは、円墳(14.20)も存在するものの、方墳(4・17)もあることである。時期が判明している方墳は7世紀初頭頃のもののみである。

このように、左郡古墳群は落合古墳群^②などの比較的初期の群集墳によく見られるような「方墳→円墳」という変遷ではなく、「円墳→円墳・方墳」の流れが存在していたものと考えざるを得ない。近接する落合古墳群の場合、その初現は4世紀末頃まで遡り、円墳の出現はTK23～47型式併行でその後暫くで古

墳群の造営そのものが途絶える。左郡古墳群における初現期の円墳が所属時期は、落合古墳群において円墳が出現する時期とほぼ併行しているわけで、この点のみを採り上げれば、当時の墳形に円墳が主体となっていた類例として用いることができるかと思われる。



5世紀末以前に方墳が形成されており、5世紀末頃～6世紀前半頃にかけては円墳、6世紀後半頃以降には円墳と方墳で構成されるようになる、という古墳群の事例としては、三重県内では安濃町・平田古墳群^③、松阪市・中部平成台団地造成にかかる古墳群(大分山・常光坊谷・狼谷・川原表)^④など、いくつかの調査事例から想定され、「方墳→円墳」の移行時期はTK23～47型式併行期付近、「円墳→円墳・方墳」の時期はTK43型式併行期付近、という想定ができそうである。要するに、方墳単独で構成される時期、円墳単独で構成される時期、両者が混合される時期(混合といっても両者が意味なく認められるのではなく、何らかの理由・意義は存在すると想定される)、という概略3段階の存在が想定され、それぞれ有機的な関係のもと連続しているように思われる。

ただし、MT15型式併行期頃まで築造される方墳群もあるようで^⑤、具体的な動向が地域単位で若干異なることは充分考えられる。

今回の検討はこれ以上踏み込まないが、左郡古墳群の意義のひとつとして「円墳→円墳・方墳」の構成変化を示す資料であること、そして群集墳において円墳の後に方墳が一定の意義をもって再度登場することに注目したい。

b 古墳群の立地と集落との関係

左郡古墳群が形成されていた当時の地形的な環境は、左郡地区と蚊山地区との間に小規模な谷が入り、左郡地区～ケカノ辻・角垣内地区に向かって低平な

台地が広がっていたものと考えられる。したがって左郡古墳群は、この低台地の南斜面に漸次築かれることによって群集墳として構成されたものといえる。このような、丘陵（台地）南縁部を利用して構築されている古墳群はさほど珍しいわけではなく、近接する落合古墳群などにも認められるものである。また、群のなかで初現的なものが斜面上方に構築されている点も、落合古墳群などの例と同じである。

相違点としては、落合古墳群の場合、それが構築された場所が明瞭に見渡せ、しかも集落を形成することのできる場所が古墳群の南方に存在しているのに対し、左郡古墳群の場合にはそれに相当する場所は古墳群の南側には認めることができない。

左郡古墳群はその末期に横穴式石室墳を有するものの、初現は5世紀末頃まで遡るものである。このような古墳群の調査例はあまり多くなく、古墳群を形成した集落との関連が不明である点からすると、初期群集墳の一例として扱うよりは後期群集墳の類に含めて考えるべき事例といえるのではないか。

2 中世岩出遺跡群にかかる事例と検討

岩出遺跡群の中心となる時期は、平安時代末頃から室町時代に及ぶ中世を中心とした時期である。岩出の歴史的環境については、第Ⅱ章でも述べたとおり岩出祭主との関連が重要で、この点を最重視して考察をする必要があるといえる。このことを念頭に置き、調査成果を検討する。

a 出土遺物—土器類—

出土遺物のなかでも中心となるのが土器類である。今回の調査では平安時代末～室町時代にかけての土器類が認められたが、多様な状況を呈している。そのことについて見ておこう。なお、時期区分は第Ⅳ章のⅠ～Ⅳ期区分を用いる。また、中世前期と後期の境はⅡ期とⅢ期の境とし、説明的に必要な場合は西暦や鎌倉時代などの表現も適宜行う。

概観

岩出遺跡群を構成する土器類には、土師器類・瓦器類・瓦質土器類・陶器類・磁器類がある。

土師器類 皿・小皿・碗などの供膳形態、鍋・羽釜などの調理形態のほか、盤などの食事に関連しないと思われる形態がある。土師器類の圧倒的大部

分が南伊勢系土師器群により構成される。器種構成としては原則南勢地域のあり方と同様であるが、当遺跡に特徴的な器種が存在することは第Ⅳ章で触れたとおりである。

瓦器類 碗・小碗・小皿などの供膳形態を構成するものであるが、出土量は極めて少なく、大和・伊賀地域からの搬入品と考えられるもののみである。当遺跡における瓦器は客体以外の何物でもない。

瓦質土器・瓦質系土器類 通常、伊勢ではⅢ期相当の頃から出土しはじめるが、ここではⅡ期からその存在が認められる。火鉢や風炉がある。瓦質土器は大和産と思われるものである。

瓦質系土器類については、左郡地区での出土に止まる。これは、南伊勢系土師器の範疇で把握できると断定できず、仮に素地胎土の点からそれが首肯されても以前の系譜が辿れない一群であることから、そのような状況が成立する背景の考察が必要となる。現在までのところ、このようなものは当遺跡にしか例がなく、類例を待って検討する必要がある。

陶器類 碗・小皿・卸皿・盤・練鉢・搦鉢・甕・壺などが認められ、主に調理形態・供膳形態・貯蔵形態が中心となる。

中世前期（Ⅰ～Ⅱ期）は山茶碗と呼称される碗・小皿類で、少量の練鉢や壺・甕を含む。練鉢は知多半島産を中心とする。山茶碗は肉眼観察では知多・渥美半島産ないしは猿投産のものを中心としているようである。中には瀬戸北部系の山茶碗もあるが、客体でしかない。

東海諸窯産と考えられる特殊な器種の存在については第Ⅳ章で触れたとおりで、当遺跡の性格を考えるうえで重要である。

中世後期（Ⅲ期）には瀬戸産と考えられる練鉢類、古瀬戸後期に属する施釉陶器類がある。施釉陶器類には平碗・卸皿・盤などがある。貯蔵形態の甕・壺類は常滑産のものが中心となる。信楽産のものなど、上記以外の産地と特定できるものはない。

磁器類 青磁・白磁・青白磁がある。碗・小皿・合子・茶入・瓶などの器種があり、比較的多様である。特に、青白磁がこれだけまわって出土した例は旧伊勢国はおろか三重県下全体でもなく、当遺跡の特殊性・重要性を物語っているといえる。

土器の変遷～土師器皿について～

南伊勢系土師器群中の皿・小皿類の変遷について、当遺跡で認識することができた知見を述べる。

中世における土器類の変遷については、型式学的な変化とともに、いわゆる法量の変化によって区分が可能であることは多くの先学によって明らかにされているところである。法量変化のうち、特によく用いられるのが器高と口径との比率（器高指数）によって示されるものであることもよく知られている。

当遺跡の土師器皿類の変遷を考えるにあたっては、上記の方法を考慮に入れつつ、完形品のものが多いことも踏まえ、口径と重量との関係から変遷を見てみた。その結果がfig.44である。

当報告でいうⅠ～Ⅲ期にかけての土師器皿が、口径では16cm内外から9cm内外へと変遷することは既に指摘されている^⑧。今回の土器資料によってもそれは追認されるのであるが、重量としては、1個体170g前後から50g前後へと変化することが確認された。そして、口径15cm内外の一群の場合、その重量は最大約40gの差があるのに対し、口径11～12cmの一群では15gほどしかないことも確認された。このことは、時の経過に伴って土器の製作に用いられる素地粘土が一定化する傾向にあることを示している。

遺構単位で見ると、溝・井戸などの遺構から出土したものには特に個体間重量と形態の差が大きく、土坑出土のものにはそれが少ないことがわかる。ただし、土坑のなかでも別目的で掘削された後に廃棄土坑として用いられた可能性が考えられるものは、個体間重量の開きが大きい。SK153は口径・重量の2点から2群に分かれるので、2時期のものが存在すると考えるべきであろう。

上記の点を踏まえ、形態的な変化

を見たのがfig.43である。形式的な要素としては、口縁部のヨコナデ手法の方法、口縁部から底部に至る角度、口縁部と底部との器壁の関係などが挙げられる。また、Ⅱb期に至ると土器に用いられる素地粘土が白色化し、その後Ⅲ期を通じてその傾向の続くことが指摘できる。

なお、実年代は伴出した陶器類などから割り振った。図中の1200年・1250年の位置については今後の変動はあまりないものと考えているが、1300年・1400年の位置については今後1型式程度のズレが生じる可

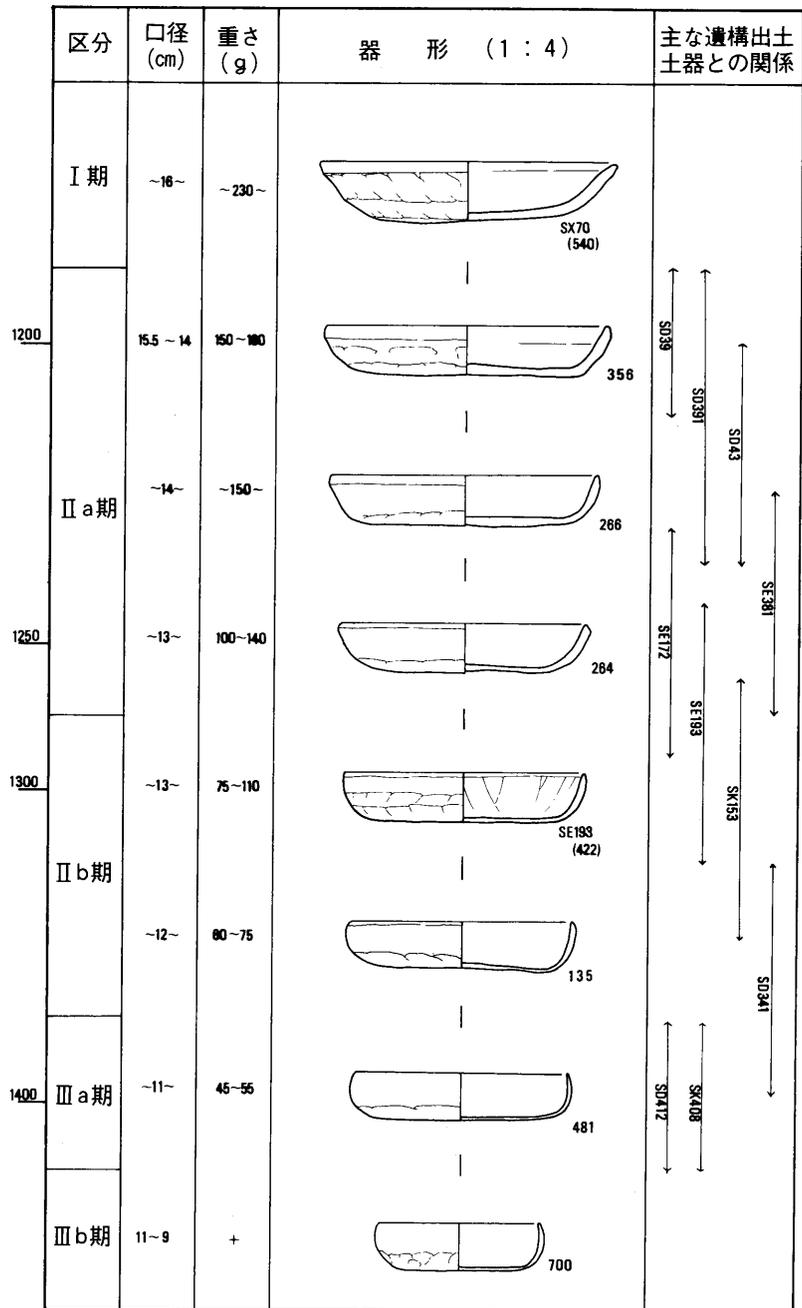


fig.43 岩出遺跡群における南伊勢系土師器皿B系統の変遷

能性を含んでいる。

遺構単位の土器組成について

今回の調査によって出土した土器のうち、Ⅱ a 期に相当する S E 381・S D 391、Ⅱ b～Ⅲ a 期の S D 341、Ⅲ a 期の S K 406・408、S D 412 について、それぞれの全体的な土器の構成比率を見たのが tab.35～40 である^⑧。これを見ると、各遺構・時期毎で多少のばらつきはあるものの、土師器皿・小皿類が全体の 66～97% を占め、他者を圧倒している状況が観察される。ただし、S D 391 は脚台付小皿・台付小皿のほか、陶器注口付小鉢・片口碗・特殊墨書土器などを含み、祭祀的な匂いのする遺構であること、S D 341・S K 406・S D 412 は土師器皿類ばかりを投棄したのではないかとと思われるほどの遺構であり、直接的な比較は注意が必要である。多気遺跡群（美杉村）における本書Ⅲ期相当の土器組成^⑨では土師器皿類がおよそ 60%、土師器煮沸具類が 32% ほどであり、S E 381 や多気遺跡群の状況あたりが実質的な土器組成のあり方かと思われる。

そのように考えると、左郡地区を含めた岩出遺跡群では、土師器皿類の構成比率が極めて突出したものと認識される。それは、多気遺跡群における本書Ⅳ期相当の土器組成にも匹敵、あるいはそれ以上の

ものであり、当遺跡の通常集落とは異なった特殊性が指摘できるのではないだろうか。

b 特殊遺物について

今回の調査で確認された特殊な遺物といえるのは、上記の土師器・陶器類のほか、絵画のある山茶碗、漆の付着した土器類、温石、四葉硯、墨書土器類など多様である。四葉硯からは字の書ける人物の存在が考えられる。伊勢地域で類例の少ない温石からは、岩出という地域を越えた、もしかすると鎌倉との関連を持っていたかも知れない人物の存在が想定できる。しかし、温石については今後の類例を待つて再度検討せざるを得ない。

絵画および墨書土器

絵画山茶碗は、梅・桜・柳と水鳥の描かれたものとモミジの描かれたものがある。ともに繊細かつ優雅な表現であり、描手の感性の豊かさが想像される。この絵そのものが生産地において描かれたものとは考え難く、生産地を離れた後、描かれたものと見てよからう。この絵画が描かれた後に当遺跡に運ばれたのか、あるいは当遺跡で描かれたのかは知る由もない。いずれにしても当遺跡におけるこの絵画土器の出土は、当遺跡に極めて風流な人物が存在していたことを十分に裏付けるものである。

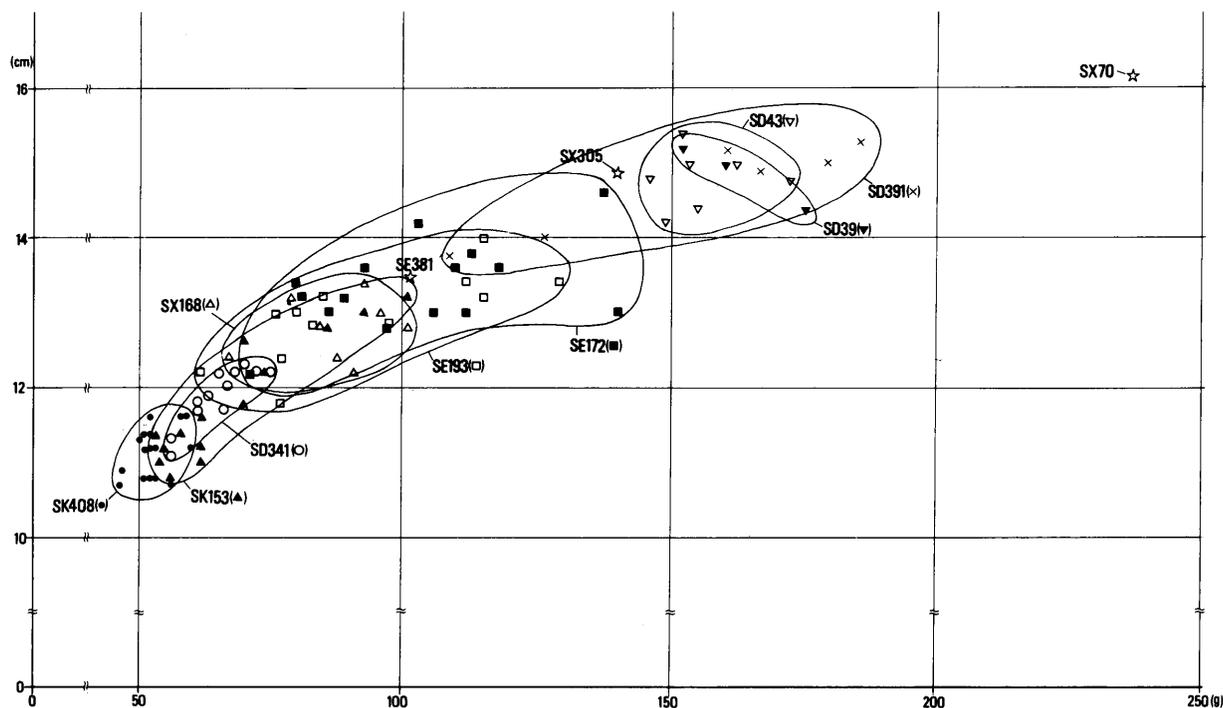


fig. 44 土師器皿口径・重量相関図

これと良く似たものに687の墨書のある土師器皿がある。これは、断定はできないが花押の可能性が高い。とすれば、この周辺にかなりの有識者の存在を想定させる。

また、墨書土器で特に注目されるのは、「上」と「侍」の墨書である。「上」の墨書は4点あり、いずれも山皿に書かれたもので、SD391を中心に出土している。「上」は恐らく「たてまつる」の意味



fig.45 山茶碗 (639) 外面の絵画 (1:1)

であり、片口を持つ特殊な器形であることと併せて、何らかの祭祀的な匂いがする。「侍」の土器はSD391のほかSZ442周辺で4点あり、武士の存在を想定させる。これらの遺物群が今回の調査におけるSD391以北で集中的に出土していることは、この付近が当遺跡においてかなり重要な意味を持つ地区に近いことを示していると考えられるべきであろう。

漆附着土器

II a 期に相当する遺構から出土している山茶碗等の内面には、漆の付着したものが存在する。山茶碗

質 類	産地等	器 種	点数	比 率(%)			
				個 別	機能別	質類別	
土 師 器	南 伊 勢	小 皿	431	55.61	83.09	84.38	
		皿	175	22.58			
		脚台付小皿	18	2.32			
			台付小皿	20	2.58		1.16
			鍋	8	1.03		
			三 足 鍋	1	0.13		
			ミニチュア鍋	1	0.13		
瓦質		火 鉢	1	0.13	0.13	0.13	
ロク口 土師器		小 皿	1	0.13	0.52	0.52	
		皿	3	0.39			
陶 器		小 皿	11	1.42	10.84	13.29	
		碗	73	9.42			
		片口碗・注口碗	5	0.64	0.64		
		鉢・小鉢	3	0.39	1.42		
		ねり鉢	8	1.03			
		壺	2	0.26	0.39		
		甕	1	0.13			
磁 器	青 磁	皿	6	0.77	1.16	1.68	
		碗	3	0.39			
		合子	1	0.13	0.13		
	白 磁	皿	1	0.13	0.26		
		碗	1	0.13			
青白		皿	1	0.13	0.13		
			775点	100.00	100.00	100.00	

tab.35 溝SD391の土器組成

質 類	産地等	器 種	点数	比 率(%)			
				個別	機能別	質類別	
土 師 器	南 伊 勢	小 皿	52	45.22	85.22		
		皿	24	20.87			66.09
		鍋(小)	7	6.09			18.26
		鍋(中)	9	7.82			
		鍋(大)	5	4.35			
		ミニチュア鍋	1	0.87			0.87
ロク 土 師 器		小 皿	2	1.74	2.61	2.61	
		皿	1	0.87			
陶 器		小 皿	3	2.61	9.56	10.43	
		椀	8	6.95			
		甕	1	0.87			0.87
瓦器		椀	1	0.87	0.87	0.87	
青磁		椀	1	0.87	0.87	0.87	
			115点	100.00	100.00	100.00	

tab.36 井戸 S E 381の土器組成

質 類	産地等	器 種	点数	比 率(%)			
				個別	機能別	質類別	
土 師 器	南 伊 勢	小 皿	306	53.77	96.31	97.54	
		中 皿	1	0.18			
		皿	239	42.00			
		大 皿	1	0.18			
		台付小皿	1	0.18			
		鍋	5	0.87			0.87
		ミニチュア鍋	1	0.18			0.18
		盤	1	0.18			0.18
陶 器	瀬戸・常滑	椀・平椀	4	0.70	1.57	2.10	
		盤	5	0.87			
		卸 皿	1	0.18			0.53
		練 鉢	2	0.35			
瓦質		火 鉢	1	0.18	0.18	0.18	
青白磁		瓶	1	0.18	0.18	0.18	
			569点	100.00	100.00	100.00	

tab.37 土坑 S K 408の土器組成

質 類	産地等	器 種	点数	比 率(%)		
				個別	機能別	質類別
土 師 器	南 伊 勢	小 皿	184	62.16	96.95	97.96
		皿	103	34.79		
		鍋	3	1.01		
陶 器	瀬・常	椀	2	0.68	0.68	1.02
		甕	1	0.34	0.34	
磁 器	青 白	椀	2	0.68	0.68	1.02
		皿	1	0.34	0.34	
			296点	100.00	100.00	100.00

tab.38 溝 S D 341の土器組成

質 類	産地等	器 種	点数	比 率(%)			
				個別	機能別	質類別	
土 師 器	南 伊 勢	小 皿	229	65.61	97.42	98.28	
		皿	111	31.81			
		鍋	1	0.29			0.29
		ミニチュア鍋	2	0.57			0.57
陶 器		練 鉢	1	0.29	0.29	0.86	
		甕	2	0.57	0.57		
磁 器	青 白	椀	2	0.57	0.57	0.86	
		皿	1	0.29	0.29		
			349点	100.00	100.00	100.00	

tab.39 土坑 S K 406の土器組成

質 類	産地等	器 種	点数	比 率(%)		
				個別	機能別	質類別
土 師 器	南 伊 勢	小 皿	76	47.50	96.25	98.13
		皿	78	48.75		
		鍋	3	1.88		
陶 器	瀬 常	練 鉢	1	0.62	0.62	1.24
		甕	1	0.62	0.62	
青磁		椀	1	0.62	0.62	0.62
			160点	99.99	99.99	99.99

tab.40 溝 S D 412の土器組成

の器壁が漆を塗るのに決して適当なものではないことから、それに塗布したものというよりは、山茶碗を塗布するための容器として用いられた結果と考えた方がよさそうである。そうすると、漆器などの漆製品にかかる作業がこの地で行われ、それに携わった工人等の存在が想定されるのである。

c 岩出遺跡群の性格と空間的構成について

集落の空間的構成については、これまでに調査された近畿自動車道関係調査の事例も併せて考察する必要がある。上記の遺物の検討とを踏まえた上で、岩出における中世集落の特徴を考えてみよう。

掘立柱建物群のあり方

今回の調査における掘立柱建物は、ケカノ辻・角垣内地区では4箇所、蚊山地区では1箇所の掘立柱建物集中地区があった。すでに調査結果が公表されている所り垣地区では2箇所、左郡地区では7箇所ほどが存在するため、全体的に見れば14地区ほどの掘立柱建物集中箇所が存在することになる。勿論、これは発掘調査が行われた範囲における状況であるので、遺跡総面積と調査面積との単純な比率から見ても、この約25倍ほどの掘立柱建物集中地区が存在している可能性も充分考えられる。

この状況は、比較的近接する楠ノ木遺跡の掘立柱建物集中箇所が6,890㎡の調査地区のなかでわずか5箇所しかないことを考えた場合、極めて密集した状況下にあることを示している。

中世墓のあり方

中世墓と考えられる遺構は、ケカノ辻・角垣内調査区の中～南部に多く、2カ所の中世墓集中地区が存在していた。このような傾向は、H1左郡地区においても認められる。これらのあり方は、墓域として明確な線引きを行うことこそ難しいものの、全く無秩序に墓が営まれたのではなく、ある程度の共通認識のもとで一定の場所に造墓が行われていたことを推察させる。

なお、今回の調査のなかで、確実に屋敷墓と考えられるようなものは存在していない。少ない調査面積からではあるが、一応共同墓地的な発想のもとで造墓活動がなされたものと考えておきたい。さらに、墓と考えられる遺構が当調査区北部にはほとんど見られない事実は、消極的ながら、調査区北部の重要

性を物語っているとできる。

また、S X305のような、恐らく墳丘を有し、完形の青磁碗を副葬品としているような例は、土師器皿類のみを副葬する一群とは明らかに差異が存在する。S X305のような墓を核とした中世墓域の存在が想定されるのである。

土師器皿を中心とした遺物群について

先述のように、土師器皿類を多量に含む遺構が存在している。土師器皿類の大量投棄は、岩手県平泉町・柳の御所遺跡、鎌倉の都市遺跡でも見られるように、饗宴などの行為の後で行われたものである可能性が高い^⑩。三重県内では、時期の違いこそあれ斎宮跡（明和町）で頻繁に確認されるし、中世後期・北畠氏の本拠である多気遺跡群の大蓮寺跡周辺でも確認されている。逆に、集落としては通常の部類に含まれる楠ノ木遺跡やある種の生産遺跡である勢和村若宮遺跡^⑪ではあまり確認できない傾向にある。これらのことから、岩出遺跡群が通常の集落の部類に含めるよりは鎌倉・多気・斎宮のような特殊な集落の部類に含めるべきものであるといえよう。

瓦とその分布から

今回確認された中世瓦の分布状況を見る。tab. 9に掲載したとおり、中世と考えられる瓦はケカノ辻・角垣内地区からのみある程度出土しているが、蚊山地区からは皆無で、H1左郡地区からも微量に留まっている。破片点数では、調査区からの出土は64点で決して多いとはいえず、これだけの資料からは何も確実なことは言えない。しかし、出土地点の分布を見るとS D391付近から次第に多くなっており、特に85ラインあたりでそのピークのあることが判る。このデータから、少なくとも85ライン付近の西あるいは東に中世の寺院が存在していた可能性を考えることができよう。

区画溝の存在

当遺跡では、Ⅱ～Ⅲ期にかけての区画溝と考えられる大規模な溝が多数確認されている。これらの溝は、昭和18年当時の地籍図^⑫に照合してみると、地割りとの関連が窺えそうなものとそうでないものが見受けられる。地割りとの関係が窺えるものはケカノ辻・角垣内地区で、そうでないものは左郡地区で多いようだ。

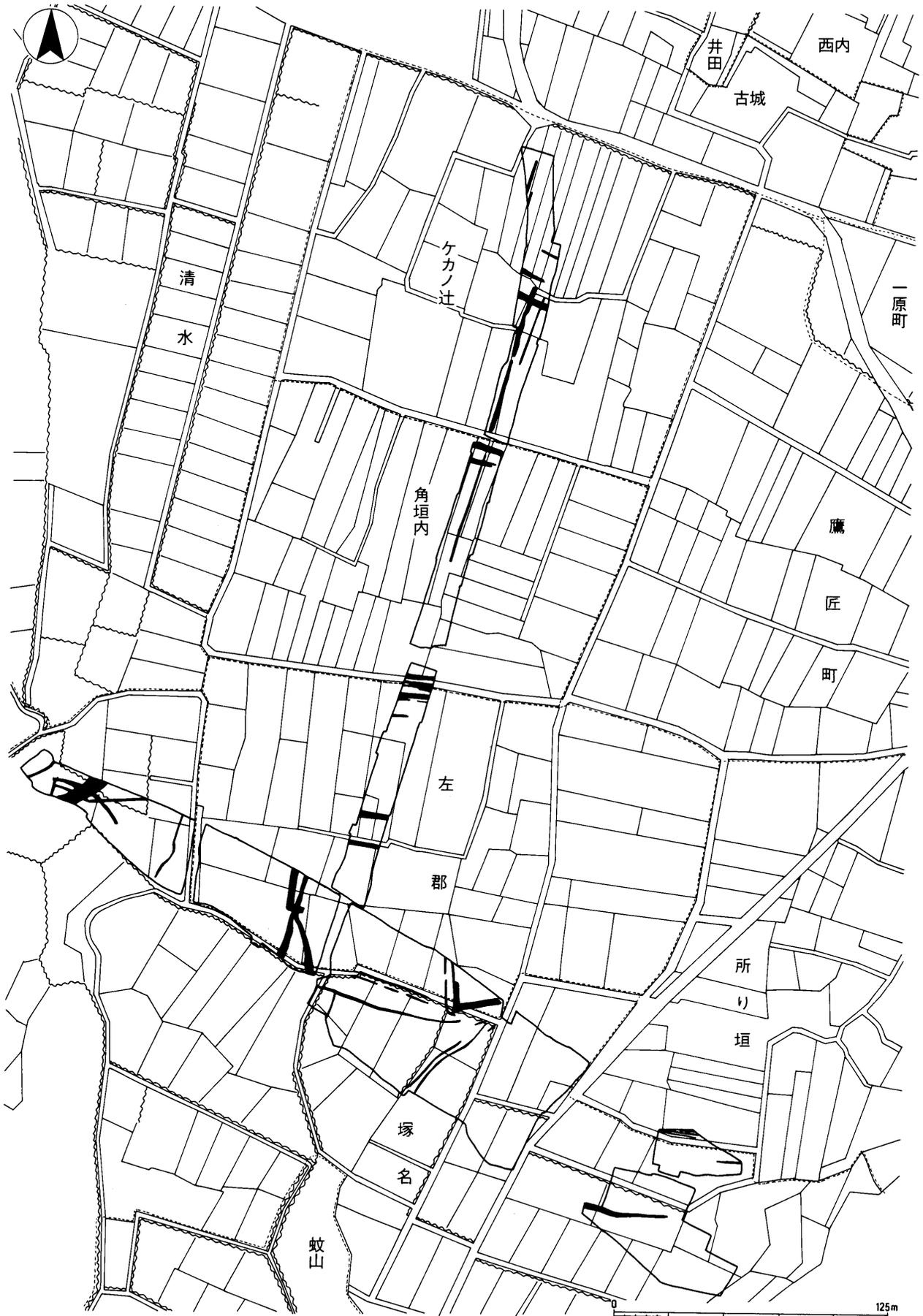


fig.46 昭和18年時点の地割りと調査区との関係 (1:2,500) 波線は水路、破線は字界を表わす。

まず、地割りととの関連が窺えるものには、S D 30 4,343,345,347 ~350,358,391,398,435,445 などがある。このうち、343,345,347 ~350 は、それ自体が近接してあることや地割りに見られる道の存在から、2条1対となる道の側溝である可能性が考えられる。S D 304 と S D 311、S D 398 と S D 402との関係も同様なものと考えられる。

地割りととの関係が見出しにくいものとしては、左郡地区のなかに多い。これは、左郡地区の南に谷が隣接していることから、自然環境の影響から地割りの改変が激しかった可能性が考えられる。

今回の調査結果から見ると、中世全般を通じ、昭和18年当時の地割りととの整合性は比較的良好であるといえ、それはケカノ辻・角垣内地区で特に顕著と考えてよさそうである。それを踏まえたうえで当調査区周辺の地割りをみると、字ケカノ辻において昭和18年当時の道がぐると廻っている部分の存在に気付く。今回の調査においてもこの付近では土師器皿類の多量廃棄遺構・絵画土器などの特殊な遺構・遺物が確認されているところであり、何らかの大規模な居館、あるいは瓦の分布状況からは寺院（仏堂）の存在が想定されるのである。

岩出遺跡群の性格

以上のことから推察すると、次のように考えることができる。すなわち、ケカノ辻・角垣内地区の調査区北部は、付近に寺院（仏堂）の存在も想定でき、かなり重要な人物の居住地に近い可能性を考えることができる。調査区の南方から左郡地区にかけては墓が分布する区域を介してそれに付随する集落が展開していたと推察される。地形的に見た場合、かなり重要な人物の居住地は西側の地形上高い部分に想定するのが妥当かと思われる。

今回の調査も含め、岩出地区での調査では、鎌倉時代初期～室町時代にかけての集落が広範囲に展開することが確認された。この事実と第Ⅱ章で検討した歴史的背景を考慮すれば、かなり重要な人物とは岩出祭主となり、今回まさに岩出祭主の屋敷地を中心に形成された集落を調査したと考えて、まず間違いないであろう。

ただし、今回の調査内に祭主館と特定できる場所は確認できなかった。上記の状況から推察すれば、

字ケカノ辻周辺、あまり調査区から隔たらない場所にそれを推定しておくのが最も妥当かと考えられる。その際、板塀跡と考えられるS A 458 は、その一端を示すものとも考えることも可能である。

ところで、祭主館を中心に、それに関わった集落が形成されているということは、当時における岩出集落が通常の集落以上に求心的な位相にあることを示している。この求心性については、第Ⅱ章で触れた中世前期を中心とした岩出の機能からも十分に窺われるところである。

岩出遺跡群のような、広範囲に集落が展開する事例として同様な時期の遺跡は、伊勢地域で確認できるのは現在までのところ斎宮跡くらいしかない。今後、このような集落遺跡の調査成果の蓄積が必要であり、安易な評価は慎まねばならないが、少なくとも当該遺跡が楠ノ木遺跡などの散在的（散村的？）な集落とは異なった機能を果たしていた場、すなわち位相的には都市としての機能を想定するのが妥当であるかと考えられる。

これは、その後当地に岩出城下町が形成されていることから、この地が周辺の集落以上に重視されていた場所であることを示していると考えられるのである。

岩出中世集落の状況について、以上のような見通しを提示した。岩出遺跡群が、まさに岩出城下町が形成される以前の中世岩出集落の重要な部分に相当することは充分推察されよう。

岩出遺跡群～中世集落～形成の歴史的背景

ただし、いくつかの問題点もある。第Ⅱ章でも述べたとおり、岩出に祭主館が存在しているのは、遅くとも長暦2（1037）年以前であり、今回までの調査によって確認された集落とは少なく見積もっても約150年ほどの開きがある。瓦の中には11世紀代に比定できるものもあり、寺院・仏堂の類の存在は想定されるが、集落の形成を窺わせるものは明確でない。発掘調査結果により、平安時代後期の祭主館の周辺には大規模な集落が形成されていなかったようだ、とするのは簡単だが、では、なぜそうなのであろうか。

その理由はいくつか考えることができる。まず、最も大きな理由が、平安時代末から鎌倉時代にかけ

て神宮祭主の機構が独自の中世的権力として再編される動向であろう。岩出遺跡群のあり方も、それと密接に関わっていると考えるのが妥当である。

この頃になると全国的な趨勢として領域型庄園が展開することから、集落形態の変化が生じるということも考えてよいのではなかろうか。祭主という極めて重要な領主権力を有していた岩出についても、このような中世的庄園領有との関係から何らかの説明を行っていく必要があるだろう。

また、当該地域周辺部における集落のあり方が、12世紀付近を境に大きく変化する事実とも大いに関連しそうである。玉城町・楠ノ木遺跡などの中世集落の出現がやはり平安時代末期の12世紀中葉付近であるし、多くの発掘調査で確認された集落が12世紀代に起点を持っている。

これと大いに関連する事象として、11世紀末から12世紀初頭における祭主権力との権力的拮抗のなかで形成された、祢宜庁の支配機構確立の要因を考えることができるのではないか。これは、神宮正祢宜の「ブール」として存在していた権祢宜層を再編成し、多数の関連する業務に充てることによって権力を強化しているらしいことである。棚橋光男氏の検討によれば、それは「恐らく在地の諸勢力を荒木田・度会氏という擬制的紐帯に組織・吸収」することによってなされた^⑧、とされる。

岩出遺跡群の発展は、以上のような歴史的背景のもと形成されていった、と見ることができる。したがって、「祭主」対「祢宜庁」という歴史的要因のなかで、両者の権益強化に伴って形成されていく集落の存在が想定されるのである。岩出遺跡群という場も、まさにそのような流れのなかで把握されよう。

3 中世集落形成にかかる諸要因

続いて、考古学的に見た中世集落形成にかかる諸要因を概観し、今後解決すべき問題点を挙げておく。

現在、特に伊勢という地域において、我々が発掘調査によって確認する遺跡は、ほ場整備事業にかかる田圃の部分の調査や、新規道路の設置など、現状集落の部分ではなく、耕地などに利用されている部分を調査する場面が極めて多い。そのような現状環境下にある部分の調査を眺めてみると、平安時代後

半期頃の遺跡の確認例は特に少なく、12世紀段階頃から13世紀頃のそれは頻繁に確認され、14世紀から15世紀頃のそれはあまり明確でなく、16世紀頃になるとぱらぱらとは確認できるものの、面としてまとまったものはあまりない、という状況が感覚としてある。もう少し乱暴な言い方をすると、現耕地の調査では12世紀から13世紀の集落ばかりが目立って確認される、ということができるのである。この状況に対し、三重県ではあまり進んでいない現況市街地や集落部分の調査成果が蓄積されねば確固とした説明は困難であるが、それでも12世紀から13世紀にかけての集落ばかりが確認される状況は異様である。現在の集落部分（当然、山を切り開いてできたような団地等は除かれる）とは、誤解を恐れずに言えば各種の要因はあろうが地形的に見ても住みやすいから今でも住まれているのであって、この状況が中世と大きく隔たっていることは考えにくい。すなわち、現在の集落部分に中世集落が重なっていることはまず間違いないのであり、これを前提として集落のあり方を考えていく必要があると思われる。

ここで先の棚橋氏の所論を加味すれば、12世紀から13世紀代にかけて実質的な権力を有していた神宮という領主権力の影響下で、庄園的な開発の進捗により、集落の拡大＝現田圃に遺跡として観察される状況が現出した可能性も充分あり得ることなのである。

12世紀頃に見られる事象は、細かな点ではいくつかある。考古学的には、①「倉」とは言えない総柱掘立柱建物の増加、②掘立柱建物に伴う南東隅土坑の出現、③瀬戸・猿投・知多・渥美産などの、いわゆる山茶碗の多量流入（消費）、などや、12世紀末頃の①南伊勢系土師器群の編成、②いわゆるロクロ土師器の消滅、などがある。伊勢の中世前期に対する考古学からの提言には、これらの要件に、想定される歴史的な事象と噛み合わせるという、グローバルな検討が必要不可欠である。

4 近世の遺構と遺物について

a 瓦窯について

今回の調査で確認された近世の瓦窯は、県内の事例としては、大山田村風呂谷館跡^⑨ (fig.47) の例に

続き、2例目である。ただし、風呂谷館跡のものは
 焚口が2方向にあるいわゆる「ダルマ窯」なのに対し、
 蚊山地区のものは平窯の類と考えざるを得ない。
 構造的に異なるものが近世に到っても併存している
 事実は、瓦生産とどのように関連するのか、今後の
 検討が必要である。

b 出土瓦について

瓦窯から出土したものには、○に上の字の刻印が
 ある軒棧瓦がある。この印刻は尾張藩江戸上屋敷で
 も確認されている¹⁶。さらに尾張藩上屋敷遺跡ではこ
 の刻印のあるものにヘラ描きで「勢州渡會郡 山田
 宮本」「伊勢山田八日市」と書かれており、今回確
 認された資料との関連が注目される。地元での聞き
 取りによると、○に上の刻印は度会郡度会町棚橋で
 かつてあったとのことで¹⁷、現伊勢市・玉城町・度
 会町にかけての地域一円に同じ刻印を有する近世瓦
 工人の存在が想定される。

また、土坑S K504から出土した軒丸瓦(fig. 40-9
 69)は、範傷などの照合から、現岩出地内に存在す
 る三尊寺の山門および観音堂に用いられた瓦と同範
 であることが確認された(P L.23参照のこと)。第

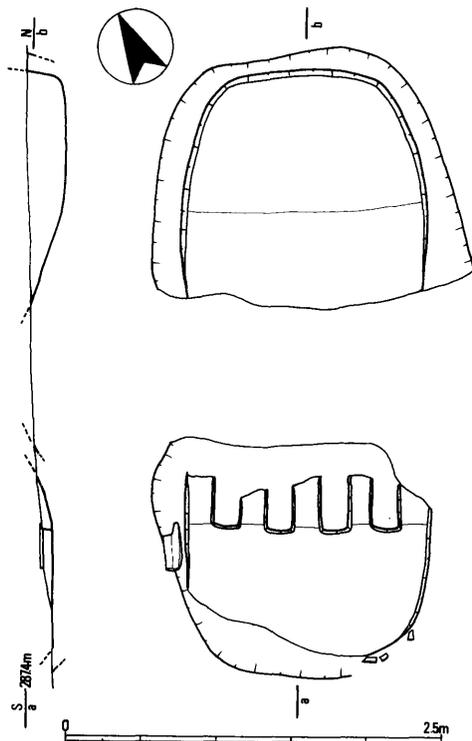


fig.47 風呂谷館跡検出瓦窯 (1:50)

II章で触れた三尊寺山門の鬼瓦銘、および考古地磁
 気測定結果からも、S F501の操業年代を18世紀初
 頭頃と考えておいてよからう。

さて、三尊寺との同範関係から蚊山地区の瓦窯が
 三尊寺の瓦のみを焼いていたと判断することはでき
 ないにしても、供給先のひとつが確認できたのは幸
 いであった。今後、周辺の寺院に用いられている瓦
 と照合し、近世の瓦供給範囲、あるいは同範瓦につ
 いて、盛んに考察されている古代のものと同様に考
 察の対象とされる必要があろう。

以上、今回の調査成果を基に、古墳群と中世集落、
 および近世の遺跡についての検討を行った。岩出地
 区内遺跡群は所り垣地区・左郡地区の調査も含めて
 考えると、旧石器～近世にかけての長期にわたる複
 合遺跡である。4次にわたる調査により、遺跡全体
 に十字形のトレンチを入れたようになり、その概略
 は把握できることとなった。このような、大規模遺
 跡のほぼ全容を知れるのは希有なことであり、今後
 の研究資料としては極めて重要な成果である。

しかし、祭主館の実態や岩出城下との関係など、
 さらに検討を要する問題も多い。今は2本の道路下
 で眠る調査区を活かすためにも、隣接地区の有効な
 保存と調査が必要である。

註

- ① 前川嘉宏ほか【近畿自動車道(勢和～伊勢)埋蔵文化財発掘調査報告】第6分冊-蚊山遺跡左郡地区-(三重県埋蔵文化財センター 1993)
- ② 田辺昭三【陶器古窯址群】I(平安学園考古学クラブ 1966)および同氏【須恵器大成】(角川書店 1981)
- ③ 伊藤裕偉ほか【近畿自動車道(勢和～伊勢)埋蔵文化財発掘調査報告】第7分冊-落合古墳群-(三重県埋蔵文化財センター 1992)
- ④ 竹内英昭ほか【平田古墳群】(安濃町遺跡調査会 1987)
- ⑤ 西田尚史ほか【中部平成台地埋蔵文化財発掘調査報告】(松阪市教育委員会 1990)
- ⑥ 近年の調査により、鈴鹿市・石薬師東古墳群がこのような例に相当することが判明しつつある(三重県埋蔵文化財センター調査)。したがって、小稿で触れたことが地域的な傾向として認められるものなのかどうか今後の検討課題となる。
- ⑦ 土器の重さは、その土器の保有する水分によって多少の変動が生じる。今回は、4月と8月に重量計測を行ったが、土師器皿で最高3g程度の違いが見られた。なお、掲載した重さは4月に計測したものを用いている。
- ⑧ 伊藤裕偉ほか【近畿自動車道(勢和～伊勢)埋蔵文化財発掘

調査報告】第3分冊一楠ノ木遺跡一（三重県埋蔵文化財センター1991）。なお、ここでいう土師器皿は、南伊勢系土師器皿類のB系統に属するもので（伊藤裕偉『多気遺跡群発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター 1993）、この皿類は口縁部径8cm内外にまで縮小（多気町・釈尊寺遺跡SK3など〔田村陽一「釈尊寺遺跡」『近畿自動車道（久居～勢和埋蔵文化財発掘調査報告）第1分冊の1 1989〕）した後、口縁部径6cmほどの「小皿」として存続することになる。

- ⑨ 今回の土器組成については、多気遺跡群で行った方法と原則的には同じ方法を用いている（伊藤裕偉『多気遺跡群発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター 1993）。すなわち、土師器皿類については、各器種単位で出土土器の重量を計測し、それぞれの平均重量にて除することによって求めた。土師器鍋類および陶磁器類については、出土量が少ないため、口縁部が $1/4$ 程度残っているものを1個体として求めた。ただし、山茶碗類については、底部ないし口縁部が $2/3$ 以上残っているものについて1個体として求めている。この方法の是非については各種の意見があるが、全国的な比較を行うためには一定の方法を取ることが望ましいと考えるので、忌憚のない御意見を頂きたい。
- ⑩ 伊藤裕偉『多気遺跡群発掘調査報告』（三重県埋蔵文化財センター 1993）
- ⑪ 藤原良章「中世の食器・考一<かわらけ>ノート」（『列島の文化史』5 1988）
- ⑫ 伊藤裕偉「丹生地区内遺跡群」（『昭和63年度農業基盤整備事業地域内埋蔵文化財発掘調査報告』第1分冊 三重県教育委員会 1989）
- ⑬ 『下外城田村土地宝典』（1943）
- ⑭ 棚橋光男「中世伊勢神宮領の形成とその特質」上下（『日本史研究』155.156 1975）
- ⑮ 森前稔・伊藤久嗣「阿山郡大山田村風呂谷館跡」（『昭和58年度農業基盤整備事業地域内埋蔵文化財発掘調査報告』三重県教育委員会 1984）
- ⑯ 内野正ほか『尾張藩上屋敷跡遺跡発掘調査概要』I（東京都埋蔵文化財センター 1993）および東京都埋蔵文化財センター『市買』No.3（1992）
- ⑰ 地元での聞き取りによる。

Plate



中世墓 S X 305出土遺物



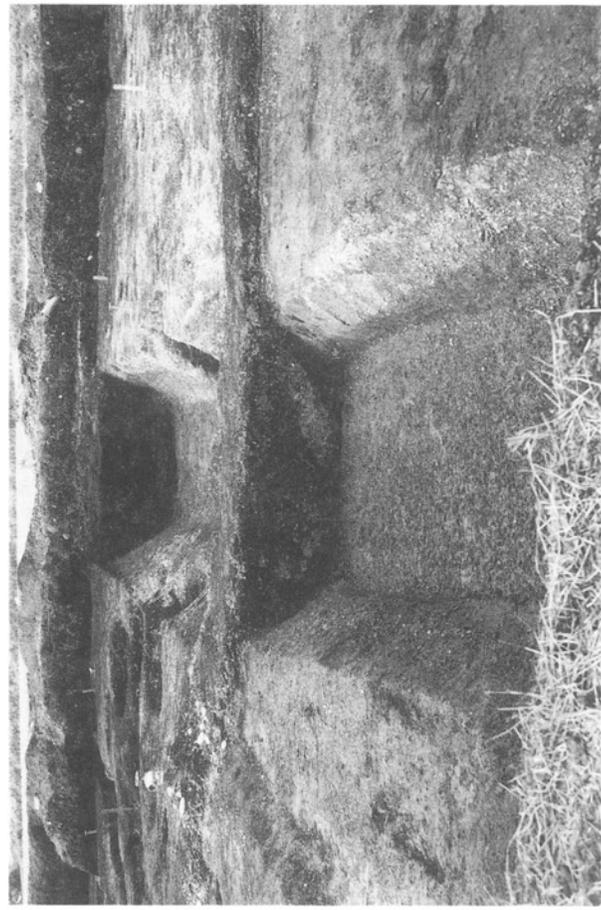
全景（北から）



全景（南から）



S K 308 (北から)



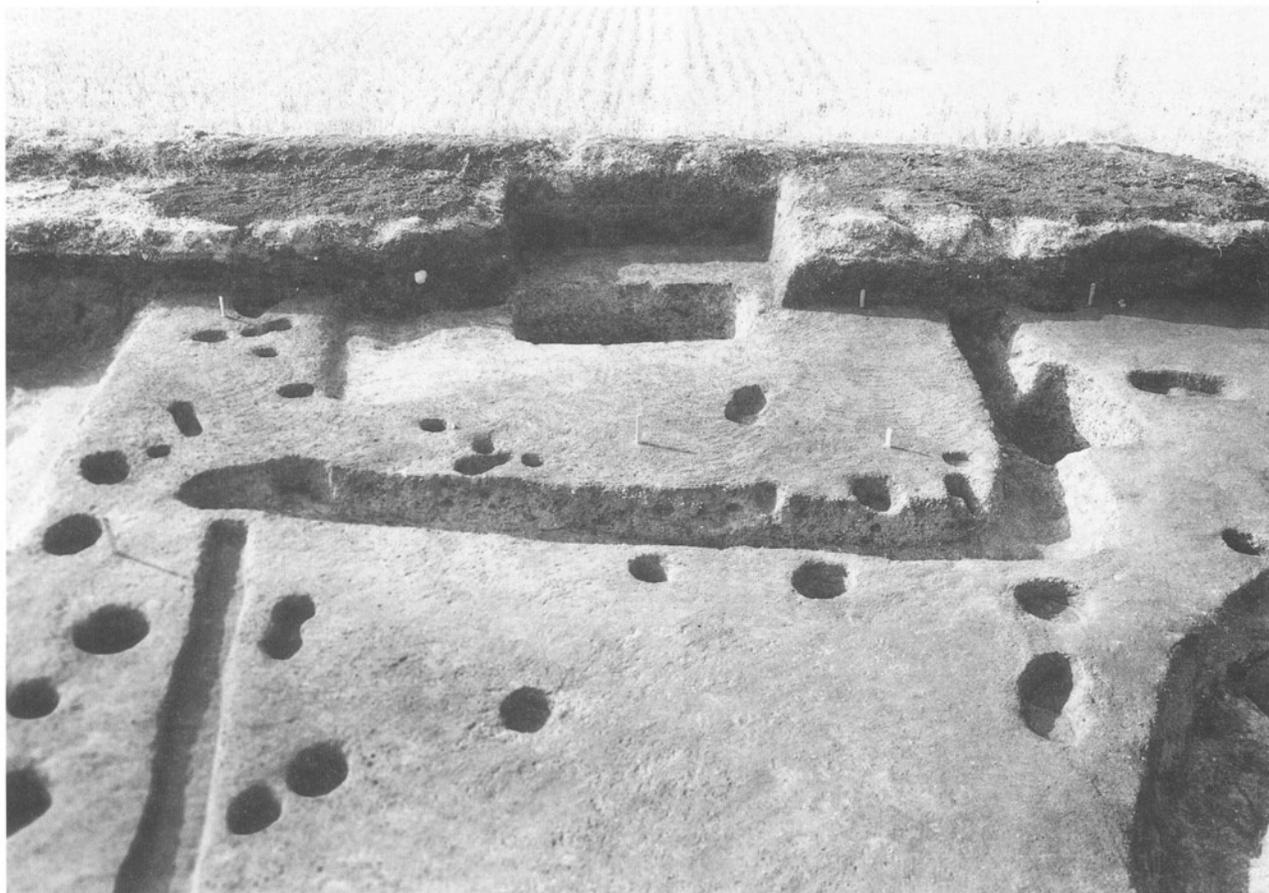
S D 311 (東から)



22・23号墳周辺 (南から)



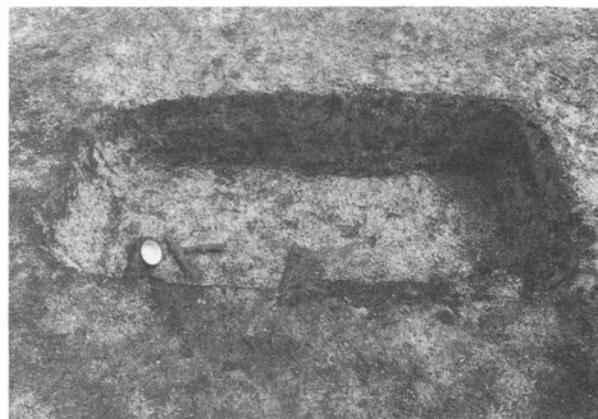
22号墳周溝と溝 S D 304土層 (東から)



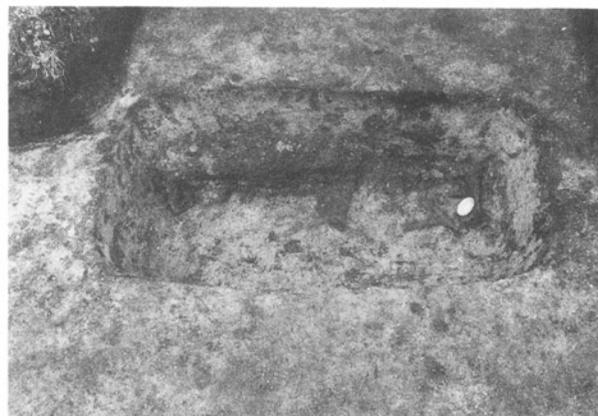
全景（東から）



墓墳（北から）



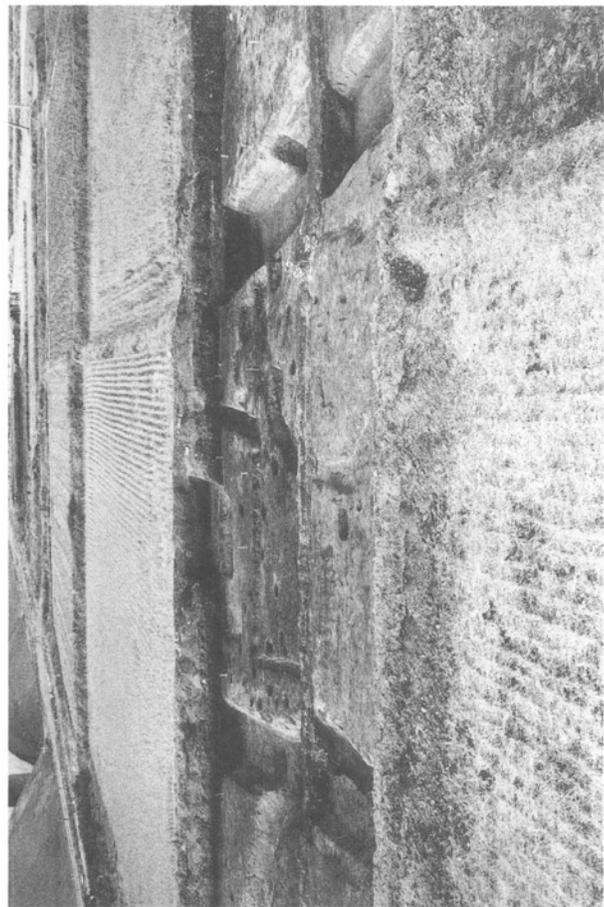
墓墳（西から）



墓墳（東から）



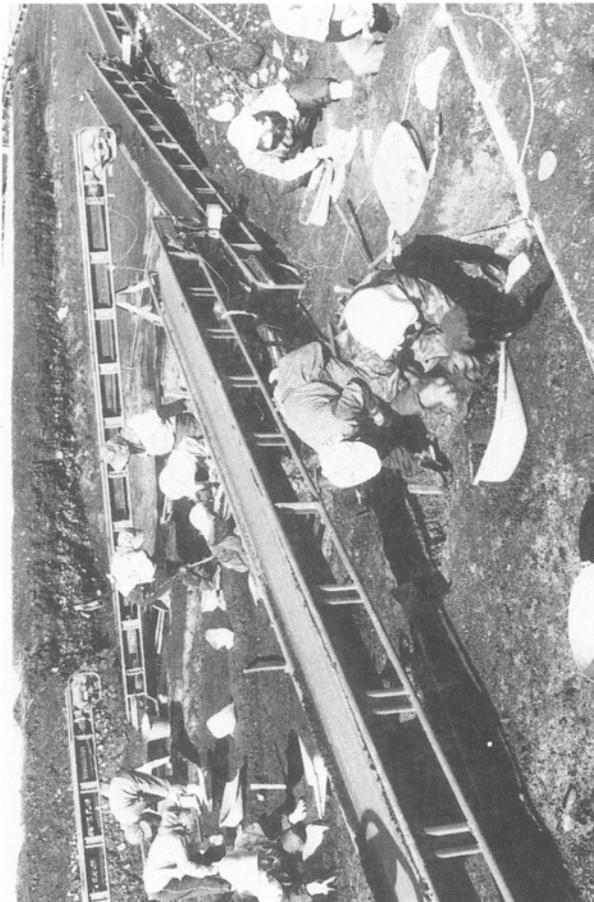
S K 321周辺 (北から)



S D 304、311周辺 (東から)



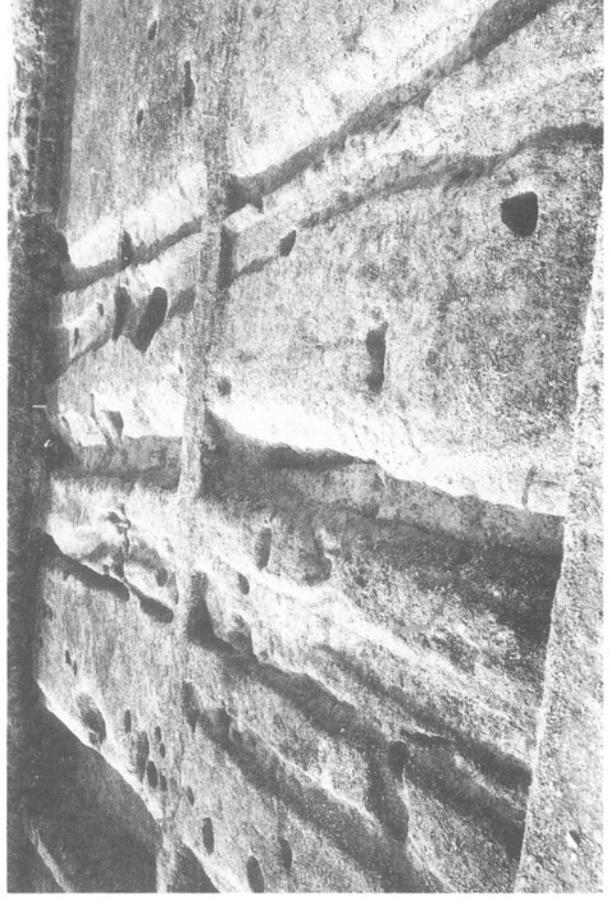
S K 321 (北から)



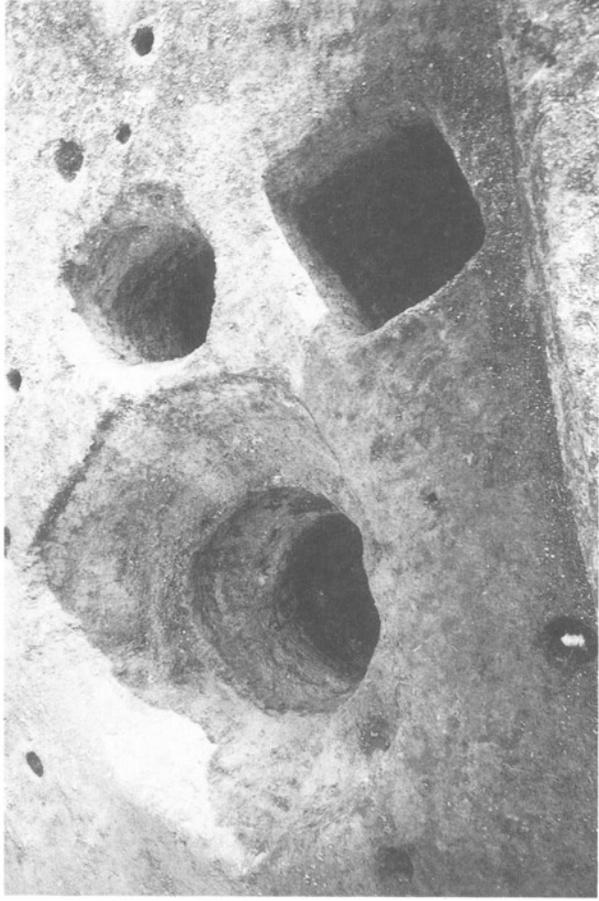
作業風景



S D 341 (東から)



S D 347~350 (東から)



井戸 S E 334、335、337 (西から)



S E 337下部の木組み

P L . 6

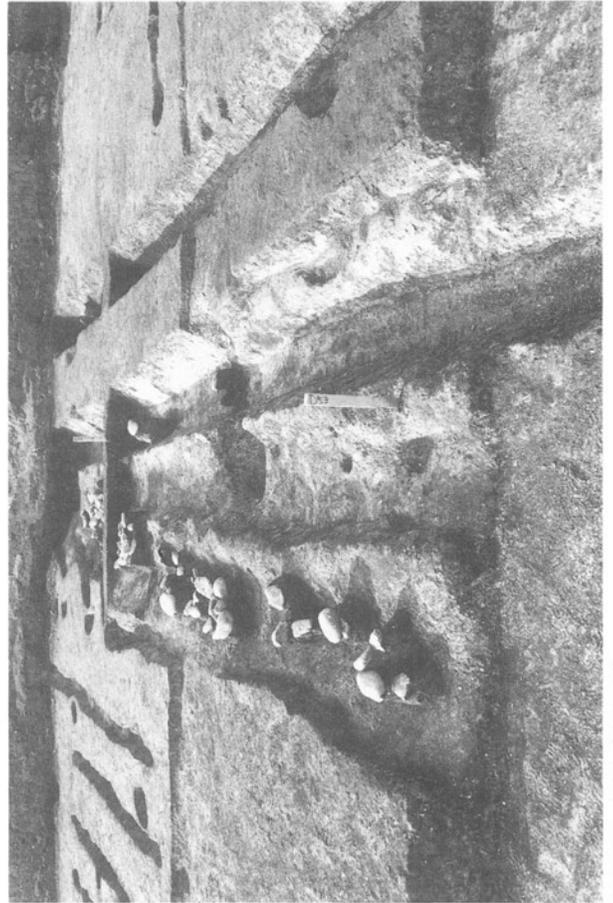
ケカノ辻・角垣内地区 各遺構
(4)



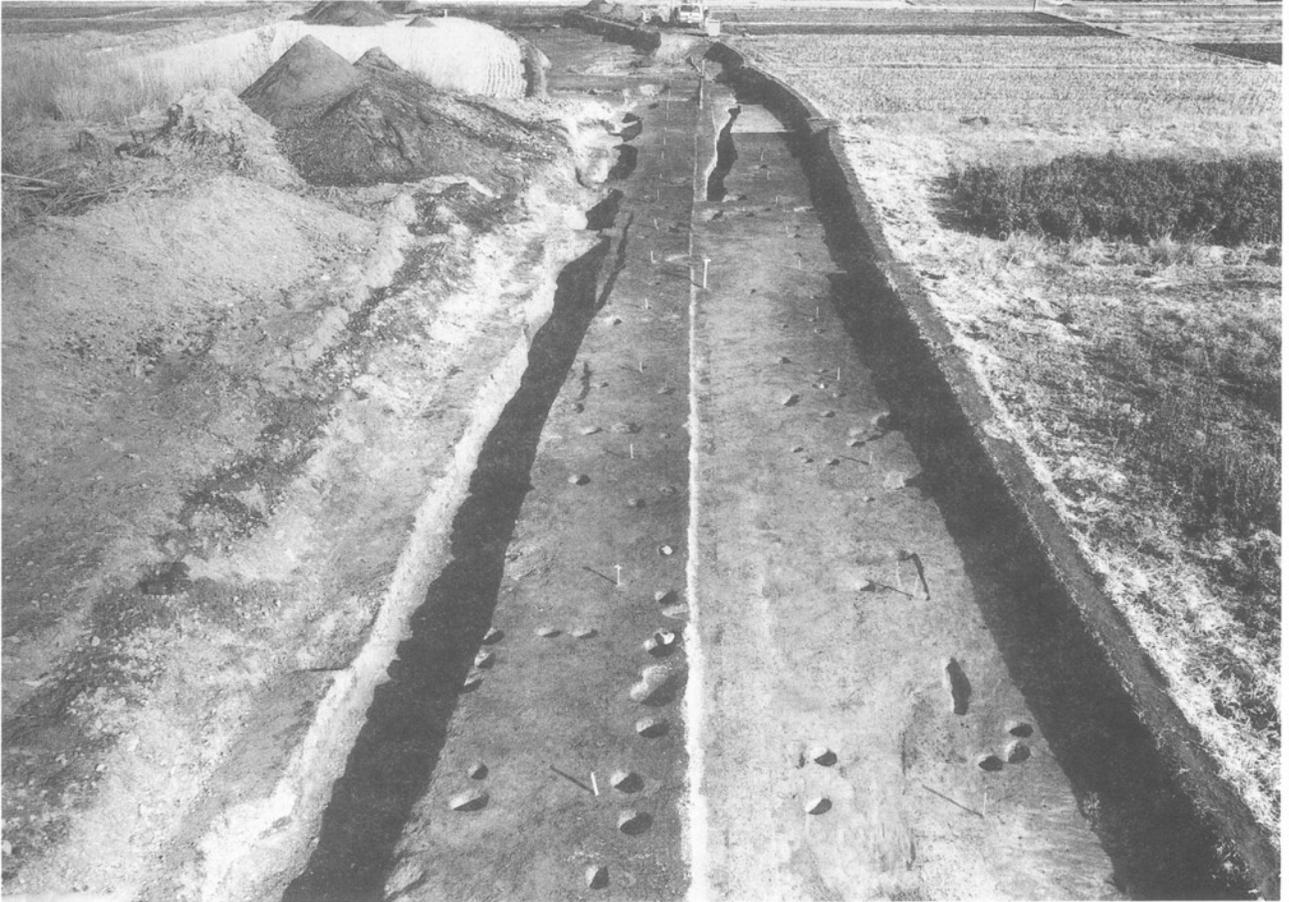
S D 358周辺 (北から)



S K 362~368 (北から)



S D 382~384 (東から)



北部全景（南から）



S D 391、392付近（北から）



S K 408、S Z 409周辺 (北から)



S K 421 (東から)



S D 396 (東から)



S D 402 (東から)



SD 445 (南から)



SZ 442 (東から)



作業風景

P.L.10

蚊山地区
調査区全景・土層



全景（西から）



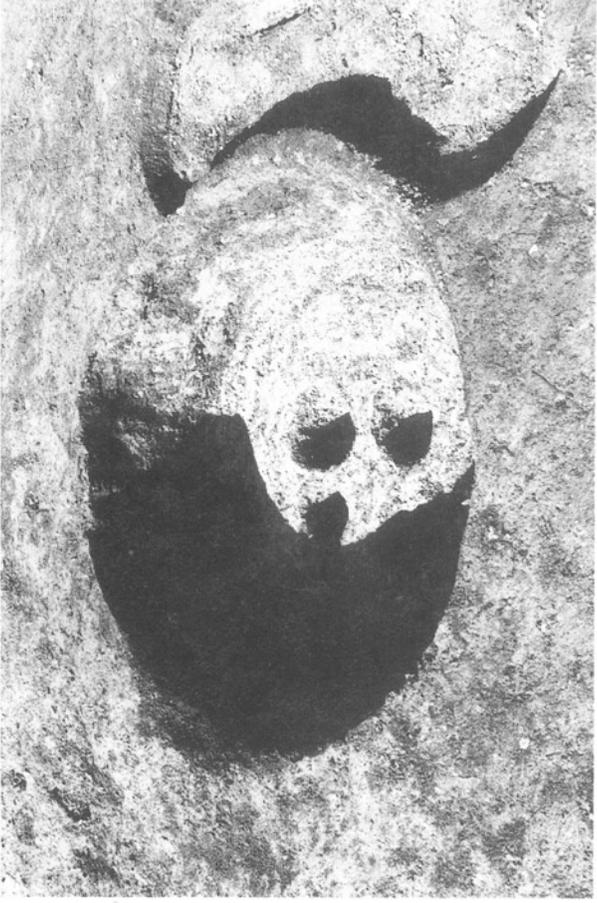
全景（西から）



S D 503・508 (北から)



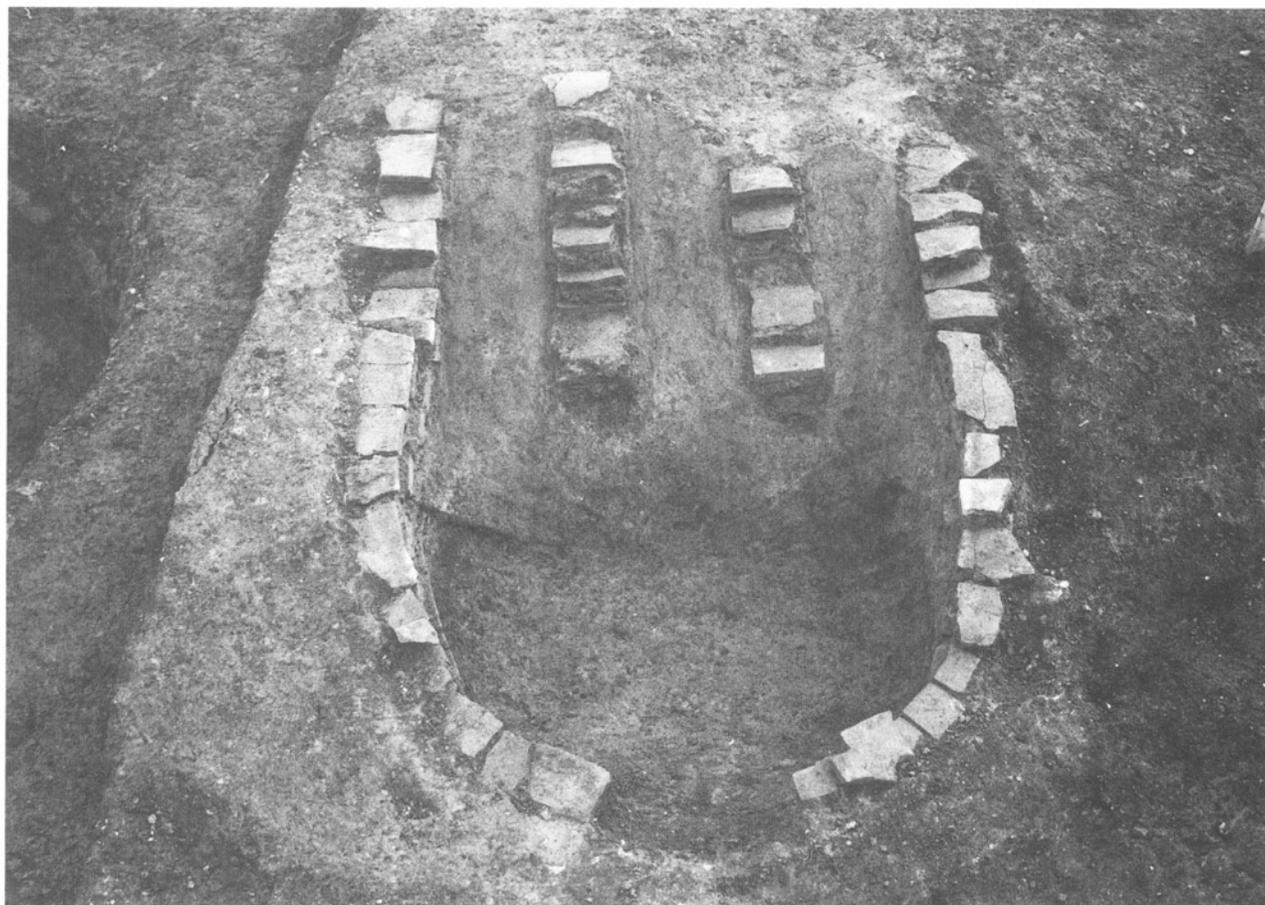
S K 517土層 (西から)



S K 507 (東から)



S B 522・523付近 (北から)



全景1 (北から)



東側壁 (西から)



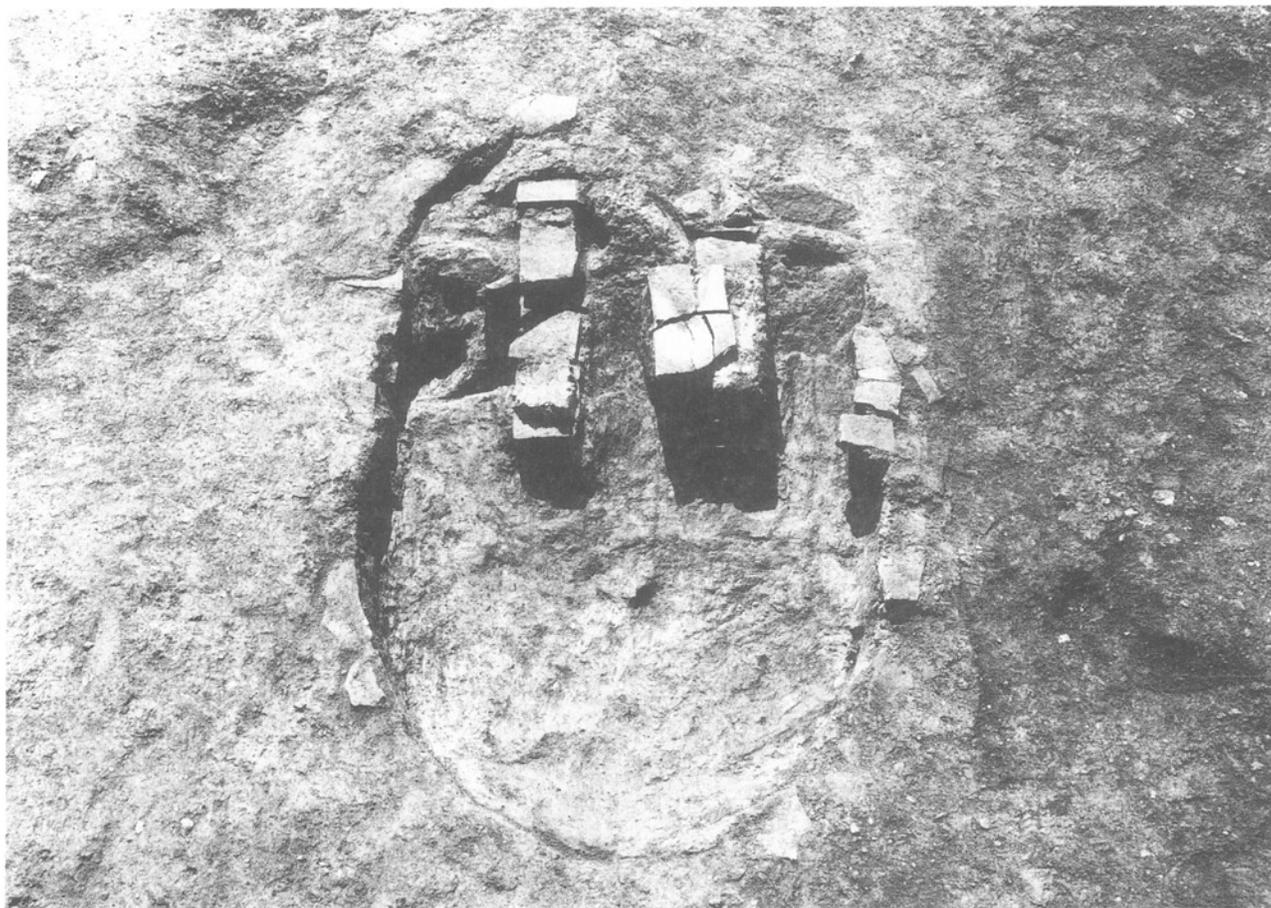
西側壁 (東から)



ロストルの状態 (東から)



SF501とSK517 (西から)



全景（北から）



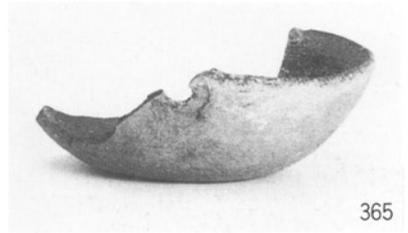
全景（西から）



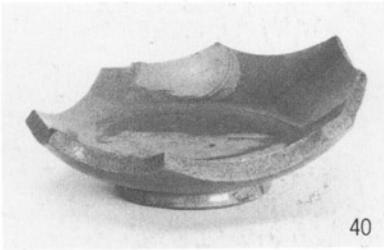
39



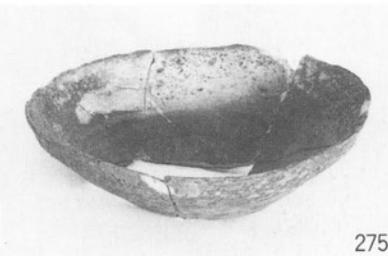
270



365



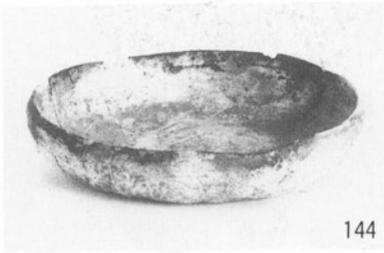
40



275



383



144



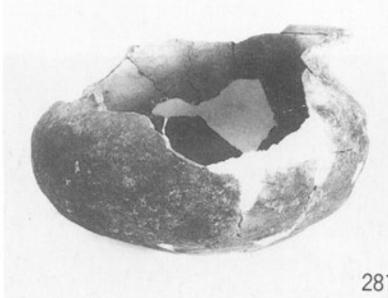
277



390



146



281



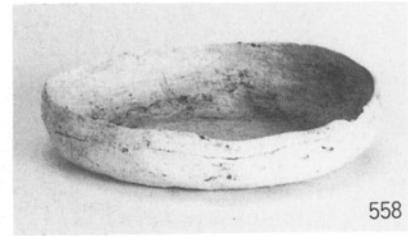
535



276



358



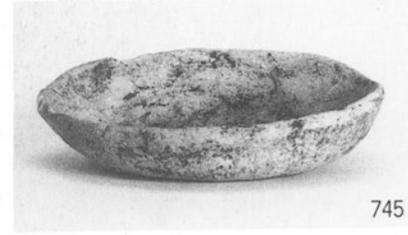
558



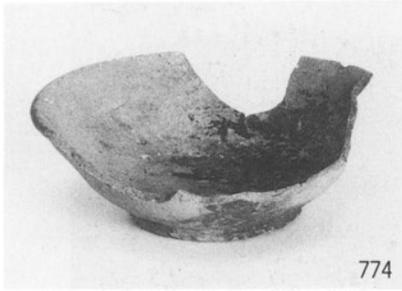
263



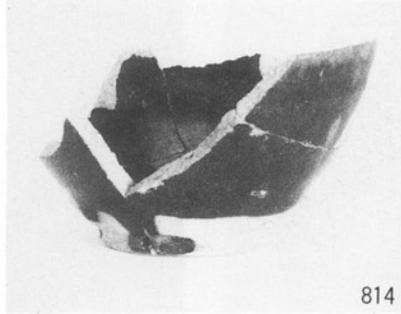
359



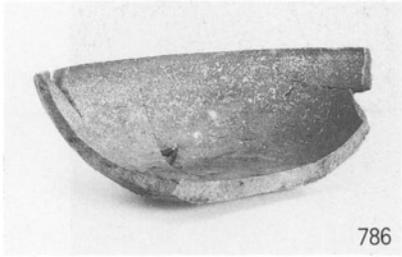
745



774



814



786



925



926



413

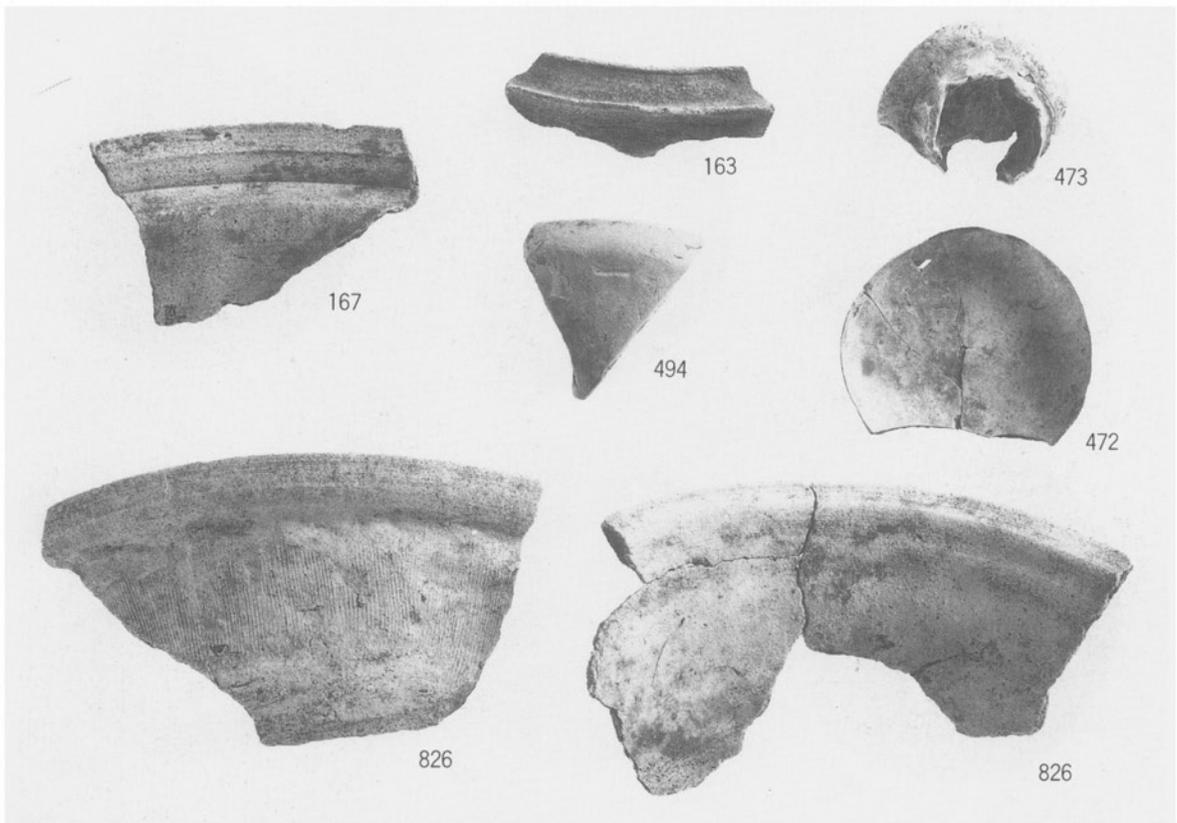
P.L.16

出土遺物
(3) 絵画のある山茶碗

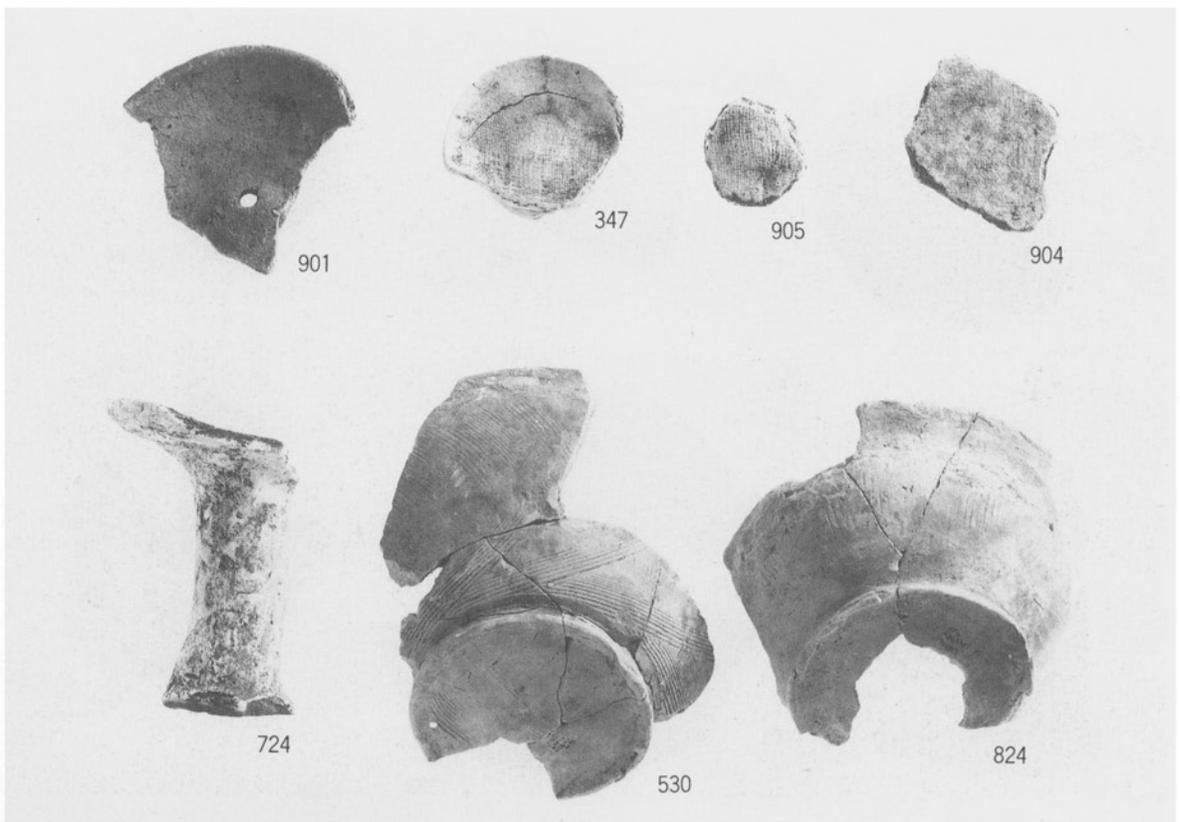


639



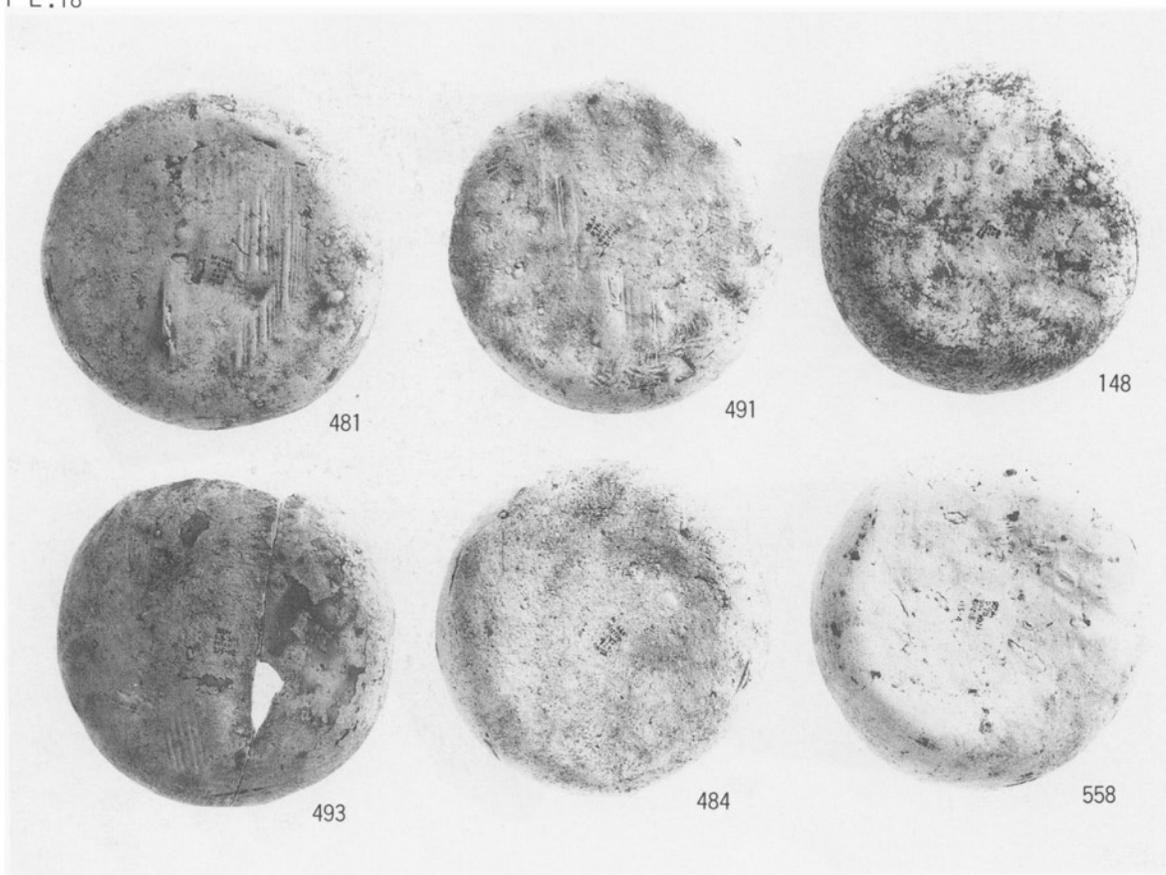


土師器類

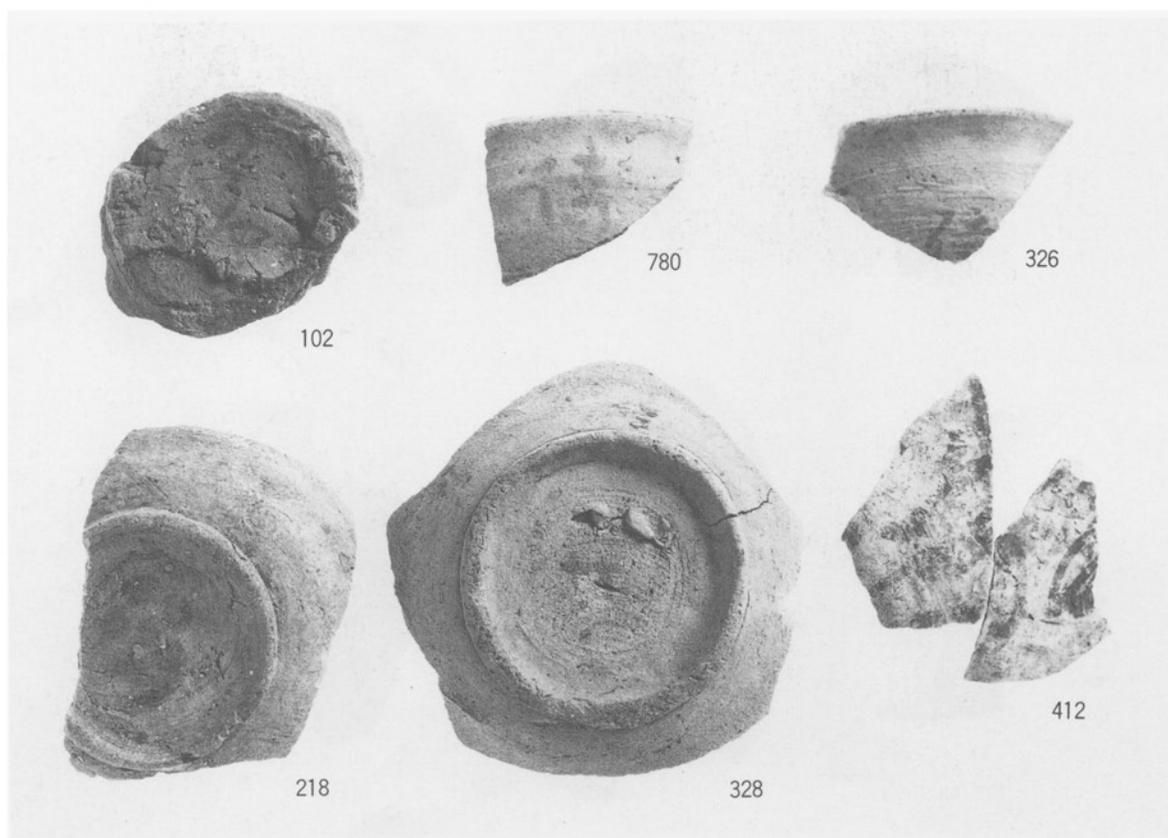


土師器類

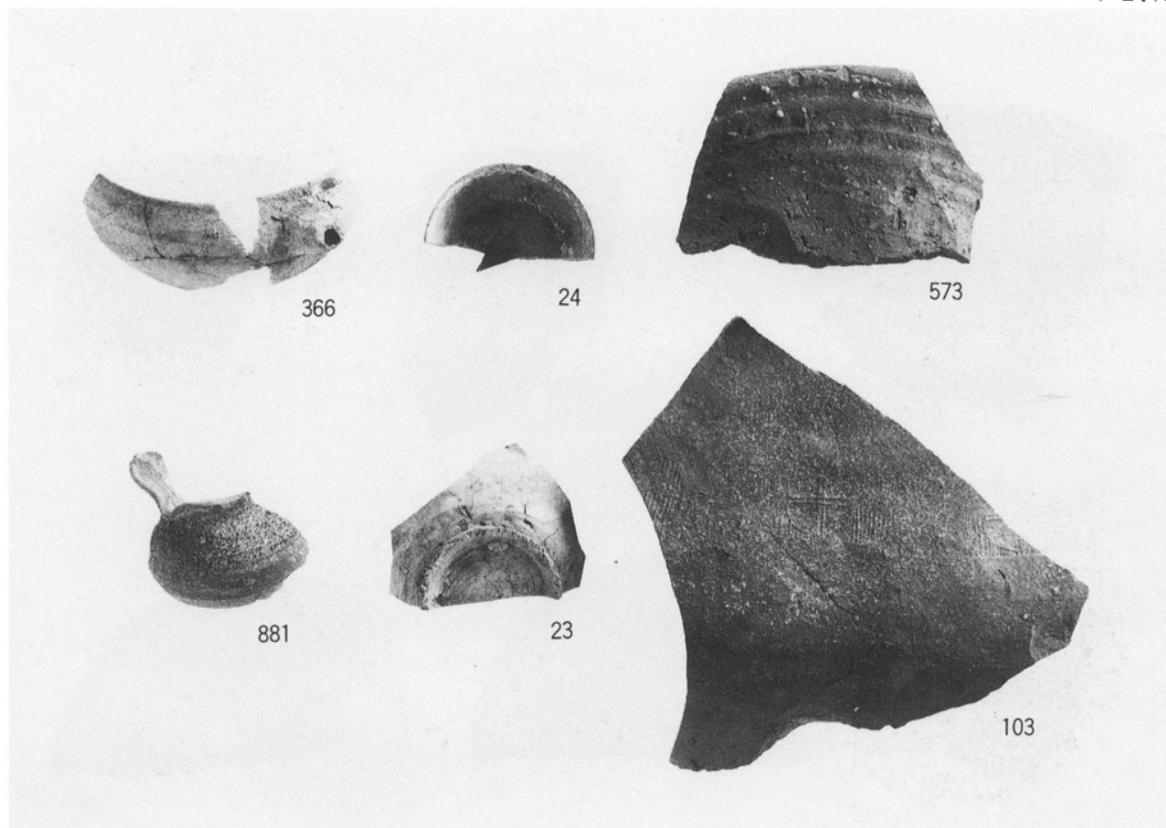
出土遺物
(5) 土師器・墨書土器



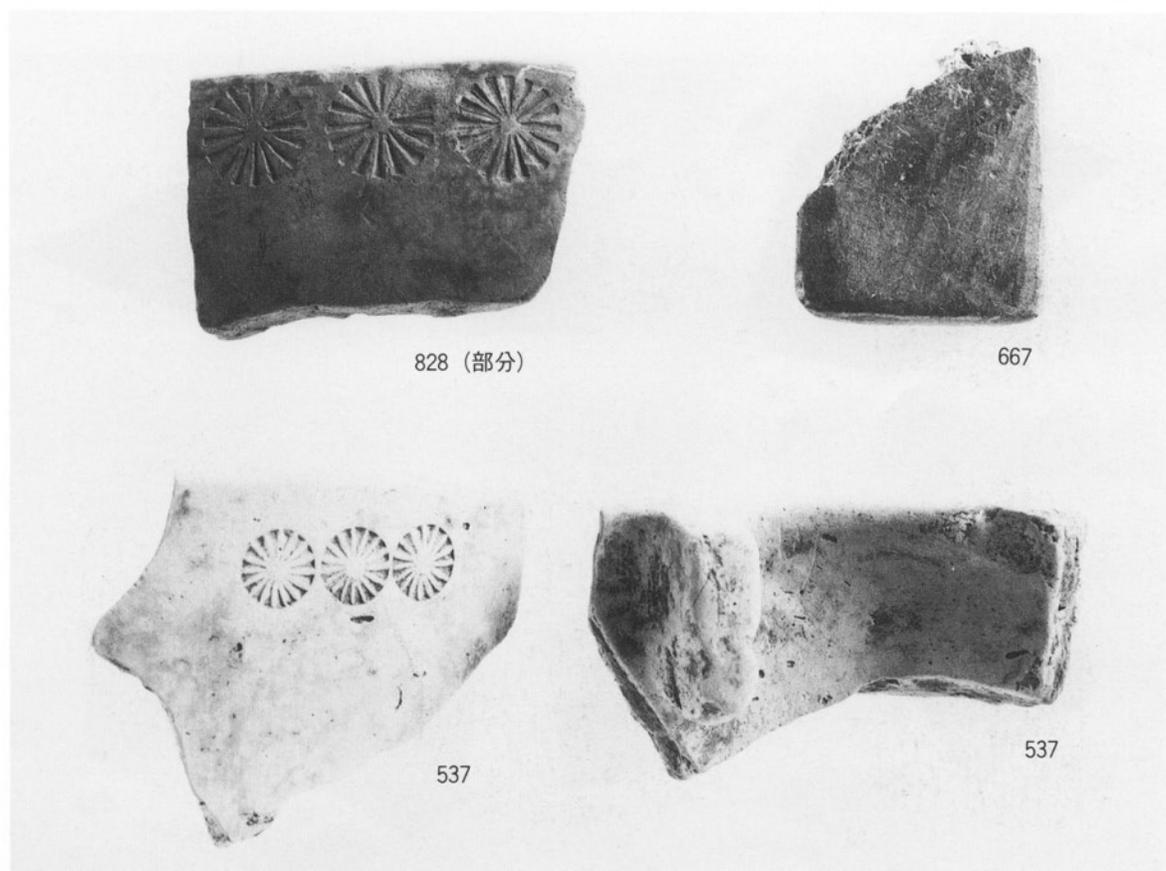
土師器皿の底部状況

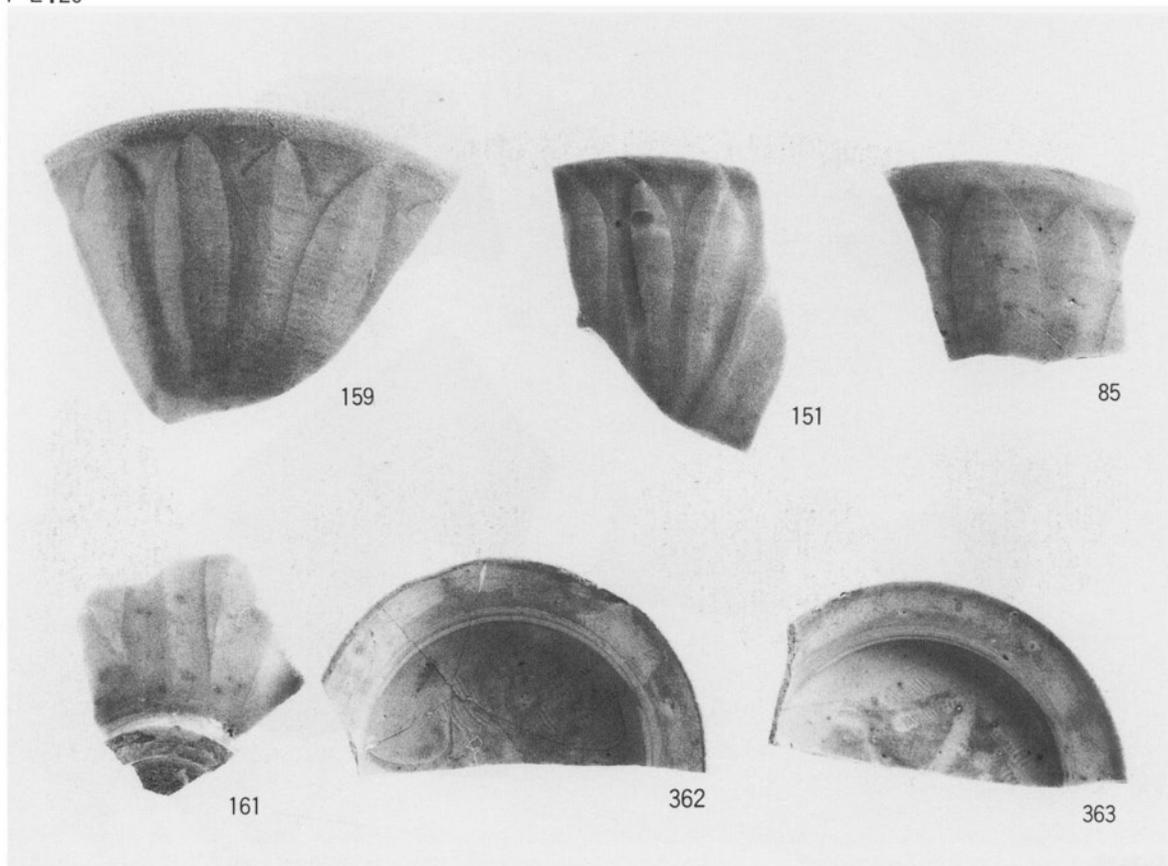


墨書土器

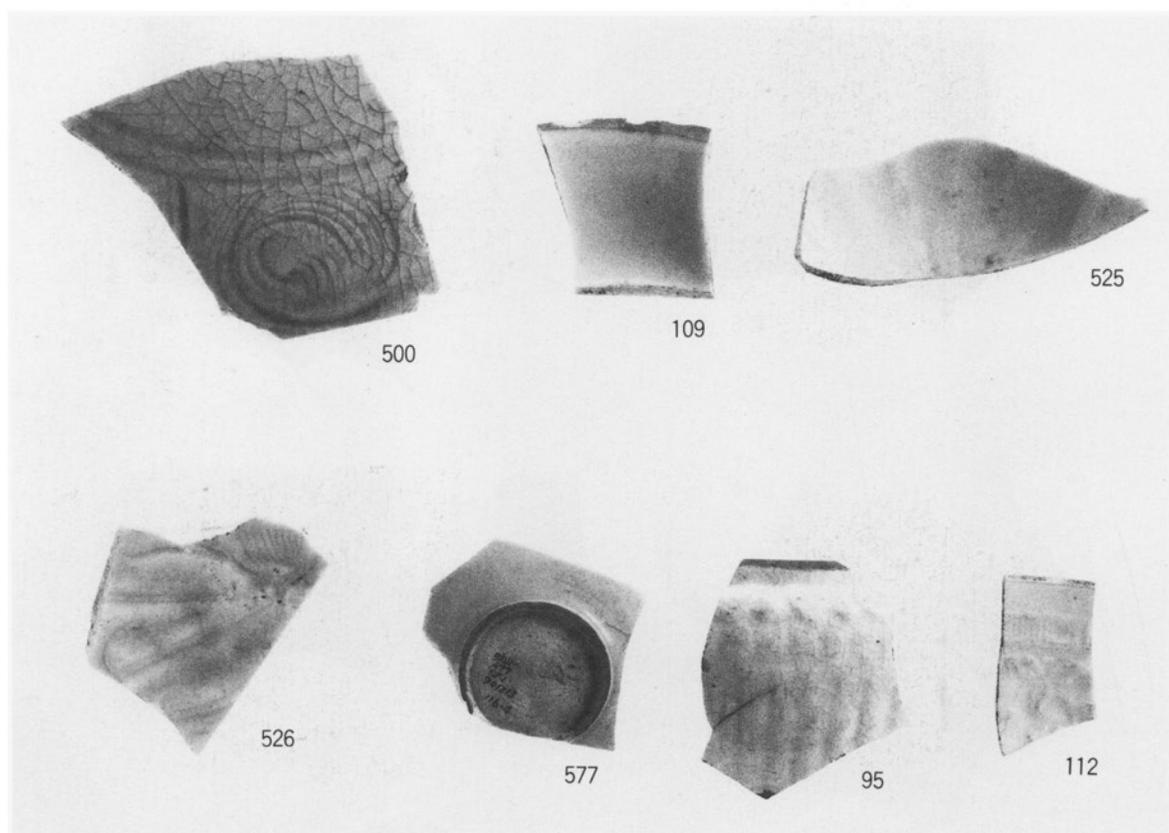


陶器類

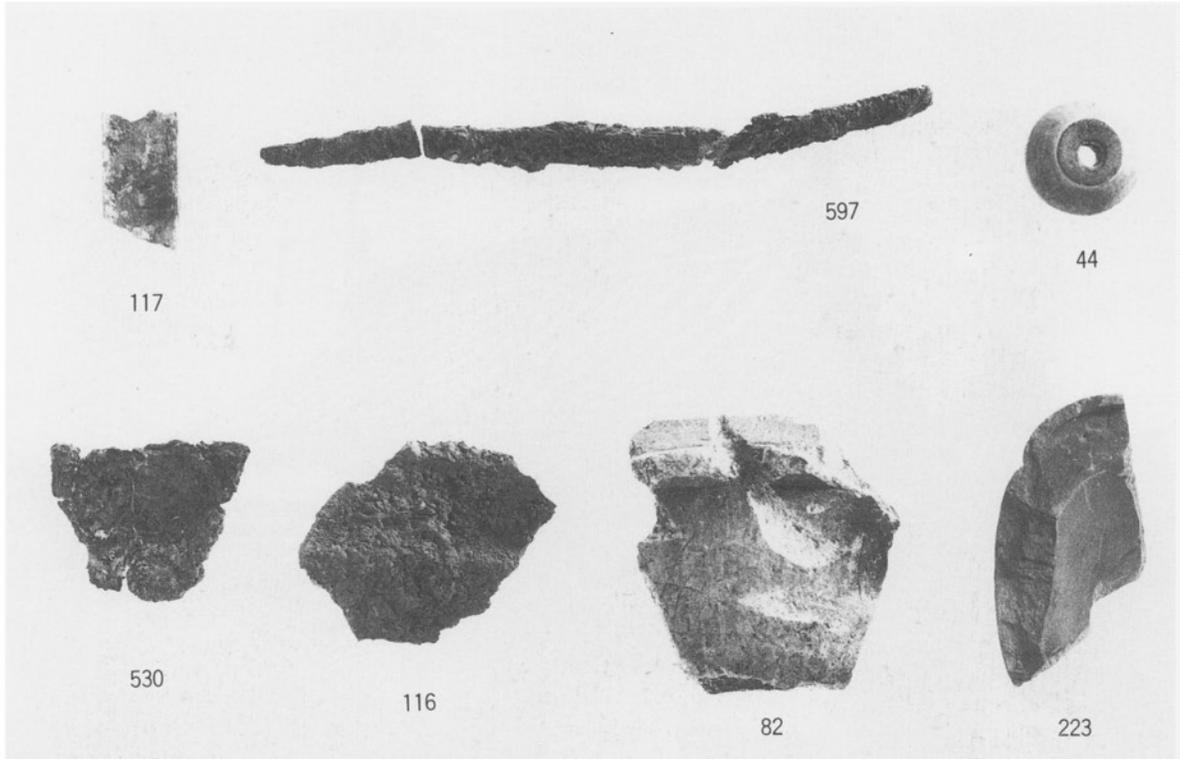




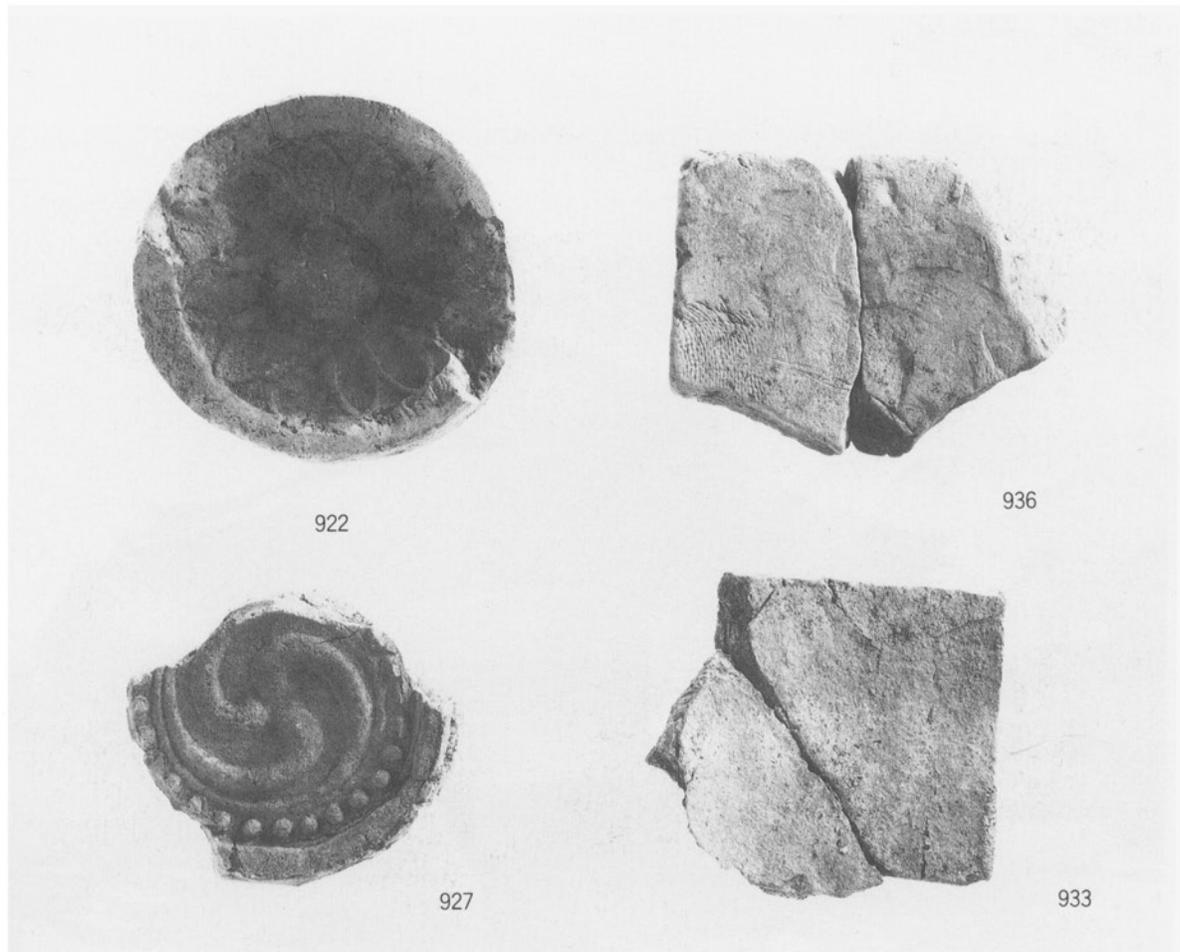
青磁類



青白磁・白磁類



金属・石製品



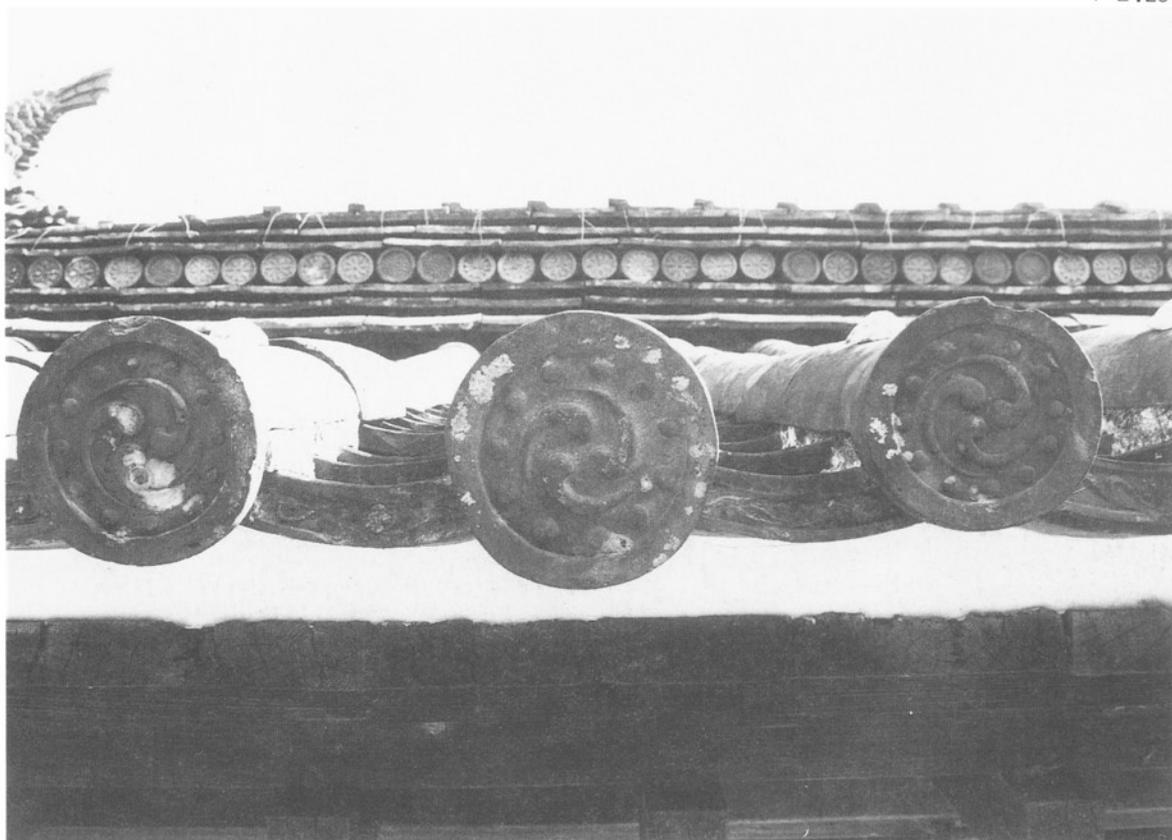
瓦類



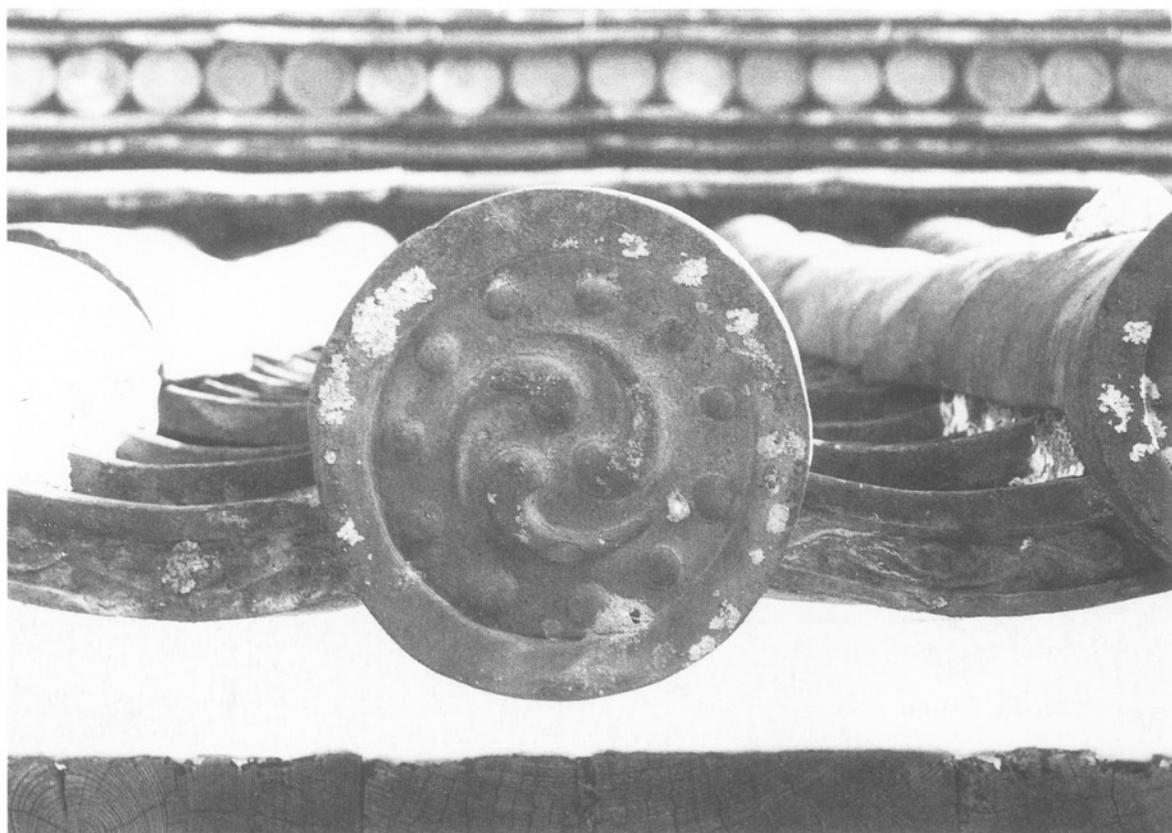
三尊寺山門（北西から）



三尊寺観音堂（北西から）



山門の瓦



S F 501と同類の軒丸瓦（山門表）

報 告 書 抄 録

ふりがな	いわでち くない いせきぐん はつかつちようさほうこく							
書名	岩出地区内遺跡群発掘調査報告							
副書名	度会郡玉城町岩出所在、ケカノ辻・角垣内・蚊山地区の調査							
巻次								
シリーズ名	三重県埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	113							
編著者名	伊藤裕偉							
編集機関	三重県埋蔵文化財センター							
所在地	〒515-03 三重県多気郡明和町竹川503 TEL05965(2)1732							
発行年月日	西暦1996年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
いわでいせきぐん 岩出遺跡群	みえけんわたらいぐん 三重県度会郡 たまきちよういわで あぎ	24461	461-302	34°	136°	19900925～	3,500	県道岩出新田 線道路改良工 事に伴う事前 調査
さこりこふんぐん 左郡古墳群	玉城町岩出字 けかのつじ すみがいと ケカノ辻・角垣内 さこり かやま 左郡・蚊山			28'	39'	10"		
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
左郡古墳群	古墳	古墳後期	古墳	土師器・須恵器		旧称「蚊山古墳群」		
岩出遺跡群	集落 墓	鎌倉～室町	区画溝・掘立柱建物 井戸・土坑・中世墓 溝	中世土師器・陶器 瓦質土器類 青磁・白磁・青白磁 鉄鍋・温石・ 墨書絵画の陶器碗		中世神宮祭主居館推定 地が近く、それに付随 する集落 完形土器の廃棄土坑・ 溝が多数あり 旧称「蚊山遺跡」		
	生産遺跡	近世	瓦窯	瓦		近隣にある三尊寺に使 用された瓦と同范 平窯		

平成8(1996)年3月に刊行されたものをもとに
平成19(2007)年2月にデジタル化しました。

三重県埋蔵文化財調査報告 113

岩出地区内遺跡群発掘調査報告

一度会郡玉城町岩出所在、ケカノ辻・角垣内・蚊山地区の調査

1996・3

編集 三重県埋蔵文化財センター
発行
印刷 東海印刷株式会社
